

具氏錦園史

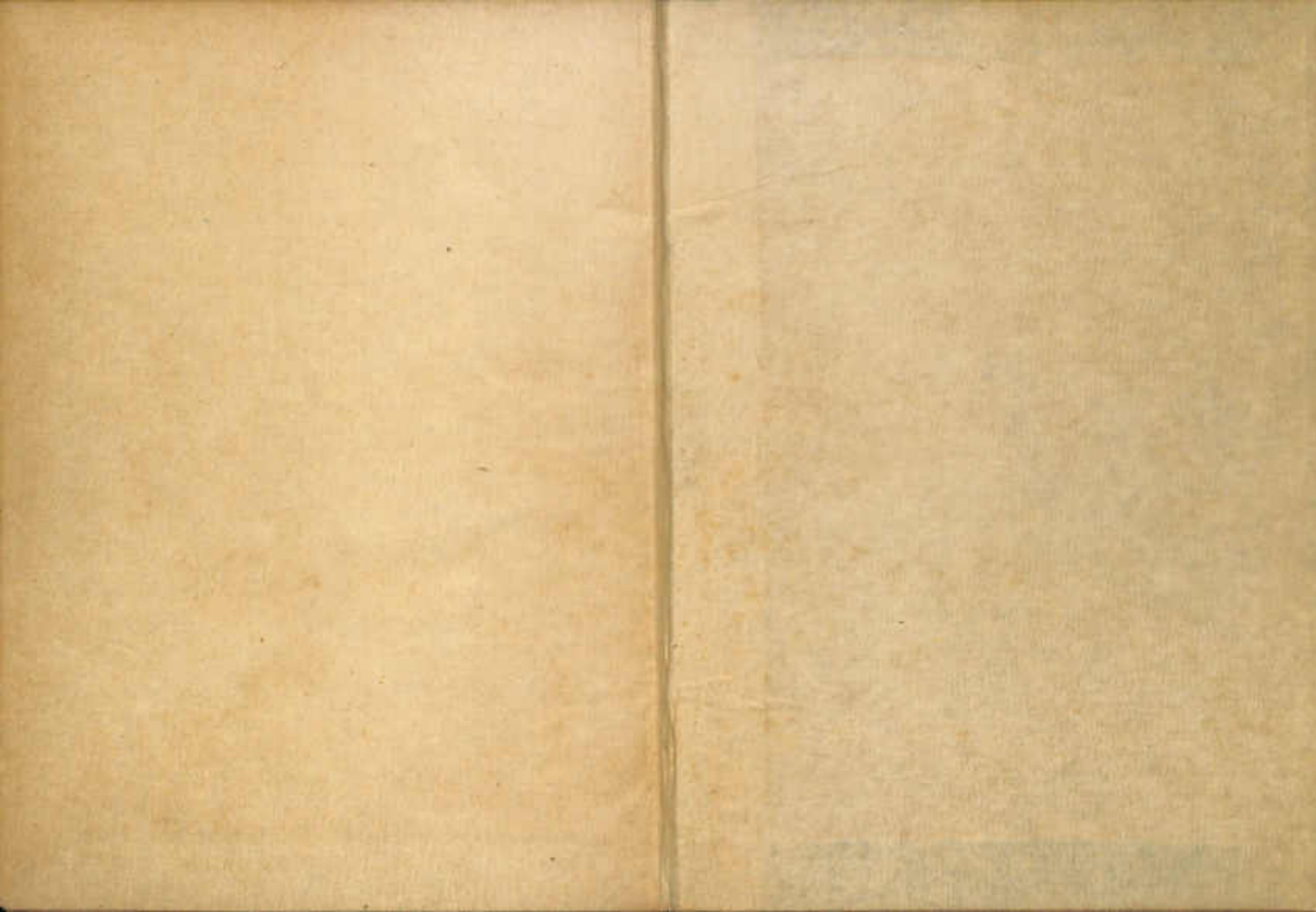
下集

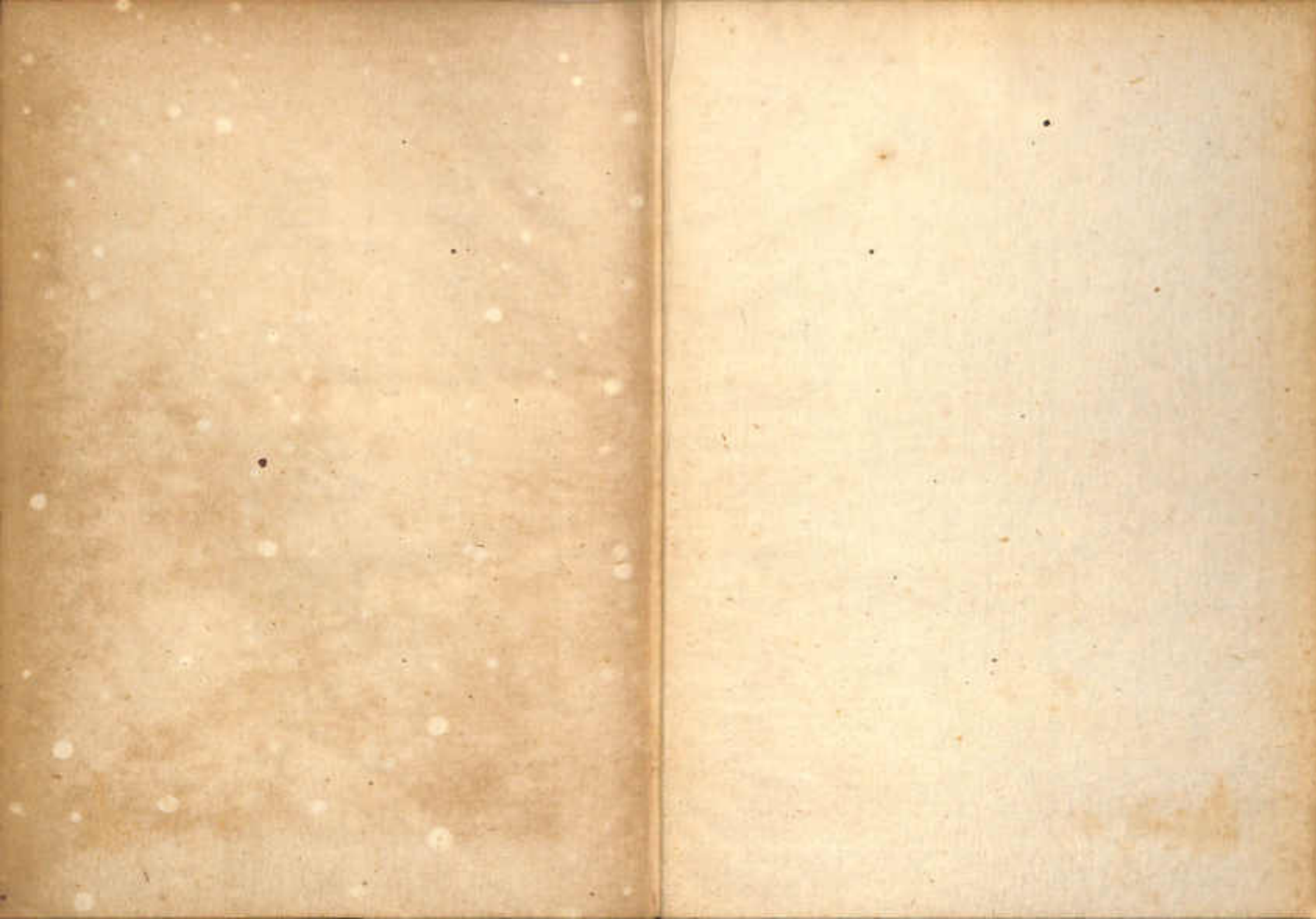
漢文  
具氏錦園史  
下集

具氏錦園史

光緒二十三年  
不列

五十五





明治十二年四月

下冊

具氏佛國史

文部省印行



文淵閣印

# 具天新國史

四卷十二半門

丁

具氏佛國史下冊目錄

彦根公立校印

第一百一篇 改宗ノ事ヨリマルケル、ルーテルジヤン、カルヴァン、ヒューク

ノ(宗門ノ名)ノ事

ギース侯ノ一族大ニ勢權ヲ得、ヒュークノ徒瑪唐ノ處置、テ

ヒットノ遺囑歌ヲ以テ異教ト爲シテ之ヲ禁スル事

第一百三篇 ヒュークノ一後話、第二世、フランソワノ殞

第一百四篇 カセリン、ド、メナイ、テスノ事、佛國ニ於テ婦人ノ騎鞍ヲ發明

ス、カセリン方術ヲ信スル談

第一百五篇 佛王第九世、マヤルノ人ト爲リ並ニト、ユム、グイ、ラ即三人

黨及佛國內亂ノ起本

第一百六篇 羅馬カトリック宗徒トヒュークノ一宗徒ト相成ッヨリギース

侯ノ死英后エリサベヌノ開始、及當時所用ノ武器ノ事ニ至ル

第一百七篇

ロ、イグノー、徒ノ再建カンド公子死、ル、メルナー、及服喪ノ事

二六

第一百八篇

ベアロン公子繼理後ニヘンリー、ス、ジラント稱スル者其母

二九

死セテナヴ、アー、王トナキ及其婦姐

第一百九篇

サン、バルタレヨ、ル、忌日ノ喪製

三二

第一百十篇

アンサ、一、侯爵ハレテ、ゴ、ラン、ドノ王トナキ、ゴ、ラン、ド

三八

人佛國ニ使ス佛國之ヲ譽ス、ゴ、ラン、ド人大ニ語學ニ長ス

第一百十一篇

第九世シヤルノ痲疾ヨリ死ニ至ル、及母后乳母及大法官

四〇

ド、ロヒタ、ル、ノ事

第一百十二篇

第三世顯理、ゴ、ラン、ドヲ去ル、及其習慣嬉戲並ニ其友ノ

四四

死ニ因テ哀痛ヲ示ス

第一百十三篇

兩宗盟約佛王ノ嗣位ニコリナヴ、アー、ル、侯顯理ヲ除斥セン

四八

ヲノ弁解、三名顯理ノ戰爭及カンド公子ノ死

第一百十四篇

ギー、ス、侯ノ徒黨及侯ノ殺害ニ遇ヘル、ト、並ニ佛王ノ母后

五二

カセリン、ド、メ、イ、セ、ス、ノ死

第一百十五篇

王顯理ニ抗スル所ノシムボンヌノ學士等ノ告示、王顯理ナ

五七

ヴァール王ニ援助ヲ請フ、ヴァ、ロ、ワ、ー、王統ノ季王第三世顯

理ノ祖及ヴァ、ロ、ワ、ー、朝家諸王品行ノ概論

第一百十六篇

德國人民内亂ニ因テ其形勢風習ヲ變ス、當時ノ兵士及ヒ著

六三

作家並ニ學徒ノ狀

第一百十七篇

第四世顯理、神名セタル、グラント稱セラル樵夫、謁テ王ニ

六八

請フノ事

第一百十八篇

巴里府ノ圍ヲ解ク、第四世顯理、寛仁ノ行

七三

第一百十九篇

第四世顯理、カトリック宗徒ト爲ル、巴里府民ノ歡喜及佛國

七五

王家ノ寶器

第一百二十篇

第四世顯理ノ後話、ナントノ法令、王顯理人心ヲ鎮定ス、及

七八

王ノ婚姻

第一百二十一篇	衣服及日用ノ家什	八一
第一百二十二篇	家具什物 ユリ 第四世顯理ノ時ノ菩提家ヲ記ス	八三
第一百二十三篇	サ、リ、侯ノ記	八七
第一百二十四篇	王顯理耶蘇教ノ諸國ヲキテ共和政治ヲラセメシムコトヲ計ル 及前兆ノ國王前兆ヲ知ル説	九〇
第一百二十五篇	后馬利王后正位ノ禮ヲ修ス、第四世顯理殺サル、事	九三
第一百二十六篇	佛后馬利、ド、セイ、ス、ノ品行、マル、サ、ヤ、ル、ド、ア、ン、ク、ル、ノ 領末、第十三世路易ノ寵臣、ド、ル、ウ、イ、ーン、ノ配妖術ヲ附ス ルノ事再世ニ行ハル	九六
第一百二十七篇	第十三世路易ノ時佛國ノ形勢	一〇一
第一百二十八篇	第十三世路易ノ世ニ當リ衣服ノ時樣	一〇四
第一百二十九篇	カル、サ、イ、ナ、ール、リ、シ、ニ、リ、エ、ノ政權及ロ、セ、ニ、ール、ノ圍城	一〇六
第一百三十篇	リ、シ、ニ、リ、エ、ノ死、リ、シ、ニ、リ、エ、ノ文學ノ士ヲ保護ス、コル、テ	一一〇

第一百三十一篇	イ、ロ、及、ビ、モ、ル、ユ、ール、ノ事佛國ノ大學校植物園並ニ新聞紙 ノ權輿	一一四
第一百三十二篇	ト、ハ、リ、ヤ、ノ約定 フ、ロ、ン、ド、ノ役	一一七
第一百三十三篇	マル、サ、ヤ、ル、サ、レ、ン、ノ品行、ビ、レ、ナ、ー、ノ約、カル、サ、イ、ナ、ー ル、マ、ザ、ラン、ノ死、第十四世路易ノ品行	一二二
第一百三十四篇	第十世路易、マ、ラ、ン、ヤ、ー、ノ人民ヲ進擧ス、及ヒ王軍ヲ退ケ謝 和スル事	一二六
第一百三十五篇	第十四世路易、佛國兩國ノ戰爭ヲ公告ス、及ビ路易和蘭ニ入 ル	一三〇
第一百三十六篇	和蘭ノ勢將ニ滅亡セントスオラン、サ、公子和蘭軍ニ將タリ オ、ク、ン、ロ、公子ハ後ニ英王第三世ウイ、ル、ヤ、ム、ト稱スル者コ	一三三



- 第一百三十七篇 カニルセーイニ宮殿、コルセル教壇ノ製造法ヲ佛國ニ  
興ス、ランゲト、クノ水遣 一三八
- 第一百三十八篇 第十四路易治世中ノ文學 一四一
- 第一百三十九篇 第十四路易治世間ノ僧侶 一四四
- 第一百四十篇 風俗好尚 一四九
- 第一百四十一篇 マダム、ド、ブーノンノ事ブルボンダ、イ侯ノ夫人 一五二
- 第一百四十二篇 ブルボン侯ノ事及ヒ侯後ニドーフォント爲ル 一五八
- 第一百四十三篇 公ニヤントノ制法ヲ廢ス、ヒューグノー徒ヲ嚴罰ス 一六二
- 第一百四十四篇 ヒューグノー徒慘刑ヲ被ルノ二 一六六
- 第一百四十五篇 歐洲新ニ兵役ヲ起ス並ニリスウ、イ、キノ講和 一六九
- 第一百四十六篇 佛王路易西班牙國ヲ分取ス 一七四
- 第一百四十七篇 佛王路易ノ孫フ、リ、ブ、ド、アンソウ、ウ、西班牙王位ニ即 一七七

- 第二百四十八篇 佛軍大ニ敗潰ス英軍ヲブルタルヲ取ル 一八〇
- 第二百四十九篇 佛王路易大不幸ヲ受クユートレタトノ講和 一八三
- 第二百五十篇 佛王第十四路易一家ノ不幸ニ違フ並ニ路易殂ス 一八六
- 第二百五十一篇 第十四路易ノ天性ヨリ行事ニ及フ貴族ノ志操 一九一
- 第二百五十二篇 オムレヤン侯佛國ニ攝政ト爲ルミスジ、セーノ創立 一九五
- 第二百五十三篇 疫癘マルセーエ港ニ流行ス並ニ一替教團大ニ德惠ヲ  
施ス 二〇〇
- 第一百五十四篇 第十五路易ノ品行 二〇四
- 第一百五十五篇 カニヤイナールブラウ、リ、及食族ノ事 二〇六
- 第一百五十六篇 マリヤ、セレイデ及洪高利人ノ事 二〇九
- 第一百五十七篇 德ヲ播テ報テ得ル、ニキスラシヤ、ベルノ講和並ニ佛王  
第十五路易ビュンエーンノト、線號ヒラル 二一二

第一百五十八篇 兵學校ヲ新建ス衣服及被服方 二二五

第一百五十九篇 往時魯國ノ役七年ノ後佛國其國地カイビカヲ奪ハル 二二八

第一百六十篇 英國カナダヲ略取ス 二二二

第一百六十一篇 佛國太子ノ書行及其死、並ニ理學家ゾールチール、ルー 二二五

第一百六十二篇 ワイズグイトス派、マヤンリンス、ス派徒互ニ諍闘ス、 二三一

佛王巴力門ト爭議ス、セヤントルーノ論況 二三五

第一百六十三篇 レットル、ド、カッピユ、リヤナコリ、權ヲ恣ニス 二三八

第一百六十四篇 第十五世路易租ス、普魯西王第二フレデリックノ事、王 二四四

綽號ル、グランド稱セラル 二四四

第一百六十五篇 第十六世路易綽號シタル、プキイルドト稱セラル其後 二四九

マリー、アントワネットノ記 二四九

第一百六十六篇 マリー、アントワネットノ後記第十八世路易タルモ 二五三

シ、ノ事、第十四世レ、ルタルダルトワー伯ノ事 二五九

第一百六十七篇 ドクトル、フランキリン、巴里ニ來ル、衣服ノ變革 二六三

第一百六十八篇 ナルゴーチ、タール、米洲改革ノ役、ラ、フ、エ、ノ事 二六九

第一百六十九篇 佛國改革ノ事情 二七二

第一百七十篇 オルレヤン侯マダム、グゼンリ、ヤコグド、シャルト 二七六

第一百七十一篇 ル即路易、ワイリッパ、ミラボーノ事 二七九

第一百七十二篇 ステート、セチラル即佛國ノ國會ワ、コバンノ集議並ニ 二七九

王親臨會、打植場ノ集會 二七九

親臨會議ヲ起ス、ミラボー伯ノ激論、三彩帽號ヲ用キル 二七九

第一百七十三篇 並ニ國民衛兵起ル 二七九

佛國變革ノ權輿、バスナル獄合ヲ毀ツ、王其ノ后ト出奔 二七九

ス 二七九

ス 二七九

ス 二七九

ス 二七九

ス 二七九

ス 二七九

ス 二七九

第一百七十四篇 爵名ヲ廢ス、宰相ヲ、クレーンノ品行、ガ、カルドノ事、並ニ王巴里府ニ入ル 二八二

第一百七十五篇 盟約ノ事、移住人民自テ一軍ヲ編成ス 二八五

第一百七十六篇 王族ウクレインニ遣ル 二八八

第一百七十七篇 ウクレインニ遣去ニル次篇 二九一

第一百七十八篇 他后其ノ相貌ヲ變テ、移住人、國人同方 二九五

第一百七十九篇 一千七百九十二年第八月十日ヲ以テ王冠ニ廢セラレ王族獄ニ繋ガル事 二九八

第一百八十篇 共和政治ノ元年ヲ、コバン管轄トナル 三〇一

第一百八十一篇 第十六世路易糾彈ヲ受ケ死刑ニ處セラル 三〇五

第一百八十二篇 太子ヲ稱セテ第十七世路易ト爲ス 三一〇

第一百八十三篇 王族生存スル者ノ運命 三一四

第一百八十四篇 佛軍大ニ振ッ並ニ佛民ノ憤發 三一九

第一百八十五篇 佛ルヘキ時勢 三二二

第一百八十六篇 拿破侖、勃那波爾的ノ傳 三二六

第一百八十七篇 拿破侖至難ノ任ヲ蒙ル、拿破侖ノ成功及ヒ褒賞ヲ得並ニ婦ヲ娶ル 三三二

第一百八十八篇 政体ノ一改革、以太利ノ役起ル 三三六

第一百八十九篇 以太利役ノ後記、ロライノ戰アルコラヲ略ス並ニ拿破侖、グレナサイエー即精兵ニ救ハル 三三九

第一百九十篇 拿破侖ノ後記 三四三

第一百九十一篇 伊太利交戦ノ結局、及レオベンノ講和ノ約 三四六

第一百九十二篇 モントベローニ在テ日ヲ送ル、カンボーフォルミオンノ講和 三五二

第一百九十三篇 巴里府ニ於テ拿破侖ノ待遇是時拿破侖ノ外貌動作ノ記、藏並ニ征服ヲ起ス 三五五

- 第一百九十四篇 征略ノ兵校及國ニ述ス 三五八
- 第一百九十五篇 佛國ニ於テ神聖天廟の毀壞及ヒヨソビニル大統領ト爲  
ル事 三六三
- 第一百九十六篇 ヤンベエナール山ヲ踏ニル事 三六八
- 第一百九十七篇 マレンゴー及カニンギンデツノ戰並ニルノウイール及  
フエアンゴノ講和 三七四
- 第一百九十八篇 拿破崙選ハシテ佛國ノ帝位ニ登ル 三八二
- 第一百九十九篇 再度ノ兵亂オーストロリヤノ役、プレスブルクノ講和  
並ニプレスツァンドーンニ圓銅柱碑ヲ立ツ 三八六
- 第二百篇 トラツファルガルノ戰、拿破崙戰勝ノ後記、サルワイットノ  
講和及ニ帝ノ出會 三九〇
- 第二百一篇 普魯西王后ノ事及拿破崙王ヲ封スル事 三九八
- 第二百二篇 再建地利ヲ服ス、維納ノ講和及拿破崙婚ヲマリー、ルウイ 四〇二

## 次ニ結フ

- 第二百三篇 魯軍不幸ニシテ敗ヲ取ル、モスコイ府ノ燒夷、及グラツ  
ド、アルモニーノ衰滅 四〇七
- 第二百四篇 佛國政兵ニ攻略セラル及拿破崙帝位ヲ辭スル事 四一四
- 第二百五篇 里巴府人民ノ記 四一八
- 第二百六篇 第十八世路易王位ニ進メタル及拿破崙ニルバ島ヨリ還  
テ佛國ニ入ル並ニ佛ノ士民拿破崙ヲ待遇スルノ情態 四二一
- 第二百七篇 同盟列國再佛國ト相寇ス、並ニワートルローノ大戰 四二五
- 第二百八篇 拿破崙護送セラレテサンクト、ニレーン島ニ至ル及共死亡 四二八
- 第二百九篇 マルシヤキエターノ死、並ニクラツアルレント脫歸ノ事 四三二
- 第二百十篇 佛國朋黨ノ形勢 四三六
- 第二百十一篇 第十世シャルルノ傳、及民黨大ニ振ツ、ナルマニル國ト戰爭  
ノ事 四四〇

第二百十二篇

三日革命ノ起初

四四四

第二百十三篇

革命ノ結局並ニラ・コ・ニ・ラト再命セラレテナゲ・ナル、  
ガ・ド即國民衛兵ノ監督トナル事

四四七

第二百十四篇

路易非立王位ニ即キ統治スル革命ノ記、第三世拿破侖命  
ノ傳

四五二

第二百十五篇

佛國人民ノ記

四六一

第二百十六篇

カペット宗族ノブルボンノ系譜即チ世ノ常ニ此ノ族ヲ  
稱シテブルボン家ト呼ばル者

四六五

目錄畢

具氏佛國史下冊

和蘭 漢加斯底爾 譯

第一百一編

改宗ノ事ヨリマルタン・ルーテル・ジャン、カルヴァン・ヒュー

ズノ一宗門ノ事

羅馬法王其十字符ヲ受ル者ニハ罪科ヲ宥赦スルノ權ヲ有ス是ノ權ハ  
皆之ヲ上帝ニ借レル所ナリ後世ニ至リ財貨ヲ投シ神事ヲ助ル者ニハ  
遂ニ其罪ヲ赦スヲ得ルトス

法王謂フ此レ財貨ヲ得ルノ最良策ナリト是ヲ以テ十字役罷ムト雖神  
事ニ關シテ財ヲ投スル者ニハ猶其罪ヲ赦ス此ヲ號シテアンデユシヤ  
ンスト曰フ即赦罪ノ義ナリ

紀元一千五百十三年ヲ以テニヤン、ド、ノデイシフト曰フ者選ハレテ  
羅馬法王ノ位ニ即ケリ之ヲ第十世レヨト爲ヌ本フオルレンス地名ノ一

貴族タリ天資穎敏人ニ接待スルヲ頗寛裕ナリ又華奢ヲ好ミ常ニセン

ト、ピートルノ祠堂ヲ建立シ前法王二世ジユリユースノ創スル所ノ

結業ヲ成サンヲ願フ而ルニ此ノ事大萬ノ資財ヲ費サスハ能ハサル  
ヲ以テ乃更ニアンドニジャスノ門ヲ開ケリ

此ノ一法ヲ盛ニシ大ニ資財ヲ得ント欲シ凡酒肆肉店及人民群集スル  
處ハ代理者ヲ遣テ之ヲ售ラシメ又市井村落家毎ニ之ヲ售ルヲ猶賣藥  
者流ノ戸毎ニ強賣スル狀ノ如シ是ニ由テ無智昏迷ノ愚俗ヨリ大利ヲ  
收ルニ至レリ

然レモ較才識アル者ハ法王ノ不義不善ヲ惡ムコト久シ王侯貴族ニ至

テハ其民ノ誘惑セラレテ貨財ヲ濫糜スルヲ憤怒スル者亦久シ時ニ一  
僧マルタン、ルーアルト曰フ者アリ法王カ此ノ法ヲ街テ費財ヲ貪求ス  
ルヲ嫉ミ之ヲ痛拒センヲ謀レリ

ルーアルハ紀元一千四百八十三年ヲ以テサキソニーノエースレーベ  
ンニ生ル其父母赤貧ニシテ之ヲ養育スルコト能ハス故ニ其學校ニ入  
ルニ及テ常ニ麵包ノ小片ヲ乞丐シテ之ヲ食フ猶他ノ貧窮兒ノ如シ初  
學ノ業ヲ畢ヘ中學ニ轉スルニ至リ彌益勉勵シ竟ニ大ニ其業ヲ成シ長  
ク世人ニ稱歎敬尊セラル、ニ至レリ

ルーアル紀元一千五百六年ヲ以テオーグスタンノ法教會社ニ入ル偶  
教會ノ文庫中ニ遺テ、用非ザル寫本聖經アリ取テ之ヲ誦讀シ專心研  
究シテ殆其奥旨ヲ極ム衆徒驚歎セサルハナシ但衆徒等ルーアルノ是

書ヲ講讀スルハ果シテ何ノ用ヲ爲シ何事ヲ爲ントスルノ意ヲ知ラスレ  
 既ニシテルーテル敬神ノ篤志ト文學ノ日進トヲ以テ其名譽四方ニ流  
 傳シ選ハレテウイデンベルグノ大學博士ニ任セラル一日ウイデンベ  
 ルグニ在テ大伽藍ノ講席ニ登リ大ニ赦罪法ヲ論シテ衆人ニ告諭セリ  
 時ニ紀元一千五百十七年ナリ其説ク所新奇ニシテ確實ナリ聽者耳ヲ  
 聳テ驚歎セサルハ無シ是其碩學能辨ナルヲ以テナリ

刊行ノ術ハ嘗テ紀元一千四百四十年ニ發明セシ所ナリ 此説蓋誤レリ  
 一千四百二十  
 二年蘭人己 ニ創造セリ 是ニ由テルーテル其説ヲ遍ク全歐洲ニ擴ムルヲ得テ改

宗ヲ希フ者各所ニ群起スルニ至ル佛國ニ在テ之ヲ遵奉スル徒ヲ稱シ  
 テヒユーグノート曰フ此ノ名何ニ由テ起ルヲ知ラス

其改宗スル者遂ニ法王ノ權勢ヲ穢キ去ルヲ得タリ然レモ其説ニ至

テハ少差異ナキヲ能ハズヒユーグノーノ徒遵奉スル所ノ説ハ稍シヤ  
 ン、カルヴァンノ説ト相類セリシヤンハ紀元一千五百九年ヲ以テ佛國  
 ビカルデイー州ノノイヨンニ生レシ人ニテ半生ハ瑞西國セキツアニ  
 住シ紀元一千五百九十四年ニ死セリ

### 第一百二篇

ギース侯ノ一族大ニ勢權ヲ得、ヒユーグノー徒殘虐ノ處置、  
 デピットノ讚聖歌ヲ以テ異教ト爲シテ之ヲ禁スル事

王顯理不虞ノ災ニ死シ二世フランソワ王位ニ即ク時見ルニ忍ビ  
 サルモノアリ時ニ王甫メテ十六歳兵亂相續キ國ヲ擧テ大ニ困弊シ之  
 ニ加ルニ改宗ノ躁擾ヲ以テシ上下大ニ惑亂セリ

朝廷モ又分レテ數黨トナリ此中ニ大黨ヲ結フ一ハギース侯之ニ首タ

リ一ハコンスタブル、モンモランシー之ガ魁タリ是ギース侯ト相敵  
視スル者ナリ國家艱難ノ時王力任フルコト能ハズ將來佛國ノ靜寧ヲ  
望マント欲スルハ實ニ難シ

パロワール族人ノ當時ニ存スル者獨王弟二世フランソワール及王ノ諸弟  
アルノミ而シテ王位ヲ襲カント欲スル者ハアントニー、ド、ブルボン  
ナリアントニーノ王族タル者ハサン、路易ノ故アルヲ以テナリ即サ  
ン、路易ノ季子某ヲブルボンノ始祖ト爲スアントニーノ人ト爲リ朴  
直柔弱ニシテ事ヲ斷決スルコト能ハズ唯兒戲ヲ爲シテ自歡娛トセリ  
アントニー婚ヲナヴァール王ノ長女ジャン、ド、アルブレールニ結ビナ  
ヴァール王位ヲ襲ケリ其婚姻ノ儀ヲ成スニ當テ一奇事アリナヴァー  
ル王女年僅ニ十二其衣裳ヲ裝飾スルコト華奢ヲ極ムルニ因テ軀身ヲ動

作スルコト能ハス王即モンモランシーニ命シテ抱擁シテ寺院ニ拜謁  
セシム

アントニーノ兄弟コンデ公子顯理ト云ヘル者アリ其性大ニアント  
ニーニ異ナリ其多才多能一人ニシテ衆人ヲ兼メ斯人朝ニ在テ勢權ヲ  
握レモ自改宗セシヲ以テ終ニ其權力ヲ失フニ至レリ

佛國ノ大后カトリンド、メデイシスハギース侯ノ黨タリ后及ギース侯  
ノ近親黨與皆榮進シモンモランシーノ位ヲ褫キブルボン族人ヲ黜ケ  
タリ

ギース侯大度德量アリ其弟カルガイナル、ド、レイント云フ者偏ニ宗教  
ニ拘泥シ即其兄ニ勸メテ同ク其教ヲ奉セシム因テヒューグノーノ徒  
タルヲ首告スルモノヲ糾劾審斷センカ爲メ更ニ裁判衙ヲ設立シ其ノ



ヒューグノ一徒ノ嫌疑アル者ハ悉ク之ヲ火刑ニ處セリ其法尤殘酷ナ  
 リ人因テ其術ヲ名ツケテシヤンブルアルダント 火殺會議所ト云フ  
 其何人タルヲ論セズ凡交テヒューグノ一徒ニ結ブ者ヲ見レハ即邪  
 教ヲ奉スルノ人ト爲ス奸黠ノ凶徒等乃己ノ怨ヲ報セント欲シ此際ニ  
 乘シテ其意ヲ逞クセントスル者アリ羅馬宗徒ノ如キモ亦怨テ他人ニ  
 得テ首告セラル者ヒューグノ一徒トシテ嚴刑ヲ免レザル者アリ  
 第一世フランソワノ妹マルクリーモ亦此刑ニ處セラルヲ免レスマ  
 ルグリー曾テ祈禱ノ文ヲ作りテ一書トス而ルニ其説ク所謂聖者ノ言  
 チ載セズ又幽冥ノ事ヲ言ハザルヲ以テソルボン 地ノ大學博士等之ニ  
 蒙ラスニ有罪ヲ以テス巴里府神學者流モ亦邪教徒ノ名ヲ蒙ル蓋ソル  
 ボンノ大學ニ集議スル所ナリ此大學ハ貧人ヲ教育シ上帝ノ道ヲ學ハ

シメンカ爲ニ設ケタル學校ニシテ紀元一千二百五十六年ヲ以テロベ  
 ルトドソルボント云フ者ノ創立スル所ナリ

デピットノ聖詠モ亦禁遏セラル佛國有名ノ詩人マロート曰フ者アリ  
 其禁ヲ犯シテデピットノ聖詠ヲ翻譯ス因テ懼テ亡命ス時ニ羅馬カト  
 リツクノ徒中二三ノ善良人出テ暴虐ノ徒ヲ抗拒ス亦大愉快ノ事ナ  
 リ

キース侯ノ妻アンデス一此ノ殘忍酷薄ナルヲ見テ歎息流涕シ一日大  
 ニ號泣シテ曰ク人民ノ殺戮セラル滿地皆流血ナリ豈是我子弟ノ支休  
 ヨリシテ出ル所カト又公直ナル一宰相アリ大法官ド、ロピタルト云フ  
 此人其何ノ宗教タルヲ問ハズ務テ民ノ欲スル所ニ隨テ之ヲ許サント  
 欲シ終身愷々トシテ心力ヲ此ニ盡シ自ヒューグノ一徒ノ疑ヲ取ルニ

至レリ

然レモ其功勞モ亦少ナカラス時ニ法教照査ノ設アリ只其虞ルベキ弊害アルヲ以テ大法官力拒シテ此ヲ佛國ニ造立セシメスカセリノ事ヲ執ル時トロビタル心ニ服セザル所アレハ之ヲ諫諍抗議スカセリノ猶之ヲ尊敬セリ蓋其誠忠德義ニ感スル所アレハナリ

第一百三篇

ヒューグノーノ後語、第二世フランソワノ祖

夫ノ改宗ノ徒唯庶人ノミニアワズカンテ公子及在廷ノ貴族男女之ヲ信奉スル者頗衆シ其他水師提督コリニー及ダントローノ輩モ亦之ニ與セリダントローハモンセラシノ甥ナリ

此ノ改宗黨ハ上下互ニ和同シ殆大黨ヲ成セリ而シテ自其勢力ヲ計リ

決議シテ其宗教ヲ行ハンコトヲ政府ニ強請シ其自主ノ權ヲ通行セントス即此ノ意ヲ達セント欲シテカンテ公子之ニ首倡トシテ佛國各部ニ在ルヒューグノーノ徒ト會盟締約セリ

結黨ノ情狀發覺スルヲ以テカンテ公子及其同胞ナヴァール王ニ命シテ出テオルレヤンニ來ラシム是即其所爲ヲ照査スルカ爲ニ之ヲ召シテ國會議院ニ至ラシメントスルナリ宗徒等二人ヲ諫メ行クヲナカラント請フ二人詔フ若王命ニ背カハ罪狀ヲ重クセント即發シテオルレヤンニ來ル

來ルニ及テ禮ヲ王族ニ納レント欲シ直ニ先城中ニ入ルギース侯之ヲ收ヘントシテ時ヲ移スマテ忍ビザルモノ、如シ既ニシテカンテ公子收ヘラレテ裁判衙ニ至リ案問シ畢テ死刑ニ處セラレントス

時ニド、ロビタル此ノ審判ヲ拒ミ死刑ヲ宥サント欲シ周旋心ヲ盡シ數日ヲ延フルヲ得タリ此一ニカンデ公子ヲ宥メントスルニ由ルナリ然レトモカンデ公子ノ死旦夕ニ在ラントス時ニ佛王第二世フランソワ一暴ニ死スルヲ以テ情勢忽變シ幸ニシテ敵人ノ手ニ死セザルヲ得タリ

王フランソワ一ノ病ニ罹レル其始死スヘキ狀無シ己ニ數日ヲ經ルニ及テ漸衰憊シテ起ツコト能ハス其死ニ瀕スルノ際唯内廷ノ擾亂スルノミ他ノ事故無シギースノ族謂フ我門閥ノ權勢己ニ竭ク新王幼冲ノ日大后其政ヲ攝セザルベカラスト時ニ新王年僅ニ十歳ナリ

ギースノ族常ニ后カセリシテ蔑視セリ是ニ於テ乃恭順敬禮スルコト甚シ是時后カセリシ專理治ニ留心シ將來ノ法ヲ計リ其王ノ殂スルヲ

追懷スルニ違アラスギースノ族后ニ説テカンテ公子及其同胞ナヴァール王ヲ死刑ニ處セントス

ド、ロビタル、ハ后カセリシニ説テ曰クロレーン家ノ權ヲ抑ヘ后ナシテ安全ナラシムル者ハ獨ナヴァール王等アルノミト后之ヲ然トシ即使ヲ遣テナヴァール王ニ謂ハシメテ曰ク王ノ同胞カンテ公子ヲ照査案檢スルハ妾固ヨリ預カリ知ラザル所ナリト又二條件ヲ約シテ曰ク之ヲ聽カハ向來和親セント其一ニ曰ク王幸ニ妾ノ意ヲ憐ミ其ノ攝政タルヲ望ムコト勿レ其二ニ曰ク請フギースノ族ト和睦セヨト

ナヴァール王其第一條ヲ聽カズ第二條ニ至テハ則更ニ敢テ聽カズ王フランソワ一ノ殂スル實ニ紀元一千五百六十年第二月五日ナリ享年十八在位僅ニ十七月嗣子無シ其弟シヤル奪テ王位ニ即ケリ之ヲ第九

第一百四篇

カセリン、ド、メデイシスノ事、佛國ニ於テ婦人ノ騎鞍ヲ發明ス、  
カセリン方術ヲ信スル談

后カセリンハロレンゾー、ド、メデイシスノ女ニシテ曾祖父ハフロラン  
スノ一巨商ナリ才畧アリテ豪富ナルヲ以テ其族皆公侯ニ列セリ  
后カセリンハフロランスニ生ル是時其親族相闘ヒフロランス府大ニ  
騷擾ス故ニカセリン幼ヨリ能ク國政ヲ執ル者ノ正邪賢否ヲ見ル  
カセリン甫メテ九歳其ノ親戚族類皆逐ハル其フロランスニ在ル者ハ  
唯カセリン一人ナリ是其親族ノ憤怒シ來テ此府ヲ恢復セント謀ル者  
アラントナ恐レ之ヲ質トスルナリ然レモ親族タル者敢テ之ヲ顧ミス

果シテ來テ此ノ府ヲ圍ミ攻メ城堡ヲ破ル時ニ府人彼等ニ謂テ曰ク若  
圍ヲ解カスハ即カセリンヲシテ城堡破壊ノ所ニ立テ、兵火ヲ蒙ラシ  
メント

彼ノ衆之ヲ聞テ驚愕シ遽ニ其圍ヲ解ケリ此時苟圍ヲ解カスハ佛國ノ  
大禍知ルベシカセリン漸ク長シ己ニ十四歳ニ及テ顛理ニ嫁セリ  
カセリン人トナリ英邁敏捷ナリト雖寛仁ノ心無ク情慾ヲ恣ニシ專横  
ナリ其平生ノ行履ヲ要スルニ終ニ權勢ヲ完クスルヲ得ズ其志專眼  
前ニ在テ將來ヲ計ラス

是ヲ以テ自穿ヲ作テ之ニ陥ルカ如キ危難アリ己ノ虚誕權譎ヲ以テ妙  
計術智アリトシ一心ノ誠信ヲ盡サズ以テ其身ヲ終レリ且常ニプロテ  
スタントノ徒ヲ疾ミ視タリ是獨其カトリック教ヲ信奉スルニ因テ然

カセリシ其王顯理不虞ノ禍ニ死スルヲ以テ託言シテ王ノ曾テヒユグ  
ノ一宗ヲ許サンコトヲ豫定スルニ由テ爾ク横死セリトス然レモ王ノ之  
ヲ許サントスルハ固ヨリ無キ所ナリ后ノ性一ノ善良ト稱スベキモノ  
無シ唯一個ノ愛スヘキアリ其文學ヲ好ム是ナリ

此實ニ學者ヲ鼓舞シ又大ニ奇巧ノ手術及心藝ヲ奮起セリトスカセリ  
シ華奢逸樂ヲ好ムト雖又常ニ其本然性質ノ靜順ナルヲ保テリ但其貪  
吝ニシテ驕侈且人ニ悖戾スルノ癖アリ其婦人從順ノ道ヲ得ザルハ世  
ニ稀ナル所ナリ

其面貌其中心ヨリ見レハ常ニ譎詐奸黠ノ相アリ然レモ其進退動止頗  
靜婉ニシテ情度ニ過ルコト無ク物ニ驚動セズ體軀肥大眉目秀美其妖嬌

タル豔姿殆人ヲ動かカス因テ其色ヲ自負シ尤其手足ノ美ナルヲ誇レリ  
脚蹠ノ屈伸自在ナルヲ以テ足ト緊襪スル所ノ小襪ヲ用井ルコトハカセ  
リシ后ニ始レリ后ハ朝ニ臨ミ政ヲ聽クノ日ト雖粧飾時晷ヲ移スニ至  
レリ其衣服ノ華美ヲ盡スモ亦知ルヘシ

后ハ大ニ田獵ヲ好メリ因テ婦女ノ騎鞍ヲ發明ス是ヨリ前ニ佛國貴女  
ノ用井來リシ馬鞍ハ皆枕形ノ物ヲ用井懸下スルニ一木片ヲ以テシ之  
ニ兩脚蹠ヲ安シ以テ證ニ代ヘタリカセリシ后一日是ノ鞍ニ騎シテ田  
獵シ跌テ馬ヨリ墮テ脚蹠ヲ傷ケ又再頂骨ヲ傷ケタリ

后ハ心剛毅ニシテ男子ノ如シト雖方術ニ惑フテ羊皮紙ニ咒文ヲ書シ  
常ニ之ヲ佩ヘリ又好テ占學者流ト談話ス一ノ占學者アリ一日后ニ告  
クルニ其子皆王タルヘキヲ以テスカセリシ后此ノ占言ヲ聞キ大ニ憂

慮セリ其ノ一子死シテ一子立テ順次皆佛ニ王タルコトアラント謂フ  
ヲ以テナリ即其第二三子ヲシテ他國ニ王タラシメントコトヲ圖ル即其  
一ヲポーランドニ王トシ又其一ヲシテ英后エリザベスニ婚シテ英王  
ノ位ニ即カシメント欲シ百方力ヲ盡セモ竟ニ成ラズ

又一占學者アリ告テ曰ク后ハ必サンゼルマンノ地ニ死セントカセリ  
ン大ニ憂慮シ斯ノ如キ地名ヲ聞ケハ敢テ其ノ地ニ入ラズ又曾テ造ル  
所ノ宮殿ニ居ラント欲セシガ俄ニ之ヲ捐テ去レリ是ツユイセリーヨ  
宮ノ地ハ適ニサンゼルマンノ街部ニ属スルヲ知レハナリ

第一百五篇

佛王第九世シヤルノ人ト爲リ并トリヨムヅイラ即三人黨  
及佛國內亂ノ起本

第九世シヤル天性良善ナリト雖其素習漸ク其本性ヲ奪ヘリ若シ教育  
其道ヲ得バシヤルノ大幸ナルベキニ惜ムベシ其ノ之ヲ惡道ニ導ク  
者アリ其幼時ニ當テ母后詭譎ヲ以テ薰陶シ己レ長ク政權ヲ把持セン  
コトヲ欲シ專ラ教フルニ嬉戲遊蕩ヲ以テセリマルシヤルドレツツト  
曰フ者以太里ノ賤人ニシテ言行鄙醜近クヘカラサル人ナリ乃之ヲ近  
ケテ傳トス故ニ習慣スル所知ルベシ

既ニ不善ヲ以テ王ニ教フ王ノ爲ス所至ラサルナシ但酒醜ノ人ト爲ル  
ヲ免ルハノミ其故ハ母后一日王ニ強テ酒ヲ飲マシム王大醉シ狂妄言  
フ可カラス己ニ醒メ大ニ悔悟シ頗漸愧ノ色アリ爾來復大ニ飲ヲ節セ

王ハ天資猛烈勇強動作甚暴ナルヲ以テ偶踏舞スルコアルモ内廷ノ

貴女共ニ踏舞スルヲ欲セス王ハ臂力ヲ負ミ作事之ニ由ラサルハナシ尤喜テ鍛冶ニ從事ス乃良冶ノ鍛スル所モ王ノ戲作スル所ニ超過スルコト能ハス

王身材極メテ強壯ナリ其心事粗勵ナルヲ狂妄人ノ如シ銃砲ヲ鑄造スルニ長シ其力ヲ勞スル甚シク稍其原質ヲ損喪スルニ至レリ長大ナリシ軀幹ハ僂身蹙首シテ其容伸ヒス美目鳩鼻ナリシモ皮膚青白ニシテ面貌瘦瘠シ尤奇相トナレリ

第二世フランソワノ末年ニ在テハ第二世顯理死スルノ日ニ比スレバ弊政更ニ甚シク朝中ノ朋黨ハ尙ホ未止マズ宗徒ノ争鬪ハ益盛ナリトロピタルハ出テ徒黨ノ士ニ説クニ國家ニ盡力シテ宗教ヲ許スベキヲ以テス而レモ竟ニ聽カレス

カセリシ后及ギース侯互ニ權勢ヲ得ンヲ謀レリ而シテギース侯ハ一朝ニシテ固有ノ政權ヲ失フヲ怨ミ因テ己カ勢ヲ張ラント欲レコンスタール及マルシヤルサントアンドレーヲ招誘シテ同盟セリ此ノ盟約ヲ稱レテトリヨムヴイラートス即三人約盟スルノ義ナリ

是時ニ當テカンデ公子己ニ縲繼ヲ免レ自ヒユーグノーノ徒ニ首唱タリ其同胞ナヴァール王ハ三人黨ニ與セリカセリシ后ハ大ニヒユーグノーノ徒ヲ愛シテ其言ヲ所サ特許セリ然レモカセリシ后其欲スル所ヲ違スルコトヲ得ス反テ其害ヲ取レリ

カトリック宗徒ハカセリシ后カヒューグノー徒ノ請ヲ許セシヲ聞キ皆謂フ其禍漸ク我宗ニ波及セン之ヲ拒絶スルハギース侯ニ依頼スルニ如ク者無シト即三人黨ニ就テ相與ニ結約セリ國勢己ニ斯ノ如シ

其内亂アル待ツヘシ乃一事ノ禍機ヲ發スルアリテ遂ニ全國ノ擾亂トナレリ

茲ニヒューグノー徒一小舎ニ集合シ懇ニ祈請セリ偶、ギース侯之ヲ過ク侯ノ從者大ニヒューグノー徒ヲ罵詈シテ忽諍闘ヲ生スギース侯勸解セントシテ得ヌ却テヒューグノー徒石ヲ投シテ侯ノ面ヲ傷ケタリ侯ノ從者之ヲ見テ大ニ奮怒シヒューグノー徒ト格闘シテ數人ヲ殺スヒューグノー徒之ヲ聞キ戰端已ニ開クト爲シ乃兵杖ヲ執テ至ル數年間佛國ノ宗亂擾々タルコト斯ノ如シ此ノ役ヤ殘殺ノ毒忍フ可カラス凡親族故舊離散死亡シ都府市邑悉ク變シテ堡障壘寨ト爲リ市人村民ニ至ルマテ猶賊害ヲ免レズ

第一百六篇

羅馬カトリック宗徒トヒューグノー宗徒ト相戦フヨリギース侯ノ死、英后エリザベスノ贈賂及當時所用ノ武器ノ事ニ至ル

カンデ公子ハヒューグノー宗徒ノ軍ニ將タリギース侯カトリック宗徒ノ首將タリ而シテ兩軍大ニドレウ地名ニ戦フカンデ公子敗レテ虜トナルコリニエー之ニ代ツテ將タリヒューグノー宗徒竟ニ軍ヲ退クカンデ公子縛セラレテギース侯ノ營中ニ入ル侯之ヲ遇スルニ捕虜ヲ以テセス敬スルコト賓客ノ如シ又之ニ親睦交信ノ意ヲ示サント欲レ臥床ヲ俱ニシテ全寢スカンデ公子後日謂ヘルコアリギース侯余ヲ以テ仇敵トセス一視同胞ノ親ト爲シ同床安眠スル平常ノ如シ余爲ニ終夕心忪シテ寢ルコト能ハサリキ



翌年ニ及テギース侯オルレヤン府ヲ圍メリ時ニ紀元一千五百六十三年ナリ將ニ府ヲ拔カントスルノ一夕ギース侯其親族ヲ訪ヒ既ニシテ其營ニ歸ラントス途上刺客ニ逢ヒ重創ヲ被リ地ニ倒レ卒ニ刺客ノ踪跡ヲ得ス

此夜方ニ闇黒彼ノ刺客ハ通霄騎シテ走ル而シテ自ラ意ヘリオルレヤン府ト相距ル己ニ數里ナラント黎明ニ及ヒテ之ヲ回望スルニ相隔タルヲ僅ニ一里許ノミ而ルニ其馬己ニ疲倦シ一步モ進ム可カラス是ニ於テ一家ニ投宿シ臥床ノ下ニ潛匿シテ始テ睡ニ就ケリ捕吏尋テ到リ之ヲ捕縛シ巴里府ニ監送シテ死刑ニ處スギース侯ハ創ヲ被ル後六日ヲ經テ終ニ死セリ

ギース侯死セントスルニ臨ミカセリン后ヲ諫テ曰ク宜ク速ニヒュエーグ

ノ一徒ト識和ス可シトギース侯ノ子顯理襲テ侯タリカセリン后ギース侯ノ諫ヲ容レヒュエーグノ一徒ト和シ大ニ德惠アル約言ヲ爲シタリ

是役ニ當リ英國ノ女王エリイサベスハ大ニヒュエーグノ一宗徒ヲ助ケタリエリイサベス常ニ自謂フ余ハプロテスタント教堂ニ司長タル者ナリト其ヒュエーグノ一徒ヲ助クル最稱ス可キ者ハ其ノ貽ルニ大砲九門ヲ以テスルモノナリ宗徒大砲九門ヲ受テ謂フ之ニ報ユル所無カル可カラスト

而シテカナンデ公子及其黨人等皆貧困ニシテ僅ニ獸毛及一二ノ寺鐘ヲ有スルノミ其寺鐘ハ曾テ諾爾曼泥州ノ寺院ヨリ取り來レル所ナリ爾後二十年ニシテクートラ<sub>地名</sub>ノ役アリ其ノ一隊ハ大砲ヲ有スル僅ニ二門一隊ハ僅ニ三門ヲ有セリト是ニ據レハエリイサベスノ貽ル所ノ大

砲九門ハ其貴重スルコト知ルベレ

小銃ハ既ニ當時歩卒ノ戦具タリ騎兵モ短槍ノ用ヲ廢シ代ルニ短銃ヲ用テセリ是軍制ノ一變革ナリ鎧冑ニ至テハ其不便ノ害反テ護身ノ利ヨリモ大ナリト雖猶之ヲ用ヰテ廢セス

第一百七篇

ヒューグノー―徒ノ再起カシテ公子死ルベルチ―及服裝ノ

事

ヒューグノー―徒后カセリシノ前約ヲ顧ミス且反テ其ノ利害ヲ詰辨シ復軍役ヲ起サンヲ決議ス時ニ紀元一千五百六十七年ナリ其ノ始テ戦フヤコンスタ―ブルモンモランシー―之ニ死セリ而ルニ彼レノ死ハカセリシノ反テ喜ブ所ナリ

ナツアール王モ亦既ニ前役ニ死スカセリシ復忌憚スル所ナシ王ニ説クニコンスタ―ブルヲ他人ニ命スルヲ以テセスシテ其第三子アンジユ―侯顯理ニ命セシムアンジユ―侯ハ后ノ最愛スル所ナリ

時ニアンジユ―侯年甫テ十六マルレヤル、ダウアンヲシテ之ニ副タラシムダウアンハ老練ノ將ニシテ后カセリシノ事ヲ委スル所ノ者ナリ此人常ニ后ニ諂事シ曾テ貴女ヲ劔ラシム此ノ女ハ后ノ最嫉ム所ナレモ后敢テ之ヲ聽サス

紀元一千五百六十九年第三月十三日ヲ以テ兩軍大ニシヤルナツク府ノ近地ニ戦フ時ニ官軍ハヒューグノー―徒ヨリ多キヲ殆四倍スカシテ公子腕創未全癒ニス乃扶ケラレテ軍ニ赴ク其將ニ戦ハントスルニ當テ奔馬アリ其脛ヲ蹴テ之ヲ折ル公子ハ意トセス急ニ令ヲ傳ヘテ會戦ス

時ニ官軍大舉スヒユールグノ一徒風ヲ望テ大ニ潰走スカンテ公子進退自由ナラス遂ニ降ヲ請フ官軍之ヲ扶ケテ馬ヨリ下シ一樹下ニ憩ハシム時ニアンジユ一侯ノ將某來テ背後ヨリ之ヲ射殺セリ公子三子アリ長ヲ顯理ト曰フ其後ヲ嗣ケリ

ナヴァール王ノ子ベアルン公子顯理ハプロテスマント宗ノ首魁タリベアルンノ稱ハナヴァール國ノ州名ヨリ來レリ此州ニ住スルノ民ヲ稱シテベルチート爲ス皆姿容アリ其衣服華麗ニシテ之ト相適セリ此州ニ在ル者貧民ト雖猶好テ美衣ヲ服ス其家ニ在リ或ハ郊野ニ力作スルモ其裝飾觀ル可シ其ノ首帕ハ最華美ナル者ヲ擇テ之ヲ用井タリ此州ヨリ製出スル所ノ首帕ハ其ノ色長ク變セス且捲縮ノ憂ヒナキヲ以テ世大ニ稱用ス其中央ハ濃褐色、淡褐色或ハ茶褐色ニシテ其縁飾モ

亦色ヲ異ニセス其華麗ナル紅顔ニ相映照ス頭髮ハ分カレテ額ノ正中ニ垂レ兩臉蓋ハレテ首帕ノ下ニ露ハル其裝袿嬌麗ト謂フベシ其頸ニ小華環ヲ挂ク頗美ナリ又肺部ニ肩巾ヲ被ラセ肩巾上ニ煖手巾ヲ懸ク手ヲ其裡ニ又シテ胸ニ襯接ス首帕ノ外別ニ蒙衣アリ此ヲ「カビユレー」ト稱ス精細哆囉呢ノ白色或ハ緋色ナル者ヲ以テ之ヲ裁縫ス其襟領ハ黑色ノ剪絨ヲ以テス之ヲ其頭ニ蒙リ垂下シテ肩部ヲ過キ或ハ疊テ頭上ニ戴ク儀容ノ美觀ル可シ

第一百八篇　ベアルン公子顯理後ニヘンリール、ガラント稱スル

者其母死シテナヴァール王ト成ル、及其ノ婚姻

カンテ公子ノ死スルニ當テベアルン公子顯理年甫メテ十六ナリ此ノ公子ハ「ボー」ノ城中ニ生マル今一大龜甲アリ即顯理ノ脚架トナセシ者

ナリト云フ又鐵造ノ二大又アリ公子晚年用井ル所ニシテ後來又齒ヲ  
製スル原始タルヲ以テ大ニ其發明ノ精細ナルヲ稱セリ

此ノ公子ハ史乘中最著名ノ一人ナリ今公子ノ年少ニシテ未大聲名ア  
ラザル時ノ事跡ヲ記セン是其當時抗敵タルカトリック宗徒等ガ記載  
セシ所ニシテ後世ノ浮説ト固ヨリ同シカラズ

夫ベアルン公子ハ最愛スベキノ少年ナリ年僅ニ十三ニシテ己ニ十八  
九歳ノ人ノ如シ其信篤寛恕ニシテ胸中城府ヲ設ケス喜テ人ニ交ル而  
シテ其言貌ノ温雅ナルコト人心服セザルハ無シ故ニ公子ノ在ル所人  
必市ヲ爲セリ

其人ト接話スル謹敬ニシテ冗言ヲ費サズ要言ヲ省カズ又我父ノ新教  
ニ染ムルヲ怨惡シ終身之ヲ忘レズ謂フ斯ノ有徳ノ人ヲ誘導シテ其宗

教ヲ信セシムルハ何ソヤト公ハ毛髮稍赤色ヲ帶フレモ之ガ爲ニ貴女  
ノ愛顧ヲ失フニ至ラズ其容貌温和眉目隣ムベク動止觀ルヘシ

紀元一千五百七十年ニ在テ王家黨即カトリック宗徒トヒューグノー  
ノ徒ト再和平ス而シテ王家黨ヒューグノーノ徒ヲシテ疑惑無カラシ  
メント欲シ王妹マルゴリートヲシテベアルン公子顯理ニ婚嫁セシメ  
ンコト約シ即ナヴァール女王及コリニー其他ヒューグノー徒中ニ首  
タル者ヲシテ婚儀ヲ助ケシメント欲ス因テ之ヲ招テ婚辰ニ會セシム  
ナヴァール女王其良人ノ遺言ヲ忘レ遂ニ之ヲ許セリ

ナヴァール女王將ニ往テ婚辰ニ會セントシ行装ヲ治ムルニ富テ暴ニ  
没セリ時ニヒュークノーノ徒皆謂フ女王ノ死ヲ致スハ毒藏手套ノ然  
ラシムル所ナリト曰フ此ノ手套ハ女王曾テ佛后カセリンニ屬セル以

太里ノ蕪物商ヨリ得ル所ナリ女王死セルヲ以テ公子顯理ナヴァール  
王位ヲ嗣ク而シテ紀元一千五百七十二年第八月十八日ヲ以テ遂ニ前  
ノ婚儀ヲ終ヘタリ

婚儀ヲ修ムル爲ニ佛國朝廷ニハ大饗宴ヲ開キヒューグノーノ徒ヲ接  
待スル最厚シ故ニ或人コリニーニ速ニ巴里府ヲ去ランコトヲ説キ且謂  
テ曰ク王ノ情意反覆常無ク以太里ノ女カセリシ詭詐測ルベカラス請  
フ之ヲ信スルコト勿レト

コリニー肯テ從ハズシテ曰ク苟我ニシテ猜疑ヲ懷カバ恐ラクハ佛國  
ヲシテ復内亂ヲ生セシメン余ハ危險ヲ踐ムトモ敢テ辭セスト是ノ時佛  
廷ノヒューグノーノ徒ヲ遇スル特ニ厚キヲ以テ人之ヲ疑テ謂フ此ノ間  
恐クハ奸詐アリテ此ニ及フナラント

コリニーノ友人コリニーニ訣別シテ曰ク余將ニ巴里府ヲ去ラントス  
朝廷吾輩ヲ接待スル厚ニ過キタリ但其大奸計ヲ施シヒューグノーノ  
徒ヲシテ犧牲タラシムルカ如キコトアルハ余カ知ラザル所ナリト

第一百九篇 「サンバルテレミー」忌日ノ殺戮

后カセリシ熟慮細思スルコト茲ニ二年許果シテ一大奸計ヲ出セリ史乘  
中ニ之ヲ毒虐ノ最第一トスヒューグノーノ全徒ヲ屠殺セント欲スル  
ノ事是ナリ佛王第九世シヤル稟性兇暴ナリト雖自斯ノ大虐ヲ行フニ  
至テハ尙戰栗恐懼スル所アリ而ルヲ况ヤ后ノ意ニ出テ、此ヲ爲サシ  
ムルヲヤ

后カセリシ其欲ヲ遂ルコトヲ得テ而シテナヴァール王顯理及コリニー  
其他ヒューグノーニ首タル者皆カセリシノ窰坑中ニ陥リ王妹ヲシテ

ナツアール王ニ嫁セシムルノ餌ヲ食ヘリ而シテ王顯理ニ至テモ猶其  
殺戮ヲ免レサルヘシ

后ノ計己ニ成リ未發セス期スルニ第八月二十四日ノ夜ヲ以テ之ヲ殲  
ニセントス城中大鐘ヲ鳴スヲ期號トス王ノ衛兵ト市兵トヲ以テ先驅  
トス衛兵ハ是端西ノ備卒ナリ又敵人ト分別シ易カラシメント欲シ白  
布ヲ其幅ニ被ラセ肩巾ヲ其左臂ニ掛ケシム

王シヤルノ殘忍其母后ニ如カズ即其期ニ至リ意氣大ニ沮喪シテ身體  
爲ニ振慄ス時ニ后カセリン及ギース侯王ヲ勸メテ意ヲ決セシム后カ  
セリン猶且王ノ意ノ變スル有ンヲ恐レ期ニ先ダナラ暗號ヲナサシ  
ム

茲ノ殘忍慘酷ノ甚シキ實ニ人情ノ忍ビサル所アリ今之ヲ略シテ記サ

ス僅ニ一個ノ酸鼻ニ堪ヘサル事ヲ錄ス亦以テ其情狀ヲ概見スルニ足  
レリ時ニ巴里府人殺戮セラル者五千人之ヲサシバルテレミーノ殺  
戮ト稱スサシバルテレミーノ忌日ニ當レルヲ以テナリ時ニコリニー  
ト云者アリ性清廉ニシテ正教宗ヲ奉スル人ナリ亦殺サル

號鐘始テ鳴ルギース侯早ク水師提督コリニーノ家ニ趨リ從士ヲシテ  
入テ之ヲ殺サシメ自階下ニ獨立シテ敢テ入ツスコリニー不虞ノ禍ヲ  
蒙リ身傷ツキ動止意ノ如クナラスト雖尙意トセス其容色夷然トシテ  
復與ニ之ト抗セス

一奴ノ日耳曼ヨリ來テギース侯ニ属スル者アリ手ニ白刃ヲ提ケコリ  
ニ一ノ室ニ入ルコリニー之ヲ見テ曰ク嗟汝少年此ノ白頭翁ハ汝カ當  
ニ敵スヘキ所ナリ然レモ今汝カ爲サント欲スル所ヲ爲セ余カ性命唯

一緩ノ如キノミト兎奴一言ノ之ニ答ルコト無ク即進テ之ヲ刺ス  
 巴里府ヨリ諸州郡ニ至ルマテヒューグノーノ徒ヲ死刑ニ處スヘキノ  
 命アリ殺戮セラル、者七萬人時ニ一知縣ノ命ニ從ハザル者アリバロ  
 シノ知縣ウイコオント、ドルテツズト云者王命ニ答フル書ニ曰ク我が  
 バロンニ於テハ陛下ニ忠ナル者アレヒ民ヲ斬殺スル兎徒ハアワズト  
 其始ニ在テハナヴァール王及カンデ新公子モ亦兎網中ノ人ナリ而レ  
 其親族タルヲ以テ王シヤル心之ヲ肯ゼス王シヤル此ノ心ノ忍ビザ  
 ル所アルハ最喜ブベク愛スベシ王又其乳母ヲ保護ス是其プロタスタ  
 ント宗徒タルヲ以テ或ハ殺サレンコトヲ懼レ常ニ左右ニ在ラシメ須臾  
 モ傍ヲ去ラシメス

王又一個ノプロタスタント宗徒ヲ擁護保祐シテ遂ニ死ヲ免レシム之

ヲ乳母ヲ助クルニ比スレハ又一點ノ私心無キニ出ル所ナリ之ヲアン  
 プロース、パーレト爲ス頗外科醫術ニ長セン人ニテ世ニ名譽アリ此  
 ノ人世ニ出テサル時世ノ外科者流皆謂ヘラクスノ如キ奇異ノ術ハ人  
 ナ治療スト稱スヘカラス之ヲ稱シテ截斷トスルコト穩當ナルヘシト  
 其ノ稱歎セラル、此ノ如シ

是時王家黨己ニヒューグノーノ黨ニ勝テ大ニ喜ヘリ王シヤル自謂フ今  
 ヨリシテ國家將ニ無事ナラント世人モ亦謂フ應ニ然ルヘシト然ルニ  
 王シヤル自其治平ノ機ヲ破リ終身常ニ安キヲ能ハズ遂ニ其身及カセ  
 リンチ懲治スルノ事起リ國家ヲ擾亂スルノ基本ヲ爲スニ至レリ

王シヤルヒューグノーノ黨ヲ暴殺スルノ罪ヲ以テ之ヲギース侯ニ歸シ  
 自其事ニ與カラスト爲ルヲ日久シ既ニシテ俄ニ其ヒューグノーノ徒

ニ勝ツヲ喜ビ上帝ニ禮謝セントス時ニヒューグノーノ徒ニシテ未死セサル者二百萬人而ルニヒューグノーノ徒ヲ死刑ニ處セシ者其始メニ在テハ皆此ノ徒ヲ邪教ト呼做シ悉之ヲ滅絶センコト謀リ反テ之ヲ激動シテ兇暴ナラシムルノ勢ヲ致シ始テ之ト和親セリ

第一百十篇 アンジュー侯撰ハレテポーランドノ王ト成ルポー

ランド人佛國ニ使ス佛國之ヲ饗スポーランド人大ニ語學ニ長ス

佛王シヤル其弟アンジュー侯ノ其母ニ愛セラレ且人望ノ歸スルヲ以テ大ニ之ヲ忌ムコト久シ是ニ於テ其ノポーランドニ王タルヲ聞キ大ニ喜色アリ其母カセリシ亦曾テ讖言ニ因テ大ニ憂フル所アリ今ニシテ始テ大ニ喜コブ

然レモアンジュー侯顯理ポーランドニ王タルコト欲セズ常ニ己ニ服スル所ノ佛民ヲ棄テ去テ野蠻ノポーランドニ往クコト欲セズ而レモ王シヤル母后カセリシト己ニ決議セルヲ以テ強テ往カザルヲ得ス時ニ宰相及在廷ノ臣皆大ニ心力ヲ竭シ二國ノ間ニ適當スルノ儀ヲ盡シポーランド國使ヲ接待スルノ備ヲ設クポーランドノ使節紀元一千五百七十三年第八月十五日ヲ以テ來テ巴里府ノ城門ニ達セリ其裝ノ華美ナル數百年間復見ザル所ナリ其大使八十二人ニシテ貴族ノ之ニ陪從スル者一百有餘人ナリ

大使及貴族等衣服行裝ノ美麗ナル巴里府人皆之ヲ奇觀トス其軀幹長大ニシテ鬚鬚頗長ク容貌莊嚴ナリ其衣上ニ美革ヲ蒙ラセ武器騎馬ヲ裝飾スル等ノ絶美ナル觀ル者歎稱セサルハナレ



其貴族ハ皆羅甸語ヲ能クス又日耳曼語ヲ能クス或ハ以太里語ニ通シ  
佛國語ニ長セル者亦多シ時ニ佛國ノ貴族ハ一モ羅甸語ヲ解スル者ナ  
シ是ニ於テ王羅甸語ヲ能スルニ貴族ヲ召シテ參朝セシム

王ノ未即位セサル日毎ニ置酒宴會ヲ事トス己ニ良辰ニ至リテ宮中ノ  
大殿ニ於テポーランド王ノ位ニ即キ龍蓋下ニ坐シポーランドノ大使  
ヲ見ル時ニ大使二人銀函ヲ肩ニ負ヘリ函中一ノ定例書ヲ藏ス斯書ハ  
一百十個ノ貴族之ニ結印セシ所ノモノナリ此ノ禮己ニ畢テ母后カセ  
リソツウイルリーノ花園中ニ大宴ヲ設ケテ之ヲ饗ス時ニ一岩石アリ  
銀冠ヲ戴キ突然トシテ帷幕ノ後ヨリ出テ跳テ空中ニ飛翔ス稗史ニ之  
ヲ稱シテアロツクトス奇怪ノ事ト雖其蹟尙今ニ傳ハレリ

斯ノ時花園中十六個ノ少貴女アリニツテ 彫像等ヲ安置スルカ爲ニ  
ニ作レル壁間ノ凹處

坐セリ其衣服ノ裝飾文彩皆佛國各地ノ圖ヲ畫ケリ各諸樂器ヲ携ヘ音  
樂ヲ奏レ詩歌ヲ製シ以テ新王ヲ讚美ス唱和己ニ畢テ地上ニ下リ各其  
衣上ノ畫圖ニ隨ヒ其地ノ物産ヲ以テ新王顯理ニ獻納セリ  
又十六ノ女子併立シテ佛國踏舞ノ最奇ニシテ快活ナル戯ヲ做セリ是  
ヲ以テポーランドヨリスル衆人モ皆顔ヲ開キ大ニ歡娛ヲ極メテ佛國  
接遇ノ厚意ヲ喜ヘリ

第一百十一篇 第九世シヤルノ憂疾ヨリ死ニ至ル及母后乳母及

大法官ドロピタルノ事

王シヤルサンバルアルミーノ殺戮ヲ行ヒシヨリ其心一日モ安カラス  
醜貌衰弱シ其顔色青白ナリレモ變シテ赤色ト成リ舊相漸失シ眼光猛  
烈ヲ形ス夜ハ心悸シテ靜臥ス可カラス旋眠リ旋覺メ竟ニ熟睡スルコ

ト能ハス

一身ノ痛苦ハ人ノ知ル所ニ非ス心ノ憂悶モ亦斯ノ如シ王サンバルヲ  
レミーノ暴殺ヨリ其聲音狀貌常ニ胸懷ニ往來シ介々トシテ忘ルヽユ  
ト能ハス覺エヌ悲泣呻吟シテ往過ヲ歎恨シ自其罪ヲ訴ルヲ屢ナリ

母后カセリシ王シヤルニ語テ曰ク王若世ヲ辭セハ即ポーラント王  
理ヲ迎ヘ還シテ位ニ即カレシメザルヲ得ズ但其ノ未至ラザルニ及テ政  
ヲ攝センヲ請フ王未之ヲ聽ルサス后遂ニ復王シヤルノ命ヲ待タス  
一意之ニ向フ王乳母アリ即曾テ王ノ力ニ因テサンバルテレミーノ慘  
毒ヲ脱セシムル者ナリ

乳母一日王ノ傍ニ在リ倦困シテ王ノ臥床側ニ假寐セリ時ニ忽王ノ呻  
吟スル聲アリ眠忽醒ム

乳母潛ニ進テ王ノ臥床ニ近キ少シク帷幕ヲ塞ケ之ヲ伺フニ王大ニ哀  
吟シテ曰ク噫我カ乳母何等ノ人血ソヤ何等ノ殺戮ソヤ余何ヲ以テ此  
ノ兇惡ノ事ニ與セシヤ嗚呼我カ上帝苟余カ罪ヲ免レシメハ請フ我ヲ  
保護救助セヨト又自痛悔長吁スルヲ數時乳母乃己ノ手巾ヲ取テ王ニ  
獻セリ王ノ手巾ハ涕淚沾濕シ滴ラントスルヲ以テナリ因テ王ヲシテ  
眠ニ就カレメント欲シ帷帳ヲ下シ出テ我カ寢ニ退ケリ

王シヤル紀元一千五百七十四年第五月三十日ヲ以テ遂ニ没セリ享年  
二十四在位十三年王日耳曼帝二世マキシミリヤンノ女アリザベツ  
トヲ娶ル后エリザベツト性質溫柔ニシテ女徳アリ佛國王家ノ之ヲ娶  
ルハ過分ナリト稱ス

是時佛國ノ殘刻兇暴ナル不幸ノ世トスヘシ而レテ明正ノ法度ヲ制シ

又法中ノ弊習ヲ改正スルハ又奇トスヘシ是等ノ德惠誠ニ皆ミツシエ  
 ールロビタルノ大功勞ニ出タル所ナリ

后カセリンハロビタルノ誠忠ナルヲ忌疾シ之ヲ貶斥シテ遂ニ大法官  
 ノ官ヲ褫クニ至ルロビタル謂フ我カ國ノ衰弊ニ趨ク其勢恰急濶ノ如  
 シ又何ゾ禦クベケント即更ニ法律ヲ改メ其ノ施行上ニ舊害アルヲ除  
 キ新利ヲ興サンコトヲ要シ終身力ヲ此ニ費セリ此人洪德ニシテ其行正  
 直ナリ紀元一千五百七十三年ヲ以テ死ス壽六十八

第一百十二篇 第三世顯理ギーランドヲ去ル及其習慣嬉戲并ニ

其ノ友ノ死ニ因テ哀痛ヲ示ス

王顯理其兄第九世シャルノ死スルヲ聞ク時其身ハギーランド國クラ  
 コウ府ニ在リ乃佛國ニ入ラント欲スル情思愈切ナリ其心曾アギーラ

ントノ政事ニ在ラス遂ニ夜ニ乘シテ潛ニ遁逃シ道者ノ及ハンコトヲ  
 恐レ境ヲ踰ユルマテ遂ニ一步ヲ休止セス

時ニギーランドノ貴族王ヲ追フ者アリ其國境ヲ踰ユテ追ヒ及ヘリ因  
 テ其ノ情ヲ陳シ王ノ國ニ還ラントヲ請フ王之ト約言シテ曰ク且佛國  
 ニ入テ公務ヲ裁了レ後必歸ラント王ノ年少ノ時ニ在テハ爲メ所ノ百  
 事殆成人ノ如シ後氣質變化シテ善心消亡スル所アリ

現今王ノ齡己ニ二十三ニ及フトイヘモ其ノ瞻儀恰少年ノ如ク大ニ成  
 人ノ風ヲ損ス常ニ宮殿ヲ鎖閉シ其中ニ坐臥シテ衣服ノ新異様ヲ製セ  
 ントスルニ其ノ心ヲ費セリ王顯理喜テ容姿ヲ粉裝スルコト殊ニ癡ナ  
 ルカ如レ或ハ赤色ヲ以テ其顔ヲ塗刷シ夜ニ至レハ更ニ一層ノ容色ヲ  
 見ハサント欲シ香麝膏ヲ着ク

又其兩手ノ雪白ナラシコトヲ欲シ夜眠ノ間ト離常ニ手套ヲ脱セス又其頭髮ノ赤色ナルヲ厭テ之ヲ濃染シテ黒カラシム此徒ニ未王ノ欲スル所ニ充ルニ足ラザルノミナラス爲ニ反テ奇害ヲ取り頭髮悉脱落シテ遂ニ禿頭トナルニ至レリ是ニ於テ王其光禿頭トナルヲ忌ミテ常日頭巾ヲ戴ケリ

王顯理嘗テ憂悶遣ルナシ適ノ一侯來リ謁セリ此ノ侯王ト面晤スル時其顔色相貌ノ異様ヲ録載スル左ノ如シフー一侯王ニ一小室ニ拜謁ス時ニ王腰ニ一劍ヲ佩ヒ肩胛ニ短被衣ヲ着ケ頭巾ニ小頭巾ヲ戴キ頸ニ一ノ小籃ヲ掛ケタリ其籃中ニ二三ノ小狗ヲ盛ル其ノ狗侯ノ拳ヨリ小ナリ

王顯理技藝ヲ好ミ頭ニ高脚盃ヲ戴キ毬子ヲ其上ニ旋轉ス是ヲ其ノ常

日ノ娛樂トス此ノ戲技唯王ノ左右ニ及ボスノミナラス大ニ宮中流傳シ遂ニ滿朝貴族ノ從士僮僕其他ノ奴輩ニ至ルマテ皆此ノ遊戲ヲ爲スニ及ヘリ王顯理ヲシテ斯ノ如キ頑愚ノ兒戲ニ耽溺セシムル者ハ誰ソヤ一ニ母后カセリシノ爲ス所ニ係ル彼ノ意自己ノ政權ヲ專握シ王ヲシテ敢テ國事ニ關涉スル勿カラシトナ要シテナリ

ポーランド國民ハ王顯理肯テ其國ニ復ラサルヲ以テ他人ヲ論撰シテ國王ノ位ニ即カシム故王顯理其前日臣民タルポーランド國人ヲ顧念スルコト無クポーランド人モ亦其舊君タル顯理ヲ問フ者無クシテ此ニ至レリ王顯理最親愛スル所ノ女友カンデ侯ノ女死ス因テ哀泣慟哭シテ止マズ

王顯理カンデ侯ノ女死シテ悲傷喪心シテ晨昏泣涕シテ己マサルコト

三日百事ヲ棄歸シテ總テ間ハス後稍人事ヲ知覺シ即哀情ノ止ムベカラザルヲ表センガ爲ニ創意シテ一物ヲ構造ス即當時貴族ノ衣服上ニ穿用スル銀製ノ穿紐針頭骨形ニ作レル者ナリ

第一百十三篇 兩宗盟約佛王ノ嗣位ニヨリナヴァール侯顯理ヲ

除斥センコトノ弁解 一ニ託言トナス 三名顯理ノ戰爭及カンテ

公子ノ死

王顯理ハ斯ノ如キ嬉戲ヲ以テ心身ヲ淫溺シ徒ニ時日ヲ浪費ス此ノ時ニ在テ佛國內亂寧日アルコト無レヒユエーグノーノ徒ハアラソン侯ノ左袒セルヲ以テ其勢益強盛ナリ此ノアラソン侯ハ王顯理ノ季弟ニシテ當ニ佛國王ノ位ヲ嗣クベキ者ナリ

紀元一千五百七十六年ヲ以テヒユエーグノーノ徒トカトリック宗徒ト盟

約ヲ爲ス而シテカトリック徒等盟約中ノ條件ニ據レバプロテスタント

ト宗徒ニ恩惠ヲ施スコト實ニ過當ナリト謂ヒ各不平ノ意アリ是ニ於

テギース侯其黨ノ心中甘シトセサルニ因テ説クニカトリック宗徒ノ其遵奉スル所ノ宗門ヲ保護セン爲ニ盟約ヲ結フノ義ヲ以テス

ギース侯ノ其黨ニ説クニ異教ヲ拒絕シテ共ニ奉信スル所ノ宗教ヲ保ツテ以テスルハ是侯ノ賜ニ其外ヲ修飾スルナリ其真意ハ此ニアラス蓋此ノ一大盟約ヲ結ビ以テ功名ヲ成スニ至テハ必我ノ權勢ヲ佛國中ニ振ハントノ爲ナリ侯ノ巧偽最愚民ノ尊信ヲ取ル所ニシテ其才氣ノ敏給ナルコト奢侈ヲ極テ而シテ貨財ヲ吝惜セス但外間ノ名譽ヲ得ルノ情甚シ是ヲ以テ大道正理ヲ以テ其情ヲ抑制スルコト能ハス

王ノ心術此ノ如シ是ヲ以テ二宗朋黨相軋シ國內騷然トシテ安カラズ

王顯理之ヲ憂ヒカトリック宗黨ニ左袒レテ自大盟主ト成リ大ニ其徒ノ光榮勢力ヲ滿盈シテ以テ策ヲ得タリトス而ルニカトリック宗黨ノ志ス所ハ佛國王家ヲ顛覆シ其權勢ヲ奪ハントス而ルニ顯理ハ此ノ黨ノ陰謀有ル斯ノ如ク畏ルヘキヲ王家頽壞ノ際ニ至ルマテ曾テ覺悟セ

ス  
紀元一千五百八十四年アウソン侯死セリ此侯死シテ國勢又大ニ變換セリ侯ノ死後王顯理ニ嗣ア位ニ即カントスル者ハナヴァール侯顯理タリ此ノ侯天資品行ノ善美ナル世ニ著明ナル所ナリカトリック宗徒此ノ侯ノ王位ヲ襲カントスルヲ以テ大ニ忌畏シ之ヲ除斥シテ王冠ヲ戴クコト能ハザラシメント欲ス因テ其辨ヲ爲テ曰クナヴァール侯顯理ハ其遵奉スル所ノ宗教アロラスダントナルヲ以テ王位ヲ嗣クベ

キ理ナシト

是時ギース侯大ニ起初ノ説ニ左袒ス然レモ王顯理ハナヴァール侯顯理ニ於テ襲位ノ理ナシト謂フヲ可ナリトセシ王顯理曾テナヴァール侯顯理ヲシテ勉メテ召命ニ應セシム因テ其名ト其母后ノ名トヲ書シテ以テ與ニ來ルヲ促ガス而ルニナヴァール侯顯理心未遽ニ此等ノ事ヲ信セス

紀元一千五百八十五年西班牙王第二世フィリップ自表シテゼプロヲ即チ盟約ヲ保護クトル即チ盟約ヲ保護オフ、ゼ、レギト云ヘリスル人ト云フ義後ニ起ル所ノ役ヲ號シテ

三名顯理ノ役ト爲ス何トナレハ佛王第三世顯理ナヴァール侯顯理及ギース侯顯理皆此ノ役ニ關係スルヲ以テナリ

紀元一千五百八十年カンダ公子死シテヒューグノーノ徒大ニ損害ヲ

被ルニ至ルカカンデ公子ノ死ハ其徒僕ノ毒殺ニ出アタリ此公子天資英明嚴正忠實ニシテ又贈量アリ其寛裕ナルハ從弟ナヴァール侯顯理ト相伯仲セリ又眞正ノ宗教ヲ尊崇スルノ意ヨリシテアプロアスタントヲ奉戴ス但私利ヲ經理スルノ情及卑陋貪吝ノ態ハ公ノ大ニ愧ル所ナリ

第一百十四篇　ギース侯ノ徒黨及侯ノ殺害ニ遇ヘルヲ并ニ佛王

ノ母后カセリン、ド、メデイシスノ死

王顯理ハ日ヲ逐テ憂悶シテ安ニスル所無シ其左袒セシ所ノカトリック盟約中ノ人モ王ヲ視ルコト傲慢無禮ニシテ之ヲ遇スルコト苛刻ナリ是ニ於テ王顯理自爲ス所ヲ知ラズ昏眩迷惑スルニ至レリ王ノ微力ナル敢テナヴァール王顯理ト争闘スルヲ得ズ

ギース侯モ亦勢羸弱ニシテ抗戦スルコト能ハズ故ニ正理ヲ堅守スル

ヲ無ク首鼠兩端ヲ持シテ兩黨ノ間ニ浮沈セリ

王顯理ハ固ヨリ民ニ信セラレス民ノ侮慢スル所トナレリ民或ハ王トギース侯トヲ比對シテ論シテ曰ク王顯理ニ背カザルモギース侯ニ面從シテ之レカ臣民タランヲ希フト而シテ又王ヲ廢シ寺院ニ禁錮セシメント謀ルヲ數次ニ及ヘリ又ギース侯ハ代理者ヲシテ衆人ヲ誘諭シ之チシテ王顯理ニ背カシム

ギース侯ノ代理者タル其黨中ノ一人最伶俐ナル者ヲギース侯ノ妹トス此ノ女子曾テ王顯理ノ其醜陋姿色無キヲ誹笑セシテ以テ大ニ之ヲ怨ミ計リテ王顯理ヲ指シテ衆民ノ嘲笑スル者ト做シ其權勢ヲ挫カントス此ノ女一日大不遜ノ語ヲ出シテ王ヲ犯ス王其語ヲ聞テ便平常ノ昏病爲ニ惺然トシテ驚覺セリ

ギース侯ノ妹曾テ其佩ル所ノ黄金製ノ剪刀ヲ取テ人ニ示シテ曰ク妾ガ此ノ剪刀ヲ用ヰルニ於テ何ヲカ最上好事トセン妾ハ之ヲ以テ佛國王位ヲ叨ニスル所ノ無禮王ノ毛髮ヲ剪除シ之ヲ寺院ニ入レ別ニ有徳ノ人ヲシテ其位ニ登ラシメント欲スト語氣傲慢其大膽見ルベシ

ギース侯ノ計蓋此ニ至テ成レリ侯ハ王顯理ノ命ヲ用ヰスシテ自巴里府ニ至レリ府民欣然トシテ之ヲ奉迎ス其狀一ニ戰勝ヲ歡呼スルガ如シ王顯理此ヲ聞キ驚愕惶遽シ即時護衛ノ瑞西兵ヲ巴里府ニ徵シテ之ヲ拒カシム然レモ市民ノ群集スル者擧テ數フヘカワズ衛兵至ルト雖入ルコトヲ得ス此ノ時ギース侯威儀嚴肅容貌沈重ヲ失ハス故ニ此ノ危難ヲ免ルヽヲ得タリ

此ノ結局ニ至リ王顯理自謂フ余此ノ府ニ在テ生命ヲ保ンスルコト能

ハズト乃夜ニ乘シテ宮殿ノ背後ヨリ花園ノ瑞壁ヲ踰エ馬ニ跨リ道ヲシヤルトルニ取テ遁逃セリ此ノ時母后カセリシ殿中ニ在リ後王顯理トギース侯トヲシテ勸解和平セシムルヲ得タリト雖猶心ニ於テ相和スルニ非ス

王顯理ギース侯ノ如キ貪名ノ徒ヲ惡ミ之ヲ擯斥セント欲スレモ其處分ノ方ニ苦ミ竟ニ其陰計ノ賤シキヲ省ミス其罪ノ疑ハシキヲ問ハス一向殺害シテ以テ其意ヲ逞フセンヲ謀レリ乃第十二月二十二日ノ夜ヲ以テ王顯理自衛兵九人ヲ以テ竊ニ王ノ常ニ室內ニ來往スル所ノ陰處ニ到ル王衛士ヲシテ各短劍ヲ持タシメ端立レテ之ニ命シテ曰クギース侯顯理ヲ殺戮セヨト

王ノギース侯ヲ殺サントスルノ計忽漏洩ス是ニ於テギース侯ニ報シ



テ魯誠ニシムル者九人ニ及ヘリ皆曰ク明日ノ會議侯往ク勿レトギ  
 一ノ侯意フ此王ノ余ヲ恐喝セント欲スルノミト復魯誠ノ意ナシ  
 ギース侯ハ王命ニ從テ將ニ會議ニ參セントシ往テ王ノ室内ニ至ラン  
 トス忽人アリテ途ニ要シテ之ヲ殺ス王ギース侯ノ死ヲ目撃シ急ニ去  
 テ母后カセリシノ房ニ入り欣々然トシテ之ニ語テ曰ク余今ヨリシテ  
 復王タリト

是時母后カセリシ敢テ王顯理ノ所爲ヲ呵責セス又肯テ喜色ヲ顯ハサ  
 ス獨潛然トシテ王ニ答テ曰ク我必事ノ將ニ此ヨリ起ラントスルヲ見  
 ルト後母后カセリシ尋テ死スルヲ以テ其ノ結果果シテ何ノ狀アルヲ  
 目撃スルニ至ラス嗟乎母后其ノ奸計詐譎至ラサル所無ク遂ニ國家ノ  
 大難ヲ釀成シ之ヲシテ顛蹶ニ至ラシメ其子孫寒酸困極ニ至ランコト

ヲ憂慮痛悔シテ此カ爲ニ其壽期ヲ促スト云フ

第一百十五篇 王顯理ニ抗スル所ノソルボンヌノ學士等ノ告示

王顯理ナツァール王ニ援助ヲ請フツハロワ―王統ノ  
 季王第三世顯理ノ殂及ビツハロワ―朝家諸王品行ノ

概論

ギース侯殺戮セラルノ翌日又人アリテ弟カルテイナール、ド、ギース  
 ナ殺セリ己ニ斯ノ兄弟ヲ害スト雖事又更ニ王顯理カ期望スル外ニ起  
 ル即カトリック盟約ノ徒黨激怒發憤シ民之カ爲ニ煽誘セラレテ竟ニ  
 干戈ヲ動カスニ至レリ

茲ニソルボンヌノ學士アリ其言フ所民之ヲ信スルコト國憲ニ異ナラズ是  
 ノ學士等衆ニ公言シテ曰ク現今佛國王位ニ在ルヴァロワ―家ノ顯理

今ヨリ王位ヲ失ヘリ之ガ臣民タル者必爲ニ忠心ヲ致スベカラズト是ニ於テ顯理將ニ王冠ヲ襪カレ王坐ヨリ下タサレントシテ大ニ憂苦セリ因テナヴァール王ニ懇訴スル所アラントス

王ナヴァール王ニ請テ曰ク顯クハ慈愛ヲ垂レ我カ困厄ヲ憫ミ救ヘトナヴァール王常ニ王顯理ノ罪戾ヲ惡ミ又其不信ヲ疑フ故ニ其ノ請フ所果シテ得難シトス然レモナヴァール王遂ニ許諾シテ王顯理ト會盟シテ復和平ヲ結ヘリ

兩王紀元一千五百八十九年第七月ヲ以テ其軍ヲ合併シ大兵巴里府ニ迫レリ其勢殆避クヘカラス府民驚愕シテ爲ス所ヲ知ラス忽一凶變アリ佛國ノ形勢頓ニ變セリ

紀元一千五百八十九年第八月一日ヲ以テ僧クレマント曰フ者王ニ三

大事ヲ上言スルニ託シテ王ノ室ニ入り一書ヲ奉呈ス王之ヲ讀テ未卒ハラサルニ僧其ノ懷中ヨリ匕首ヲ出タシ王ヲ刺ス王重傷ヲ蒙ル

王顯理即善ヲナヴァール王ニ贈リ友愛ノ情ヲ陳ヘ且佛王ノ位ヲ傳ヘシコトヲ請ヒ又之ニ正宗教ヲ廢棄スルヲ誓ヘリヴァロワール統ノ佛王位ヲ保有スル者茲ニ二百六十一年王顯理ニ至テ竟ニ絶エタリ

ヴァロワール統ノ王タル者十三世之ヲ概論スルニ多クハ勇悍端壯ニシテ尤技術ヲ愛好スルノ人タリ此ノ王統治世ノ間外敵大ニ佛國ヲ凌蹙シ内國人モ亦割據獨立シテ數多ノ州ヲ立ルニ至レリ而ルニ今英人ノ來テ内地ニ住スル者ヲ境外ニ驅逐シドフクチャーブルゴンヨプロヴァシス及ヒブルタンヤ等ノ州ヲシテ佛國ノ版圖ニ歸セシメ其盛大ノ境域且聯合スル所ノ土地ヲ以テ悉後世佛王タル者ニ遺贈セリ

復更ニ之ヲ論スルニヴァロワー統ノ十三王中僅ニ一二王ノ取ルベキ者アリ其他ハ皆貪慚暴怒ニシテ其情願スル所ハ我臣民ヲシテ幸福ヲ享ケシメンヨリハ他邦ヲ劫掠シテ土地ヲ奪フニ在リ其臣民ヲ視ル權理ノ有無ニ關セス一ニ皆之ヲ蔑如シ下民ヲシテ租稅ノ重キニ困シミ生活スルコト能ハザラシメ貴族ヲ貶黜シテ其爵祿ヲ褫キ其嬖寵スル所ヲ舉ケ其器ニ任ヘザルモ猶且重職高爵ヲ與ヘリ

ヴァロワー王統ノ系譜

第六世 フィリップ 第三世 フィリップ ノ孫

紀元一千三百二十八年即位ス

第二世 ジャン 綽號シタル、ボント 稱ス

紀元一千三百五十年即位ス

第五世 シャル 綽名シタル、サー ント稱ス

紀元一千三百六十四年即位ス

第六世 シャル 綽名シタル、ピユ チノト稱ス

紀元一千三百八十年即位ス

第七世 シャル 綽名シタル、ヴィクト リオト稱ス

紀元一千四百二十二年即位ス

第十一世 路易 紀元一千四百六十一年即位ス

第八世 シャル 紀元一千四百八十三年即位ス

第十二世 路易 カー ベー同族ニシテ オルレヤン、ヴァロワー 家

ト稱スル シャル、ル、サー、ジ、ニ ノ曾孫 紀元一千四

百九十八年即位ス

第一世フランソワ

アングレーム、ヴァロワノ同族シヤル、ル、サー

シユノ玄孫紀元一千五百十五年即位ス

第二世顯理

紀元一千五百四十七年即位ス

第二世フランソワ

紀元一千五百五十九年即位ス

第九世シヤル

紀元一千五百六十年即位ス

第三世顯理

紀元一千五百七十四年即位ス

以上

以上

以上

以上

以上

以上

以上

以上

第一百十六篇

佛國人民内亂ニ因テ其形勢風習ヲ變ス當時ノ兵

士及ヒ著作家並ニ學徒ノ狀

内亂ノ久シキ佛國ノ勢復見ルベカラス其戰フヤ兩邦對立シテ相爭フ

ニ非ス徒ニ其都府アル所ハ各其黨與ヲ爲シテ相戰ヘリ

兄弟相殺シ骨肉相吞噬シテ止マスカトリック宗徒及プロテスタント

宗徒ノ如キモ亦寢ヲ安スルヲ得ズ凡民ノ其田ニ耕ス者ハ手ニ劍ヲ

把リナカラ耕鋤スルニ至レリ己ニシテ各黨力竭キ之カ魁タル者皆自

戰闘ヲ休メザルベカラザルニ乃猶相爭ヒテ流血淋漓トシテ曾テ一日

ノ寧靜ヲ見ズ

各黨悉常備兵ヲ隨帶セリ常備兵トハ之ヲ民兵ニ分ツ所以ナリ此ノ時

ニ當リ瑞西ノ王家衛兵ヲ除クノ外ハ其服色ノ同一整齊ナル者アラズ

王家衛兵ノ服ハ皆淡黒ノ哆囉ヲ以テ之ヲ製ス是第三世國理曾テ定ムル所ノ製ナリ而シテ各黨ノ貴族職員モ亦皆其服様ヲ殊別セリカトリック宗徒ハ深紅ノ短表衣ニ袈裟ヲ掛ケタリ又フューグノー黨ハ短表衣ト袈裟ト共ニ白シ是等ノ服ハ皆其記號ヲ表スルノミニシテ軍陣ニ用ヰルニ非ス

兵人ノ儲錢ハ名有テ實無キ者多シ幸ニシテ僅ニ之ヲ得ル者アリ不幸ニシテ得ザル者アリ以太里ノ役ハ大ニ兵人ノ僥倖スルコトアリ佛國ノ兵士其金銀財貨ヲ得ル者最衆シ故ニ庶人ニシテ剪絨金衣等ヲ服スル者少ナカラズ就中一士アリ綠色ノ紵絲衣ヲ服シ其裳ニ装着スルニ金貨ヲ以テセリト世ニ傳フル所ナリ其内亂ノ久シキ盛衰互ニ變シ富榮往テ貧辱來リ美錦ニ代ルニ爛布ヲ

以テス此ノ時佛國ノ兵人ヲアルスタッフノ貧軍ト同一ノ稱アリ(フアルスタッフハ英王第五世ノ臣ニシテ大ニ王ニ寵遇セラレ奢侈ヲ究メタリ然ルニ後漸貧困ニシテ其臣屬ニ衣服ヲ給スルノ資無ク衆富ニ弊衣ヲ着テ王ニ從テ步行ス遂ニ一千四百六十九年ニ死ス)而シテ其殘酷或ハ農人ヲ暴殺シ或ハ耕夫ノ所有ヲ奪掠シテ僅ニ其性命ヲ保ツコトヲ得タリ

此ノ昏闇ノ世ニ遇テ寒心酸鼻忍フヘカラサル者アリ人ノ相殺シ相食ム其流血ヲ見ルモ目常ニ慣テ恬トシテ意トセス慾情ノ深結セル黨人ノ暴行ニ誘ハレテ恒心ヲ放失シ遂ニ是非曲直ヲ辨別セザルニ至レリ世ノ史ヲ編輯スル者皆謂フ佛國ノ人民ウハロワ一統ノ季世三王政ヲ爲スノ日大ニ人ノ性情ヲ變シ漸々兇惡ニ歸セリ然レモ僅ニ其暗世

ヲ照スベキ者ハ文學進步ノ功ニ出ツ文學ノ進步スルハ第一世フランソワールノ力多シ

當時有名ノ詩人ヲシヨゲール及デスボルトノ二氏トスシヨワールハ悲歌戯曲ノ始祖ニシテデスボルトハ悲歌ノ作ニ名アル者ナリ又詩ヲ裁シ事ヲ紀スル學ノ佛國ニ在ルハフランシヤールドロンサールヲ鼻祖トス此ノ詩流最盛ニ世ニ行ルロンサールハ英ノ女王エリイザベス大ニ之ヲ寵愛シ常ニ宮中ニ在ラシム蘇格蘭女王メリーモ亦之ヲ愛シ曾テ幽囚セラル時其ノ監舍内ニ入レ爲ニ鬱情ヲ慰メタリ

格蘇蘭女王メリー曾テ銀板ヲロンサールニ贈レリ之ニ彫鏤スルニバ  
ルナッス山ノ圖ヲ以テセリ異教神傳中ニ所謂詩學ノ神アポロ一常坐ノ處ヲ云フ其之ヲ贈レル故ハ前ニ女王メリーノ鬱憂ノ日ニ當リロ

ンサールニ慰メラル、ヲ以テ之ヲ謝スルナリ又ハルナッスノ畫ハ女王曾テロンサール作ル所ノ此ノ山ノ詩ヲ一讀シテ作ル所ナリロンサール勉テ佛國ノ語ヲ更新セリ先時佛國ノ語韻モ大ニ粗鹵ニシテ野鄙ナリシト云フ

當時散文家ニシテ世ニ著名ナルハモンターギユナリ斯人紀元一千五百九十二年ヲ以テ死ス其製スル所ノ文章一時大ニ世ニ賞歎セラレ今ニ至テ猶尙誦讀スル者多シ其文馳驟自在簡要ニシテ法アリ當時貴族ノ風流情況ヲ寫シ出スト絶妙ナリ然レモ之ヲ文物大ニ備リ敬神己ニ行ハル、ノ現今ニ比較スレバ尙尺サ、ル所アリ

當時學徒ノ所行ヲ自記スル者アリ今之ヲ載セン其書ニ曰ク紀元一千五百四十五年余甫テ十四歳弟某ト一貴族ノ家ニ寓ヌ文學ヲ修センガ

爲ナリ兄弟此ニ在ルヲ三年心ヲ正シ學ヲ勉メ刻苦スルヲ今ノ人ノ能  
知ル所ニ非ス

毎朝第四時ヲ以テ起キ先上帝ヲ拜シ第五時ニ至テ讀書ヲ始ム腕下ニ  
大書冊ヲ置キ手中ニ墨汁器ト燈燭トヲ持テ講義ヲ聽キ第十時ニ至ル  
マデ少モ間斷無シ其事終テ即當日記間ノ書ヲ看ル而シテ後午餐ヲ喫  
セリ

午餐已ニ畢リ希臘神史及「アモスタニー」等ヲ讀テ自娛ミ午後第一時  
復書ヲ讀過シ第五時ニ至レハ諳誦ノ課サヤシ又此日聽ク所ノ講義ヲ  
校閲シテ晚餐ヲ喫シ希臘羅句等ノ書ヲ熟覽セリ若安息日ニ值ヘハ禮  
拜堂ニ赴キ説教ヲ聽キ畢テ或ハ樂ヲ奏シ又遊歩シテ以テ一日ヲ銷遣  
セリ又説ク善王一タビ出テ佛國大ニ其困難ヲ脱ルコトヲ得タリ今之

ヲ下條ニ記セン

第一百十七篇 第四世顯理紳名シテルガウント稱セラル樵夫謁  
カ王ニ請フノ事

第三世顯理佛國ノ禍亂ニ因テ其位ヲ退クノ報巴里府ニ達ス府民之ヲ  
聞テ皆欣々然トシテ覺エス心情ノ素ヲ見ハスニ至レリ上ニ説クギ  
ス侯ノ妹時ニ坊間ニ馳走シ號呼シテ曰ク好新報アリ好新報アリ暴君  
己ニ斃レタリト

己ニシテ王軍ノ兵營大ニ動搖シ軍中ノ貴族皆ナヴァール王ニ心ヲ傾  
ケリナヴァール王ハ即第四世顯理ト稱セシ者ナリ史中之ヲ記シテ顯  
理ルガウント稱ス此ノ稱其人ト相稱フ此ノ王ハ今ニ至ルマテ佛國人  
民皆其德ヲ仰ケリ

カトリック盟約黨ハナヴァール王ノ佛王ノ位ニ即クテ肯ゼズ却テナ  
 ヲナル王ノ叔父カルタイナール、ドブルボンヲ佛王トシ第十世シヤ  
 ルト稱センヲ要シ將ニ之ヲ公告セントスカルデイナールハ八年八十  
 性柔弱ノ人ナリナヴァール王顯理ノ奉養ヲ受タリカトリック黨ノ之  
 テ奉スル其心實ニ然ルニアラズ唯其名ニ假托シテ自其權威ヲ恣ニセ  
 ントスルノ私情ニ出ツ  
 時ニ第四世顯理ノ軍大ニ勢氣ヲ減損ス是カトリック黨ノ貴族輩分散  
 スル者多キヲ以テナリ此等ノ貴族其意猶第三世顯理ヲ敬愛ス然レモ  
 當日ノ評聞ニ在テハ局外中立タラント欲ス第四世顯理ニ要シテ曰ク  
 王若カトリックノ宗徒タルベクバ力ヲ協セテ王ヲ助ケントカトリッ  
 ク宗ハ王ノ常ニ惡ム所ナリ

王顯理兵勢愈減シ遂ニ巴里府外ノ兵營ヲ撤シ去テ諺爾湯泥地名ニ奔ル

王ノ諺爾湯泥ニ奔ル唯敵人ノ途ニ要スルヲ恐ル、ノミナラズ其下ヲ  
 統一スルコト能ハサルニ苦ム其中ニカトリック宗徒アリヒューグノ

黨ト相仇視シ互ニ相拒クアルヲ以テナリ

故ニ兩黨互ニ王ニ疑ナキコト能ハス又嫉忌ナキコト能ハス而シテ王  
 顯理ニ於テハ又一人ノ之ヲ助クル者無シ此ニ由テ獨其艱難ニ當ルノ  
 ミ王ノ能ク艱難ニ堪ヘ困苦ヲ忍フヲ世未曾テ見ザル所ナリ時ニ王年  
 三十六天資淳朴明達ニシテ才敏幼時ヨリ百苦ヲ嘗メ來リテ能ク性ヲ  
 忍ヒ志ヲ立テリ

王自奉スル甚儉ナリ人ニ接スル頗寛ナリ毫モ慳吝ノ色無シ且勇敢ノ  
 氣アリ事ニ臨テ蓄縮セス以テ能敵人ヲ服ス其志行誠忠實實ナル世稱



シテ佛王中ニ希ニ有ル所トス

王ノ心寛宏矜恤ノ情深ク大ニ貧民ニ伸ガル凡管窺子ノ恩惠ヲ高貴ノ人ニ得ルハ最稀ナル所ナリ今王ノ稱スベキ者ヲ説話セン

茲ニ管樵夫アリヲオンテインブローノ林中ニ家居セリ一日自用ノ薪ヲ伐ルニ一獵人騎シテ馳セ來リ倉卒ニ問テ曰ク獵犬ノ此ヲ過クル無キヤト樵夫頭ヲ掉リ流涕シテ曰ク今王ノ德アル世舉テ稱スル所余ハ一心ニ之ニ拜謁センコトヲ祈望スルノミ又獵犬ヲ見ズト

獵人樵夫ノ意ニ感シ其意ヲ達セシメント欲シ命シテ背後ニ騎セシメ之ニ謂テ曰ク余ハ同僚ヲ尋テ馳驅スルナリ追テ同僚ニ會セバ乃余モ亦共ニ王ニ謁セント樵夫云フ余何ヲ以テ王タルヲ祈スベキ獵人答テ云フ帽ヲ其頭ニ冠スル者即是ナリ

是ニ於テ馬ヲ驅テ大ニ進ミ其同僚ニ會フ同僚大ニ喜ヒ群至シテ獵人ヲ圍繞ス此群雖レテ相見ザルコト久シケレバナリ而シテ各禮ヲ尽シ之ヲ祝シテ其帽ヲ脱ス時ニ王顯理朝士群中ニ在リテ樵夫ヲ召ス樵夫始テ其王タルヲ識リ愕然トシテ驚懼シ且欣躍セリ

第一百十八篇 巴里府ノ國ヲ解ク第四世顯理寬仁ノ行

カトリック盟約黨ノ勢益猖獗ナルニ西班牙王之ニ假スニ權力ヲ以テシ之ニ贈ルニ貨財ヲ以テシテ大ニ其勢威ヲ助ク最首タル者ハマエーシ侯ナリ此侯ハギース侯ノ弟ナリ其爲ス所ハ大ニギース侯ト異ナリ今此ノ首魁タルヲ得ルハ其爵位アルト之ニ黨比左袒スル者アルヲ以テナリ

紀元一千五百九十年カトリック黨嘗テ立テ、王トセント欲スル所ノ

カルデイナル、ブルボン亡セリ此ノ人其甥第四世顯理當ニ佛王タルベ  
 キノ權理ヲ抑ヘ己レ自之ヲ領取セントスルノ意ハ曾テ無キ所ナリ同  
 年ヲ以テ第四世顯理巴里府ヲ圍メリ  
 府民各力ヲ尽シテ防禦シ隊ヲ制シ兵ヲ習フ又各競テ銅造ノ器具ヲ出  
 シ以テ大砲ヲ鑄造セリ府民ノ防守斯ノ如シト雖若王ヲシテ之ヲ急擊  
 セシメバ之ヲ拔クノ易キ枯ヲ拉スルカ如キノミ而ルニ王ハ敢テ之ヲ  
 欲セズ

王ノ曰ク余實ニ府民ノ父タリ今此ノ民ヲ殺シテ之ヲ取ルハ取ラザル  
 ニ如カズト王ノ德惠慈心斯ノ如シ因テカトリック黨ニ在テ此府ヲ保  
 全スルコトヲ得タリ是時府民圍中ニ在テ將ニ飢困シテ死ニ至ラント  
 ス會西班牙ノ軍來テ之ヲ援ケ王モ亦圍ヲ解テ去ル

哨兵巴里府ノ障壁ヲ守ル一終夜黎明ニ及テ王師ノ退去スルヲ見ル  
 即紀元一千五百九十年第八月三十日ナリ時ニ哨兵等王師ノ俄ニ去ル  
 ヲ以テ大ニ悦ヒ踊躍シテ大ニ叫呼ス府民爲ニ眠ヲ驚カシ復急警アリ  
 ト謂テ奔黃慌忙スルニ至レリ

己ニシテ府民等王師ノ信ニ退去スルヲ知り其ノ歡喜スルコト狂ノ如  
 ク或ハ尙其實ヲ審ニセントシテ障壁ニ上リ觀望スル者アリ或ハ久シ  
 ク飢渴ニ苦シムヲ以テ忽倒懸ヲ解クカ如ク巴里府外ニ出テ之ヲ天神  
 ニ謝シ競テ禮拜堂ニ集合スル者アリ

第一百十九篇 第四世顯理カトリック宗徒ト爲ル巴里府民ノ歡

喜及佛國王家ノ寶器

佛國ノ擾亂スル己ニ久シ而シテ之ヲ和平ニ復セシムルハ要スルニ唯

是一事アリ即王顯理ノ一變シテ心ヲカトリック宗ニ歸スル是ナリ王ノ之ヲ思フコト日久シ遂ニカトリック神學者ノ説教ヲ聽クニ至レリシユリー―其他眞實良心ノヘューグノー―宗徒王ニ勸ムルニカトリック宗徒ダランヲ以テスルコト切ナリ其意衆民ノ和親安全ヲ得ルハ唯此ノ一事ニ止マルヲ知レバナリ是ニ於テ王紀元一千五百九十三年第七月二十五日以テアウリンドニーノ寺院ニ詣テ改宗ノ禮ヲ修メタリ巴里府ノ民是ニ於テ兵仗ヲ收メ鬪諍ヲ止ム此ノ時シユリー―ノ言フ所ヲ説カン戰止ムノ翌日巴里府民大ニウリンドニーニ集合ス王直ニ之ニ接見ス是ニ於テ王ノ嚮フ所人民之ニ隨フ王ノ過クル所人民來リ充ツ行クニ路無キニ至レリ人民ノ群集充塞スルヤ皆大ニ歡呼シテ王ノ寶祚延長ヲ祝ス王容色温

潤ニシテ謙讓アリ且其ノ素ヨリ人望ヲ得タルヲ以テ皆心ニ感動シ相謂テ其厚福ヲ祈リ又涕泣シテ天ヲ仰テ曰ク上帝冀クハ我王ヲ保助セヨト王ノ天資良善ナル亦事ニ觸レテ感シ易ク即人民ノ祈請スルヲ見聞シ其面眞ニ感喜スルノ色アリ

今茲ニ王ノ自話ヲ舉ゲ示サン王一友人ニ語りテ云フ巴里府民ハ王者ニ謁見スルニ頗粗卒ナリ余曾テ禮拜堂上ニ在リ偶一老嫗アリ其齡殆八十餘遽ニ來リテ余ガ頸ヲ抱擁シテ接吻セリト

王ノ此ノ宗教ヲ信スル隨テ亦其福ヲ厚重セリ貴族輩ノ王ニ服從センヲテ願ヒ來リ謁スル者一日一日ヨリモ多シ王之ヲ待遇スル寛容温厚其德望爵位ヲ以テ毫モ之ヲ胸襟ニ挾サマザル者ノ如クス

是時ニ當リランス府ハマエーシ侯ノ領スル所タリ此ノ侯ハ未王ニ服

事セザルノ故ヲ以テ王ノ位ニ即ク其禮ヲシヤルトニ行ヘリ時ニ紀元  
 一千五百九十四年第二月二十七日ナリ其冠笏ハ即位セントスルニ當  
 テ新ニ製スル所ナリ此當時稱スル所ノ佛國ノ寶器所謂王家ノ號章ハ  
 前日カトリック盟約黨ノ破毀セルヲ以テナリ先王シヤルマンヤノ服  
 スル冠冕モ之ト同シク亡ヒタリ此ノ冠ハ佛國王家無比ノ最貴寶ニシ  
 テ永ク襲藏セル所ナリ

第一百二十篇 第四世顯理ノ後話ナントノ法令王顯理人心ヲ鎮  
 定ス及王ノ婚姻

第三月二十二日衆王顯理ヲ迎ヘテ巴里府ニ入ル時ニ王ノ軍人巴里府  
 民ト常ニ仇視スルヲ以テ頗暴行アリ而ルニ府民爲ニ喧擾スル所無ク  
 又苦訴スル所ナシ王ノ入ルニ及テ悉ク市戸ヲ開キ和平歡喜ノ狀ヲ表

シ向來久シク安全ヲ保ツヲ得タリ

王此ニ於テ巴里府民ノ常ニ王ニ抗敵スル罪ヲ赦スヲ公告セリ王斯ノ  
 如キ寛仁ナル人ニシテ世或ハ以テ己ムヲ得ザルニ出ツトスルハ大ニ  
 然ラス王若之ヲ報セント欲セバ其力之ヲ能クスルニ足ラン而シテ爾  
 セザルモノハ曾テ怨ヲ報スルノ心アラザルヲ知ルヘシ

マエーン侯後王ニ服従ス王ノ之ヲ待スル大寛ニシテ而シテ恭敬ヲ尽  
 セリ侯深ク其德ニ感シ爾來忠誠ノ臣タリモンバンシエー侯ノ夫人ハ  
 王ニ於テ曾テ大ニ怨惡スベキ敵人タリ而ルニ王ハ待スルニ懇篤禮敬  
 ナリテシテ其レヲシテ愧感從順スルニ至ラシム試ニ他人ヲシテ王ノ  
 地位ニ居ラシメバ必報仇スル所アラシム而ルヲ其接スル猶故舊ノ如ク  
 ス故ニ其ノ從服此ニ及ベリ

佛國ノ擾亂三十七年是ニ至テ僅ニ和平ヲ得タリ而レテ又ヒユークノ  
 一ノ宗徒ノ權理「エディ、ド、ナント」ト稱スルノ法令アリ「ナント」ハ  
 都ノ名此處ヨリ出セル法令ナルヲ以テ此ノ名稱アリ「エディ」トハ法  
 令ノ義ナリ「此ノ宗ヲ保存スルコトヲ得自來自主自由ニ宗教ヲ奉シ官  
 爵モ亦受クルコトヲ得タリ

佛國ノ民深ク王ノ德化ヲ仰キ公明ノ政廷ヲ奉戴スルニ至レリ其租稅  
 ナ課徴スルニ至テハ猶舊ノ如シト雖亦言論ヲ起スノ人無レ此王ノ用  
 ナ節シテ浪費セズ貨財ヲ出納スル最公明ニレテ私ニ涉ラザルヲ知レ  
 バナリ

王顯理大ニ思慮ヲ農民生ノ法ニ尽ス夫民ノ蠢々タル王者之ヲ度外  
 ニ措キ曾テ其窮乏疾苦ヲ問フ者無シ因テ王ノ治世ノ始ニ當テギエー

シノ農民頗助搖セリ

民ノ服セザル兵力殺戮ヲ以テ之ヲ制スルハ古來ノ習俗法トス王ハ乃  
 之ヲ爲サズ自出テ其哀訴スル所ヲ聽キ隨テ之ヲ審按シ其民ニ對シテ  
 不理ナルハ悉ク之ヲ廢棄セリ是ニ於テ民人各其業ヲ勤メ所轄ノ民首  
 トシテ王ニ悅服ス

紀元一千六百年ヲ以テ王顯理マリ、ド、メディシスヲ聘シ婚ヲ結ヘリ  
 王ノ之ヲ娶ルハ其ノ國ノ爲ニシテ自其意欲ノ爲ニセス后マリ、性  
 酷烈ナリト雖其意柔弱ニシテ常ニ以太里ヨリスル所ノ寵臣ニ抑制セ  
 ラレ佛朝ニ在テ竟ニ諍問ヲ醸シ出セリ

第一百二十一篇 衣服及ヒ日用ノ家什

王顯理諸工事ヲ勸メ製造物ヲ盛ニセントスリ—ヨシ市ノ絹帛ヲ貿易

スルガ如キハ王ノ創ムル所ナリ又通商貿易ヲ博行セント欲シ其自奉  
スルノ節儉ニ反シ在廷ノ諸臣ヲ鼓舞シテ大ニ華侈ヲ究メシム

是ニ由テ衣服ノ用費更ニ多夥ナリ其衣服ヲ飾ルニ金銀寶玉ヲ以テシ  
唯其價ノ貴キノミナラズ衣ルニ其ノ重ニ任ヘス内廷ノ一貴女ニ奇談  
アリ其ノ女時風ノ服裝ヲ極メテ身ニ蒙リ其衣ノ重ニ壓セラレテ動作  
スルコト能ハス又起立スルコト能ハズト

當時貴族男子ノ衣服ハ銀纒ヲ以テ織成シ其靴及ヒ容袴ハ白色ヲ用シ  
表衣ハ更ニ黒色ヲ用シ華美ノ細縫ヲ爲シテ之ニ細縵セリ其裏ハ銀帛  
ヲ以テシ帽ヲ製スルニハ黒剪絨ヲ以テス又多ク寶玉ヲ佩帶セリ

嘗テ有鬩風領ノ製アリ前代ニ至テ廢ス第三世顯理ノ侍臣ニ王ノ有鬩  
風領ヲ服スル毎ニ鼓槌針ヲ用テ之ヲ縫繫スルヲ職トセル者アリ適人

アリ之ニ略遺シテ有毒針ヲ用テ王ノ頸ヲ刺サシムル者アリ是ヨリ  
シテ遂ニ之ヲ廢止セリ是時貴女ノ輩皆常ニ服裝ニ留心シ更ニ銅縵若  
クハ縵縵ヲ以テ風領ヲ製シ之ヲ有鬩風領ニ代フ此ノ製ハ頭上ヨリ蒙  
レリ

爾後數年間ハ巴里府中ニ在ル馬車ノ數僅ニ三輛第二世顯理ノ后其一  
ヲ有シ内廷ノ貴媛其一ヲ有シ老年ノ貴族其一ヲ有セリ此ノ貴族ハ軀  
幹極テ肥大騎馬ニ堪ヘズ因テ已ムヲ得ズシテ此婦女子ノ如キ柔弱ノ  
俗習ヲ學ベリ

第一百二十二篇 家具什物ヨリ第四世顯理ノ時ノ著述家ヲ記スレ

當時掛氈條氈寢室帳等ノ物皆華麗ニシテ價アルコト其衣服ト異ナラ  
ズコンスタールブルモンセラシノ殺サル、其ノ屍ヲ送テ其家ニ還

ルニ衆人ヲシテ縦觀セシム時ニ客室中ノ垂帷皆深紅剪絨ヲ以テ作り  
眞珠ヲ以テ之ニ縁セリ

然レトモ宮殿家屋ヲ通覽スルニ唯氈毯ノ美ナルノミニテ他ノ家具什  
物ニ至テハ多ク満足セズ其家主タル者ノ常用ニ供スル一二個ノ安腕  
方椅アリ其他各室ニ一個ノ机案アリ又一二ノ腰架椅子等ヲ列セリ又  
數個ノ函筐ヲ備ヘテ腰架ニ代用スル者アリ

絹帛緞子閃緞等ノ垂帷ヲ購フニ力能ハザル者鍍金帶ヲ以テ壁ヲ掩ヒ  
或ハ板ヲ以テ壁ヲ封スル者アリ板ヲ以テスルハ最適當トス曾テ佛人  
ノ別莊ニ於テ一間室ヲ或ハ客室ニ用ヰ或ハ憩室ニ用ヰルコトヲ詳ニ  
記載セル書ヲ見テ然リト爲セリ

其室頗廣大室隅ニ一鹿角ヲ備フ帽外衣狗子頸環及ロールドノ祈禱念

珠等ヲ懸ルニ供ス又一隅ニ弓弩箭矢小的刀劍十字弓等ノ物ヲ陳セリ

一大窓ヲ作り三小銃ヲ置キ又網厨及他物ノ嬉戲ニ供スル物モ亦窓下

ニ在リ又一函中ニ鏢十鐵ヲ藏シ鏢ノ生スルヲ防クガ爲ニ稻糠中ニ埋

藏セリ腰架下ニ夥多ノ稻稈ヲ鋪クアリ此狗子ノ臥床ニ備フルナリ

室内ニ稻稈ヲ鋪キ中央ニ棚架ヲ安シ此ニ書籍ヲ堆積ス其書ハパイプ

ル聖オジール、ル、ダノアル、ル、カランドリエー、シエバートル牧羊家、  
ノ書

レジャンデ、ゴーデン釋ル、ローマンヌ、ド、ル、ローズ釋等ノ類アリ

此ニ由テ考ルニ當時史乘言行錄等ノ書アレトモ人唯稗史野乘ヲ喜ミ  
之ヲ讀ム者多キヲ知レリ當時著述家彬々輩出其書現ニ今人ノ稱スル

所トナレリ

著述家中最著名ナル者ヲシユリ一侯トス佛國史中言行錄等ノ人ヲ感

動セシムル者ハ多クハ侯ノ説ニ出ツ侯及侯ノ師某尤權ヲ執ル之ニ次  
ク者ヲドツア―ト爲ス斯人紀元一千五百四十五年ヨリ一千六百七年  
ニ至ルマデ約五十年間詳細ニ歴史ヲ編脩セリ

此ノ外言行録著述家ノ有名者ヲテオドル、オービンエ―ト爲ス第四  
世顯理ニ於テ異母兄弟タリ而シテマダム、ド、マントノンニ於テ祖父タ  
リマダムノ事ハ第十四世路易王ノ記ニ及テ説キ示サントス

王顯理其都府巴里ヲシテ始ノ如ク富殷繁華ナラシメント欲シテ先此  
ニ着手セリ王ノ初ノテ巴里府ニ入ル街坊ハ草深ク家屋ハ戸鎖セリ主  
無キノ家ハ變シテ馬厩ト成ルアリ而ルニ王即位數月ニシテ復此ノ光  
景ヲ見ス時ニ西班牙國使ノ至ル使人都市ヲ見テ大ニ驚キ且歎シテ曰  
ク前ノ荒廢スル者今頓ニ壯麗ニ變ス王即位未幾ナラズシテ能ク此ニ

及フ何ゾ更新ノ速カナルヤト

王之ニ答テ云フ夫一家ノ主タル者出テ外ニ在レハ百事皆廢ス其歸來  
スルニ及テハ滿室舊汗ヲ新ニシ百事其處ヲ得ルナリト

第一百二十三篇 シュリ―侯ノ記

王顯理ノ爲ス所多クハシュリ―侯誠忠ニシテ之ヲ相クルニ由レリ侯  
終身プロアスタント宗ヲ信奉スト雖又政廷ノ最高官爵ヲ有シ常ニ衆  
人ニ信セラル此其君上ヲ敬シテ恭順ナルト國家ノ公益ヲ謀リ心秋毫  
モ挾サム所無キトヲ以テナリ

シュリ―侯ノ改宗センコトヲ欲スル者アリ羅馬法王大ニ力ヲ此ニ竭  
セリ侯之ニ謂テ曰ク余常ニ上帝ニ祈リ法王ノ改宗センコトヲ請ヘリ  
ト侯容貌嚴正ニシテ威儀アリ致仕ノ後其ノ營生ニ於テ自定法アルヲ



王家ニ勝レリ其第宅ノ雄ナルハウイルゴン<sub>地名</sub>ニ在ルモノトス其居巴里府ト相距ル約六十里

侯家ニ在ルニ從者頗衆シ偶臥病ノ者幾十餘人ナルモ亦覺知セザル者ノ如シ官位ナキ人ニシテ此衆士ト優遊起居スルハ解シ難キ者トス今侯ノ營生ノ蹤ヲ揭示セン

侯毎ニ早起シテ上帝ヲ拜シ畢リ自四個ノ書記官ト共ニ課業ヲ典ス書記官ノ任ハ侯ノ自書ヲ分類シ又其言行錄ノ稿ヲ點檢訂正シ或ハ侯ノ人ニ答フル尺牘ヲ草シ其他諸般ノ事務ヲ修ムルニ在リ午食前一時ニ大鐘ヲ鳴シテ警告ス此ヲ侯ノ逍遙ヲ促スノ號トス

是ニ於テ一家悉ク來テ正堂ニ集リ環立ス時ニ牌手侯ノ貴族家令哨兵等先進ム侯此ト俱ニ出ツ侯ノ親族亦從テ侯ノ左右ニ在リ相語り相答

ヘ和樂逍遙セリ小吏兵卒等亦皆列ニ就ク其儀甚嚴肅ナリ畢テ侯食堂ニ入ル食堂モ亦廣濶其四壁ニ侯王君主終身事跡ノ最著明ナル者ヲ畫ク

堂中長机ヲ設ク上面ニ二個ノ安腕方椅ヲ置ク此侯ト夫人トニ備フル所ニレテ侯ノ男女ノ如キハ其既婚未嫁ヲ問ハズ均シク小方椅ニ踞ス當時ノ子女ヲ待ツニ斯ノ如クスルハ即父母ト等級ヲ異ニスル所以ナリ若父母在セハ父母許スニアラザレバ敢テ踞スルコトヲ得ズ

午食己ニ畢リ侯復課業ヲ起シ以テ午後逍遙運動ノ時ニ至ル午後ノ逍遙モ其規嚴肅ナルコト亦午前ノ如シ回匝二三次ニシテ例ノ如ク花園ト蔬圃トノ際樹木森列相蔽フ所ノ徑ヲ過キ往テ菩提樹陰ニ至ル此ニ於テ侯納涼亭ニ於テ小方椅ニ踞シ窓ニ倚リ目下ニ近境ノ風景ヲ

眺望シ心懐ヲ欣慰スルヲ以テ例トセリ俟ノ自有スル所ノ園地ハ平坦ニシテ花徑ヲ通シ其樹木ヲ栽種スル皆直線形ヲ以テ又半身像水缸及ヒ偶像等ノモノヲ以テ其間ニ設置セリ

第一百二十四篇 王顯理耶穌教ノ諸國ヲシテ共和政治タラシメ

シヨヲ計ル及前兆ノ説王前兆ヲ知ル説

王顯理唯佛國ノ公益ヲ謀ルヲ以テ足ルトセズ其大ニ欲スル所ノ眞意ハ耶穌教ノ國ヲシテ共和政治タラシムルニ在リ此各國ヲシテ相攻畧スルコト無カワシメント欲シテナリ然レモ各國終ニ其説ニ左袒スル者ナシ

王ノ欲スル所遂ケズ時ニ佛國人流ス音王顯理ノ世ニ在ルコト長カラザラントト者モ亦豫言ス凶兆屢見ハレントマルシヤル、パツソムビエ

ールト云フ者ノ言行録ニ此ノ事ヲ説ケリマツソムビエールハ佛國ノ勇將ニシテ朝土中最快活ノ人ナリ

言行録ニ云ク王顯理第五月一日ヲ以テアルール宮ノ大歩廊ヲ過ク時ニギースト余ト從ヘリ王其后ノ室ニ入ラントス余トギースト此ニ留メ誠テ云ク去ルコト勿レ往テ后ヲ促シ速ニ調饑セシメントス其久レク俟ツコトアラザラシメンガ爲ナリト

二人乃此ニ留ル偶、宮殿ノ中央ニ樹立セル「メイトリー」「メイ」ハ五月ナリ此ノ時樹木ヲ栽ニテ耶穌ノ母ヲ祭ルトリーハ木ナリ忽仆ル此時風ナク又目前ニ物ナシ余ギースト語テ曰ク事ノ此ニ及フハ是凶兆ナリ上帝我王ヲ保護セヨ王ハルール

ノメイナリト「メイトリー」ト云義ニシテ最聖靈ト云フ意

時ニ王ノ來リテ傍ニ在ルヲ知ラス言フ所皆王ニ聞カル王即謂テ曰ク

汝輩愚モ亦甚シ此ノ前兆ヲ信シテ其心思ヲ勞ス余深ク之ヲ謝ス請フ  
將來ヲ諷メヨ此ノ如キ前兆豫言等ハ毫モ意ト爲スコト勿レ

又曰ク我佛國中占學者ト者等余ニ諷ムルニ將ニ暴殺ニ會ハントスル  
ヲ以テ其月某日ヲ戒ムヘント曰フコト毎年毎歲今ニ至ルマデ殆三  
十餘期而レテ曾テ當日禍ニ罹ルコトナシ既往ノ前兆今日ニ至リテ尙  
論定スヘカラズ余ノ死スル正ニ何ノ年月ニ於テセンカ死スルノ日始  
テ之ヲ論スヘン

王ノ明知物ニ惑ハス彼ノ讖言ハ笑テ問ハザル所ナリ而レモ嘗テロエ  
ーグノ一徒タルヲ以テ自許ス因テカトリック宗狂妄徒等ニ怨マル  
ヲ知レリ一日馬車ニ乘シ往テ街頭人民麁集ノ處ニ入ル是彼ノ王ヲ刺  
サント欲スル者ニ好隙ヲ示セシ者ナラン是等ノ記スル所ヲ觀ルニ王

ノ自死兆ヲ知ルニ出ルカ

第一百二十五篇 后馬利王后正位ノ禮ヲ修ム、第四世顯理弒セラ

ルノ事

后馬利未服冠ノ禮ヲ修メス故ニ紀元一千六百十年ヲ以テ其禮ヲ修メ  
ント請フ其ノ用費ノ夥シク又其ノ修禮ハ好ム所ナラザルヲ以テ王心  
許サス而レモ性ノ寛柔ナルヲ以テ又甚拒カス

后遂ニ善美ヲ尽シテ大禮ヲ修成ス時ニ紀元一千六百十年第五月十三  
日ナリ又其十五日ヲ以テ公然巴里府ニ入ランヲ決セリ是ニ於テ府  
民倉卒皆其ノ備ヲ爲レ后ノ經過スベキ街坊悉ク彎形門ヲ造築シ闔府  
囂然トシテ侯迎セントス  
府民ノ歡怡斯ノ如ク甚レキニ王獨鬱々トシテ憂色アリ府中ノ喧騰ス

ルヲ見テ心喜ハザルガ如シ從者其色ヲ望ミ深ク憂ト爲ス者アリ十四日ニ及テ乃王ニ諭解スル所アリ王答テ曰ク汝今日余ヲ見ルモ猶未其眞價ヲ知ル能ハズ余ガ死スルニ及テ始メテ當ニ之ヲ知ルベシ余ノ他人ト差等アルコト亦判然タラン

時ニバツソムビエール側ニ在リテ曰ク王今死期ヲ言ハバ臣等又日トシテ憂懼無キコト能ハズ王請フ上帝ノ保助ヲ蒙リ其年ヲ長フセヨ世ノ幸福ヲ王ト同フスル者ハ誰ソヤ王壯年ニシテ身体強剛且其ノ名譽アルコト他人ノ比ニアラズ王ノ世ニ佛國雍熙隆盛ニシテ良民安居富饒官殿壯麗妃嬪豔麗ナリ之ニ加フルニ子女ノ美ヲ以テス又何ノ福ヲカ願ハンヤト王之ヲ聞テ大ニ歎息シテ曰ク余ハ則悉ク是等ノ物ヲ棄捐セザルヲ得ズト又約スルニ當日午後造兵所ニ會セ

シコトヲ以テス造兵所ハ即シユリー侯ノ居ル所是時侯病ニ罹レルヲ以テナリ

バツソムビエール王ノ約ニ從ヒ往テ造兵所ニ赴カントス忽見ル人衆距躍且哭シ且號ヒテ曰ク吾王重傷ヲ被リテルーヴルニ歸レリトバツソムビエール乃衆ヲ排レテ走り在ル所ノ一馬ニ乘シ急ニ馳セテルーヴルニ至リ王ノ室ニ入ルニ王床上ニ臥シ衆臣皆環泣セリ王奄々泣カント欲シテ得ズ侍醫之ヲ診シテ曰ク己ノリト王遂ニ絶ス

茲ニ人ヲシテ慘怛セシムルハ王將ニ造兵所ニ赴カントシ貴族六人ト馬車ニ同駕シテ出ツ車中玻窓ナク又簾箔ナレ唯革帷ヲ以テ掩ヘリ此ノ日府民方ニ后ヲ迎ヘントシテ其供帳ヲ設ク王之ヲ覽ント欲シ垂帷ヲ上ケタリ

王駕一街頭ヲ横過スルニ當リ適一車ノ耦進スルアリ王駕誤テ彼ノ車  
 繩ニ權リテ繫留セラル是ノ時ツヴァイヤツクト云フ者アリ直ニ跳テ  
 車輪ヲ踏ミ車ニ入テ劍ヲ揮テ王ノ胸膈ヲ刺スコニタヒ是ニ於テ忽革  
 靴ヲ垂下シ車ヲ回シタルイウルニ還レリ地上流血淋漓トシテ引タル  
 一ウルニ至レリ

朝臣等直ニ來會シ乃議スヘキ所ノ大事ヲ決シ大ニ商量苦思スル所ア  
 リ遂ニ后馬利ヲシテ政ヲ攝セシム此事ノ起ル倉卒ナリ朝第四時ニ於  
 テ王尙強健ニシテ上ニ在リ第六時半ニ及テ后己ニ攝政セリ時ニ紀元  
 一千六百十年第五月十四日ナリ

第一百二十六篇 佛后馬利、ド、メダイレスノ品行、マルシヤル、ド、ア  
 シクルノ願末、第十三世路易ノ寵臣、ドルウイ、ンノ

記、妖術ヲ罰スルノ事再世ニ行ハル

王顯理ノ暴禍ニ遭フ佛民戸々驚愕シ其悲悼スルコト考妣ヲ喪スルカ  
 如シ夫一人死シテ國國爲ニ哀ヲ舉ケ痛哭スルハ理ノ當然ナラザルガ  
 如シト雖君主專制ノ國體凡百事悉ク一君主ノ身ニ属スレハナリ之カ  
 臣民タル者其性命一ニ皆君主ノ權中ニ在リ故ニ其善惡禍福悉ク王ノ  
 一身ニ關ス若君暴ナレハ國民之ヲ惡ミ君善ナレハ國民之ヲ好ミシテ  
 之ヲ視ルコト猶父ノ如シ

王顯理子二人アリ路易及ナルレヤン侯ガストン是ナリ長子路易ヲ史  
 稱シテ第十三世路易トス第四世顯理ノ死スルニ當リ甫ノテ九歳ナリ  
 而シテ太后馬利、ド、メダイシス政ヲ攝スルコト前ニ說過セルカ如シ  
 太后馬利性柔情頑鷲ナリ頗鬼神ヲ好ム先后カセリシノ穢行大ニ民ノ

怨懣ヲ取レリ今ヤ太后ノ行カセリシノ如ク甚シカラズ太后務メテ技  
 術ヲ興起セントスルコトサシムル宮ノ繪堂ト稱スル者アリ彩像彩畫等  
名ノ秀逸ナル者ヲ以テ之ヲ裝飾スフレミツス今ノ蘭國南部ノ一州ナリ有名ノ畫彫  
 エルーヘンス付テ王家ニ仕ヘ閱歷スル所ノ事跡ノ著明ナル者ヲ畫ケ  
 ル所ナリ此堂ノ今ニ存セル者ハ一ニ太后馬利ノ功ナリ  
 太后馬利大ニ貴族ノ惡ミヲ取ル所以ハ一切事ヲコシテハ一ニ夫妻ニ任  
 スルヲ以テナリコシテハ一ニ以太里國ヨリ來ル者ニシテ諸侯超利ノ  
 人タリ居ルコト日久シ太后之ニ授ルニ高爵位ヲ以テシ更ニマルキ一デ、  
 アンクルト稱セシメマルシヤル官ニ任セリ  
 デアンクル動止倨傲ナルヲ以テ貴族益之ヲ怒ルアンクルハ下ノ怨ヲ  
 抑壓シ己ニ抗スル者無カラシムコト欲シ繼架ヲ巴里府中數處ニ造リテ衆

ナ威ス而ルニ此ノ架曾テ人ノ用ヲ爲サスレテ己カ用ヲ爲スニ至ルヲ  
 料ラサリキ

王路易ノ品行一モ先王顯理ニ類スル所無ク終身人ニ調弄セラル王年  
 十六デ、ルウイーント云フ者アリ常ニ之ニ制馭セラレデ、ルウイーンハ  
 曾テ先朝ニ在リ王顯理ノ愛臣ニシテ力行シテ王事ニ從フ顯理其用心  
 ノ厚キヲ以テ特ニ月俸ヲ給與スデ、ルウイーンハ之ヲ以テ其二弟ヲ教  
 育スルノ費ニ充テリ

王顯理因テ大ニ感喜シ即俸金ヲ倍與シ拔擢シテ太子路易ノ侍友タラ  
 シム是ヲ以テ大ニ權勢ヲ得タリ路易放鷹田獵ヲ好ムデ、ルウイーン亦  
 善ク遊獵ス是ヲ以テ亦寵ヲ王ニ得タリ因テ遂ニ高官爵ニ昇ルニ至レ

テ、ルウイーン常ニ路易ヲ激シ太后ニ長ク攝政スルヲ得ザラシメント  
ス且太后ノ寵臣等ノ王ノ即位ヲ嫉メル意アルヲ知ラシメントシ王ニ  
勸メテ速ニ政ヲ親ラセシメ又先テ、アングルヲ刑セシム此ノ二大件ヨ  
リ始メテ之ヲ行フ其命ヲ受ル者ハ衛兵ノ將ウイトリート云フ者ナリ  
ウイトリート適マ、マルシヤルアングルニル―ヴル橋上ニ遇フ即命ヲ傳テ  
之ヲ執フ其罪ニ服スルト服セザルトヲ問ハズ直ニ之ヲ射殺セリ王路  
易即王命ヲ以テ其罪ヲ布告シウイトリートヲ舉テマルシヤルニ任セリ  
都民乃アングルノ屍ヲ以テ其ノ曾テ造ル所ノ繭架ニ懸ケタリ因テア  
ングルノ婦モ亦妖術ヲ行ヘルヲ以テ之ヲ縛シ問テ曰ク汝何ノ妖術ヲ  
得テ權力ヲ太后ニ得ル斯ノ如クナルヤ婦答テ曰ク妾妖術ヲ行ハス唯  
強心ノ弱心ヲ壓制スルヲ以テ此ニ至ルナリト

此ノ婦蠟製ノ偶像ヲ灸リ以テ王ヲ咒詛ス是ヨリ先キ三百年前マダ、  
ド、マリシエート云フ者ノ罪狀ト其名ヲ同フス即上條己ニ記載セシ所  
ナリ

第一百二十七篇 第十三世路易ノ時佛國ノ形勢

王路易ノ位ニ在ル虚器ヲ擁シ空名ヲ掲クルノミ政皆ド、ルウイーンノ  
手ニ出ツド、ルウイーン倨傲自居リ人見ルヲ得ル極テ難シ是故ニ當時  
ノ語ニ曰ク地球中ニ三ノ大難事アリ圓形物ヲシテ方正ナラシムル一  
ナリ理學者ノ石ヲ查照シ出ス二ナリ理學者ノ石トハ萬物ヲ變シテ金  
ト爲スヲ得ベキモノナリ其三ハケーク、ド、ルウイーント相見テ話  
スル是ナリ

是時佛國ノ政衰廢シテ有名有徳ノ士跡ヲ屏ケ朝士鄙惡上下相誑キ人

道地ヲ掃フ

巴里府ノ盛大ナル變シテ強盜暴殺ノ域ト爲リ夜々刺傷賊害アラザルハ無シ白晝ニ街坊ヲ過ルモ健兒ヲ從ヘザレハ往々安穩ヲ保テ難シ而ルニ猶且禍ヲ被ルヲ免レヌ

一書記官某嘗テ晚餐ヲ饗スルノ招ニ應シ家ヲ出ル時命シテ曰ク夜第九時ヲ過キハ馬ヲ以テ來レト己ニ其期ニ至リ馬來レトモ適蹇蹶ヲ病フルヲ以テ乃亦步行シテ歸ラントス街頭ノ汚穢ナルニ徒行ハ好ム所ニ非ス况ヤ路上ノ明ヲ取ルハ僅ニ松根或ハ束薪ヲ巨器ニ盛リ之ヲ街頭ニ焚キ燭ニ代フルノミ

書記官從者ヲシテ炬ヲ携ヘ先導タワシメ方ニボンノツフニ達セリガ  
ンノツフハ后馬利銅ヲ以テ王顯理馬上ノ偶像ヲ鑄造シ安置シタル處

ナリ此ニ刀劍相觸ル聲アルヲ聞ク乃俯看シテ炬下ヨリ圍ヘバ二人アリ前路ニ爭ヘリ

書記官未數十歩ヲ移サマルニ二人詐テ相關フ狀ヲ爲シ劍ヲ拔キ短銃ノ鐵機ヲ起シ來進ム書記官ヲ見テ乃禮敬シテ曰ク余等一紙札ヲ此ノ街頭ニ拾ヒ得タリ因テ評論スル所アリ公願クハ之ヲ一讀セヨト

書記官乃眼鏡ヲ取り此ノ紙札ヲ讀起ス其書中ニ云ク何人タルヲ論セズ夜第九時後ニ及テ此ノ橋ヲ過ル者ハ必其上衣ヲ遺シテ去ル可シ若上衣ヲ被ザル者ハ其帽ヲ贈レト讀了テ去ラントスル時其一人曰ク此ノ書ノ意蓋公ニ關セリト二人同一ニ書記官ヲ促シ上衣ヲ脫セシム是等ノ偷兒多クハ公侯播紳家ノ從僕ノミ其主タル者之ヲ禁遏セザルノミナラス反テ自相率テ作サシムルノ惡習アリ世ニ之ヲ傳稱シテ云



フ當時ノ貴族或ハ市民ノ上衣ヲ襜尊シ或ハ衆貨ヲ盛レル荷袋ヲ劫掠セリト當時荷袋ヲ携ル者多ク之ヲ腰帶ニ懸鈎ス倫兒必之ヲ剪斷シテ去ル故ニ倫兒ヲ稱シテ剪絡賊ト喚ヒ做セリ

第一百二十八篇 第十三世路易ノ世ニ當リ衣服ノ時様

王路易天資暗愚而ルニ之ヲ導クニ怠傲ヲ以テシ其才能ノ及フ所ハ音樂圖書機械器ニ止ルノミ王ノ幼時フオーシエトノ著セル佛國史ヲ讀ミ甚倦厭シ成人トナルニ及ヒテ手終ニ復書籍ヲ執ツス

此ノ王佛國臣民ノ容貌ヲ修飾スルヲ事トス第四世顯理ノ時人民多ク鬚鬚ヲ畜ヘ蠟ヲ鬚梢ニ塗リ凝固シテ前ニ向ハシム王顯理ノ刺殺セラ  
ル、愛スル所ノ鬚鬚ヲ剪斷シ去レリト 王ノ死後鬚鬚ノ習俗廢スルヲ云フ

王路易年少未鬚鬚アラス臣民因テ各其美鬚鬚ヲ剃除シ去リ口上僅ニ

疎鬚ヲ留ムル者二處頰下モ亦些ノ鬚毛ヲ餘シ鬚梢ヲ前ニ向ハシム又更ニ當時ノ服襟ヲ舉ケン

肩ニ剪絨ノ上衣ヲ着ケ故ニ整正ナルヲ要セス而シテ白長靴ノ刺馬針アル物ヲ踏ミ一手ニ杖ヲ握リ上鬚ノ垂レテ口角ニ及ブモノヲ拂ヒ一手ニ下鬚ノ小卷シテ前ニ向フモノヲ持ス

當時貴女ノ服裝比スルニ物ナシ桶ノ如キ圓形ナル者ヲ用テ腰臀ニ着ケ大ナラシム自餘新奇ノ裝具モ美トスル者ナク適醜笑ヲ取ルニ足レ

王成長スルニ隨テ人民大ニ希望スル所アリ皆謂フ王必奮發シテ寵臣ノ權ヲ殺キ國家ヲ隆興スル前王ノ如ケント而シテ終ニ此ノ事ナク衆皆失望スルニ至ルドルサイーン紀元一千六百二十一年第十二月十五

日ヲ以テ死ス是ニ於テ王直ニ有名ノ士アルマンデュー、ブレシー、リシ  
 エリユ、ナ舉ケテト、ルウィーンノ官爵ニ代ラシムは一ニ王ノ信スル  
 所ニ出ツ此人居ルヲ幾モ無ク又カルザイナール官ニ任セラル

第一百二十九篇

カルザイナールノ政權及ロシエ

ルノ圍城

カルザイナール、リシユリユールハ紀元一千五百八十五年第九月五日サ  
 以テリシユリユール城ニ生レソルボーニ在テ教ヲ受ケタリ其貴族タ  
 ルヲ以テ年二十一累遷シタルーソソノ督教主ニ進メリ其國事ニ關  
 涉スルニ及テハ常ニマロシヤル、ダアンクルニ依レリ

既ニシテダアンクルト合ハス去テド、ルウィーンニ從ヘリド、ルウィー  
 ンノダアンクルニ於ル其ノ仇視スル所ナリ因テ之ニ洩ラスニダアン

クルノ機事ヲ以テシ大ニ悦ハル而シテ其天才敏銳慧黠終ニ專權ノ一  
 君タル勢アリ紀元一千六百四十二年ニシテ死ス其首相タルハ紀元一  
 千六百二十九年ヨリセリ

斯人既ニ政權ヲ掌握シテ而シテ又陸軍大元帥ヲ兼任セリ其陣ニ臨ム  
 毎ニ輒僧服ヲ脱シテ兵人トナリ肥馬ニ騎リ軍ノ中央ニ出ツ頭ニ毛帽  
 ヲ戴キ腰ニ利劍ヲ佩ヒ金縷ノ上衣ヲ着ケ輕甲ヲ撰ク輕甲ハ當時大ニ  
 行ハル、所ナリ

斯人心情中大欲尤熾ナル者ニアリ權勢ヲ貪テ醫カザルナリ虛飾ヲ極  
 メテ止マサルナリ總テ己カ欲スル所ハ事ノ難易ヲ問ハス是非ヲ論セ  
 ス必意ヲ達スルニ在リ

嘗テ獨語シテ曰ク余ガ事ヲ爲スハ再思熟考スルニ非ザレバ決シテ之

ナ行ハス己ニ決定シテ之ヲ行フヤ必其意ヲ達ス天地ヲ顛覆シ萬物ヲ  
 移動スル力余ニ抗スル者無シ蓋我カ深紅ノ上衣ヲ以テ萬物ヲ蓋フコ  
 ト久シト深紅上衣ハ即カルザイナールノ官服ナリ  
 貴族ノ合議シテ政法ニ關涉セル者ハ悉クリシエリニールノ攘斥セラル  
 權力ヲ持シテ國事ニ及フ者復口ヲ開クコトヲ得ヌ又ヒユグノーノ  
 徒ニ喻スニ人民固有ノ權理アラザルヲ以テシテ而シテ佛國ヲ擾亂ス  
 ル宗教徒等カ軍竟ニ根株ヲ絶セリ  
 リシエリニール府ヲ圍ミテ之ヲ拔ク此ナリシエリニールトヒ  
 ニーグノート戰爭ノ最顯著ナル者トス時ニ西班牙國リシエリニール  
 援クロシエール府ハヒユグノー徒ノ堡臺ニシテ最堅牢ナリ圍  
 中ニ在ル久シト雖其地海濱ニ沿ヘルヲ以テ運輸便利ニシテ海路ヲ遮

絶スルコト亦易カラス兵仗兵食等ハ英國ヨリ輸送スルコト頗多シ

リシエリニール其糧道ヲ絶テント欲シ石壁ヲ港口ニ築キ之ヲ杜塞セリ  
 港口徑約一里ナリ而シテ英人復ロシエール人ヲ援ケントシテ之ガ策  
 畧ヲ爲セトモ遂ニ成ラヌ

是時ニ在テ府民等皆有名ノシユリール侯ノ女郎ローワン侯ノ夫人某ニ  
 勸勵セラルレ其率先スルニ從テ大ニ酸苦ヲ嘗メ心力ヲ尽セリローワン  
 侯ノ夫人及ヒ其女ノ食フ所ハ僅ニ麵包小片ト馬肉トヲ以テスルモノ  
 三月ナリ

既ニシテ英國ノ援絶エ終ニ陣前ニ降服ス蓋府民ノ艱難辛苦知ルベシ  
 初圍ミテ受ルニ當テ其民一萬五千人ナリ其降ルニ及テ生存スル者僅  
 ニ四千疲病困羸シテ死セル者多キヲ知ルベシ

一小片ノ麵包ト雖生存セル者ニ在テハ誠ニ貴シ因テ亦自死ヲ招キ取  
ルモノ少シトセズ其飢ル甚シキニ因テ一旦食ヲ得テ輒暴食スル多キ  
ニヨレリ一奇事ノ生スル有テ此ノ憫然ニ次ケリ

其降レルノ明日俄ニ疾風暴雨アリ港口ノ石壁怒濤ノ爲ニ毀倒ス此ノ  
石壁ハ昔日府民ノ爲ニ大害ヲ爲セシ者ナルカ今一旦ニシテ此ノ如シ  
リシエリユ一久シク府民ノ頑固ナルヲ惡ミ今其志ニ報スルヲ得タリ  
是ニ於テ悉ク府中ノ堡障ヲ毀テ府民ノ權利ヲ奪ヘリヒューグノー宗  
徒ノ生殺與奪ヲ擅ニスル者一ニ皆王ノ特權中ニ屬スルニ至レリ

### 第一百三十篇

リシエリユ一ノ死リシエリエ一文學ノ士ヲ保護

ス、コルチーイヨ及ヒモリユールノ事佛國ノ大學校植  
物園并新聞誌ノ權輿

王路易ノ末年ニ及テ澳地利家ノ權ヲ抑ヘント欲シ心力ヲ勞スルヲ七  
年屢此ト戦ヒ佛國稍利ヲ得ルト雖其土地ヲ得ルハ甚多カワズ

是時リシエリユ一漸衰老スレモ豪傲ノ氣依然トシテ功名ノ心未息マ  
ス病羸スルニ及テ尙且朝參ヲ廢セス乘スル所ノ輿ハ緞子ヲ被ヒ衛卒  
ヲシテ昇セシメタリ且王ノ没後猶身ヲ存シテ自國政ヲ攝セント欲シ  
豫メ之カ策ヲ爲セシカ遂ニ紀元一千六百四十二年第十二月四日ヲ以  
テ死セリ享年五十七

斯人性壯快濶達供奉美テ務ム凡營生ノ事王家ト均シ嘗テ一宮殿ヲ造  
ラントシ土木ノ工壯宏ナリ王路易之ヲ見テ頗妬色アリ此ノ殿ヲバラ  
イス、カルゲイナールト稱ス今所謂パレー、ル、ワイヤール即是ナリ土  
木未竣ヲザルニ當テ其美觀王宮ニ勝レル數等其ノ死ニ臨テ終ニ之ヲ

王ニ獻ヌ王直ニ移テ此ニ居ル

リシエリエー又禮拜堂ヲソルゴーヌ名ニ建ツ其壯嚴偉麗ナル王宮ニ

優レリ以テ紀功碑ト爲スニ足レリ堂中ニ其墳墓ヲ造ル有名ノ彫像工  
ギラドン像ヲ作ル絶妙ト稱ス又其開創スル所ノ植物園アリ園中大世  
界ノ奇異珍賞スベキ動植動物悉ク羅列セザル者無シ

滿園ノ美既ニ此ノ如シ又野獸禽鳥ヲ其間ニ放ツ走馳飛翔自得セリ獼  
猴敬種アリ石屋ヲ造ケ之ニ棲マセシム

リシエリエー名聲ノ當時ニ止ルノミヲ欲セズ之ヲ後世ニ顯揚センコ  
ヲ求ム而シテ斯ノ人ノ勢威多ク其建築スル所ニ存セリ其聲名ヲ求ル  
ノ甚シキニ因テ學者ヲ保護スルモ亦厚シ其意謂フ願クハ學者ヲシテ  
余カ名聲ヲ記シテ之ヲ不朽ニ垂レシメント

學士中最著名ナル者ヲビエール、コルチーイヨト爲ス大才フル英物ナ

リ其作ル所ノ文法皆辨論體ニ渡ルヲ以テ佛國當時ノ體ト適合セザル  
アリ斯人又能ク稗史ヲ作ル其著ス所シットト稱ス大ニ世人ニ歎賞セ  
ラル此ノ書ノ體裁文理真ニ作文ノ軌範トスルニ足レリ當時物ノ絶美  
ナルヲ見レハ輒曰ク華美怡シッドノ如シト相傳ヘテ世ノ通稱タリ

斯書大ニ世ニ著ハルリシエリエー尤之ヲ好メリリシエリエーモ亦稗  
史ヲ著ス人ナルヲ以テナリ此ノ人才智ヲ國政ニ用ルハ頗長スト雖之  
ヲ詩學上ニ施スハ甚短ナリ而シテ其政柄ヲ執ルモ亦遂ニ實功ヲ成サ  
ス唯面從諂諛ヲ事トスル其飲食ヨリモ切ナリ

モリーエールト曰フモノ大ニ嗣世ニ稱セラルト雖其始メテ文學ヲ修  
ムルハリシエリエーニ依テ之ヲ爲ス佛國有名ノ稗史著作家タリ第十

四世路易曾ア謂フ此ノ人實ニ余ガ太平ヲ粧飾セル者ナリト

リシエリエー又佛國アカダミー校ヲ起セリ最世ニ著ハルアカダミー  
ハ即學者ノ相會シテ佛國ノ語格文例ヲ刪正スル所ニシテ此ヲ創起  
セシ人學者ニ要タルシッドノ書ヲ批評セシムルモノトス

佛國ニテ日誌ヲ製スルハリシエリエー執政タル日ニ權與スル所ナリ  
此ノ誌ハ年中行事ヲ錄スル者ニシテ今ノ年簿ノ類ナリ日報及ヒ歐洲  
各國ノ歴史ヲ記載ス其ノ誌大ニ實効ヲ成スニ因テ之ヲ編輯スル者更  
ニ一事業ヲ起スニ至レリ時ニ紀元一千六百三十七年一週日コトニ新  
聞紙ヲ刊行スル者即是ナリ

第三百三十一篇 第十三世路易死ス、カルザイナールマザランノ品

行、ウエストバリヤノ約定

路易其貪名ノ相リシエリエー己ニ没シテヨリ世ニ在ル日亦久シカラ  
ズ偶病テ氣体漸衰憊セリ而ルニ太子年未五歳ニ及バズ王心ニ謂フ嗣  
子幼ナリ國ヲ保ツ大權ハ一人ニ委託センヨリ各個ニ分裁スルノ善キ  
ニハ如カスト即澳地利ヨリスル所ノ后アンナシテ攝政セシメ凡百事  
ヲ決スルハ公議ヲ取ルヲ遺命シ其弟某ニ任スルニ公議會長ヲ以テセ  
リ  
王已ニ後事ヲ料理シヨリ安心シテ死ノ將ニ至ラントスルヲ俟アリ侍  
醫王ニ告ルニ死期一二時間ニ迫ルヲ以テス王怡然トシテ逝ク實ニ紀  
元一千六百四十三年第五月二十四日ナリ壽四十二在位三十三年二子  
アリ一ヲ第十四世路易トス一ヲフィリップトス後ニオアルレヤン俟タ  
ル者ナリ

王死スルコト未久シカラス誰カ遺命ヲ守ラン公議會モ亦全ク廢絶シ  
 アンノ攝政ハ僅ニ虛名ヲ擁スルノミ而レテ以太里人カルザイナール  
 マザラント云フ者全權ヲ掌握ス此ノ人々トナリシエリエート相反  
 セリ然レモ其才氣ハ大ニ之ニ讓ル所アリリシエリエーハ倨傲自滿人  
 ナ壓倒シ人與ニ抗スル者ナキニ至レリマザランハ謙退辭讓頗温厚ノ  
 美質アリ

マザラン容貌豔麗眼口俱ニ美ナリ唯額額巨大面鼻并ニ潤ナリ才思捷  
 敏諸謀ヲ善ス其欲スル所ハ敢テ之ヲ爲シ自制止スルヲ能ハズ官ニ在  
 ルヲ十八年屢不幸ニ遭遇スト雖輒亦能ク免ル其計畫スル所確然トシ  
 テ移スヘカラス其心常ニ波濤中ノ岩石ヲ以テ自標セリ

斯人喜愠愛憎面色ニアラハサズト雖尙損益スル所アレバ則愛憎ノ心

ヲ生ス是ヲ以テ過失ヲ取ル亦大ニシテカルザイナール、リシエリエー  
 ト並ヘ稱セラルリシエリエーハマザランニ於テ師タリ其才能マザラ  
 ンニ優レル遠シ

リシエリエー死スト雖其ノ起ス所ノ兵事ニ至テハ未曾テ炯マズ敵人  
 佛王ノ尙幼冲ナルニ乗シテ之ヲ利セント欲ス當時佛將モ亦年少ニシ  
 テ兵事ニ老練セザルヲ以テ復顧忌スル所無シ

然ルニ佛將カンド侯ハ其齡未二十歳ニ及ハズト雖連戰皆之ニ勝ツ佛  
 國今王ノ時ニ在テ未斯ノ如キ利ヲ得ルヲ見ズ遂ニ日耳曼帝ヲシテウ  
 エスバリヤニ於テ講和ノ條約ヲ結バシム結約ノ時ハ紀元一千六百四  
 十八年第十月ナリ

マザラン曾テ戰鬪ヲ熄メ和平ナランコトヲ求ム自謂フ余ガ盡カスル所ハ内國ニ在リ他ハ暇アラズト斯人外邦ノ客ヲ以テ寵テ佛朝ニ得ルニ因テ人望ヲ得ズ人民之ヲ嘲哂スルニ其言語ノ異ナルヲ以テシ凡佛國人民ノ嘲哂一ニ皆マザランニ歸セリ

佛民ノ不平ヲ鳴ス者ヲビシヨツブ、ド、レイト云フ首トシテ衆人ヲ鼓動セリ此ノ人後ニ擧ラレテカルザイナールトナル言行録ヲ著ハス者ナリ其性輕佻奸黠能ク他人ヲ誘惑シテ不慙ヲナサシメ喜テ人ニ慘毒ヲ及ホセリ

其不平ヲ鳴ラシ民心ヲ鼓動スル其意ノ如クナルヲ得巴里府民皆國相ノ命ニ抗抵シ各其戸ヲ閉鎖シ街柵ヲ設ケ人ヲシテ過クルコト能ハザラシム此ヲ内亂ノ原トス此役ヲ稱シテフロンドト曰フ佛語フロンデ

一ノ字ニ出ツ即罪ヲ正シ罰ヲ行フノ義ナリ今ニ至ルマデ政府ニ抗スル者アレバ猶之ニ命スルニ此ノ名ヲ以テセリ

后巴里府ニ在ルヲ安寧ナラズトシ潛ニ逃レテセン、ゼルメーンニ奔ル其子女及ビカレザイナールマザラン從フ此ノ地ニ寓スル時后費財ニ乏シクシテ寶玉ヲ典賣スルニ至ル王モ亦屢缺乏シ家臣等ハ稻稗ヲ以テ粥トシ門子ニ食ヲ給スルコト能ハズ終ニ辭シ去ラシムルニ及ベリ

貴女ハ火爐ニ就クヲ得ザルヲ以テ終日衾褥ヲ脫スルコト能ヒス此ノ役ニ笑フ可キコト多シ是其ノ尤著明ナル者トス又風謠短詩等大ニ流行シ之ヲ貴フコト武備ニ欠クヘカラサル銃砲ノ如シ

兩軍競ヒ爲ス所獨此ノミナラスポルト、ロヤールノ尼姑ノ史中ニ巴里



府近傍ノ情狀ヲ記セル說話ヲ見テ亦知ルベシ女僧ノ菴室ハ巴里府近  
村ノ農民等來集伏匿スル所トナリ兵人之ヲ守衛ス

尼姑ノ首タルモノ書ヲ其友ニ贈レリ書中ニ曰ク余等終日湯汁ヲ調シ  
貧人ニ給ス在ル所ノ家物ハ悉ク奪掠セラル田園ノ蔬菜植物ニ至テハ  
皆騎兵ニ蹂躪セラレ人々失望シテ唯命ヲ上帝ニ歸スルノミ復一人ノ  
稼穡ノ事ニ從フ者ナシ

余等力メテ農家畜積ノ物ヲ藏匿セシメ其畜類ト雜居ス臭汗殆ト人ノ  
氣息ヲ咽塞ス此貧兒ノ悲哀ヲ見ルニ忍ビザル爲ナリ余ノ寢室ニ充盈  
スル所ノ馬廐庫ニ藏匿スル所ノ牛凡四十頭老幼篤疾及ヒ傷者ト雜居  
セリト

黨中貴女最多シトス王埵マクモワセールドモンパンシエール及ビ

デューシユスド、ロングウィーヨ等ノ如キハフロンド黨ノ首長タリ凡  
貴女等ヲ悦ハシメント欲シ貴族ノフロンド黨ニ属スル者多シ甚シキ  
ハ其身ヲ售ラント欲シテ王軍ニ歸向スルアリ

身ヲ售リ土地財貨ヲ得或ハ大家産アル女子ト結婚シテ其身ヲ售リ已  
ニ其情欲ヲ饜カシムレバ使復去テ他ニ之ク者アリ彼ノカンデ侯ノ如  
キモ猶其醜行ヲ爲スヲ免レス斯ノ如クニシテ相交戦スルコト凡四年貴  
族人ニ至リテモ亦其成敗ニ隨ヒ忽此ニ隸シ忽彼ニ属シ嘗テ常操ナシレ  
カンデ侯及ビタレンニーノ二人常ニ相抗敵セシニ又互ニ彼此ニ属從  
セリマザランモ或ハ官軍ニ属シ或ハ叛黨ニ属ス其此ニ與シ彼ニ同ス  
ト雖其恣ニ太后ヲ制伏スルハ皆異ナルコト無シ

戰鬪四年ニシテ熄ムカルダイナールハ巴里府ニ在テ晏然事務ヲ執リ

行ヒ大ニ人ノ爲ニ恭敬セラルカシテ侯ハ叛黨ノ首魁タレハ逐ハレテ  
 外邦ニ在リ此ノ役ニ存セル者ハ僅ニボナイメートル及ヒフロンデユ  
 ーノ二語アルノミボナイノトルハ春秋ニ富メル人教誨ニ怠リ大  
 ニ兇惡ナル者ヲ稱スル名ニシテフロンデユールハ政府ヲ誹議スル人  
 ニ命スルノ稱ナリ

## 第一百三十三篇

マルシヤル、ナユレーンノ品行、ビレチーノ約カ

ルディナールマザランノ死、第十四世路易ノ品行

西班牙ト交戦未休マス是時カンテ侯西班牙ノ軍ニ將タリ侯兵ニ長ス  
 ルノ名アリ而レヲナユレーント曰フ者侯ノ仇敵ニシテ亦才畧アリ相  
 讒ツズ

ナユレーン身矮小ニシテ肩廣張ス人ト對語スルニ兩肩ヲ聳動シテ止

マズ是天賦己ニ缺ク所アリ身ノ短小加フルニ眉毛稠多濃密而上自薄

福ノ色相アリ其公議スル聽ク者以テ不斷トス然レモ其事ニ臨ミ裁決  
 スル勇果敏斷遠ク世人ノ上ニ出ツ斯人度量膾畧アリ常ニ自謂フ文學  
 ト事務トヲ修行セバ兩全ヲ得ザルノ理ナシ羅句語ヲ能クスル詩人ト  
 多ク交結ス其人ト談スルニ佛國詩人ヨリ學ビ得タル許多ノ美談ヲ用  
 井タリ平生衣服朴素ニシテ性行謙遜ナリ

且誠忠節義アリテ富貴ヲ度外ニス佛軍ニ將帥タル時其權力財貨ヲ聚  
 畜スルニ足レリ然ルモ自抑制シテ之ヲ爲サハルハ實ニ恬淡ナルニ出  
 ヲ偶己ムヲ得ズシテ戰闘ヲ爲スモ專國家ノ爲ニシテ毫セ私ヲ挾マス  
 歎人ト雖尙之ヲ愛慕スルノ情アリ

又辨才アリ多ク古諺ヲ諳記シテ辨難駁擊快キヲ風雨ノ如シ因テ朝官

兵人皆之ヲ愛敬ス人ノ功名ヲ嫉マス己ノ才能ニ誇ラス獨其守任ヲ盡  
スノミ斯ノ如クナルヲ以テ終ニ良將ノ名ヲ當時ニ得タリ

夫ナコレーシハ世ニ卓絶シタル賢人ナリ而ルヲ世唯有功ノ將帥ト爲  
シテ説ケリ蓋其賢ニシテ善行アルスノ如キ者誠ニ得難シ戰亂ノ日ニ  
當テハ此ノ如キ將帥ヲ撰ハサルヘカラス

佛國ノ兵向フ所勝タサルハ無シ西班牙ノ兵屢敗餽シ國爲ニ大ニ疲困  
シ竟ニ和ヲ佛國ニ乞フ佛國カルザイナールマザラン喜デ之ヲ許ス乃  
ビレチーノ盟アリ紀元一千六百五十九年十一月七日兵罷ム此ノ約

ニ曰ク佛王路易西班牙王ノ女某ヲ娶リ若其ノ王死スルニ及テ世嫡無

キモ佛王敢テ西班牙ノ王位ヲ取ルヲ得ス又カンデ侯ノ舊佛國ノ重臣  
ニシテ是時逃

テ西班牙  
國ニ在リ罪ヲ赦スベシト

王路易紀元一千六百六十年ヲ以テ西班牙ノ王女某ト婚ス此ノ后終身  
ノ操行人ノ能ク識ル所ニ非ス世ニ傳稱シテ云フ王路易ニ嫁シテヨリ  
後二十三年ニシテ没セリ王悲叫シテ曰ク是彼ノ女ノ余ヲシテ悲傷憂  
悶セシムルノ始ナリト

カルザイナールマザラン紀元一千六百八十一年第三月九日ヲ以テ死  
ス斯人ノ政事吾カ管治所ノ人民ノ爲ニ公益ヲ謀ルヲ無シ然レモ亦此  
カ爲ニウニスフアリヤ及ビレチーヌ等ノ盟約講和ニ於テ得ル所ノ美  
聲ヲ損セズ其敵國ニ周旋スルノ術ヲ得ルハ世ノ贊稱スル所ナリマザ  
ラン戰ヲ熄ムルハ民ノ塗炭ヲ免レシムト謂フベシ

佛王路易年二十三猶嬉戲ニ耽リ事務ヲ習ハズ其王ヲシテ斯ノ如クナ  
ラシムルハマザランノ爲ス所ナリ王路易諸王侯等徒ニ其尊號ヲ擁シ

娛樂ヲ嗜ミ至重大ノ任職ハ他人之ヲ擢當シテ己レ曾テ顧ミス  
 王路易斯ク愚ナルカ如シト雖其志高遠ニシテ未嘗テ聲名權勢ヲ拋棄  
 セズ故ニマザラン世ニ在ルノ日ハ唯其ノ爲メ所ニ從フト雖一朝彼カ  
 羈絆ヲ脱スルニ及テ政權ヲ親ツスルヲ公告セリ  
 是ヨリシテ世ヲ没スルニ至ルマテ路易ハ佛國公正平直ノ君タリ其大  
 臣モ肅然トシテ王ノ使令ニ從ハザルナシ王躬萬般ノ事務ヲ體シ勉メ  
 テ倦マズ故ニ王畢生ノ名譽一ニ此ニ在リ當時王有ツ所ノ土ノ壯麗華  
 美ナル爲ノミテラズ今其壯麗ナル者己ニ皆烟滅スレトモ勵精圖治ノ  
 聲名益多シ

第一百三十四篇 第十四世王路易フランドーノ人民ヲ進撃ス及

ビ王軍ヲ退ケ講和スル事

王路易治世七十三年ノ久シキニ及ヘリ而シテ其一世ヲ分ナテ三トス  
 其幼年ヲ擾亂ノ時トス此ノ事己ニ説過セリ其中年武威赫々名聲四方  
 ニ播ク成立ノ時トス其老年ノ日ヲ運命衰微ニ属スルノ時トス王ノ晚  
 暮ニ及テ内國騷擾シ禍難休ム時無シ

王路易兵事ヲ以テ大ニ名譽ヲ得ント欲スル意アリ此ノ意ヲ近傍諸國  
 ニ達シ之ヲシテ論スル所ナカラシメント欲シ欺詐假託ノ語ヲ設ク嘗  
 テ西班牙王ノ女ヲ娶ル時盟約スルニ爾來西班牙ノ領地ニ属スル者ハ  
 吾之ヲ領取セント欲スルコトナキヲ證セリ而ルニ西班牙王ノ墳土未  
 ダ乾カサルニフランドー及ヒ其他ノ大土ヲ取ランコトヲ圖ル

是時澳地利家ノ首タル日耳曼帝オボルト西班牙幼王ノ爲ニ大ニ心力  
 ナ盡スト雖終ニ佛王路易ニフランドーノ地ヲ與ヘンヲ許セリ加之

幼王若天没スルアラハ又西班牙全國ヲ領取スルヲ許セリ

帝オボルド佛王路易ト斯約諾ヲ爲セシヲ慙テ深ク之ヲ世ニ秘セリ其約書タル僅ニ一券ノミ之ヲ鐵函ニ藏シテ封鎖スルコト二處一鍵ハ佛王之ヲ有シ一鍵ハ自之ヲ持セリ

コルベルハ大ニ心計ニ長シタル人ニテシユリ一俟ニ亞クノ稱アリ此ノ人王路易ニ事ヘ王ノ命ニ從テ大ニ費財ヲ畜積シ歷代王朝ノ富ニ倍スルヲ得タリ又兵馬總督ルウガアーハ其ノ邊境ノ地ニ火藥ヲ分置スル便捷ナル方法ヲ設ケタリ

兵備已ニ全整スルヲ以テ王路易自將トシテ大軍ヲ率テ老將ケューレン之ニ副タリ貴族少年皆王前ニ在テ干戈ヲ執ルヲ喜ビ欣然トシテ來集シ王ノ親定斷スル軍律ニ服從セリ

一大隊毎ニ服裝ヲ殊ニシテ之ヲ分別シ各相競フノ心アラシメテ王ノ裝飾尤其美ヲ盡セリ王既ニ斯ノ如シ將士軍吏皆相倣フテ費力ヲ極メテ之ヲ爲セリ

大臣既ニ大オアリケューレン既ニ大將タリ王ノ意其ノ必勝ヲ期セリ又著名ノウオーバント云フ者亦軍ニ從ヘリ此ノ人多才多藝ナリ頗穢械ノ學制ヲ改創ス

王軍進發甚急ナリ歐洲諸國ヲシテ大ニ驚動セシム是時英國和蘭兩國ノ戰已ニ休ム而ルニ王路易ノ兵ヲ防カンガ爲メ相與ニ又瑞典ト合從セリ佛王貪名ノ欲竟ニ全歐洲人ノ自由ヲ妨ケントスルニ至ル此ノ倨傲ノ侵掠者佛王ヲ指ス留ルヲ少頃即和ヲ講セリ其講和ハ紀元一千六百六十八年第五月二日ヲ以テエキスヲシヤベル地名ニ於テセリ

始王ノ和ヲ講スルハ和蘭ノ一市人ノ指教ニ因テ枉テ其忿ヲ抑制ス此  
ノ市人剛毅ニシテ醇乎タル共和政黨ナリ其名ハフアン、ベニツホウ和  
儀ヲ商量スルニ當リ敢テ惶懼スル所無ク又強テ禮敬ヲ盡スニ非ス佛  
國使一日此ノ人ニ語テ曰ク子一ニ佛王ノ言フ所ニ從フヤ彼答テ曰ク  
王ノ爲ス所如何ヲ知ラズ唯其成就スル所如何ヲ思慮スルナリト遂ニ  
自其約ヲ爲セリ

第一百三十五篇 第十四世路易佛蘭兩國ノ戰事ヲ公告ス及ヒ路

易和蘭ニ入ル

王路易將ニ侵略セントシテ意ノ如クナラス是ニ因テ大ニ激憤シ必報  
スルコトアワント欲ス其敵トスベキ者和蘭最近ニ因テ直ニ之ヲ擊破  
シテ忿怨ヲ洩サント欲スレモ和蘭英國ト結盟スルヲ以テ之ニ加フル

コト能ハス

王路易乃和蘭ト英國トノ盟ヲ破ラント欲シ先オルレヤン侯ノ夫人ヲ  
シテ計ヲ爲サシム遂ニ其意ヲ得タリオルレヤン侯ノ夫人ハ英王第二  
世ケヤーレスノ妹ナリ之ヲ英國ニ遣ハシ其情ヲケヤーレスニ説キ遂  
ニ和蘭ノ盟ヲ破リ佛王ヲ援ケテ之ヲ伐タンコトヲ結約セリ

王路易因テ歐洲各國ニ皆兵ヲ舉テ應援セシム然セザル者ハ局外中立  
タルヲ約ス獨西班牙ノミ此ノ約外ニ在リ是ニ於テ王謂フ共和政治ノ  
和蘭ヲ取ル掌ニ運スカ如シト時ニ共和政治ノ民中ニ僅ニ王ニ抗セン  
ト欲スル者アリ

王路易戰ヲ欲スレトモ其名ナキニ苦ム己ニシテ一歎事ヲ查出セリ和  
蘭共和政治國ニ於テ大吉祥事アレバ必紀功碑ヲ鑄造スルヲ猶古今各

國ノ爲ス所ノ如クス

王路易其王國ニ對シテ禮敬ヲ失フ者ナリト稱シ自大軍ヲ帥テ和蘭ニ入ル時ニ紀元一千六百七十二年第六月十二日リーン河ヲ渡ル此ノ河水面甚低シ和蘭ノ軍前岸ニ屯スル者二大隊ノミ佛王軍ヲ進ムルヲ見テ悉ク潰散セリ

其兩岸相距ル遠カラス騎兵ハ之ヲ騎渡シ步兵ハ哨舟ヲ連テテ橋ニ代ヘ王ニ從テ渡ル易キコト平地ヲ行クガ如シ巴厘府民之ヲ聞テ盛功ナリト爲シ又詩家者流ハ之ヲ粧飾シテ大ニ其事ヲ稱揚セリ

佛軍ノ攻畧未三月ナラズシテ獲ル所三州四十餘堡其アムストルダム府モ佛軍殆ト其城門ニ薄レリマイデン市邑ハ一列婦アリ奇策ヲ建テ僅ニ存スルヲ得タリ始游客十四人アリマイデンノ城門ニ薄ル其市

尹乃出テ降り授ルニ門鍵ヲ以テセリ

時ニ一列婦アリ堅ク此ヲ拒キ十四人ヲシテ城中ニ入ルヲ得ザラシム此ノ婦ハ甲楯ヲ城中ニ造レル人ナリ己ニシテ市尹モ亦游客ノ怯弱ナルヲ見テ計リテ之ヲ醉ハシメ遂ニ門鍵ヲ奪還セリ然レトモ是時和蘭國人己ニ其亡期ノ將ニ至ラントスルヲ知レリ

第一百三十六篇 和蘭ノ勢將ニ滅亡セントス、オランジ公子和蘭

軍ニ將タリ、オランジ公子ハ後ニ英王第三世ウイリ

ヤムト稱スル者、ニメグエンノ和親

和蘭人ノ大家産ヲ有スル者及ヒ單ニ自主自由ヲ求ムル者皆僻遠ノ境ニ遣レバタツイヤ東印度中ニ一市邑ニ隱匿センヲ決議シ航海ヲ善スル者ノ船籍ヲ檢シ能ク五萬戸ノ人ヲ載輸スベキ船ヲ得タリ

是時和蘭人ハ益東印度ノ一僻陬ニ避匿シ富饒繁華ノ地水之ヲ浸シテ忽大澤トナリ其水ヲ防カント欲スル者財ヲ擲ナカテ竭シ方ニ其ノ備ヲ爲セリ

王路易無數ノ人力ヲ費シテ建立シタル最美麗奇異ナル一國ヲ亡滅セシヲ以テ蓋惡聲ヲ世ニ流クナラン而ルニ詩人理學者歴史家等諛辭ヲ以テ附會修飾スルモ亦多シ

是ニ於テ蘭人始テ決議シテ和ヲ請ヘリ講和使佛軍ニ至ル佛軍之ニ遇スル倨傲ナリ而シテ之ニ指示スル所ノ章程ハ蘭人ノ從ヒ肯セザル所ノミ是蘭人枉テ佛國ノ要スル所ニ從ヒ其國政宗教ノ權理ニ及フマテ皆俱ニ棄擲スルニ非スンハ唯其戰勝ヲ以テ佛人ノ望ヲ飽カシムルコト能ハザルベシ

講和使佛軍ヨリ還ル敵ノ欲スル所ヲ告ス國人更ニ大ニ失望シ遂ニ共和政治ノ情勢ヲ恢復スルニ至レリ是ニ於テオランジ公子ヲ公選シテ政務ヲ統領シ政府ニ主タラシムオランジ公子ハ後ニ英主ト爲リ第三世ウイリヤムト稱スル者是ナリ

オランジ公子謂フ余良策アリ我ハ手ヲ袖ニシテ國家ノ覆滅ヲ視ル人タルヲ欲セス己ムコトナクハ我城堡ノ敵ニ辱有セラル、所ニ於テ快死センノミウイリヤムノ志剛毅ニシテ必其國家ヲ保護セント欲シ大ニ其心力ヲ竭セリ因テ悉ク城闢ヲ開キ水ヲ國中ニ注カシム其ノ策天氣極寒堅氷結テ能ク天造ノ橋梁ヲ爲スヲ以テ此ニ出ルナリ奇巧ト謂フヘシ

耶蘇ノ祭日ヲ以テ王路易ヘキニューー府ヲ襲撃セント欲シ最強武ナル一



軍ヲ遣ル軍堅氷ヲ履テ急ニ進ム是時佛軍氷雪ノ融釋スルニ遇ハズン  
 ハ必成功アルベシ然ルニ佛軍氷漸ニ圍障セラレ避クルニ道ナク僅ニ  
 小隄上ノ狹路ヲ取ル

佛軍ノ前路ニ一堡障アリ敢テ相攻撃セヌ佛軍ノ退クニ當テ終ニ之ニ  
 抗スル者ナシ是其ノ軍ノ強キニ非ス敵兵ノ弱ニ出ツルノミ大率敵一  
 兵ヲ交ヘズシテ出テ降ル

是時和蘭ノ勢忽復振フ紀元一千六百七十三年西班牙帝和蘭ヲ援ハン  
 ト欲スルコトヲ公告ス是ニ於テオランジ公子其軍ヲ以テ西班牙ノ近  
 衛大將モンテキコリート合從シ進テ佛國ニ入ランヲ約ス此ニ因テ  
 王路易悉ク其軍ヲ召還シ侵掠ノ舉ヲ止ム

紀元一千六百七十四年英佛二國ノ好モ亦破ル英王チャーレスハ夥多

ノ財貨ヲ贈リ其私費ヲ助クルノ故アルヲ以テ其ノ意好ノ破ルヲ欲  
 セズト雖國民肯テ從ハス更ニ復和蘭ト結盟スルニ至レリ

王路易英國ノ好破ルレトモ以テ意トセズ其敵タル者ハ悉ク之ヲ擊破  
 セントス佛將ニューレンシ向フ所皆勝ツ但其ノ兇暴ナル兵馬都督ルー  
 ヴオアーニ從フヲ以テ大ニ美名ヲ汚辱セリニューレン偏ニルーヴオ  
 アーノ命ニ從テ其部兵ニ令シ伯領リーン中豐饒ノ全地ヲシテ悉ク兵  
 燹ニ羅フシム

此ノ饒土己ニ變シテ荒原トナル時ニ本州ノ伯其宮ニ在リ窓ニ倚テ回  
 望スルニ二市邑二十五村均シク燼セリ英國兩黨ノ間ニ居リ終ニ勸解  
 シテ講和セシム

茲ニニメグエンノ和約成レリ曰ク和蘭ハ其未戰ハザル前ニ有スル所

ノ地ハ悉ク有セヨ佛國ハ先ニ西班牙ト戰マ時畧スル所ノ地ハ有スル  
ヲ得ヘシト

第一百三十七篇

ツエルセーイヨ地ノ宮殿コルベル數種ノ製造  
法ヲ佛國ニ興スランゲトツクノ水道

王路易ノ權勢己ニ其極ニ至レリ群臣王ノ德ヲ稱揚讚頌シテ曰ク王己  
ニ外ニ仇敵無ク内ニ大自在力ヲ有セリト王路易其說ヲ信シ其虛名ヲ  
喜ヒ自謂フ古今史傳中余ヨリ卓越セル者ナレト

王路易名ヲ求ムルコト尤兵事ニ於テ切ナリ國事ニ在テハ更新ノ意意  
ラス巴里府ハ佛人ノ常ニ誇張スル所ナリ王益之ヲ壯大ニセントシテ  
貨財ヲ費スコト日ニ多レ

然レトモ王路易ハ昔日フロンデノ擾亂ニ臨テ巴里府民皆之ニ左袒

スルヲ以テ嘗テ之ヲ忘レズ因テ巴里府ニ住居スルヲ欲セス治世ノ初ニ

當テハ其政府サンゼルメー地ニ在リ爾後ヴェルセーイヨニ移レリン

是ニ於テ宮殿ヲヴェルセーイヨニ造ル其壯麗巨觀全歐洲ニ冠タリ王  
ノ此ノ地ヲ購ヒ此ノ土木ヲ興ス其費二億弗其工ヲ畢ルニ至テ民人ノ

賦課頗煩苛ナリ

王路易斯ノ誇奢虛張ノ紀功碑宮殿ヲ指スヲ建立スルニ當テ賢相コルヘル

ハ其國家ノ安全ニシテ隆盛ナラント欲シ大ニ心力ヲ竭セリ此ノ人  
執政タル時貿易通商ヲ盛ニシ各色製造ノ事ヲ振興セリ

此ノ人東印人ト貿易セント欲シ茲ニ一商會社ヲ創立セリ其隆盛ナ  
ル和蘭商社ト相競フニ至ル實ニ佛國大富ノ一部トス是ヨリ先華麗ナ  
ル哆羅呢ハ英國ヨリ輸入スル所ナルヲコルヘル智力ヲ竭シテ其方ヲ

考へ遂ニ佛國ニ於テ製造スルコトヲ爲セリ

大ニ國內人ニ教ヘテ桑柘ヲ種藝セシメ織工ヲ舉用シ生絹ヲ内輸スル  
 ヲ止ム又ヴェニスヨリ玻璃製造ノ法ヲ取り速ニ其功ヲ成シヴェニ  
 スノ製ニ勝レルモノヲ出ス

又氈毯ヲ製シテ以テ土耳其格ベルシヤ等ノ製ニ擬シ其功ヲ大成ス佛國  
 ゴベリンスニ於テ懸氈條ヲ製スルニフランデーノ製出スル所却テ之  
 カ下タリ其ゴベリンスノ工人八百人餘皆設色家ノ指使スル畫工ノ圖  
 内最精密ナル者ニ擬シテ之ヲ製造ス

コルベル又靴裏襪ヲ製スルノ機械ヲ英國ヨリ輸運シ又ヴェニス及フ  
 ランデーノ婦女ヲ雇ヒ來ル是佛國ノ小女之ヲ師トシ狹機等ノ製ヲ學  
 ハシメントシテナリ錫鋼鐵磁器及麻羅罽革ノ類ハ古來外邦ヨリ輸入

スル所今悉ク佛國ニ於テ製造セリ

斯人ノ創造スル所多シト雖其民ニ切要ニシテ功業甚大ニ事復爲シ易  
 カラサル者ヲラングドックノ水道ヲ鑿ケタル一欸トス此ノ水道ハ大  
 西洋ト地中海トニ通セシムル者ナリ紀元一千六百八十一年ニ至テ成  
 ル其工事始ヨリ終マテ一日モ間斷アラスト云フ

第一百三十八篇 第十四世路易治世中ノ文學

王路易無學ナリト雖亦名ヲ求ル心アリ因テ文人學士ニ接待スル務メ  
 テ優異ヲ示シ自文學ヲ保護スルノ人ト爲セリコルベルハ文學ノ眞價  
 ナ識ル遠ク王ニ勝レリ王モ亦此ノ人ノ誘導ニ由テ事ヲ爲スコト衆シ  
 又其言ヲ用井テ年々金若干ヲ頒テ歐洲有名ノ諸學士ニ給與セリ是ヲ  
 以テ彼ノ學士ノ褒揚ヲ取ル最誼レ

當時著名ノ學士ヲ舉ケンニ其履歷ノ概畧ヲ錄スルモ積テ一冊子ヲ爲スニ至ラントス稗史氏コルチーイロモリユールウシーン等尤有名トス詩人ハボツレオーラフオンターインヅオアナユールヲ尤有名トス理學家ノ尤俊秀ナル者ヲモンアスキューフオントチールト爲ス史家モ亦多シ其中ニヘノート曰フ者アリ議會長ニシテ高德秀才アリテ世ニ稱セラルル此ノ人曾テ佛國史ノ年契畧ヲ編輯セリ裴葛ヲ更ルヲ四十編纂ノ功速ナラスト雖記スル所確實ニシテ浮華鮮シ斯人ヲシテ修史ノ日ニ當テ銳發ノ氣ヲ抑ヘ質直ノ辭氣ヲ達セシメバ年契ニ至テモ人其確實ナルコトヲ知ラン

其ノ編修スル所ノ史往々謬錯アリト雖同時ベールダニエールノ史ニ比スレハ高キコト數等ナリベールダニエールノ史ハ杜撰ニシテ謬

ノ多キ其數十萬ト稱スダニエールハ自著ノ書ヲ點檢訂正セス其史ヲ修ムル日王ノ文庫監某貴重ノ簿錄若干卷ヲ寄贈セリ蓋之ヲ其引用ノ必需タルハキ者トスレハナリ

時ニダニエール悉ク之ヲ送還シテ曰ク此ノ故紙ヲ以テ自累ハサマルモ簡要ノ一史ヲ編撰スルハ難ダカラス又史家ニソゾレト曰フ者アリ其人質實ナルヲ以テ史モ亦質實ナリ世此ノ人ヲ評スル奇異ノ說多シソゾレ一憂中ニ在テ快晴ノ日ト雖猶燭ヲ點シテ白晝ニ坐セリト是其一ナリ

當時多才博學ナル者獨男子ノミナラズ女子モ亦多シ一婦人マダムダシエート云フ者上古ノ經典學ニ長セリ詳ニ之カ註解ヲ加ヘ又傍訓ヲ施シ之ヲ刊行シ且佛國語ヲ以テ之ヲ譯述セリ

世傳テ謂フ此ノ婦ノ博學當時全歐ノ最ダリ他人ト接話スルニ其溫柔篤恭ノ容貌ヲ變スルコト無ク又論理ノ際ニ當テ曾テ人ニ抗抵セズ曾テ才ヲ負マズ

又一婦アリ名ハマダムドソヴィニエー其ノ不凡ノ才アルニアラズト雖著述スル所ノ筆其俊發ヲ見ルニ足レリ世ノ尺牘ヲ學フ者ノ軌範ト爲ス

第一百三十九篇 第十四世路易治世間ノ僧侶

時風既ニ上ニ説ク所ノ如シト雖其ノ之ヲ縁飾スル者ハ多ク僧徒ナリ其積學ニシテ厚ク神ヲ敬シ且辨論ニ長スル者ヲボスシユエーブルダールー及ヒフエチロントスボスシユエー始メ認師タラントス而ルニ幼年ヨリ頗講書ノ才ニ長セルヲ以テ其志力ヲ此ニ專ニセリ

此ノ人博學ナルヲ以テ王路易太子ニ師傳タラレム其懇篤責任ヲ盡スヲ以テ又拔テラレテメオ地ノ督教師タリ紀元一千七百四年ヲ以テ寂ス年七十七此ノ人曾テフエチロント神學ヲ諍論ス時ニ羅馬法王之ヲ判決シボスシユエーヲ以テ優レリトス

是時王路易モ亦ボスシユエーノ持論ヲ善トス王一日之ニ問テ曰ク往ニ余若エチロンノ説ニ與セバ子奈何セントスボスシユエー答テ曰ク苟然ラハ將ニ辨論反覆スル數十次ニシテ止マザラントス又曰ク人高明正大ノ論ヲ持セバ終ニ其理ノ貫徹スルアリ

ボスシユエーハ職務ニ汲々トシテ曾テ遊觀嬉樂ノ間隙ナシ其ノ園圃ノ盛美ナルアレトモ足到ルコト少ナク一日園庭ヲ過ク園丁佛然トシ愠色アリ曰ク余苟名士ヲ栽植セバ公必來テ之ヲ見ン園樹ニ至テハ何

ソ然セサレヤ

斯人ノ名譽ハ專講辨ニ在リ舌鋒ノ爽快ナル威儀ノ美ナル自然人心ヲ感動セシム故ニ世大ニ之ヲ稱揚ス平常講スル所ノ書ハ縷々タル細語之ヲ觀ルニ他ノ異ナルコト無シ其之ヲ演說スルヲ聽ケバ中心ニ微シ感服流涕止マザラシム

ブルダル―モ亦講師タリ其志操同シカラス平常志ス所ハ眞ニ道理上ニ留意シテ苟臆斷道辭ヲ以テスルコトヲ欲セズ其心ニ謂フ私情ヲ以テ人ヲ感セシメンヨリハ大理ヲ以テ其意ニ了解セシムルニ如カス此ノ人勸善ノ說其他公說ヲ出シ世ノ刊行ニ付スル者多シ現今尙之ヲ珍重ス

以上三人フエテロン最春秋ニ富メリ名聲ヲ得ルモ亦此人ヲ最トス大

才博學ニシテ謙遜恭敬ナリ遂ニ撰ハレテ王孫ニ師傅タリブルゴンデイ  
―侯ノ高德博識諸公子中ニ冠タルハ此ノ人ノ教訓スルニ因レハナリ  
フエテロン又撰ハレテカンブレ―地名ニ大督教師タリカンブレ―ノ大  
督教師ハ大家産ヲ有シ爵位高貴佛國ニ冠タリブルゴンデイ―侯ノ碩  
德人民尊敬悅服スルハ其師傅ノ力ナリ此侯年尙弱少ニシテ品行ノ美  
ナルハ太子ニ過ルコトアリ及ハサルコトナレ太子ノ師傅ゴスシユエ  
―大ニ之ヲ妬ムニ至ル

是ニ於テゴスシユエ―害ヲ大督教師ニ加ヘント欲シ其アレマキユ―  
ト稱スル書ヲ刊行セントスル意ヲ言ヒ竟ニ其計ヲ成ステ得タリアレ  
マキユ―ハ大督教師フエテロン其弟子ノ爲ニ著ハス所ノ遊戯ヲ兼テ  
タル書ナリ其稿已ニ成リ之ヲ淨寫スルニ及テ其ノ寫字生自其文ヲ

變更シ之ヲ書舖ニ售ルニ蓋其純潔簡要ニシテ高尚ナル訓ヲ以テ王子ニ傳フルハ斯人ニ過キタル者無シトス王乃是書ヲ觀ルニ政府ノ良法德惠アルヲ詳載シ或ハ其不理ニシテ名ヲ貪リ或ハ虛飾奢侈ヲ極メ由テ災害ヲ起スコトヲ記セリ故ニ嘲哂誹謗ナリト稱シ其記者フエチロシテ仇視スルニ至レリ

終ニフエチロンノ爵位ヲ褫ヒ貶シテ其寺邑ニ退去セシム然レモ其行清廉性温厚ナル人大ニ之ヲ崇敬セリ寺邑ノ大ナル收ムル所ノ租稅ハ之ヲ衆人ニ頒與シ自畜フル所ナク又負債ヲ遺サズ曾テフランデーノ侵掠ニ遭フ時肯テ避匿セス其堂宇ニ貧困病者及ビ戰傷ノ者ヲ居キ懇切ニ之ヲ救助賑恤ス

近世ノ戰事ヲ記スル書中ニ一奇談アリ曰クマルゴロー侯及其他同盟

ノ將等特ニ命令ヲ傳ヘ此ノ大督教師ノ所有ニ妨害センヲ恐レ務メテ之ヲ守護セシム此其ノ皆人民ニ施行スル物ナリト爲セハナリフエチロン紀元一千七百十五年ヲ以テ終レリ

### 第一百四十篇 風俗好尚

佛國人民ノ當時用ヰル所ノ諸物器ヲ説カン是ハ英人ノ佛國ニ遊歴シテ記スル所ノ説ヲ擧ク讀ム者稍快心スルニ足ラン此ノ英人ハ醫師ナリ曾テ英使ノ家族ニ從テ來ル者ナリ

此人佛國ニ來ル時先專注目スル所ハ佛俗ノ縱覽物ヲ好ムナリ其縱覽物ヲ稱シテアスベクタクルト曰フ是ノ時英使ノ巴里府ニ入ルヲ觀ント欲シ數百個ノ貴族及ビ督教師等出テ路傍ニ在ルコト數時皆車中ニ在テ靜肅ナリ車製ノ變ハ馬車ノ盛ニ行ハルヨリ後始テ車箱下ニ彈機ヲ

設ク又雇車アリ世ニ行ハルト雖粗惡ニレテ觀ルニ足ラス  
 又一種ノ乗車アリ英人大ニ之ヲ奇トス此ヲツイチグレットト曰フ二  
 個ノ牙輪アリテ一個人之ヲ輓ク又婦女子小童ノ推ス者アリ英人謂フ  
 佳ナリト雖大都會ニ此ノ様ノ車アルハ相稱ハスト

此ノ乗車等ヲ觀覽シ畢テ更ニ街頭ノ行人ヲ觀ント欲シ左顧右盼シテ  
 歩ヲ進ムルニ市街ノ過客中僧徒最衆中ニ超然タリ其服飾及ヒ從僕頗  
 華美ナリ又律法家アリ其婦妻ニ扶ケラレテ行クヲ見ル

之ヲ熟視スルニ律法家ノ街頭ヲ往來スル門子衣裳ヲ携ヘテ從フ己ニ  
 禮拜堂ニ入レハ一從者ヲシテ剪絨ノ椅褥ヲ捧ケ先驅セシム其婦妻モ  
 亦此ノ權ヲ分ツヲ得ルカ如シ

律法家モ亦佛國ノ一有司ナリ其職任爵位モ亦猶王家ノ官爵ノ如ク若

千金ヲ以テ之ヲ購ヒ得ル者ナリ其權ヲ婦妻ニ分ツハ又頗大費ナルコ  
 トナリ但與ヘントスルコトアレハ敢テ拒論スルコト能ハザル者アリ  
 近世佛國ノ街坊ヲ觀ルニ大ニ更新セリ當時ハ街頭ノ昭々明々タルコ  
 ト月ノ有無ニ係ラス英人之ヲ見テ大ニ怪メリ龍動府ニ於テハ月夜ハ  
 街燈ヲ點セザルノ簡法アリ其月夜ニ偶陰雨暗黒ニ値フモ猶月夜ト同  
 例ニ燈ヲ點セサレハナリ

街頭ニ繩ヲ橫張シ之ニ連掛スルニ燈籠ヲ以テス其ノ費二十万弗餘ナ  
 リト云フドクトル、フワンクリンノ巴里府ニ在ル會テ此ノ點燈ノ事ヲ  
 論シ懇ニ之ヲ府氏ニ諭シテ曰ク公等甲夜ニ寐テ夙ニ起ルヲ爲サハ  
 將ニ若干ノ膏ヲ餘スコトアラント

英人其所見ニ隨テ家屋建築ノ狀ヲ記スル者アリテ曰フ其高貴人ノ第



宅ハ門戸深廣馬車ヲ容ル可シ又内庭アリ同シク門戸ヲ設ク其戸數七百有餘而シテ其門戸ノ式多クハ古代ノ營築法ヲ模造スル者ナリ又連戸低下ノ窓櫺ヲ造ル皆鐵條ヲ用ケル而シテ室内ノ造構華美全整ナルハ亦猶室外ノ飾裝ト稱フ諸什器ニ至テモ亦然リ懸氈條ヲ着ルニ金線銀系ヲ以テシ臥床ハ深紅剪絨或ハ紵緞或ハ金銀絲帛ヲ以テス牙器書案ハ皆螺鈿ナリアランナ即數枝ア  
ル燈臺及ヒ燭架ハ水晶ヲ以テセリ而シテ又最好ノ色漆器アリ世ノ希ナル所ナリ富豪ノ家ナラザルモ亦此等ノ裝飾ヲ見ル但其財ヲ浪費シ市人ノ産ヲ破リ家ヲ傾ル者往々之アリ人ノ安慰便利ヲ資ル器物ニ至テハ却テ巴里府ニ在テハ之ヲ見ス

## 第一百四十一篇

マダムドメーントノンノ事ブルゴンドイー侯

## ノ夫人

紀元一千六百八十三年王后死ス後二年ニシテ王私ニマダムドメーントノンヲ娶ルメーントノンハ元來ヒユージュノーノ徒ナリテオドルド、オーボチーノ孫女ナリテオドルハ王顯理ロカラシノ異父兄弟ナリメーントノン幼ニシテ父ヲ失ヒ獨母ニ育ハル而シテ母恩慈薄シ世傳フ其成長スルニ至ルマデ手ツカワ抱ケルコト唯二次ノミト然レモ人ト爲リ強壯剛毅大丈夫ノ如シ困厄ニ遭フト雖曾テ屈スル所ナシ其家火災アリメーントノン大ニ號泣セリ其母之ヲ罵テ曰ク今家屋灰燼ニ歸セントスルニ號泣スルモ何ノ益カアランメーントノン嘗テ是事ヲ語テ曰ク妾ノ號泣セルハ家屋ヲ失ハンコトナ哀シムニ非ズ妾ガ玩具灰燼ト成ラントスルヲ悲ムナリ苟家慈ヲシテ斯ノ真情ヲ知ラシム

ハ益隨責セラルヘキノミト

メーントノン其母ト居ルノ日未久シカラスシア政府之ヲシテカトリ  
ックノ宗徒タラシメント欲シ召シテ其母ト離別セシム其父母タル者  
素ヨリヒユীগノーノ徒タリ而シテ其ノ子ヲ強奪ス是王路易ゾロア  
スタント宗ヲ滅セント欲スル計ナリ

メーントノン身ヲ一個人ニ寄托ス己ニシテ人之ヲ厭ヒ十四歳ニ及  
之ヲ詩人スカーロンニ嫁ススカーロンノ納聘スル時メーントノン曰  
ク妾有ル所ノ物唯茲ノ二巨眼二手臂ト妾色才藝アリ優誦ヲ能スルノ  
ミ齋ス所ハ止銀貨四弗ナリトメーントノンノ清貧斯ノ如シ

其夫スカーロン没ス而シテメーントノンノ貧猶舊ノ如シ然レモ親友  
ニ富メリ是其人貞良ニシテ動作語言ノ温雅ナルコト人ヲシテ戀慕セ

シムルヲ以テナリ

是ニ於テ其友ノ薦ニ因テ内廷ノ一貴女某ノ兒女ニ師傅タリ因テ屢王  
ニ謁見ス其ノ人ト談話スル音吐嬌婉ニシテ性行温厚ナリ王見テ心大  
ニ動キ遂ニ之ヲ舉テ後配トス

メーントノン敢テ后位后號ヲ受ケス其履行舊ノ如シ但變スル者ハ衆  
庶ノ交ヲ絶テ王及ヒ二三ノ貴女ト共ニ起居周旋スルノミ猶殊ニ謙讓  
ノ意ヲ存シ貴ニ誇リ驕態ヲ見スコト無シ

人ノ幸福ヲ享ル豈久シク尊富安榮ナル者アラシヤ能ク此ノ理致ヲ識  
明スル者ハ蓋マダム、メーントノンノ若キ者ハアラス想フニメー  
トノンノ如キ者ハ之ヲシテ王妃タラシメンヨリハ貧老ノ一詩人ヲカ  
ーロンノ妻トナリテ身ヲ終ラシメバ其幸福ヲ享ルコト幾何ゾヤ

メーントノシ曾テ友人ニ贈レル書ニ云ク妾何ヲ以テカ能聞歴スル所  
 ナ公ニ語ラン又何ヲ以テカ能遭遇スル所ヲ公ニ説カン妾今高貴ナリ  
 ト雖乃悶々タリ但勉強シテ以テ憂ヲ忘ルヘノミ君之ヲ知ルヤ妾ガ付  
 テ心ニ期スル所皆是悲歎ノ事タリ天運菲薄命將ニ終ラントス上帝ノ  
 保護ヲ請フニ非スハ妾ノ憂悶ヲ除クコト能ハス

王路易昏夜ハ多クメーントノシノ室ニ在テ時ヲ移シ一宰相某ト國事  
 ナ此ニ謀議セリ而シテメーントノシハ或ハ把針シ或ハ讀書シ之ニ參  
 與スルコト稀ナリ王之ニ問フニ國事ヲ以テレテ曰ク汝之ヲ如何セン  
 トスメーントノシ辭シテ言ハス其ノ避ケテ國事ニ與カラサルコト此  
 ノ如シ

メーントノシ夜間ハ例ニ早く臥床ニ就ク己ニ臥床ニ就ク時王ハ即子

孫ヲ招集シ歡笑シテ時刻ヲ移セリ時ニ最王愛ヲ受ルハ孫ブルゴーン  
 侯ノ夫人ナリ而シテ夫人モ亦務テ其祖翁ヲ歡慰センコトヲ思フ

此ノ夫人モ亦マダムドメーントノシト交リ厚ク相親昵セリ而レモ其  
 最美ト爲ス者ハ其祖翁ノ爲ニ幸福ヲ計レル一欸ナリ王鬱憂スル所ア  
 レバ懇々之ヲ慰解ス王ノ暮年大ニ不幸ヲ享クルアルヲ以テナリ此ノ  
 夫人始メテ佛國ニ入ル時年僅ニ十一而シテ能王ニ事ルコト其性ニ出  
 ルカ如シ

此ノ夫人ノ行動語默或ハ沈默肅靜或ハ銳發快活ニシテ機變アリ能物  
 ニ應ス或ハ身自椅上ニ坐シ或ハ王ノ膝上ニ立テ嬉笑ス王之ヲ見テ心  
 常ニ樂ム夫人此等ノ嬉戲ヲ王前ニ爲スニ其心未嘗テ謹慎ヲ忘レズ王  
 ノ倦色アルヲ見レハ則便之ヲ止ム

其公事アル夫人ノ王ニ侍スル最禮敬ヲ盡セリ王亦之ヲ愛スル實ニ  
渥ク其暮年ニ及テハ常ニ之ヲシテ左右ヲ去ラシメズ

此ノ夫人常ニ内廷貴女ノ嬉娛遊戲スルヲ見ルト雖之ニ與カルヲ甚稀  
ナリ若與リテ之ヲ爲スコアレバ則王其未寢テザルヲ候テ之ヲ其室ニ  
召レ其前ニ爲セル所ヲ語ラシメ之ヲ聽テ樂ミトセリ

第一百四十二篇

ブルゴーン侯ノコト及ヒ侯後ニドーフアン

佛國太子

ノ稱ト爲ル

ブルゴーン侯ハニ秀拔スルコト亦其夫人ノ如シ侯ハ佛國太子ノ長子  
ナリ太子死スルヲ以テ代リ立テ太子トナル而シテ王路易ニ先テ死セ  
リ是ニ於テ其ノ二太子ノ辨別シ難カラシコト恐レ侯ノ父即前太子  
シテグラントドーフアン子ナリ(即大太子)ト曰フ

後太子ハ善良有名ノ士フエチロンノ教誨ヲ受ケ大ニ其德ニ化セリフ

エチロン太子カ爲ニ編述スル書ハ秘府ノ物タリ後太子死スルニ及テ  
昏頑主悉ク皆之ヲ燒ク其書中記スル所ニ自由ノ權利過ルコトアリト

スレハナリ

後太子性頗驕急ナリ而レモ幼時ヨリ大ニ學ヘル所アリテ自之ヲ抑制

ス長スルニ及テハ其性ヲ見ハスコ甚稀ナリ天理人道ニ則リテ事ヲ行  
ハント欲シ其遊戲ノ用ニ給セラル所ノ貨幣ハ悉ク貧人ニ賑給セリ

一日自謂フ我將ニ王タラントスト是ヨリ神識ヲ磨勵シ國ヲ富シ民ヲ  
利スルノ事務ヲ開明セント欲ス祖父王路易心己ニ後太子ノ賢俊ナル

ヲ知リ身ヲ卑フシテ其參贊ヲ取ル王ノ從來頑梗ナルヲ知ル者皆驚愕  
セサルハナシ

後太子容貌醜惡ニシテ廢疾アレヒ丰采秀發舉動高邁自威儀アリ其伏  
ヲ摘シ隱ヲ發スル神ノ如シ謀叛ノ者覺ハルレハ其ノ卑陋ナル者ハ大  
ニ之ヲ蔑如セリ諸大臣等皆謂フ太子剛果ナリ其王タルニ及ハ、我輩  
恐クハ課責ヲ蒙リ又國事ヲ建議スルコトヲ得ザラント

大太子ハ可モナク又不可モナレ其性至良ナレヒ賤劣ナル所アリ此ノ  
人素ボスシコエーノ訓教ヲ受クボスレコエー曾テ萬國史ヲ作ルハ太  
子ヲシテ讀マシメシガ爲ナリ又博學ノ男女ヲ用ヰテ古代ノ史ニ註解  
シテ刊行セシノ以テ太子ニ授ク

此ノ太子已ニ斯ノ如キ書アリ而ルニ之ヲ讀テ以テ目大理ヲ識明スル  
ノ才能ヲ具セズ曾テ文學ノ興味ヲ悟ラズ其新聞誌ヲ閱スルモ婚嫁死  
亡二條ノ外ナル者ハ讀ミ徹セス

然レモ其師傅學士ノ力ヲ費ス亦益多シトス此等編輯著述スル所ヲ以  
テ世ノ兒童輩ヲ教フルニ欠クヘカラス現今米合衆國ノ如キ尙之ヲ大  
學及ヒ中學ノ教則ニ用ヰル

大太子止不學ナルノミナラズ其行ノ賤陋拙劣ナル人君ノ品格ナキカ  
如シ其妃モ亦其短處ヲ補修スヘキ器ナシ此ノ婦生得陋醜ニシテ才色  
ノ取ルヘキ無シ其佛語ヲ學フモ亦甚拙ナリ全歐洲中最盛大ナル朝廷  
上ニ在リテ乃自謂フ妾ハ固ヨリ朝廷上ニ在ル者ニアラスト

此ノ妃常ニ暗黒ナル一小室ニ閉居シ其日耳曼國ヨリ來ル一侍女ト共  
ニ日語ヲ以テ喃喃相話シ以テ娛トス王及太子其ノ出テ衆人ト接語歡  
樂スルコトアワシメシヲ勸ムレトモ遂ニ從ハス只悲歎スルノミ佛  
國ノ貴女等就テ之ヲ慰メントスレハ益哀傷シテ殆死セントスルノ狀

第一百四十三篇 公ニナントノ制法ヲ廢ス、ヒューグノー徒ヲ嚴

罰ス

王路易最品行ヲ汚取セシ日ヲ紀元一千六百八十五年トスナントノ制法ヲ廢シヒューグノー徒ヲ酷刑ニ行フ是ナリ王心宗教ニ偏僻シ生前曾テ眞個ノ宗教アル者ヲ識ツズ瀕死ノ際ニ至テ痛惱哀苦始テ心中ノ頑梗ヲ破リ宗教ノ眞意ヲ悟了スルヲ得タリ

此ノ王羅馬カトリック宗教ヲ偏信シ其ノ信スル所ヲ信セザル人ヲ毒痛スルヲ以テ上帝ヲ恭敬スト爲セリ且驕慢自負作事悉ク衆人ニ超越セリト爲ス其信仰スル所及ヒ常ニ説過スル所皆然リトセザルハ無シマザランノ如キハ固ヨリヒューグノー徒ヲ毒スル人ニアラズ又賢相

コルベル在世ニハ大ニヒューグノー徒ヲ保助シ衆人ノ怨敵タルヲ免カレシメ其宗徒ヲ以テ實用ノ民ト爲シカメテ之ヲ勸誘シ以テ其事業ヲ爲サシム紀元一千六百八十三年ヲ以テ終レリ

コルベル己ニ死スルニ及テ其宰相タル者漸其權ヲ屈シ王路易ノ偏心ニ從フルーヴオアーノ如キハ性來暴惡殺戮ヲ嗜ム其父ロテリエー大ニプロテスタントノ宗徒ヲ惡ム此ノ法ヲ廢スルハ此ノ人ノ力ニ出ル所ニシテ暴惡ヲ縱行セシ後數日ニシテ死セリ其死スルニ臨テ自上帝ニ謝スルニ上帝余ヲシテ尙世ニ在ラシメテ此ノ成果ヲ目撃スルヲ許セト

茲ニヒューグノー徒ヲ壓制セント欲シ之カ方法ヲ設ル等差アリ事紀元一千六百八十一年ニ係ル其法タル唯ヒューグノー徒ノ驚愕ヲ生ス

ルノミナラズ其徒ニシテ官任アル者ハ即悉ク貶黜セラル其子女齟齬ノ者ハ之ニ教諭シテ其父母ノ奉信スル所ノ宗教ヲ棄斷シテカトリックノ徒タラシム

此等ノ慘酷苛法アリヒューグノーノ徒皆之ヲ憂ヒテ謂フ余等願ハクハ真意ノ禱フ所ニ從ヒ上帝ヲ拜スルヲ得ル國土ニ移リ住セント是ニ於テ政府ヨリ更ニ令ヲ下シテ曰ク水師工匠等ノ輩ニシテ苟他邦ニ移ラントスル者アレハ即之ヲ懲罰スルニ棹手ノ役ヲ以テセント

又ヒューグノー黨其家産ヲ賣販センコト謀ルヲ見テ即復令シテ曰ク民若其家産ヲ賣販シテ未一年ニ滿タザルニ他邦ニ移ル者アラバ其家産悉ク之ヲ官ニ沒收スト

是ニ於テヒューグノー黨ノ欲情ヲ禁遏シ得又教法師ヲ派出シテ徧ク

諭解セントス教法師等其功ヲ成スコト能ハズ王宿意ノ遂ゲサルヲ以テ更ニ兵人ヲ出シ之ヲ刼制シ其意ヲ遂ケントス兵人因テ大ニ暴動ス佛國史家皆此ノ苛法ヲ稱シテロドリゴトードト曰フ即兵人行暴ノ義ナリ

ルーヴオアー又公告シテ曰ク苟王旨ニ反キ其ノ宗教ヲ用非ザル者アレバ之ヲ極刑ニ處セン又頑陋ノ說ヲ固執シテ我宗教ニ抗スル者アラハ力ヲ極メテ罰極セン是我王陛下ノ聖旨ナリト

此ノ命ノ下ルヤ苟背犯抗敵スル者アレバ兵人直ニ赴テ其家宅ヲ監守シ其儲積スル所ヲ括尽シ而シテ後其家宅ヲ奪取シ器皿貨財ヲ破毀シ何物ヲ問ハズプロテスタント宗徒ノ持スル所ハ悉ク之ヲ取ル

己ニシテ又プロテスタントノ人民ヲ殺戮シ其老幼ヲ問ハズ男女ヲ論

セズ之ヲ惱苦セシム幸ニシテ生存スル者ハ悉ク之ヲ繫獄ス或ハ林谷ノ間ニ遁伏スル者アレバ之ヲ視ルコト猛獸ノ如ク驅逐シテ之ヲ殺戮セリ  
 其黨ノ婦女多ハ護送セラレテ尼菴ニ入ル尼姑其婦女ニ諭シ之ヲシテ改宗セシム若肯テ從ハスハ之ヲシテ安坐セシメス是ノ時ヒューグノ一ノ民タル皆貧困ニシテ其狀見ルヘカラザル者アリ禮拜堂悉ク毀倒シテ地ニ委セリ

第一百四十四篇　ヒューグノ一徒慘刑ヲ被ルノ二

ヒューグノ一黨已ニ大ニ慘毒ヲ被ル其安全ヲ得ント欲スレハ遁避スルノ外他策ナシ而ルニ又政府之ヲ黜換スルコト嚴密ナリ兵人邏卒ヲ四境ニ出シテ之ヲ索ム又農人ニ命シ遁逃スル者アルヲ見バ一々捕ヘ

テ之ヲ擊殺セシム

兵人捕虜スル所ノヒューグノ一徒ハ皆之ヲ囚獄ニ送ル捕虜ノ昔日暴掠ヲ遁レ僅ニ保持スル所ノ物貨モ悉ク皆奪掠セラレ妻孥親族分離シテ鎖繫ニ就キ痛苦ヲ極ム其殘賊此ノ如キ者多シ

同一政府ナリ而ルニ佛國此ノ暴政ヲ下ニ施ス之ヲ他邦ノ公正ヲ守リ恩惠ヲ施ス者ニ比較セバ其仁暴豈啻天壤ノミナランヤローヴオアーノ殘暴極ルト謂フベシ

政府ノ此令ヲ下ス偶然ニシテ斯ニ至ルニ非ス但衆人曾テ之ヲ顧ミズ争テ遁逃スル者五十萬人ニ下ラズ各其藏貨ヲ提携シ與國或ハ敵國ニ輸スルノミナラズ其從來精練スル所ノ製造法及ヒ作新スル所ノ民風併セ持ナテ人ニ贈ル是其貴重ナル貨幣ニ勝ルコト甚遠シ



コルベル曾テ大ニ貨財ヲ費シ佛國ニ入り傳授スル所ノ技術及ヒ專ヒ  
 ユーグノー黨ニ傳ハレル技藝今皆外邦ニ持テ去ケ佛國ニ在テハ錫及  
 鋼鐵ヲ製スル術獨ヒユグノー黨ニ傳フ其技今亦滅絶ニ歸セリ  
 ヒユグノーノ徒多クハ米州ニ道レ去リ分レテ各州ニ住セリ其カロ  
 リナ州ニ居ル者尤多シ此ノ州氣候大抵佛國ト其度チ同クス  
 其去テ各州ニ住スル者皆待遇セラル、コト甚厚シ其曾テ艱苦ヲ經タ  
 ル人ナルヲ以テ尤愛憐セラル此ノ時合衆國ハ英國人ノ居ル所人家稀  
 疎ニシテ生計窮乏ナリ而ルニ今斯ノ善民斯ノ善道ヲ持テ此ノ地ニ移  
 ル之ヲ舊時移住ノ人ヨリ觀レバ其厚福知ルヘシ  
 ナントノ制法ヲ廢棄スルハ佛國史中最大緊要ノ事タリ佛國是ニ於テ  
 其國力ヲ損スル甚シ爾來遂ニ其舊ニ復ズルヲ能ハズヒユグノー徒

ハ佛國中温良恭順ノ民タリ瑞典女王クリスチナ謂ヘルコトアリ今ノ  
 佛國ハ猶人ノ疾病ノ如シ其治ヲ施スヤ自重耐忍シテ輕舉スヘカラス  
 而ルヲ急治セント欲シテ反テ其四肢ヲ截斷セリ焉ソ全愈ヲ得ンヤト  
 其言詢ニ然リ

是時ヨリ佛國プロテスタント宗徒ノ事跡ヲ以テ之ヲ史書ニ載スル者  
 甚少シ而ルニ佛國政府プロテスタント宗教ノ旨趣ニ由テ爲ス所稱、  
 温和ニシテ歴觀スル所大ニ嘆スヘキ者アリ今其人ヲ慘戮スルノ皇天  
 ニ罪アリテ且頑愚ナルヲ覺悟スルニ至レリ然レモ佛國人始テ良心ノ  
 自由ヲ立テ得タルハ紀元一千七百八十九年ノ大變革後ニ在リ

第一百四十五篇

歐洲新ニ兵役ヲ起ス並ニリスウイツキ

地名ノ講

和

紀元一千六百八十七年オランダ公子首トシテ佛國ニ敵セントシ和蘭日耳曼西班牙ノ三國ト相結黨ス之ヲオーズブルノ約ト稱スサヴォア一侯モ亦之ニ與セリ

紀元一千六百八十八年英王第二世ゼームス王位ヲ黜ケラル因テオランダ公子ヲシテ代テ位ニ即カシム之ヲ史ニ稱シテ英國ノ變革ト爲スオランダ公子ノ英國王位ニ即クヤ益前盟ヲ堅結セント欲シカヲ此ニ尽セリ

佛國復師ヲ出シ進テ伯領ヲ攻撃ス其軍十萬ト稱セリ伯領ハ前役ヲ以テ大ニ佛軍ニ擊破セラル佛國ノ兵權今猶凶暴ルーヴオアーノ手ニ在リ乃意ヲ決シテ謂フ此ノ豊饒ノ地ヲ一變シテ荒野ト爲シ澳地利ノ兵ヲシテ此ノ伯領ニ留マルコト能ハザラメント

ルーヴオアー此ヲ以テ王ニ告ク王之ヲ聞テ大ニ驚恐シテ曰ク我軍前役ニ伯領ヲ擊破セル己ニ文明諸國ヲ激動スルニ足レリ今此役ヲ起スハ亦驕暴ナラスヤルーヴオアー固執シテ聽カス王モ亦拒辨スルコト能ハズ

佛軍ノ伯領ニ迫ル其土人兵燹ニ罹リ顛倒逃竄ス時ニ紀元一千六百八十九年第二月ナリ男女老少此ノ酷寒ニ當リ居ルニ家ナク流離シテ原野ニ在リ世傳ヘ云フ後役ノ暴舉前役ニ比スレバ幾万倍ナリ前役ノ暴ハ猶燭火ノ如キノミト此ノ時從軍ノ吏彼狂奴ニ驅使セラレ醜恥ヲ取ル亦最大ナリ

一黨人アリ今尙アイルランドニ存セリ第二世ゼームスヲシテ英王ノ位ニ復セシメントテ謀レリ而レテ佛王路易兵六千ヲ遣テ之ヲ援ケシ

ムゴワイス地名ニ戦ヒ大ニ敗走ス時ニ紀元一千六百九十年第七月十一日ナリ

是役英王第三世ウイリヤム傷ヲ病ム時ニ流言シテ英王戰没セリト云フ  
巴里府人之ヲ聞テ皆大ニ喜ビ鐘ヲ鳴ラシ王ウイリヤムノ偶像ヲ作リ之ヲ焚キ又王命ヲ待タズシテバヌナルノ大銃ヲ發セリバヌナルノ號砲ハ人民大慶事ニ非ザレハ發セザル所ナリ

佛王及マルレヤル、リクサンブールカチナーノ兵陸ヨリ進ミ敵ヲ伐テ大ニ勝テリ是時プリンス、エオセン及サウオアー侯ヴィクトル、マデュー等敵軍ニ將タリ佛將リクサンブール紀元一千六百九十五年第一月ニ死セリ即マルシヤル、ポッフレー、マルレヤル、ウイルレロワート云フ者之ニ代テ將タリ

其海上ニ戦フヤ英蘭二軍大ニ佛軍ノ水師提督ツールウイールヲ破ル時ニ紀元一千六百九十二年第五月十九日ナリ佛ノ兵艦皆走ル其ノ海岸ニ灣匿スル者亦遂ニ追兵ニ擊破セラル是時第二世ゼームス其近地ノ山上ニ在テ戰敗ノ狀ヲ望ミ竟ニ其嗣位ノ意ヲ絶セリ

爾後各黨竟ニ自相和スルニ至レリ日耳曼帝西班牙王其軍常ニ利アラザルヲ以テ俱ニ戰ヲ厭ヒ英國人民ハ其王ノ大洲歐洲ヲト隙ヲ搆ルニ因テ費耗巨大ナルヲ唱ヘ愁訟止マヌ

是時和蘭國貿易道絶エ又其沃饒ノ土地茂草トナル而シテ佛王路易亦感スル所アリ謂フ余一己ノ爲ニ心思ヲ勞シ大ニ我國力ヲ損セリト又別ニ中心企望スル所アリ要スルニ必講和セザルベカラズ其情勢已ニ斯ニ至レリ竟ニスイツキノ盟ヲ爲セリ時ニ一千六百九十七年第九

月ナリ稱シテリスイツキノ盟トスルモノハ約シテヘギニー和蘭南部ノ一都府近地ノ小村リズイツキニ於テスル故ナリ

王路易曾テ畧取スル所ノ地ヲ西班牙及ヒ日耳曼ニ取り又第三世ウイリヤムノ英王ノ位ニ即クテ聞ケリ是其盟約ニ因テ然ルナリ王路易ノ此ノ役ニ於ケル之ヲ概スルニ大ニ利ヲ成ス所アリ而ルニ其終ニ至テ相結約スル斯ノ如シ假令佛軍利アラザルモ其大國ニ王タル者ニシテ休戦スベキ者ニ非ズ

第一百四十六篇 佛王路易西班牙國ヲ分取ス

佛王路易ノ自忍テ斯ノ講和ヲ爲ス所以ノ意ハ即此ノ戦利ヨリ尙大ニ王ノ心ニ係ル者アルヲ以テナリ是時西班牙王將ニ死セントス此ノ王ハ日耳曼帝第五世ケヤーレスノ嫡子ニシテ曾テ父ニ襲テ立ントシ又

更ニ西班牙ニ王タル者ナリ全歐洲舉テ注目シテ謂フ西班牙王ノ大遺産ヲ承ケ得ル者ハ誰ソヤト

西班牙王子女無シ其最近親ヲ佛王第十四世路易及日耳曼帝レオポルトト爲ス而シテ王等皆西班牙王第三世フィリップノ孫タルヲ以テ今ノ西班牙王ト從兄弟タリ且共ニ第四世フィリップノ女ヲ娶レルヲ以テ西班牙王ニ於テハ姉妹夫タリ

日耳曼帝及佛王同ク西班牙王ノ重親タルニ因テ今共ニ其子ニシテ西班牙王位ヲ襲カシムルヲ得ヘシ佛王路易ノ母后及后モ亦皆其長姉タリ然ルニ后等自西班牙王位ニ即キ又其子孫ヲシテ之ヲ襲カシムルノ權ハ己ニ廢格シテ守ルコトヲ得ス從テ佛王路易及其父王亦皆自西班牙王位ヲ嗣クノ權ヲ失セリ

時ニ西班牙人專澳地利家ニ依頼シ舊怨ヲ佛國ニ結ヘリ又バウァリヤ  
 一公子アリ帝オポルトノ孫タリ而シテ又其母夫人ノ親故アリ第四世  
 フイリツプニ於テ正脈ノ族タリ

佛王路易人ト爲リ常操ナシ其盟約スル所モ其條款ニ於テ己カ爲ス所  
 ニ障礙アレバ復前約ヲ顧ミス故ニ謂フ今將ニ西班牙王位ヲ取ラント  
 ス但自之ヲ爲サバ即全歐洲我カ敵トナラン亦我カ利ニ非スト

佛王ノ意謂フ自取ル可キ者ハ擧テ之ヲ取ラン取ル能ハザル者ト雖誓  
 テ日爾曼帝ニ取ラシメスト即其意ヲ以テ英王ニ説テ曰ク西班牙王第  
 二世シヤル死ニ至ラハ將ニ西班牙王國ヲ分取セントスルノ議ニ與ミ  
 セヨ

英王ウイリヤム佛王路易ノ説ク所ヲ聽キ其意謂フ苟之ヲ許諾セス

バ佛王或ハ全ク西班牙國ヲ取り又他邦ニ及ブノ患アラント遂ニ之ヲ  
 許ス是ニ於テ西班牙國ヲ以テ之ヲ公子及ヒ奧地利家ノ公子第二世シ  
 ヤルニ分與セリ第二世シヤルハ日耳曼帝ノ子ナリ

第一百四十七篇 佛王路易ノ孫フイリツプドアンレウー西班牙  
 王位ニ即ク歐洲兵復起ル

既ニ其國ヲ分ツ西班牙王ノ憤慨スル蓋知ルベシ王乃遺命シテ曰ク我  
 全境ヲ以テバヴァーリヤ公子ニ與ヘント而ルニ公子適死セリ是ニ  
 於テ英王ウイリヤム及路易更ニ西班牙國ヲ分タシテ謀ル

然レモ西班牙王更ニ遺命スル所アリ二王ノ計畫スル所徒ニ烟滅ニ歸  
 セリ其ノ遺命ニ曰ク我全境ヲ以テアンジール侯フイリツプニ讓ラント  
 侯ハ即佛王路易ノ孫ニシテ佛太子ノ第二子ナリ

王路易或ハ其孫ヲシテ彼ノ大遺産ヲ受ケシメントシ或ハ曾テ謀議セシ約ニ依テ之ヲ分取シテ佛國ノ有トナサントシ二ノ者心ニ戰テ決スルコト能ハズ終ニフィリップニ與ヘリ是時和蘭英國モ亦皆西班牙國ヲ以テ他邦ニ附屬セシメザルノ議ヲ主トシテ第五世フィリップノ立ツニ雷同セリ

時ニ日耳曼帝心第五世フィリップノ立ツヲ欲セズ因テ之ヲ廢センヲ謀リ即師ヲ出シテ以太里ニ戰フ公子エオセン其軍ニ將タリ大ニ我軍ヲ破ル是時カキチー及ヴィルローウアハ我軍ニ將タリ英蘭二國反シテ日耳曼ニ合ス

英國昔日ノ戰ニ由テ費ス所ノ國用ヲ償ハント欲シ租稅ヲ重課スルヲ以テ大ニ人民ヲ苦シム人民因テ曰ク佛王路易ヲシテ紀元一千七百一

年間英王第二世セームスノ死スル時其子ヲ儲立スルコトナクハ今日英國ノ人民必怨テ英王ヲシテ佛國ト講和セシメン而シテ又王路易輒第三世ウイリヤムノ立ツヲ許サス

是ニ於テ英國ヲ舉テ王路易ノ不敬ヲ怒リ罵リ只戰鬥ヲ議スルニ從事スルノミ會英王第三世ウイリヤム死セリ然レモ其氣勢ヲ屈セス女王アン即位シテ猶王ウイリヤムノ志ヲ嗣カント欲ス

今ヤ敵軍悉ク合従スルヲ斯ノ如シ王路易忿怒抑制ス可カラズ乃勃然トシテ色ヲ作シテ曰ク蘭國民人曾テ我國力ノ強大ナルヲ見テ肅然トシテ畏縮セシニ今反テ將ニ我ニ抗敵セントス豈痛悔スル日無カランヤト

王路易ノ彼ヲ威侮スル斯ノ如シト雖衆敵ノ謀ル所窄クシテ拔クヘカ

ラス英國有名ノ將マルゴローフ侯ハ一黨全軍ノ將タリ尤佛國ニ抗セ  
ントス其軍ノ強盛ナルクレツシー及ビエジンクールニ大敗セン以來  
佛國ノ未曾ア見ザル所ノ勁敵ナリ

第一百四十八篇 佛軍大ニ敗潰ス英軍ジブラルタルヲ取ル

是時ヨリ紀元一千七百十一年ニ至ルマテ王路易ノ軍敗レ又其ノ災厄  
ニ遇フコト少ナカラズ之ヲ詳記スルモ亦讀者ニ益ナシ蓋其成果結局  
ヲ説カバ則事了セン

其以太里ニ戰フヤ日耳曼帝ノ將プリンス、エオゼン大ニ我軍ヲナウラ  
ンニ敗ル時ニ紀元一千七百六年第九月七日ナリ此ノ役ニ於テ竟ニ復  
アルボン家ノ氣勢ヲ以太里國中ニ振フコト能ハザラシム

マルゴローフ侯ニ隸スル諸軍又ブランハイムラミリエーウードナル

トマルブラケ其コ地名等ノ地ニ勝ツ是ニ於テ我軍從前得ル所ノ土地ハ

悉ク復奪還セワレ敵軍勢焰ノ熾盛ナル佛國ヲシテ長ク保全スルコト  
能ハザラシム

敵軍既ニ利アリ而ルニ英國ニ在テハ唯戰勝ノ名ヲ得テ他ノ得ル所ナ  
シ軍費ニ在テハ獨多ク英國ヨリ出ツ顯フニ一地ヲ攻取スルハ英國ノ  
最貴シトスル所ナレトモ其得ルノ利ト其ノ費ス所トヲ比較スレハ其  
西班牙ニ於テ人ヲ損シ貨ヲ耗スル所亦少シトセズ

ジブラルタルノ堡障ハ高ク聳テ絶壁ノ上ニ在リ僅ニ一條路アリ近ツ  
クベシ實ニ天險ノ地ナリ西班牙人常ニ謂フ苟風顛漢ニ非スハ之ヲ攻  
メント欲スル者アウンヤ老羸奴ヲシテ之ヲ守ラレメ一有司ヲ遣テ之  
ヲ監セシメバ足レリト

英國ノ將ソル、シヨール、ルルク、船隊ヲ以テ地中海ニ至レリ、大ニ爲サント欲スル所アレハナリ而シテ其志ヲ遂ルコト能ハス乃更ニシアラルタルヲ攻メントス其欲スル所盛ニシテ氣力少レク屈セス遂ニ其功ヲ成セリ時ニ英軍ノ水兵進テ絶壁嶮崖ニ攀援シテ登ルヲ神捷ナリ且其人皆勇悍ナルニ因テ誰カ能守禦スル者アラシヤ一撃ノ下ニ堅城使破レ守者皆降伏セリ

英國ノ此ノ報ヲ聞クヤ人民洵々トシテ曰クシブラルタルヲ攻取スルノ功勞之ヲ水師提督ニ謝スヘキカ謝スヘカラサルカト諍論シテ止マズ遂ニ定メテ謝スベキノ理無シトスマルゴローフ侯ニ在テハ功ノ賞スベキモノ無シト雖依然トシテ富貴ヲ保ツヲ得タリソル、シヨール、ルルクモ其功勳ヲ稱スル者無ク乃水師提督ノ職ヲ褫ハル

シブラルタルハ今存シテ英國ノ有ト成リ地中海ニ在リ船艦ヲ補修シ英國貿易地トス其緊要甚大ナリ

第一百四十九篇 佛王路易大不幸ヲ受クニトレクトノ講和

王路易資財己ニ盡キ志氣己ニ屈シ謀議スル所竟ニ成ラズ因テ使ヲ和蘭ニ遣ハシ和ヲ乞フ時ニ紀元一千七百九年ナリ王路易請フ所ハ此ノ役前ニ同盟諸國ノ各自取ラント欲スル所ノ言ヨリモ多キヲ與ヘントス其言聽テ可ナルベキナリ

然ルニマルゴローフ侯大ニ其權力ヲ持シ且其將帥タルノ俸資賞典等ヲ要スルヲ以テ講和ノ際苛酷ノ條件ヲ制シ其說ヲ主張シ同盟國ヲシテ能服スヘカラザラシム佛王路易ハ此ノ要盟ヲ蔑視シテ受ケス此ノ時佛國人民久シク苛政ニ抑制セラルト雖尙歎憤ノ心ヲ生セリ



紀元一千七百年佛王路易復和ヲ請フ其約條前言ニ於テ更ニ二三件  
 ナ増加ス其一項ニ曰ク奧地利皇子シヤルヲ立テ西班牙王タラシメン  
 ト又曰ク我孫フィリップヲ愛護スルコトアラス若フィリップト交戦  
 スル者アラハ金若干ヲ出シ其ノ軍費ニ充テ、同盟諸國ニ與セン  
 時ニ同盟諸國剛愎ニレテ此ノ條約ニ服セズ更ニ佛王ニ請テ曰ク西班  
 牙王フィリップヲ廢黜スルト否ラサルトハ唯王ノ爲ス所他人ヲ累ハサ  
 ザレト王路易其凌辱セラル、ヲ知テ奮テ曰ク苟己ムコトヲ得ズレテ干  
 戈ヲ動スコトアラハ我子孫ト戦ハンヨリハ寧歎國ト闘ハンノミト  
 是時ジョセフト云フ者其父レオポルトニ嗣テ日耳曼帝位ニ即キ紀元  
 一千七百十二年第四月ヲ以テ没セリ其弟奧地利皇子シヤル其位ヲ襲  
 ケリ皇子シヤルハフィリップト共ニ西班牙王位ヲ争フ人ナリ今ニシ

テ始テ佛國ノ大利トス

是時歐洲各國皆謂フブルボン家ノ二王子ヲシテ一ハ佛王タラシメ一  
 ハ西班牙王タラシムルモ猶奧地利家ノ一皇子ヲシテ日耳曼西班牙二  
 國ヲ保有セシムルニ勝レリト  
 英國ノ人民是ニ至テ其持論ヲ變シ極テ其和平ヲランコトヲ望ミ大小官  
 吏亦大ニ黜除スル所アリ新宰相ノ首ニ爲ス所ハマルボローフ侯ヲ召  
 シ還ヘス等はナリ

オルモンド侯マルボローフ侯ニ代テ將タリオルモンド侯ハ兵事ニ慣  
 レザル人ナリ英軍其同盟國ト離絶シ紀元一千七百十一年第七月ヲ以  
 テ退テ本國ニ還ル是時フランスエオゼン孤立シグドティンニ戦セ大  
 ニ佛將マルシヤルヴィルヴァーニ擊破セラル

此ノ戰勝ノ爲ニ佛國人民大ニ奮發欣躍スルヲ以テ佛國ニ於テ大有功ノ役ト爲セリ夫戰フニ當リ初時軍利アレバ其民心ノ向背ヲ定メ其欲スルヲ得ル者アリ佛軍ノ此ノ捷ヲ得ル時前ニ出テユーートレヒートニ在ル使節ノ聲氣ヲ張ルニ足レリ是ニ於テユーートレヒートノ地ニテ其和議紀元一千七百十三年ヲ以テ遂ニ講成ス歐洲各國皆同心シテ押印セリ但日耳曼帝國獨此ノ議ニ與カラス乃和約ノ條件ニ依テファイリツプヲ西班牙王位ニ在ラシムルヲ許シ其佛國ニ王タルヲ禁セリ佛王路易ハ女王アンノ立テ英王タルヲ許セリ

第一百五十篇 佛王第十四世路易一家ノ不幸ニ逢フ並ニ王路易殞ス

王路易末路斯ノ如シ此ノ時國用耗竭レ敵國連合ノ勢猖獗ニシテ王ノ

請盟ヲ受ケス却テ軍敗ヲ取レリ佛國ハ卑屈謙讓シテ却テ軍利アリ然レモ王路易ノ爲ス所貪戾ナルニ因テ大ニ患テ國家ニ遺セリ是時其ノ年己ニ七十六終身正道ヲ誤リ力行スル所率々齟齬スルヲ悔恨セシムレ又一家大不幸ニ罹リ王ヲシテ悲哀セシムルコトアリ紀元一千七百十二年第四月王ノ太子死ス太子ハ王路易ノ子女中僅ニ生存セシ一子ナリ太子三子アリブルゴーン侯西班牙王ファイリツプ及ベルー侯トス紀元一千七百十一年第二月ブルゴーン侯死ス是ニ於テ人民賢明ノ君主ヲ奉シ從前損亡セシ所ヲ恢復セントスル意ヲ遂ルコトヲ得ザルニ至ル侯ノ死スル其夫人ト合葬セリ夫人ノ死ハ侯ニ先タツツ六日ナリ後未三週日ナラザルニ復此ノ墳塋ヲ發ケリ是侯ノ長子又死スルヲ以テ之ヲ合葬セント欲シテナリ紀元一千七百十四年第五月ヲ以テ

一侯死セリ西班牙王フィリップ己ニ佛國王位ニ即クノ權ナキヲ以テ  
今ブルボン統人ノ望ヲ屈スル所僅ニブルゴーン侯ノ一子存スルノミ  
而ルニ此ノ子尙幼稚ニシテ弱質ナリ

是ヨリ以後佛國朝廷ノ暗昧ニ屬スルコト久レ其ノ前ニ盛ナルニ當テ  
歐洲各國俱ニ憤怨セザル者無シ佛王路易其身ニ貴價ナル學ヲ得ント  
欲シ大ニ勉力スレトモ唯心ノ幽鬱思憂スルニ勝ヘス終ニ身ヲ潛メテ  
偏ヘニ上帝ヲ禮拜スルニ至レリ

紀元一千七百十五年第八月王在世ノ日久シカラザルヲ知ル王不治ノ  
病ニ罹リ床上ニ在ルヨリ恭謙ノ心生シ大ニ誠意ヲ見ハス所アリ自宗  
教ヲ信スルノ心薄キヲ悟リシ其罪ヲ上帝ニ自訴ス又幼冲ノ嗣子ヲ抱  
キ堂上侍臣ノ面前ニ在テ大聲シテ之ニ遺命セリ

曰ク汝今將ニ王ヲラントス余最深ク汝ニ遺誡スル所以ハ上帝ニ報ス  
ル義務ナリ常ニ之ヲ記念シテ忘ルヽコト勿レ汝ノ自有スル所ハ即是  
上帝ノ賜ヲ所ナリ衆庶ト相和親シテ其ノ生ヲ害スルコト勿レ余ガ如  
キハ戰鬪ヲ好ム者ト謂フヘシ

汝余ニ效フテ戰鬪ヲ好ムコト勿レ余ガ奢侈ヲ極メ國用ヲ費スニ傲ハ  
ザレ能ク諫言ヲ容レ其最善ナル者ヲ擇ヘ勉テ稅租ヲ薄クシ民力ヲ息  
セヨ余ノ爲セル所百事不幸ニ屬セリ汝之ヲ誠メ其爲ス所ヲシテ不幸  
ヲ被ラザラシメヨ

王路易殂ス壽七十七實ニ紀元一千七百十五年第九月一日ナリ路易ノ  
幼ナルヤ母后之ニ語テ曰ク愛兒汝謂汝ノ祖父ニ傲ヘ汝ノ父ヲ學フコ  
ト勿レ王問テ曰ク何ヲ以テ然ルヤ母后曰汝ノ祖父第四世顯理ノ死ス

ル人民慟哭シテ相吊セリ先考第十三世路易ノ死スルヤ人民哭スル者  
ナレ第十三世路易ノ死セル佛國人民猶之カ爲ニ縞素シテ自敬戒セリ  
第十四世路易ノ死ニ及テハ人民誠ニ之ヲ歡悅セリ

王路易ノ大ニ操行ヲ失フハ是其后マダムドモーントノンノ勸誘シテ  
其爲ス所ニ倣ハシムルニ因テ然リ先ニ兵役ニ會シ后モーントノン寶  
玉及ヒ騎ヲ售テ王ノ爲ニ失フ所ノ人ニ償還シ其不足ヲ補フ

后モーントノン王ノ給與セントスル物ヲ受ケ肯セス其意謂フ王ノ妾  
ニ與フル所税租若クハ賤工ノ雇賃錢税ニ非ザル者ナレト王ノ死ニ及  
テ后一モ私有スル所ノ物ナレ

攝政オルレヤン侯養老資ヲ以テモーントノンニ奉給セントシ之ニ謂  
テ曰ク后ノ廉潔ナルヲ以テ之ヲ獻セザルベカラスト時ニモーントノ

シ其少費ヲ受ケ退隱シテサンシル地名ニ入ル后曾テ小女子ヲ教育セン

ト欲シテ設立スル所ノ學校アリ是時大ニ衰廢ニ及ヘリ故ニ其兒女ノ  
父母タル者纔ニ身ヲ安スルヲ得ルハ兒女ノ此ノ覺ニ入テ勤學スルコ  
トヲ得ザルヲ以テナリ后モーントノンサンシルニ隱居シテ紀元一千  
七百十九年ヲ以テ此ニ終レリ壽八十三

第一百五十一篇 第十四世路易ノ天性ヨリ行事ニ及フ貴族ノ志

操

マザラン曾テ王路易ヲ評シテ曰ク王路易四個ノ王者ト一ノ方正人ト  
ノ質ヲ兼有セリ蓋天ノ此ノ人ヲ生スル其器ノ大ナランヲ欲シテナリ  
而レ凡人欲私知ノ長スル所遂ニ天ノ奇工ヲ損亡スルニ至ル王ノ身材  
頗美ナルモ當時ノ衣服ヲ以テ之ヲ汚セリ其動止甚善ナルモ其位ニ在

リテ高尚ノ論ヲ持スルヲ以テ終ニ僞倣ナラシメタリ  
 王天資聰明ナルモ學問セズ意志誠正ナルモ諧諛ノ外誘及ヒ宗教師ゼ  
 レニウイトノ勸説スル所不善ナルヲ以テ竟ニ其長能ヲ失フニ至レリ  
 王ノ動止方正ナルハ世ノ希ナル所ナリ其事ヲ爲スニ皆時限ヲ定ム恒  
 例午前第八時ヲ以テ其從者ヲ呼ビ起シ乳媪内外科二侍醫ヲ將シ王ノ  
 室ニ入り王ノ起居如何ヲ診視セシム此ノ乳媪ハ長壽ヲ保アル人ナリ  
 診視畢リテ其内老及ヒ侍臣等來テ王ノ室ニ入り服御ヲ裝整ス佛國史  
 家ノ言ニ王ノ衣服ヲ正ス從容不迫須臾ニシテ終フト王ノ未臥床ヲ下  
 ラザル必先侍者ヲシテ假鬘ヲ竿頭ニ懸ケテ進メシメ自ラ把テ之ヲ戴  
 ク其意謂フ假鬘ヲ着ケズ裸頭ヲ人ニ見スハ大ニ威儀ヲ損スルモノナ  
 リト

第一世フランソワ一不虞ノ害ニ罹ルニ因テ短假鬘ノ佛國ニ行ハル、  
 所以ハ上條已ニ説過セリ而シテ第十四世路易幼ヨリ美髮長ク背ニ垂  
 レタリ因テ僕從皆倣テ長垂假鬘ヲ着タリ王長シ亦假鬘ヲ用シル其制  
 大ニシテ且捲縮セリ

當時ノ史至テ精密ナルニ因テ余等聞ク所アリ曰ク王粧鏡臺ヲ用シス  
 シテ侍者ニ鏡子ヲ捧ケレム王裝束シ終レハ即起テ百般ノ事務ヲ執リ  
 午食時ニ及フ

王ノ食スル時人ノ來リ觀ルヲ許セリ觀ル者以テ榮トス是ヲ以テ衆群  
 集シ目ヲ刮テ之ヲ觀ル王爲ニ其常度ヲ廢スルコト無シ又傳フ王四盤  
 ノ湯汁野雞肉一蒸腿二片ヲ盡シ又羊肉和物麵木菓等ヲ併セ食ヒ又糖  
 菓ヲモ喫者セリ

午夜ニ至テ王室ニ入り衣服ヲ脱スルコト猶始著クル時ノ如ク其假鬘  
ヲ脱スレハ侍臣竿ヲ以テ之ヲ受テ而シテ後寢ニ就ク

又常ニ好テ衆多ノ侍臣ヲ從フ其從僕タル者屈伏シテ命ヲ聽ク王ノ釁  
蹙スルヲ見テハ其大體ヲ蒙ルヲ畏レ又朝ニ在テ黜ケラルレハ死刑ニ  
處セラレントスルカ如ク皆戰々股慄レテ已マス此等ノ小人常ニ大ニ  
志願スル所アリ其事ハ甚小ナリ今且之ヲ記セハ其狀笑フニ足ラ  
ン此等ノ人王ノ服裝ヲ更フルニ當テ燭ヲ執ルノ役ニ服スレハ人羨ミ嫉  
ム故ニ燭ヲ執ルノ人自大榮ヲ得タリトレ世ノ美稱ヲ受クヘキ者トセ  
リ

此ノ暴戾ノ朝苛酷ノ政ニシテ遂ニ第十一世路易ノ鐵轡ヲ作り人ヲ檻  
セントスルノ遺志ヲ續キ其功ヲ大成スルヲ得タリ是ニ於テ著名ナル

佛國貴族モ皆其自由不羈ノ權力ト氣節トヲ失ヘリ夫ノ王ノ一擧スル  
ヲ見テ股票スルカ如キ小人ニ至テハゲソラツーン及ヒバヤールノ氣  
節堂々タル人アルヲ未曾テ知ラサルナルヘシ

第一百五十二篇 オルレヤン侯佛國ニ攝政ト爲ルミツシスレヒ

一ノ創立

第十五世路易曾祖父ヲ喪スルニ當リ年甫テ五歳ナリオルレヤン侯フ  
イリツブヲ以テ攝政トス侯ハ前王第十四世路易ノ甥タリ王ニ嗣テ佛  
王タルヘキ人ナリ

オルレヤン侯幼ニシテ穎敏宏度ナリ極メテ奇聞ヲ好ム技術藝能一ト  
レヲ學テ能クセサル者無シ其ノ師傅サンローランハ正實ナル有徳ノ  
君子ナリ不幸ニシテ早ク没ス更ニアベデユボアト云フ者ヲ以テ師

傳トステニゴア一侯ヲ教ヘ大ニ其ノ恭謙ナル美質ヲ變シ不善ニ誘進  
セシム

侯ノ攝政ト爲リ始メテ事ヲ執ル大ニ人民ノ歡心ヲ得タリ是ヲ以テ政  
府侯ノ爲ス所アルヲ望メリ而ルニ侯乃王ニ抗抵シ王ノ旨ヲ奪フ所ノ  
巴力門ノ權力ヲ以テ復之ニ還セリ

前王ノ世ニ當リ國難ノ隙ニ乘シ官物ヲ竊倫シテ其ノ富ヲ致ス者等ハ  
侯悉ク之ヲ籍沒シテ官ニ入ル又昔年宗教ノ争ニ乘シ大ニ殘虐ヲ行フ  
者ニ與スル徒ハ議院ヨリ之ヲ擯斥セリ

侯此等ノ善政ヲ行フコト久シカラス漸ク愉惰遊蕩ニ流レ自其任ヲ專  
ニセス之ヲ師傅テユゴア一ニ委スルニ至ルデユゴア一政ヲ爲ス正理  
地ヲ掃ヒ變更スル所一善績ナシ風俗大ニ敗ル

其始敬神ノ俗ナルモ今ヤ一變シテ不敬神トナリ始禮讓ノ風アルモ今  
ヤ倨傲不遜トナル夫俗ヲ易ヘ風ヲ移ス一ニ皆其執政ノ性情ト標準ト  
ニ因テ然ル所ナルニ侯ノ輕舉妄行百事理マラス遂ニ放蕩ニ歸セリ此  
等ノ弊風佛國輕佻ノ民ヲシテ漸習染セシム

其風習タル放縱ヲ以テ正トシ守任責務ヲ以テ邪トシ正理ニ依ルヲ偏  
頗トシ篤厚ヲ行フヲ虛飾トスオルレヤン侯政ヲ攝スルニ及テ佛國人  
民頓ニ舊來ノ禮節ヲ亡滅セリ

攝政ノ爲ス所ニシテ最世ニ著明ナル者ヲミツスシツビ一國立銀ノ創  
行ノ名

立トス其始蘇格蘭人ヒンロー一之ヲ建議ス第十四世路易奢侈ニシテ國  
用空竭ス且其兵争日久シク又廷中ノ虛飾大ナルニ因テ費ス所亦大ナ  
リ國債山積スルニ至ル其最費用ノ大ナル者ハツエルセーヨニ宮殿ヲ

建築シ華奢ヲ盡スモノトス

當時ニ及テ尙此ノ國債アルヲ以テ攝政大ニ病苦セリ財主償還ヲ促スト雖國帑支フルコト能ハズ因テ人民怨訴急迫ナリ時ニロート云フ者一策ヲ設ケ攝政ニ白レテ曰ク此ノ策公ノ病苦ヲ醫シ大ニ國家ノ殷富ヲ興復スヘキ者ナリト

其策ハ即一ノ大ナル國立銀行ヲ創起セントス此ノ國立銀行ヲ起スハ楮幣ヲ製シ國債ヲ償還スルヲ謀ルカ爲ナリ終ニ其利ヲ得テ大ニ貿易ヲ爲シ米州ミツスレツビー河邊ニ至ラントスルニ及ヘリ當時ミツスレツビー河ヲ謂フモノ皆以テ金銀寶石充滿セル處ト爲セリ

是ニ於テ日ニ金貨ノ價ヲ減シ終ニ楮幣ヨリ低下ナラシメント欲シ百方奇策ヲ設ク既ニシテ楮幣現價ヨリ低下セサルヲ以テ金銀ヲ蓄積ス

ル者皆爭テ此ヲ楮幣ニ交換センヲ欲ス國立銀行ノ有司之カ爲ニ休息ノ暇アラザルニ至レリ

僻遠ノ州郡ニ居ル者巴里府民ノ此ノ如キヲ見テ亦來テ府下ニ群集セリ人民ノ巴里府ニ雲集スルノ多キ未曾テ見ザル所ナリ皆金銀ヲ帶ヒ來テ銀行ノ門戸ニ輻湊シ或ハ其ノ來ルノ運キヲ悔ユルアリ有司皆其ノ請フ所ヲ允許レ且之ヲ慰撫シテ曰ク公等嗟歎スルコト勿レ其帶ヒ來ル所ノ金貨ハ今悉皆之ヲ交換レ得セシメント來ル者意始テ安レ然シテ後國立銀行竟ニ廢絶スルニ歸シ楮幣ノ眞價無キヲ證明スルニ至ル是ニ於テ有スル所金銀翻手ノ間ニ亡失シ唯無價ノ楮幣ヲ存スルノミ佛國殆ト滅亡ニ至ラントス始ハ人民急ニ殷富ヲ致サント欲シ國立銀行ノ交鈔ヲ購求レ又幾ナクシテ之ガ爲ニ其田園ヲ賣ルニ至レリ



第一百五十三篇

疫癘マルセーエ港ニ流行ス並ニ一督教師大ニ德惠ヲ施ク

侯ノ攝政スルニ當リ又一事ノ發スルアリ今之ヲ記ス其事昔日爲ス所ニ同シカラス是ヲ以テ人倫正明ノ性ヲ見ルニ足レリ即疫癘大ニマルセーエ港ニ流行スルカ如キ是ナリ

紀元一千七百二十年第五月ヲ以テ一艦セーリア

亞細亞西部ノ一州

ヨリ來リテ

マルセーエ港ニ達ス時ニ船捎タル者其艦中汚穢腐敗ノ物アラズトシ其查照スルコトヲ記セス輒其輸入ノ諸物ヲ舉テ岸ニ上ク乃疫癘忽港市ニ流傳シ人々患染スル者多シ此ニ由テ死亡スル者幾許人ナルコトヲ知ラス市民大ニ恐レ此ノ港ヲ逃レ去ラントス官其疫氣ノ全國ニ染及センコトヲ懼レ哨兵ヲ遣シテ港市ノ四方ヲ守ラシメ以テ逃去スル

者ヲ看護ス然レトモ豪富智力アル者ハ其始テ發スル時既ニ早ク避道シ去レリ

今此地ニ在留スル者只日ニ恐憂ニ堪ヘス顔色神氣頓ニ耗セリ此ノ時剛強ナル者四人アリ銳意勉勵百方カヲ盡シ家人ヲシテ保安ナラシメシコトヲ謀レリ

其一人ナマルセーエ港ノ督教師ベルザンストス此ノ人晨夕勞思シテ垂死ノ病者ヲ看護シ諸人ノ心ヲ安慰シ又同志ノ人數人ヲ勉勵セシメテ最患者ノ醫院中ニ在ル者ニ留心シテ保護ヲ加ヘリ

督教師ベルザンズ耶蘇教徒ノ義務ヲ修ム又シスター、ド、ジャリー、テ即尼姑徒中ノ人ノ救護ヲ得此ノ尼姑徒ニ菴室ニ日ヲ閉過セズ病客ヲ看護スルニ奔走セリ又三人ノ義氣アル者アリ其港市ノ法官エスター

ルムスナエ及ヒジユヅアリ―エラオローズ是ナリ此等ノ人皆疫氣ヲ防禦驅除セント欲シ各其事ニ心思ヲ勞シ先街市ノ死尸ヲ收ムルニ着手ス此ノ臭穢存在スレハ大氣ヲシテ清新ナラシムルノ期無キヲ以テナリ時ニ醫院ニ入ラシムコトヲ請フ者日ニ衆多ニシテ容ル處無キニ至レリ

是ヲ以テ巨大ノ醫院ヲ市外ニ建立レ將ニ其功ヲ竣ヘントスルニ當リ颶風方ニ北方ヨリ起リ屋宇盡ク毀頽ス是ニ於テ人心沮喪シ自謂フ此天譴ノ然ラシムル所ナラシト外邦人ハ大ニ傳患ヲ恐レ敢テ此ノ港ニ入ル者無シ故ヲ以テ土人ノ糧食殆支フベカラス漸次ニ飢餓スルニ至レリ

此ノ大風ハ此ノ疫癘飢餓ノ民ヲ并セ殲サントシテ然ル者ノ如シ此ノ

生ノ災禍言フベカラス然ルニ此ノ中無量ノ德惠アリ颶風ノ來ル大ニ大氣ヲシテ新清ナラシメ之カ爲ニ汚惡ノ疫氣ヲ散滅セリ又羅馬法王糧米若干ヲ輸送シ病者ニ賑恤スルニ因テ飢餓ノ艱苦モ亦免ルコトヲ得タリ

是ニ於テ民人漸安堵シ其氣體常ニ復スルヲ得タリ然レトモ全ク疫癘ノ病根ヲ斷絶シ去ルハ紀元一千七百二十一年第六月ノ末ニ在リ此ノ善徳ノ督教師ハ斯ノ危險ノ除クニ於テ其災ヲ免レ能ク其勞苦ニ堪ヘ竟ニ死セサルヲ得人民ノ督教師ヲ愛慕スル父母ノ如ク督教師モ亦人民ヲ視ル幼兒ノ如シ今此ノ督教師ニ與フルニ更ニ大食邑ヲ以テストモ蓋此ノマルセイエ港ヲ去ルノ意無カル可シ其歲ヲ積ムコト八十四歲紀元一千七百五十五年ヲ以テ遂ニ此ノ地ニ寂セリ

第一百五十四篇

第十五世路易ノ品行

紀元一千七百二十二年ヲ以テ攝政オルレヤン侯任滿テリ時ニ王第十  
五世路易年甫メテ十三己ニ幼シト爲サス而ルニ王ノ賦性偏狹文學ヲ  
好マス抑幼童ノ自主タラントスルヲ知リ學ヲ勤ムル意無キ者ヲシテ  
策勵勤勉セシメントスルハ大難事ナラスヤ

王ノ女傳アリ王ヲシテ勤學セシメント欲シ爲ニ一策ヲ設ク女傳ノ意  
フ王ニ鞭撻ヲ加フルハ叛逆罪ト異ナラスト乃貧人ノ子ニシテ其齡王  
ト同シキ者ヲ求メ得テ王ノ近侍タラシム王惰慢邪僻其諫ヲ容レス或  
ハ日課ヲ怠ルコト有レハ則此ノ兒ヲシテ王ニ代テ鞭撻ヲ受ケシム  
女ハ其心力ヲ竭ス者ト謂フヘシ然レトモ王ノ賦性ヲ變シテ其知覺ヲ

穎敏ナラシムルコト能ハス増其性ヲ長スルニ至レリ王輕率ニシテ喜  
テ瑣末ノ鄙事ヲ聽ク又能ク虛誕ニシテ妄語セリ國家ノ安危内外ノ大  
事ハ恬然トシテ嘗テ聞カザル者ノ如シ其賤民中ニ生スルノ瑣事ニ至  
テハ則能ク審察セリ

此ノ王賤人ヲ友トスルヲ愛シ俗言俚語ヲ學フコト反覆鄭重シテ之ヲ  
習熟セントス然レトモ容姿高邁ニシテ動止威嚴アリ大ニ王者ノ外貌  
ヲ存セリ

王ノ顔色甚醜麗ニシテ眼青多シ世ノ稀ナル所ナリ又彼ノ女傳ニ代リ  
テ王ノ師傅タル者アレドモ亦其功ヲ成スコト能ハス時ニカルザイナ  
ールド、フワウー僧官謂テ自師傅ノ任ニ當リ王ヲ訓導セントシテ力ヲ  
竭セリ

フワウリーノ勞全ク益無シトセス斯ノ人ノ世ニ存セルニ當テ王モ亦其規度中ニ在リ斯人没スルニ及テ復亦竟ニ放縱ナリ陷溺シテ回スヘカラズ斯ノ惡性ノ兒童年僅ニ十三自其身ヲ守ルコト能ハス而ルテ況ヤ一王國ヲ治ムルニ於テヤ此ノ時オルレヤン侯更ニ國相ノ命ヲ蒙ムリ其政ヲ攝セリ

爾時侯既往ノ懶性ヲ去リ更ニ人民ヲ安全幸福ニ導カント欲シ其身ヲ國政ニ委シ大ニ責任ヲ盡セリ但其行ヲ改メ善ニ歸スルノ日己ニ晚ク且曠昔爲ス所ノ放蕩淫逸遂ニ其身ヲ傷害シ爲ニ中風ヲ患ヒ竟ニ紀元一千七百二十三年第十二月二日ヲ以テ死セリ

### 第一百五十五篇

カルゼイナールフワウリー及貴族ノコト

有名ノコンダイ侯ノ孫ブルボン侯襲テ國相ト爲ル其政ヲ攝スルニ當テ世ノ注目スルニ足ル者アリ佛王ノマリーエチ聘スル是ナリマリーエハ波蘭王スタニヅラッスノ女ナリ王スタニヅラッスハ嘗テ逐レテ其國ヲ去リ佛國ニ逃ケ來レル者ナリ

ブルボン侯才能其任ニ當ラザルヲ以ニ遽ニ其官職ヲ褫ハル而シテカルゼイナールフワウリート云フ者佛國人民ノ屬望王ノ勸請ニ應シテ老衰ヲ以テ代リテ國相ト爲ル時ニ年七十三

王其民ニ對スルコト温厚ナリ其國ヲ舊時ノ隆盛ニ復セシメント欲シ務テ世ノ和平ヲ希望セリ國相フワウリー克ク此ノ意ヲ領シテ敢テ大變革ヲ爲サス專國家ヲ復起スルニ從事セリ而ルニフワウリーノ爲ス所乃酷薄ニシテ眞個ノ經濟法ヲ得タルニ非ス徒ニ目前ノ費用ヲ省減

セント欲シ官府ノ船艦其補修スベキ者アルモ捨テ修メズ海軍船隊毀廢スルニ至レリ

フラウリ―其職ニ在テ和平ノ政ヲ施シ舊觀ニ復スルヲ希フモ亦久シキヲ得ヘカラズ何ニ由テカ其然ルヲ知ル試ニ佛國貴族當時ノ情形ヲ看ヨ是時佛國中七千有餘家ノ民種各貿易ヲ爲シ至要ノ業ヲ營ミ孳々トシテ暇アラズ凡此等ノ要務ヲ兼担トスル種類ヲ皆貴族ト爲ス而シテ古來ヨリ貴族ト稱スル者ハ僅ニ二百家此ノ族ハ皆自特許ノ世襲ヲ保持スルコトヲ務ム紀元一千四百年以降ニ及テ貴族籍ニ入ル者ノ如キハ敢テ王ノ車駕ニ入ルヲ許サズ

此等ノ遊民其二百家ニ外ナル者多クハ免租ノ特許ヲ得ント欲シ各務メテ其爵位ヲ購求レ亦貴族ニ列スル特許アリトス其爵ヲ購ヒ租稅ヲ

免セラルハ者他人ト分別シテ自高貴ト稱スルニ此等ノ人多クハ教學ナク野鄙ノ俗習ヲ爲セリ

是ニ於テ貴族人ハ廟堂ニ有司タルコトヲ得ズ其名譽ヲ揚ケ富貴ヲ得ベキハ僅ニ軍事ニ在ルノミ故ニ國相フラウリ―專兵事ヲ未萌ニ防カシコトヲ務ムト雖貴族人大ニ之ヲ欲スルヲ以テ竟ニ一戰役ヲ起スニ至レリ其他其欲スル所ハスタニスラッスナシテ波蘭王位ニ復祚セシメント欲スル是ナリ

### 第一百五十六篇

マリヤ、セレイチ及洪葛利人ノ事

茲ニ波蘭王ヲ立ツルノ役起ルコト二年而シテスタニスラッス肯テ王位ヲ再踐セズ侯ノ封邑ローレーンバルヲ得テ終ニ戰ヲ休ム又相約シ

テ曰クスタニスワツス死スル日此ノ二邑ヲ以テ后マリーノ粧奩資ト爲シ佛國ノ版圖ニ屬セシメント

后マリー曾テ其國民ニ逐ハレ僅ニ佛國ニ逃レ來リ復一資助ナキノ女タリト雖今二邑ノ粧奩資ヲ得ントスルヲ以テ有價ノ嫡女タルヲ得タリ且其父スタニスワツスノ如キモ先キニ道レテ佛國ニ來リ僅ニ其難ヲ避クルノ處ヲ得ルノミ彼ノ二邑ヲ齋持スルハ曾テブルタンヤキイエーンヲ齋シ至レルヨリ以來又佛后ニ稀ナル所ナリ

是時日耳曼帝第六世レヤル其位ヲ女マリーセレーザニ禪ラント欲ス佛王ノ力ヲ借ラントシ佛王ニ謀ル佛王之ヲ諾セリ

紀元一千七百四十年日耳曼帝歿セリ其大遺産ヲ襲受セント欲スル者衆レ普魯西王第三世フレデリックハセリイシヤ州ヲ畧ス是ノ王世ニ

武勇ノ名アリ時ニバヴァリヤ國エレクトル即君主マリーセレイザニ叛シテ帝王ヲ奪ハント欲レ援兵ヲ佛國ニ請フ而シテカルゲイナールフラウリー佛國ノ日耳曼先帝ト舊約アルヲ以テ之ヲ破ランコトヲ恐レ大ニ其心力ヲ勞セリ

フラウリー心力ヲ盡スト雖得ズ遂ニ大舉シテ進テ澳大利ニ入ル而シテバヴァリヤノ王己ニ日耳曼帝位ニ即クマリーセレイザ逃レテ洪葛利ニ入ル時ニ洪葛利國曾テ其貴族自由ノ權利ヲ抑制スト雖封建制度尙自若タリ

當時其貴族ト稱スル者皆城中ニ家居シ其家臣相圍テ之ニ住セリ而シテ猶皆巴圖魯職ノ信誠ナル氣象ヲ存セリマリーセレイザノ道レテ此ノ國ニ入ル其艱難ノ情ヲ陳シ大ニ貴族人ノ愛憐ヲ蒙レリ

マリー、セレイザ乃貴族人ヲ招集シ自麻縞ヲ服シ自其幼兒ヲ抱キ利口  
 ナ以テ貴族ニ陳告スル所アリ其語温雅羅甸ヲ用キルヲ以テ貴族人大  
 ニ感歎ス當時羅甸語尙專洪葛利ニ行ハルヲ以テナリ  
 且其幼兒ヲ以テ貴族人ニ接見セシム貴族人皆務テ此ノ可憐兒ヲ愛護  
 シ各其劍ヲ按シ號呼シテ余輩我王マリー、セレイザノ爲ニ死セント曰  
 フニ至レリ

貴族ノマリー、セレイザヲ稱スルニ洪葛利女王ト曰ハズシテ單ニ王ト  
 稱ス世或ハ之ヲ恠ム者アラン然レトモ此ノ貴族ノ君主ヲ稱スルニ女  
 王ト雖尙之ヲ王ト曰フハ是其封建世ノ習癖ナルヘシ

第一百五十七篇

德ヲ播テ報ヲ得ルエキスラシヤベルノ講和并ニ佛王第十五

世路易ピュンエーシメート綽號セラル

既ニシテ勢運一變シ即日耳曼ノ軍隊クロツツ及バントールス又洪葛  
 利ノ募兵ノ勇銳ナル者一群其君主ヲ援ケント欲シテ來集セリ是ヲ以  
 テ澳地利人ノ軍氣其舊ニ復シ佛國ノ兵退去セントスルノ勢アリ  
 時ニ英王第二世シヨルジ親其軍ニ將トシテ日耳曼女帝ヲ援ケ大ニ佛  
 兵ヲデッナゲルニ擊破スカルダイナールフラウリー紀元一千七百  
 四十三年第一月二十九日ヲ以テ死ス世之ヲ其己ムヲ得ズシテ軍ヲ出  
 シ敗テ取ルヲ痛恨シ狂疾ヲ發シテ死セリト謂フ

フワウリー一奇談アリ曰クフワウリー兵間ニ在テ猶其教化ノ心ヲ廢  
 セズ督教師ウイエルソント曰フ者マン島愛龍海中一島ニ居リ克ク私欲ヲ抑  
 制シ之ニ高官爵ヲ授ケントスルモ肯テ受ケズ只管一島中野蠻ノ民ヲ

化育スルヲ以テ己カ任トセリ

フラウリー此ノ善良人ヲ敬スルヲ示サント欲シ英國ト戰フニ當テ其軍ニ令シテ曰ク彼ノマン島ハ英國版圖ニ屬スト離秋毫モ犯スコト勿レ

紀元一千七百四十四年ニ及テ王路易親軍ヲ督シ進テ諸地ヲ侵シ之ヲ來降セシム適ノッツ府ニ在テ暴ニ疾アリ佛民舉テ驚懼ス己ニシテ寢ニ佛民大ニ喜デ之ヲ祝セリ國人ノ其王ヲ愛敬奉戴スル何ソ斯ノ如ク厚キヤ

佛民此ノ日ヲ以テ王路易ヲ號シテピエンエーシノイ

民ニ愛セラルト、最厚キ義

曰フ王國民愛敬ノ情ニ感シ亦其肝心ヲ其民ニ示シテ曰ク民情ノ吾ニ斯ノ如ク厚キハ豈愉快ナラスヤ又曰ク余ノ民愛ヲ受ル何ノ爲セル所

ニシテ然ルヤ

王ノ病己ニ愈エテ後又フオントノウアウノ役アリ而シテ英國和蘭及澳地利三國同盟ノ軍マレンシャルド、サククスニ破ラルサククスト云フ者兵ヲ用井ルニ長セリ其人ト爲リ勇悍果敢世ノ希ニ見ル所ナリ

紀元一千七百四十八年エキストラシヤベルノ盟約ヲ爲シ戰役始テ休ム佛軍ノ此ノ役ニ於ケル澳地利及和蘭ニ在テハ多ク利アリ以太里ニ在テハ敗ヲ取レリ而シテ佛國復マリ、セレイザノ日耳曼ニ帝タルヲ許シ普魯西王フレデリックハ其前約ニ依テセリージャ地ヲ有スルコトヲ得タリ

### 第一百五十八篇

兵學校ヲ創建ス衣服及梳剃方



エキストラシヤバルノ約己ニ成テ後佛國人民和平ヲ享ルコト二年此ノ  
間製造術及通商大ニ盛ニシテ民モ亦其利ヲ享クセントドウミンゴ  
ノ民尤其富ヲ成シ且其土ヲ廣大ニス

王路易ノ世ニ當リ紀元一千七百五十一年ヲ以テ壯大ノ土木ヲ起セリ  
即官設兵學校是ナリ而シテ志學ノ少年五百人ヲ簡ミ官費ヲ以テ校中  
ニ教育セリ

王此ニ心ヲ留メ諸學科ヲシテ研究セシム數學星學最其進步ヲ見ル然  
レトモ臺榭屋宇衣服等ノ彩飾ニ至テハ又稱スルニ足ル者ナレ

其不用虛飾ノ物ニ至テハ常ニ多ク之ヲ見ル其建築ノ制法トルニ足ラ  
ス聖彩ノ施法其定式ニ非ス質神女神等ノ偶像ニ至テハ史書傳記ニ據  
ルニ非ス粗惡ナル牧男女ノ木偶アリ衣スルニ朝人輕賤ナル衣服ヲ以

テセリト世ニ傳ヘタリ

其衣服ニ在テハ張錠環及鞞ノ高キ蹴馬距ヲ着ケタル者ヲ以テシテ人  
ニ誇示セリ其裝具ハ白及紅ヲ其顏頸ト手腕トニ臙抹ス内庭貴女ノ粧  
容ヲ爲セル者ニ至テハ脂膏及髮粉ヲ以テ其頭髮ニ施シテゴツテント

トト亞弗利加南部喜望  
嶺近地ノ一州ナリノ美人ニ臙ル所アリ

貴女ノ脂膏ト髮粉トヲ用キテ其頭髮ニ施スカ爲ニ新ニ一式様ヲ制ス  
ルアリ梳剃工レニュール、ル、グロツツト云フ者アリ其徒ノ巴里府中ニ在  
ル者一千二百餘人ニ其法ヲ傳ヘント欲シ一卷ノ梳剃新様ノ書ヲ著ハ  
セリ

其爲ス所率此ノ類ニテ他ノ好處ナント雖巴里府街頭ノ光景ト其便利  
ヲ得ルトハ第十五世路易ノ時ニ及テ大ニ更新スル所アリ王一街坊ヲ

創作シ之ヲシテアウイロリーヨ官ノ園圃ト其境ヲ接セシメ青銅ヲ以テ王ノ騎馬像ヲ鑄造シ街頭ニ安置ス其制宏麗ナル大理石ノ四個偶像アルヲ以テ柱ト爲シ盤ヲ製シテ其脚ニ銘スルニ剛建平安ナル箴戒及公正ノ語ヲ以テセリ

王路易ノ行放縱ナルニ因テ曾テ縛號アルビュンエーシメイノ美稱ヲ失ヘリ而シテ今其一偶像ノ存スルアリ因テ短詩ヲ賦シタル者アリ其詩ニ云

嗚呼美ナル哉盤礎嗚呼美ナル哉偶像馬背ニ不善人アリ盤脚ハ更ニ誠ニ德アリ

### 第一百五十九篇

往時佛國ノ役七年ノ役佛國其屬地クイビツクヲ奪ハル英國

#### カナダヲ畧取ス

英佛兩國共ニ外其本邦ト相距ルノ遠地ニ在テ屬卑相接シ内互ニ恐隙ヲ生レ兩國相和スルノ日久シキヲ得スト雖和平ハ固ヨリ兩國ノ與ニ望ム所ナリ

紀元一千七百五十四年ニ及テ英佛ノ米洲ニ移住セシ者ノ戰アリ此ノ戰ハ吾祖父屢之ヲ語りテ往時ノ役ト稱スル者ナリ華盛頓ノ兵事ニ老熟スルモ此ノ役ニ根基スル所ニシテ即自主ノ權ヲ保有セントスル時華盛頓撰ハレテ始テ將帥タルニ己ニ能ク兵事ニ達スルカ如キ是ナリ此ノ役息テ佛國ノ不利尙少ナカラズ米洲ニ一島ケーアブリトント云フアリ島中ノ一市邑ナルウイス、ゼルグト曰フセント、ラウレンス河口ニ臨ミ頗要害ノ地ナリ佛軍之ヲ固守スレドモ遂ニ英國ニ奪ハル又

クイビックカナダ州ノ一市邑ト曰フ地アリ亦要地ナリ前ニ既ニ英軍ニ畧取セラル

市邑クイビックハ天然要害ノ城ニアジブワルタル地中海ノト相隣ラ要衝ノ地

サル者ナリ既ニ英將ウオルフニ畧取セラル時ニ紀元一千七百五十九年第九月ナリ是ヲ以テカナダ全州竟ニ英國ノ有ニ歸セリ

此ノ戦ノ歐洲ニ波及スル者ハ纔ニ紀元一千七百五十六年ナリ而シテ歐洲各國ノ史乘中此ノ役ヲ稱シテ七年ノ大役ト爲ス其前役ニ在テハ佛國普魯西ト相結ヒテ英澳ノ二國ニ敵セシハ世ノ知ル所ナリ而シテ此ノ役ニ在テハ佛澳ト同盟シ普魯西ト相敵セリ時ニ普魯西ハ援テ英國ニ得タリ

佛國ノ遽ニ澳ト同盟スル所以ヲ審考スルニ曰ク澳太利女帝マリヤ、セ

レイサ佛王路易ノ嬖女ニ縁リ賄賂ヲ行ヒ諛情ヲ極ム因テ普魯西ノ爲ス所ヲ愾怒シ澳地利ニ和親スルヲ勸ム普魯西王大ニマリヤ、ゼレイサヲ怨惡セリ

魯西亞瑞典撒遜ノ三國共ニ普魯西ニ敵セント欲シテ與ニ同盟ヲ爲ス普魯西王フレデリック勤敵ノ合同ヲ聞クトモ敢テ懼色ナシ彼ノ猛暴ナル勢ヲ挫キ其功烈ヲ爲ス概略ヲ記セントセハ亦大ニ時間ヲ費サ、ルヲ得ス夫普魯西王不足ノ兵備ヲ以テ勝ツ可カラサルノ戦ニ克テ竟ニ大功ヲ成スハ史中其人アルカ蓋希ニ見ル所ナラン

普魯西王戦勝ツト雖兵力己ニ盡キ將ニ魯西亞澳地利ニ降ラントスルニ及テ忽不虞ノ幸アリ事ノ不虞ニ出ル往々其國民ノ氣機勢運ヲ轉換スル者アリ

魯西亞女帝エリサベス紀元一千七百六十二年ヲ以テ崩ス第三世ビートル嗣ヲ即位ス新王ビートル大ニ普魯西王フレデリックノ英才ニシテ且剛勇ナルヲ欣慕シ之ヲ尊敬シテ乃和親ヲ請ヒ其奪フ所ノ者悉ク之ヲ送還セリ

第一百六十篇

シルウエトノ法和親ノ約佛國大ニ衰運ニ属ス

佛國大臣ノ最良善ナル者前ニ大ニ激論語辨スルニ戰ヲ息ムルヲ以テセリ而シテ今戰鬪ノ初ニ在リテ佛軍勝利ヲ得タリ此ニ於テ大臣此ノ際ニ乘シ又和平ノ約ヲ爲シ以テ佛國ノ益ヲ謀ラシコトヲ王ニ陳ス時ニ王ノ寵女マダムデボンパツールト云フ者百ノ事務ヲ執レリ女謂フ戰間妾ノ利スル所大ナリト其爲ス所皆貪戾強欲ノ情ヲ飽カシムル

ニ在リ而シテ大臣大將ヲ黜陟褒貶スルモ唯其意ノ嚮フ所ナリ佛國ヲシテ不幸相踵テ至ラシムルノ禍源ハ實ニ此ノ女ニ由レリ

此ノ女自撰ヲカルシナールベルニーヲ以テ國相トス而シラベルニー忠貞ノ心ヲ國ニ盡ス者ナリ因テ之ヲ黜ケ更ニジュークゲジューアゼルヲ舉テ代テ國相トス自意フ必吾意ニ從順スル者ナラント又出納庶務ヲ以テモツシユールデシルウエトト云フ者ニ任セリ此佛國ノ困弊ヲ趣カス者アラント思ヘハナリ

シルウエトノ施ス所果シテ苛刻ナリ勇銳ナル巴里府人皆疾惡セサルハナシシルウエトノ法ニ繪像及椅子ノ制アリ大ニ衆ノ好ム所ナリ繪像ハ燈燭ヲ照シテ人影ヲ紙上ニ移シ筆ヲ把テ之ヲ模寫シ粉彩ヲ施サズ椅子ハ衣囊ヲ施サズ

將帥タル者亦皆マダム、ド、ボンパツールヲ以テ標艦ト爲シ財賄ヲ得ル  
ヲ以テ名譽ヲ取り國益ヲ致スニ勝ル者トス即マレーシヤル、リミユリ  
ニハ專貨財ヲ貪り取り大ニ意氣ヲ張ルニ因テ其旗下ノ兵人等之ヲ縛  
號シテセテラル、ビユータン 剽奪ノ  
將ノ義ト曰フ

佛國將ニ亡滅ニ屬セントスルニ際シ援テ西班牙ニ請フ西班牙之ニ應  
スルニ當テ世ニ所謂ルバクトフアミーニ即親和ノ約ヲ爲セリ其款ニ  
曰ク西班牙王ノ人民ニ許ス所ハ佛王モ亦之ヲ其民ニ許サン佛王ノ其  
民ニ許ス所ハ西班牙王モ亦之ニ據ラン但兩國ノ人民隨意ニ米洲人ニ  
貿易スルヲ禁止ス且西班牙ノ仇敵トスル所ハ則佛國ニ於テ敵タリ佛  
國ノ敵トスル者モ亦然リ

其此ノ條件ヲ約スト雖モ佛國ニ在テ一モ得ル所アラズ到底佛國ノ不

幸ヲ以テ同ク其同盟ニ波及セシムルニ過キズ彼我與ニ自國家ノ困弊  
スルヲ知り竟ニ和ヲ巴里府ニ講セリ時ニ紀元一千七百六十三年第二  
月ナリ佛民己ニ其國ノ和平ヲ得タリ然レトモ其亞細亞亞非利加及米  
洲ニ在テ大ニ屬地ヲ有セル英國ノ得ル者ヨリ其失フ所尙大ナルアリ  
第六十一篇

佛國太子ノ善行及其死并ニ理學家ヴォルテールルソーノ  
記

マダム、ド、ボンパツールハ紀元一千七百六十四年ヲ以テ死セリ此ノ女  
己ニ没スト雖王尙別人ニ制馭抑壓セラル、ヲ免レズ一介ノ嬖臣アリ  
マダム、ド、ボンパツールノ爲セル所ヲ履行セリ王モ亦因テ不善ニ身  
ヲ終ヘタリ

此時在廷ノ人大抵王ノ爲ス所ニ習テ爲サ、ル者無シ而ルニ王ノ家眷  
 中其ノ品行稱スルニ足レル者アリ即后及ヒ四女是ナリ其人皆良ナ  
 リト難恨ラクハ皆幽隱退去ノ風趣ヲ愛シテ人亦之ヲ鑑ミ習フ者少シ  
 太子ノ妃人ニ愛慕セラレ温厚ニシテ信義アリ人ノ妻トナリ慈母トナ  
 ルノ務ニ力ヲ竭セリ太子モ亦品行高潔心常ニマダム、ド、ボン、バツ  
 ルヲ疾視シ但心中自問セ自答ヘテ敢テ口ヨリ出タサズ  
 太子孝道ヲ盡セトモ王ハ嬖臣ニ制馭セラレ太子ヲ視ル甚薄クシテ慈  
 心無シ是ヲ以テ太子愀然トシテ心ヲ傷メリ遂ニ鬱々心憂ヲ生シ元氣  
 損亡シテ肺病ヲ發スルニ至レリ  
 太子病危篤死ニ至ルマテ心情怡悅ス但其憂心ヲ後ニ留ムルハ其子ニ  
 在ルノミ即後ニ第十六世路易ト爲ス者是ナリ國政振ハズ世道日ニ衰

へ一人訓誨ノ任ニ當ル者無シ是遺孤ヲ以テ憂ト爲サ、ルコトヲ得ズ  
 遂ニ紀元一千七百六十五年ヲ以テ早世ス

太子ノ愛妃貞心淳篤太子ノ病ム時細心ニ看護シ須臾モ其左右ヲ離レ  
 ズ而ルニ又太子ト同一病ニ染ミ太子没後幾モ無クシテ没セリ追テ太  
 子ノ墓塋ニ合葬ス

當代ノ學者一黨ヲ爲シ自名ツケテ理學者ト稱ス此等ノ學者著述スル  
 所ノ書及ヒ其品行全ク太子ノ意見ト相反シ其反スル所ヲ見テ益太子  
 ノ有徳聰明ナルヲ知ルニ足レリ太子曾テ謂フ理學者ノ名ハ尊稱ナリ  
 而ルニ人ヲ稱スルニ此理學者ノ名ヲ以テセハ蓋不敬ヲ免レザラン此  
 其宗教ヲ檢査スルノ黨人ト爲スヲ以テナリ

自其法ヲ立テ理學者ト稱スル者其固執ノ意見耶蘇宗教ヲ廢滅セント

欲スルニ在リ其宗教ニ惑溺スル徒ト看做ス者ハ力ヲ協セテ之ヲ殲サ  
シコトヲ謀レリ其惑溺ノ徒ト稱スルハ專耶蘇宗教徒ヲ指スナリ  
此等ノ人皆其意ヲ遂クルコト能ハス勢ノ不利ヲ見レハ愈々其説ヲ誇  
張ス偶々一事アリ多少ノ奸謀ヲ助ク茲ニ羅馬宗教ノ寺院廢頽スルア  
リ彼ノ宗徒來テ此ノ黨ニ與スル者多シ

不敬神者ノ稱上下ニ治シ余之ヲ普天下ニ記傳スルノ神速ナル人ヲレ  
テ驚愕セシムルニ足ラン若此ノ不敬神者當日嗣王ノ世政事ノ大變革  
ヲ爲スノ用ニ供セズンバ吾カ記ノ佛國中ニ傳聞スルノ神速ナルヲ得  
ズ其大變革ト稱スルハ願フニ善法ニ非スト云フ

第十五世路易ノ時最有名ノ史家ヲウオルマイル及ルーソート曰フウ  
オルマイル姓ハアルウニ紀元一千六百九十四年第二月二十四日ヲ以

テ巴里府ニ生ル才氣敏捷人ト談話スル諸謔千變辨舌アリト雖其人粗  
暴ニシテ妬心アリ傲慢ニシテ虛飾多シ

此ノ人曾テ普魯西王フリデリックニ聘セラレベルリン府ニ居ル此ノ  
地ニ在ル日久シ王フリデリック特ニウオルマイルノ誇誕ヲ容ルヽニ  
忍ビズ遂ニ普魯西ヲ出デフェルチーニ奔ルフェルチーハ瑞士國ゼノ  
ヴァー近傍ノ一部落ナリ爾後紀元一千七百七十八年第五月三十日ヲ  
以テ竟ニ巴里府ニ死セリ其死ニ臨テ當時理學家ノ宗教ニ託シ各其熱  
智ヲ恣ニスル者ヲ教誡スルノ硃針ト爲ス可キ者アリ

ウオルマイル重病ニ罹ルニ及テ其爲ス所ヲ捨テ其死セントスルノ懼  
心アルニ因テ其過惡ヲ悔悟スル者ノ如シ病愈ルニ及テ乃亦自奮發シ  
痛恨悔悟セリト云フ

此ノ人理學者流ノ虛飾傲慢自欺クノ心ト耶蘇宗徒ノ當ニ殲スヘキ心ト常ニ胸中ニ戰ヒ制抑スルコト能ハス死ニ臨ムニ及テ始テ善惡邪正ヲ辨明スルニ至レリ其人ノ衆民ニ崇敬セラルヽト輕蔑セラルヽト一ニ皆此ニ在リ且正理ヲ抑制スルモ眞教宗徒ヲシテ感動セシムルノ德ニ由ルニアラザレバ其才智乃無用ニ屬ズル而已ナラズ大惡事ヲ顯ハスニ至ルベシ

ルーツーノ書記スル所讀ム者ヲシテ激怒セシムルニ足ル者アリ此人ノ書ヲ著ス始ヨリ確然貫徹スル意見アルニアラス物ニ觸レ事ニ感シ隨テ思想ヲ生シ隨テ之ヲ寫スカ如シ且其感スル所ヲ以テ明ニ順序ヲ立ツル意無ク遂ニ天生放縱ニ任セ癡狂人ノ作ル者ノ如シ其何人タルヲ論セズ輒評論ヲ生シ善舊親ト雖猶詰辨攻難ニ免レズ

ルーツーウオルマイル常ニ相拮抗シテ相容レスルーツーハ形貌奇異ヲ以テ人ノ驚服スルヲ喜ム其龍動府ニ入テ街頭ニ徘徊スル時亞耳美尼人ノ衣服ヲ着ケ大ニ人ノ異觀ヲ成セリ此ノ人紀元一千七百十二年第六月二十八日ヲ以テゼノヴァ瑞西國ノ一部ニ生レ紀元一千七百七十八年第七月二日ヲ以テ死セリ

## 第一百六十二篇

シイズヴィトス派徒シヤンソンスツス派徒 共ニ加特力ノ名 互ニ

諍鬭ス佛王巴力門ト爭議スシヤントルーノ論況

第十六世路易ノ時ニ及テシイズヴィトス派徒シヤンソンスツス派徒各其信奉スル所同シカラザルヲ以テ互ニ相諍鬭スシヤンソンスツスノ名ハ此ノ派ヲ開基セシ人ノ名シヤンソンニ取ル此ノ時王路易宗教



上ニ關係スル事ハ悉クジイヅヴィトス派徒ノ指揮ヲ取ル而シテ其ノ  
教ニ同心信奉シテ動スレハジヤンソンヌス派徒ニ殘戮ヲ加ヘント  
シテ遂ニ其首タル者ヲ捕縛シ皆之ヲ監禁セリ

時ニジイヅヴィトス派其意ヲ成スコトヲ得ルト雖尙大ニ其ノ欲ヲ還  
フセント欲シ其ノ争鬭ノ曲直ヲ羅馬法王ニ質ス法王ジイヅヴィトス  
派徒ヲ以テ正直ト爲シ制ヲ出シテ即告諭ス之ヲブールト稱ス曰クカ  
トリッキ宗徒タル者ジヤンソンノ説ヲ奉スルコト勿レト而ルニ爾來  
羅馬法王ヲ信シ其告諭文ヲ遵奉スル者無シ

僧徒人民及ヒ巴力門人等多ク法王ノ告諭文ヲ以テ我權理ヲ抑廢スル  
者トシ遂ニ佛國ヲ擾亂ス第十六世路易死スルニ及テ始テ鎮定ニ歸ス  
時ニオルレヤンス侯此ノ告諭文ヲ評シテ曰ク僧徒ノ同心者ヲ順服ス

ルノ文ノミト

紀元一千七百五十年ニ至テ再此ノ争鬭ヲ生セリ時ニ僧徒ノ先輩タル  
者多クハジヌウイトス派ニ與シ王モ亦之レニ黨スルヲ以テジヌウイ  
トス徒苟已レト異説ナル者アレバ即之ヲ殘戮センコトヲ謀ル時ニ巴  
力門人乃其説ヲ主張シテ曰ク人苟自固守スルノ卓説アル者ハ自主ノ  
權理ニ任スベシト是ニ於テ王悉ク巴力門人ヲ逐ヒ其職ヲ褫キテ去ラ  
シム

是ニ於テ人民洵々論争シテ止マズ王其己ムベカラザルノ勢ヲ知り復  
其ノ門人ヲ召シ還ス是時ジヌウイトス徒マダムドゴンバツール及  
ヒ國相レニワゾール侯ノ惡ミヲ取ル羅馬法王モ亦之ニ與スルヲ以テ  
ジヌウイトス派卒ニ悉ク認服セラル

ジユワゾール侯威力ヲ王ニ加フルコトヲ得テ白國ニ益アリト謂フ所  
ハ輒之ヲ施用セリ是ニ於テ王ニ指教スル所ノ一嬖人マダム、ド、ボンバ  
ゾールト論評セサルベカラザルノ勢ヲ生ズボンバゾールハ侯ヲ  
貶シテ其任職ヲ褫奪センコトヲ謀テジユワゾール侯ノ始メ巴力門ニ  
左袒セシテ説破セリ

王乃ジユワゾール侯ヲシヤントルーニ放ツ制シテ之ニレットルス、ド、カ  
ツシニューヲ與フ即罪科ヲ命スルノ公書ナリ王ノ印璽アルヲ以テカッ  
シニューノ文ト云フシヤントルーハ美麗ノ一宮殿ニシテロワール河堤  
ニ在リ時ニ世人皆謂フ侯ハ真ノ自主ノ權ヲ得ント欲シ高貴ナル官爵  
ヲ棄テ冤枉人トナルト而ルニ佛國中有德ノ士來集シ之ニ從フ者多シ  
侯俸養ノ盛ナル王家ノ如シ其僚從四百餘人其ノ食客ハ皆縱シテ其ノ

意ニ任セ煩スニ事ヲ以テセス是ヲ以テ隨意ニ晨朝ヲ送リ午後第三點  
ニ至テ乃大餐ヲ喫ス之ヲ房中ニ食セント欲スル者ハ亦其意ニ任ス  
己ニ大餐ヲ畢ヘテ遊歩スル者談話スル者讀書スル者各其欲スル所ニ  
隨フ凡此ノ宮中ニ在ル者去ラント欲スルモ追ハズ留マラント欲スル  
モ拒マズ去留其安スルニ從フ晚暮ニ至テ又各歡娛ヲ極メ或ハ假寐或  
ハ早寢晚寢スルモ亦唯其欲スル所ニ從フ又宮中ニ於テ私ニ演劇場ヲ  
設ク當時以テ有要ト爲ス所ノ者ナリ

第一百六十三篇

レットルス、ド、カッシニュー、リッチャエリニュー權ヲ恣ニス

佛史中當時レットルス、ド、カッシニュート稱スル者ハ國王押印詔書ニシ  
テ其書ノ下ルヤ或ハ其ノ人ヲ放テ或ハ監禁スル等ノ罪刑ヲ命スル所

以ナリ

君主獨制ノ國ニ於テ此ノ命ヲ出スノ權ヲ持スルハ必君主ニ在リ亦之ヲ行フニ至テハ其大小緩急一ニ君主ノ心ト臣下ノ意トニ據ル

カレデイナールリツナエリユ一此ノ權ヲ弄セリ又マルレヤル、パツソ  
 ビエールハ第四世顯理及ヒ第十三世路易ノ一忠臣ニシテ世ニ有名ナ  
 ル人ナリ其バスケー巴里府中監禁セラル、世人ノ未知ラサル  
 所ナリ

其監禁セラル、己ニ七年王一日リツナエリユ一ニ謂テ曰ク今一人ノ  
 罪スヘキ理アラサル者ヲ監禁スルコト久シ余心須臾モ之ヲ安ンゼズ  
 トリツナエリユ一答ヘテ曰クパツソ  
 ビエール監禁セラレシ以來百  
 端ノ感慨臣カ胸中ニ往來シ憤懣己ムコト能ハス陛下何ヲ以テカバツ

ソ  
 ビエールヲ監禁シ臣何ヲ以テカ王ニ説テ之ヲ行ハシメシ今既ニ  
 其義ヲ忘ル、ニ及ヘリ

王其心ヲ安スルコト能ハスト雖バツソ  
 ビエール依然トシテ獄ニ在  
 リ爾後五年ニシテリツナエリユ一死セリ其未死セサル時バツソ  
 ビエール其親族ト相見ルダモ猶能ハズ

第十五世路易ニ及テ其專制ノ權ヲ弄シ乃人怨ヲ買テ人ニ結フ者多シ  
 其所以ハ人賄賂ヲ行ヒ請フ所アレハ則命罪詔書レツトル、ド、カッシエ  
 一  
 チマダム、ド、ボンジュールニ受ク其命罪詔書ノ下ル其人ノ冤枉ヲ聞  
 ハス概之ヲ寂寥タル獄舍ニ繫ク其ノ監禁セラル、者狂狴中ニ死スル  
 多シ

其シユワゾール侯ニ貽レルレツトルズ、カッシエ一ニ曰ク從弟汝カ爲

ス所ノ職務余以テ足ラズトスル所アリ余カ心汝ヲシヤントルニ放  
 タサルヲ得スシヤントルニ放ツハ將ニ職セントスル時其地ノ近キ  
 一日程ニ過キサルヲ以テナリ余ハ更ニ遠ク汝ヲ放ダント欲スレトモ  
 大ニ汝カ夫人ノ憂慮センヲ思フテナリ

汝謹テ其行ヲ正クシ余ヲシテ又更ニ法ヲ行ハシムルコト勿レ余上帝  
 ニ從弟ヲ保護センコトヲ祈ルト凡從弟ト稱スルハ王ノ貴族ニ對スル  
 ノ言ニシテ其親戚ヲ云フノ意ニアラズ

### 第一百六十四篇

第十五世路易殂ス普魯西王第二フレデリックノ事王綽號

ゼグレートト稱セラル

シコロゾール侯ノ官爵ヲ褫ヘルモ尙能巴力門人ヲシテ服從セシメ難

シ是ニ於テ王意ニ巴里府中巴力門ノ議員ヲ悉ク放ダサルベカラサル  
 ノ勢已ム可ラス遂ニ其專制ノ權ヲ障礙スル者ヲ驅除シ後國人皆昏睡  
 病ヲ患フルカ如クナルニ至レリ

上下賁賤一人ノ此ノ暴政ヲ抗議スル者無シ是專國相ノ威權ニ由ルニ  
 非ス嬖人マダム、ド、ボンパヅールノ助ケ爲ス所ナリ時ニ王自恐懼ス  
 ル所アリテ心常ニ易キヲ得ス是英王第一世テヤールス巴力門議員ノ  
 命ニ因テ竟ニ斬滅セラレ今王路易亦此ノ厄運ニ罹ラントスル數次ナ  
 ルヲ以テ人民ノ信服セサルヲ見レハナリ

第十五世路易死スルノ日佛國ノ情勢多クハ上ニ記スル所ノ如シ王路  
 易紀元一千七百七十四年第五月十日ヲ以テ殂セリ壽六十五在位五十  
 九年其孫嗣ヲ位ニ即ク是ヲ第十六世路易ト爲ス

上條屢普魯西王第二世フレデリックノ事ヲ記セリ此ノ王世ニ有名ノ人タリ讀者其概畧ヲ識ルコトヲ要ス此ノ王ノ先考心術善良ナラズ殘酷兇暴終身武術ヲ尊ヒ文學ヲ卑シメタリ

此ノ王從來其子フレデリックヲ愛セズ常ニ目タルニ矯飾兒或ハ佛國僂子等ノ稱ヲ以テセリ其平生文學ヲ好ムノ心深キヲ言フナリ其后ニ至テハ頗ル人ニ愛敬セラル、ノ人タリ后常ニ太子フレデリックヲシテ其姪ヲ娶ラシメンコトヲ欲セリ姪ハ即英王ノ女アン是ナリ

王フレデリック曾テ其從妹アンヲ見テ常ニ之ヲ眷戀メ父王初ハ之ヲ聘セリ後不禮ヲアンノ父ニ加ヘ呼テ我弟コルボワール押伍ナリト爲セリ因テ父王フレデリックニ謂フ汝後復此ノ婚ヲ遂クルコトヲ欲セザレ

ト

フレデリック戀々ノ情ニ堪ヘス因テ其父ノ命ニ從フテ惡ミ竟ニ母后ノ密旨ヲ得テ英國ニ出奔センコトヲ謀リ事覺ル乃腹心ノ臣パーロン、ドカットト云フ者ヲ從ヘテ卒然出奔セリ乃捕ヘラレテ監禁セラル

其始父ノ心ニ激スル所アリ將ニ之ヲ死ニ處セントス時ニ澳地利ノ國使之ヲ勸解シテ死セザルヲ得タリ其使云フ普魯西太子ノ身ハ澳地利國ノ當ニ保護スヘキ所ナリト其父王ウイリヤム其子ヲ殺ス能ハサルヲ知りフレデリックニ加フルコト太慘毒ナリ

王ウイリヤム太子ノ監舍前ニ於テドカットヲ殺戮ス太子之ヲ見テ恐愕膽ヲ破ルノミナラス其身モ亦更ニ大苦惱ヲ被レリ太子監禁セラル、コト凡三年

其斯ノ如キ殘酷ヲ加フルヲ以テ太子モ亦自其稟性ヲ失ヒ頑固放恣暴

虐ナルニ至レリ太子付テ學ヲ勸ム其正理ヲ推スニ必質直寛温ナルヘシ而ルニ一人ヲ愛シ一人ヲ周フヲ聞カス想フニ我カ慘毒ヲ被ルヲ以テ王ト爲ルニ及テ亦其ノ暴ヲ人ニ施シテ可ナリト爲ス者ナラン

王フレデッキ勇悍ニシテ果斷明察ナリ聲名ヲ貪リ事業ヲ開宏スルヲ務ム王ノ一生ヲ分テ三項事トス戰闘ヲ爲シ文學ヲ修メ政權ヲ執ル是ナリ其事タル次序ヲ得ルヲ以テ常ニ紳々トシテ餘裕アルカ如シ

此ノ王傳ク群書ニ涉ル其讀ム所ヲ分ケテ二類トス當時讀易キ書ヲ以テ第一類ト爲ス之ヲ一閱スルノミ萬代不易ニシテ有功ノ者ヲ第二類ト爲ス常ニ反復百回潛心シテ熟讀セリ

其第二類ノ書ヲ有スル各五部之ヲ五宮ニ分置ス一宮ニ一部ヲ藏セリ故ニ第一宮ヨリ移テ第二宮ニ入り其始ノ讀殘書ヲ繼キ閱セントスル

モ其ノ書第幾冊第幾葉ニ至ルヲ譜記シテ止ムノミ更ニ其書帙ヲ携ヘ移スヲ要セス

王從來華美ヲ愛セズ又時晷ヲ漫過スルヲ好マズ前ニ第十四世路易ノ世ニ在テ朝臣衣服ノ制ヲ出タス佛國政府ノ一事務ノ如クス第二世フレデリックノ朝ハ大ニ之ト異ナリ茲ニ人アリ久シク羈旅ニ在リテ還レリ旅衣ヲ脱セスシテ王ニ謁セント請フ王大ニ之ヲ罵リテ曰ク余ノ汝ニ要スル所ハ唯汝ノ面ノミ其來テ事ヲ奏スルニ衣服ノ如キハ唯汝ノ欲スル所ノ儘ノミト

王美服ヲ着ケ新裁衣ヲ用ルヲ好マズ常ニ藍青ノ軍衣ヲ被リ小假髮ノ辮髮アル者ヲ冒ムリ又三稜帽ヲ冠セリ出ツル時毎ニ必長靴ヲ穿テリ其晚年位ヲ讓ルニ及テ好テ寬濶ノ上衣ヲ服ス而レトモ尙其三稜帽ヲ

冠シ長靴ヲ蹈着セサルヲ見ル者亦希ナリ

王又亦甚鼻烟草ヲ好メリ其烟草筒ヲ有スル其數勝テ計フベカクゾ唯之ヲ以テ王ノ奢泰ト爲セリ又王ノ動物ヲ愛スル彼此ヲ問ハズ皆同一ナル者ハ唯狗子ニ於テ然ルノミ最小グレイイハワンド獵犬ノ一種眼睛銳透形貌甚美其脚小コレヲ極メテ疾キ者一隊ヲ畜養シ愛顧シテ其左右ヲ去ラシメズ旅行征戰ニ臨ムト雖必自其一ヲ抱ケリ

### 第一百六十五篇

第十六世路易縛號シテゼデサイルドト稱セラル其後マリシ、

アントイチイトノ記

佛王第十四世路易放蕩ヲ極メ第十五世路易暴政ヲ施シ竟ニ其國家ヲシテ衰運ニ歸セシム民租ヲ課スルコト頗繁多ニシテ上下交々敬神ヲ

知ラス自暴放恣ナルニ至レリ

一ノ太子アリ佛朝綱紀弛廢スルノ時ニ在テ獨其行ヲ勵シ人ノ神ヲ敬スルヲ知ラス或ハ神惡シト論スルノ時ニ在テ獨神明ヲ敬信シ又奢侈無度ノ際ニ當テ獨其用ヲ節シ其費ヲ省ク故ニ太子嗣テ位ニ即クニ至テ國民大ニ歡喜シテ之ヲ慶賀セリ

上下交々此ノ王ニ属望スルコト縛號ニ證明ナリ即ゼデサイルド大ニ高望ノ義ト

噴ヒ傲ス但王路易頗知識アリテ先王ノ民ニ誹謗セラル、ヲ知ル故ニ此ノ縛號ヲ受ルハ心ニ肯テ欲セザル所ナルベシ

王務メテ民害ヲ驅除セント欲シ身ヲ致シ力ヲ竭シ即巴力門ヲ起シテ舊ニ復セシメ悉ク重臣ノ不忠ナル者ヲ貶黜シ第十五世路易發幸ノ不  
正人ヲ放逐シ而シテ出納ノ事序ヲ正シ務メテ之ヲ舊貫ニ復セントス

此ノ王事物ニ於テ專愛スル所無シ唯其平素欲スル所ハ國民ヲシテ安  
全幸福ヲ享ケシムルニ在ルノミ

王ノ品行斯ノ如ク善美ナリト雖巴里府民ノ輕佻ナル者ト相合セサル  
氷炭ノ如シ王ノ廢疾ヲ唱フル是ナリ凡巴里府民ノ言フ所ハ佛國人皆  
倣フテ之ヲ唱フルナリ

王ノ身軀醜惡其衣冠儀容甚尊カラス亦敢テ自修飾ヲ爲サス曾テ王者  
ノ威望無シ凡佛國ノ人民眼目ノ爲ニ役セラル、ノ病癘アリ乃王ヲ瞻  
視シテ輒奉戴崇敬スルノ意ナシ

佛國ノ人民己ニ政府華侈ノ風習ニ染ミ常操無キニ慣ルコト日久シ而  
ルニ王ニ於テハ極メテ素質ヲ資ヒ一遊戲ヲ爲スモ一庶人ニ異ナラス  
其大宴席ニ在テ第一位ニ坐シ愉樂ヲ盡サンヨリハ寧ロ狭小ナル工場

ニ入テ鍵鑰等ノ物ヲ製シ自樂ムニ如カズト云フ佛人ノ情ニ於テハ斯  
ノ如キ人ニ事フルニ堪ヘサルナリ

王后曾テ王路易ノ制定セシ禮典ヲ輕蔑シテ之ヲ行フニ崇敬ヲ加ヘス  
因テ大ニ佛民ヲ驚愕セリ其禮典ノ如キハ當時ニ在テ反テ佛朝ヲ驕擻  
スルノ物タルガ之ヲ王路易ノ迷魂物ト稱スルモ可ナリ此ノ后名ハマ  
リーアントイテット日耳曼女帝マリーテレーイザノ女ナリ

王路易ノ此ノ后ヲ娶ル實ニ紀元一千七百七十年ナリ其嘉辰ニ當テ  
適ニ一事アリ小人知識ナキ者ハ之ヲ以テ凶兆ナリト爲ス巴里府民王  
ノ新婚ヲ賀セント欲スル時第十五世路易巧技ナル烟火ヲ街坊ニ揚ク  
四方觀者來リ集ル其數六十萬人

烟火ノ戲己ニ畢リ觀ル者競テ街坊ヲ出ツ其前頭ニ進ム者誤リ跌キ積



塵上ニ倒ル此ノ塵埃ハ久シク坊間ノ通路ニ墮堆シ曾テ掃除セサル所  
 ノモノナリ前ノ者既ニ倒ル後ノ者足ヲ止ムルコト能ハス混淆シテ至  
 ル前人起立スル能ハズ後人相蹂躙シテ相死スルニ至レリ是ニ於テ倒  
 仆踏壓セラレテ死スル者其數約一千一二百人此ノ一塵掃除セサルノ  
 積ヨリ起ル所ナリ

后ノ王ニ嫁スル時年十五姫媼ノ色アリト雖性亦頑陋其教育ヲ得ル所  
 少シ常ニ自其蒙昧ナルヲ知り婦女子ノ博識ナル者ヲ忌惡ス故ニ世傳  
 テ此ノ后道理ト教訓トナ好マズト曰ヘリ茲ニ二貴女アリ后ニ親愛セ  
 ラル二女ノ天資愛スヘキ者アリ其品行亦誹毀スヘキ者アラズ概シテ  
 之ヲ論スレバ固亦凡庸ヲ免ル能ハズ其一ヲアリンセストウシバ  
 ルト曰フニチデユーケユスドゼリニツクト曰フ

后マリーアントワネット其才智ナキヲ以テ常ニ自懺嘆シテ曰ク人不  
 虞ノ禍難ニ罹リ之ヲ能ク救フ者ハ則其教誨ノ厚キニ依ルノミト后ノ  
 過失アルハ世ノ明ニ知ル所ニシテ其性ノ愛好スベキ所アルハ后ト常  
 ニ親昵スル人ニ非スハ是ヲ暗識スル者ナシ  
 后ノ舉動ニ至テ觀ルベキ者アリ其ノ愛親狎昵スル人ニ對シテハ務メ  
 テ情ヲ奪ヒ望ヲ養ヒ輕忽違卒ノ態ナシ本性厚ク衆人ヲ親愛シ溫柔惠  
 恤實ニ常度ニ踰エタリ而レトモ其感觸ノ鋭ナルモ亦甚シ感スル所甚  
 シケレハ抑制耐忍スヘカラス故ニ其忿怒ヲ發スル烈シキ猶人ヲ親ム  
 ノ厚キカ如レ之カ爲ニ怨惡ヲ被フル者亦多シ

第六百六十六篇

マリーアントワネットノ後記第十八世路易タルモツシユーノ

事第十四世シャルタルデルトワ―伯ノ事

此ノ妙齡ノ勇銳ナル后ニ於テ當時内廷ノ禮典ヲ修ルハ頗難シト爲ス  
ハ亦自然ノ理ナリ而レトモ后ノ性自其足ヲサルヲ知ルヲ以テ斷然ト  
シテ其禮ヲ改易セントスルノ色ヲ見ハサス唯僅ニ禮典ヲ簡省セント  
欲シ貴族等ヲシテ内廷ノ官人ト爲ルヲ聽セリ是佛國先后ノ未曾ア爲  
サマル所ナリ

后ノ最快心事ト爲ス所ハ此ノ内廷ノ權要ヲ捨テ其友トスル所ノ人ト  
共ニトリヤノンノ私有地ニ避道シ一農夫ト爲リ身ニ白布單衣ヲ着ケ  
手ニ牛乳ヲ搾取シ或ハ庭園ヲ修メテ逍遙游息セント欲スルニ在リ  
此ノ地ノ光景觀ルニ足ル者アリ人其ノ茅舍ニ入ルモ亦華麗ナル舞堂  
ニ升ルノ思ヲ做サシム而レトモ巴里府人謂フ牧婦ノ賤役ヲ樂ムハ后

ニ在テ最無用ノ事ナルコトヲ知レトモ其友人ト稱スル者之ヲ止メン  
トシテ忠告スル能ハサル所アリ  
夫人各其ノ地位ニ在テ各其特有ノ任アリ且各其ノ特有ノ樂ミアリ他  
人ニ在テ樂ト爲ス所ハ后ニ在テ乃樂マス是ニ由テ后復此ニ顧慮セス  
蓋后ノ樂ト爲ス所ハ專其身ヲ降シ衆婢ト共ニ事ヲ執ルノ佳境ニ在ル  
ノミ乃亦不幸ナラスヤ

當時佛國ニ在テ私家各演戲ヲ流行セリ而シテ貴媛等競テ臺上演戲ヲ  
爲ス尋常ノ舞蹈ヲ爲スヨリ緊要ナル技藝トス是恰后ノ開濶ナル快意  
ニ相合セリ后ニ私戲場アリ拙技ナル者ト雖能ク舞臺上ニ演戲スルコ  
ト屢ナリ

君ト云フノ義人ナリト云フハ王ノ二弟中最長タルヲ以

テ此ノ稱號アリ此ノ人容儀嚴肅ニシテ精力アリ甚學文ヲ好ミ新聞誌ノ章句ヲ書記セリ幼時岐嶷ニシテ成人ノ如シ宗族中尤秀異ト稱セラル

路易及ヒ其兄弟幼時ノ一段話アリ一使節アリ下郷ヨリ來テ路易兄弟ニ謁ス太子ノ嫡長タルヲ以テ語中屢其才能ノ俊秀文學ノ進歩ヲ稱揚シ麗辭ヲ以テ之ヲ祝セリ

是ニ於テ路易其容ノ語ヲ止メモッシユ一ヲ指シテ曰ク汝須ラク余カ弟ヲ指テ然カク稱スベシ彼ハ怜悯ナル童子ナリトモッシユ一ハ果シテ怜悯ナルカ然ラサルカ唯是正直ナル一童タリ終身其天賦ノ質ヲ失ハス此ノモッシユ一後ニ第十八世路易ノ稱號ヲ襲テ世ヲ治メタリ王ノ弟ダルトワー伯ハ王及ヒモッシユ一トハ稟性大ニ異ナル者ナリ

其容貌ノ美麗心性ノ快活儂利ニシテ其ノ嬉戲ヲ好ム心其ノ篤實ナル行ヲ奪フニ足レリ而シテ能ク后ノ心ヲ得テ其ノ娛樂ヲ共ニシ后ヲ獎誘シテ放蕩ナラシムルニ至レリダルトワー伯ハ即第十世シヤルナリ此ノ王ノ事尙後章ニ詳説スヘシ

### 第一百六十七篇

ドクトルフランキリン巴里ニ來ル衣服ノ變革

后ノ品行前ニ説ク所ノ如キヲ以テ顯貴ノ族輩ニ至ルマテ相習フテ浮華ニ流レ唯娛樂遊戲ニ從事シ衣服粉粧舞技演戲ノ事生業ノ如ク然リ賀宴ニ祝辭ヲ作り酒筵ニ詩ヲ賦スルカ如キハ當時能文人中ニ在テ最第一トシ其ノ才思人ノ向慕スル所ナリ

其ノ習ヒ俗ヲ成シ蒙昧ナル斯ノ如ク甚シ此亦一變革ノ期ナラスヤ其

變革ドクトルフランキリンニ起原セリフランキリンハ即米洲政府ヨ  
 リ佛朝ニ差遣スル所ノ人ナリ時ニ米洲合衆國獨立ヲ謀リ干戈方ニ興  
 ラントスル期ニ在テ援兵ヲ佛國ニ請ハント欲スルノ使ナリ  
 フランキリン着クル所ノ衣服粗惡ナルハ佛國貴媛ヲシテ属目セシム  
 ルニ足レリ然レトモ此ニ由テ貴人ノ衣服一ニ變革セサルヘカラサル  
 ノ勢ヲ生セリ前ニ巴里府人ノ華美ヲ以テ誇レル所ノ金繡綺羅及ヒ其  
 ノ縮髮捲毛ノ粧容ノ如キ一切廢止スルニ至ル彼ノ絶美ト稱スル貴人  
 モ自其ノ頭髮ヲ截リテ質實朴素ナル米洲人ト均シキ茶褐色ノ衣服ヲ  
 被レリ

佛國ノ史家此ノ使節ノ事ヲ記述シテ謂フ斯人ノ始メテ來ル恰羅馬希  
 臘ノ聖智人忽焉トシテ至ルカ如シ其ノ衣裳ノ古風ニシテ朴素ナル其

人品ノ剛毅ニシテ質直ナル言語ノ端正ニシテ明白ナル等ノ事總テ佛  
 國人ノ浮華淫蕩ナル習俗賤陋ナル儀容ト正ニ相反セリ是ニ於テ一種  
 儀様ノ貴重スヘキ者此ノ共和國人米洲人ヨリ傳移シ來リ貴媛公侯文  
 雅ノ人皆舉テ之ヲ信仰シ相爭テ之ヲ學ヘリ

曾テ大饗宴ヲ開キ使節ヲ饗應セルニ當テドボリニアック伯ノ夫人進

テドクトルフランキリンノ前ニ出テ月桂樹冠ヲ月桂樹冠ハ大勳功ア  
ル人ヲ褒賞シテ賜フ

所+ 其頭上ニ戴ケリ此ノ夫人當時在官美少婦ノ冠タル者ナリ

貴媛服制ノ變革甚神速ナルコト其政体大變革ヨリ甚シキヲ覺フ政体  
 ノ大變革モ亦己ニ手ヲ下ス者アリ第十六世路易治世ノ始其ノ頭髮ニ  
 香粉香油ヲ装着シ其ノ外貌ヲ高起セシメ面部ハ全體ノ中位ニ在ルカ  
 如クナラシム

全體ハ鯨骨ヲ以テ製スル所ノ外套ヲ以テ覆壓セリ其ノ堅硬ナルカ爲  
ニ呼吸ヲ抑遏シ飲食ノ機器損耗ス其臀上ニ二圈器ヲ着ケ下衣ヲ排張  
セシム狀小氣球ノ如ク漸ク濶大ナラシム斯ノ如キ異様奇粧ナル怪異  
ノ婦動物婦人ノ異様ヲ指喚シテ云フハ博學多識ノブッフオン動物學ノ大家コレヲ世界第一等ノ人ト稱スモ何門ニ彙編スヘキヤ大ニ難スル所ト爲セリ

曾テ板行スル所ノ畫圖ヲ觀ルニ鬘髮者アリ貴媛ノ髮ヲ梳飾スルニ梯  
子上ニ在リテ之ヲ脩ム但此ノ笑フヘキノ甚シキ未其ノ頭容ノ拔起シ  
テ高キノ甚シキカ如クナラス其ノ髻ノ高キコト益甚シキニ至リ竟ニ  
后ノ毛髮ヲシテ禿然トシテ脱落レ后ヲシテ大苦病ヲ發セシムルニ至  
レリ是ニ於テ此ノ陋習頓ニ廢絶シ貴媛輩皆相約スルカ如ク常様ニ復  
セリ

又一變革ノ續テ起レルアリ是サントヒエールト云フ者ニ據ルサント  
ビエールハ一史家ニシテポール及ヴィルジューヨノ事跡ヲ記スヴィル  
ジューヨハ白洋布ノ單衣ヲ服シ極惡ノ草帽ヲ冠セリト云フ唯此ノ淺々  
タル一史ヨリシテ遂ニ巴里府下ノ貴媛ヲシテ其風ヲ慕フノ情ヲ起サ  
シムルニ至レリ

絹帛毛布衣及ヒ正禮服ノ制等聖路易治世ノ日ヨリ漸次變更シテ定ム  
ル所ナルモ今一旦盡ク廢棄セラル、殆鬼魔ノ方ヲ弄ヒ一時ニ變更セ  
シムルカ如シ而シテ后ヨリ婢子ニ至ルマテ一般白洋布ノ表衣ト草帽  
ヲ用キルノ外更ニ服スル所ナシ

此時奮然トシテ自主ノ權ヲ得ント欲シ遽ニ往昔羅馬帝國ノ共和政國  
ノ古淡尙フ可キ者ニ誘導セント欲ス是ニ於テ貴媛等ハ古遺物ノ半身

像ノ頭容ニ模擬シテ其頭ヲ裝飾シ務メテ古昔偶像ノ素質ナル布帛段匹ヲ用ヰルノ様式ヲ爲セリ

貴媛輩ハ斯ノ希臘ノ古風ニ模擬セリ而ルニ貴族男子ハ其頭髮ヲ剪截シ馬羅馬人ノ容様ヲ倣ヘリ古風ヲ好ム斯ノ如クナルモ又遂ニ一女優カ支那女流ノ風度ニ擬スル演戲ヨリシテ隨テ之ヲ廢絶スルニ至レリ是彼ノ女優別ニ一種ノ奇想ヲ生シ胸飾ヲ裝出スル所ノ衷衣ヲ以テ支那様ヲ打扮スルナリ

此ノ胸飾ノ新奇ナル大ニ巴里府人ノ心ヲ奪ヒ其嗜好ヲ移スニ足レリ此ノ時様一タヒ行ハレ人皆胸飾及ヒ有裝風領ヲ着セサル者ナク漸ク遠ク米洲ニ波及スルニ至ル但米洲ノ婦女子ハ蓋目其ノ時様ノ支那ト佛國ヨリ來レル所以ヲ知ラスシテ用ヰルナリ

### 第一百六十八篇

チニルゴ一、チッケール、米洲改革ノ役、フ、フイエットノ事

余前ニ第十六世路易ノ記事ヲ遺漏セリ今復之ヲ明示セン王其父祖ノ大遺産タル佛國ヲ嗣有スルニ當テ甚不善事アリテ之ヲ改メント欲スル意アリ而シテ其ノ尤難トスル所ハ國財ナリ此ノ改正ノ任ヲ委スル者チニルゴ一ナリ此ノ人多才多能爲スコトアルニ堪フル者ナリ

チニルゴ一舊弊ヲ改革釐定スルノ方ヲ明陳セリ而レトモ其ノ弊頗深ク其ノ病頗大ナルヲ以テ之ヲ改メントスル方嚴酷激烈ナラザルヲ得ス王能ク是意ヲ辨知スト雖天性柔懦ニシテ共ニ此ノ大事ヲ爲スニ足ラス是ニ於テチニルゴ一其ノ策ノ施用スルコト能ハサルヲ知り遂ニ其職ヲ辭セリ

此ノ職ヲ繼クベキ者ヲ撰擧スルハ至急ノ事ナリ此ノ煩擾紛紜ノ時ニ當リテツケールト云フ者撰ハレテ此ノ職ニ代レリ斯ノ人ハ瑞西ニ生レプロアスタントノ宗徒ニシテ銀單舖ヲ業トセリ從來此等ノ職ニ任スルハ貴族ニシテカトリック宗徒ナル佛國產ノ者ニ非スハ決シテ當ルヘカラサル所ナリ

王ノ更ニ憂慮スヘキ一大事生セリ此大貌列顛ト北部米洲ニ在ル屬國トノ爭戰是ナリ米ノ植民來テ援テ佛ニ請フ王路易ニ説ク者アリテ曰ク我カ舊怨ヲ報シ往年失フ所ノ土地ヲ復シ武威ヲ恢張スヘキ好機會ナリト

此ノ事王ヲ誘惑スルノ大ナルモノナリ王敗テ之ニ從ハス英國植民ノ其ノ君主ニ抗敵スルヲ勸ムルハ心ニ於テ之ヲ欲セス又更ニ此ノ反逆

人ヲ援クルハ其ノ惡ム所ナリ此ノ植民實ニ畏ルヘキ氣力アル者ヲ以テ乃呼テ反人ト爲スナリ

佛國人民ノ心志ハ之ト異ナリ其ノ一ハ苛酷ノ壓制ヲ厭ヒ一ハ唯名譽ヲ好ムノ黨タリ是等ノ習氣ノ其ノ性情ヲ感移スル所以ハ往古武人ノ弱ヲ援ケ強ヲ抑ユルノ風今ニ存スルヲ以テ縱令國王ノ欲セサル所アルモ人民同心協力シテ此ヲ救援センコトヲ決セリ

英ノ國使來テ王ニ説クヲ以テ王益援兵ノ議ヲ拒メリ時ニ米洲人ノ自主獨立ノ權ヲ保助セントシテ剴切ニ建議スル者ハマルキド、ラ、フィエツトト云フ一壯士ナリ王執テ之ヲ拘囚ス而ルニマルキド、ラ、フィエツト監吏ノ怠慢ヲ伺ヒ出テ西班牙ニ走リ其ノ港口ヨリ舩シテ米洲ニ赴ク其ノ米洲ニ抵ルニ當テ米人方ニ敗沮ノ時タリ乃フフィエツト忽焉

トシテ來ルニ會ヒ沮喪ノ民心大ニ憤怒ヲ發シ勢復盛ナリ  
 ラファイエット既ニ一タヒ唱テ爲スヨリ全佛國勸勵激發ノ心急ナリ夫  
 獨裁國王ト雖亦其ノ臣民ノ好ム所ニ從ハサルヲ得サルハ古來往々之  
 アリ是ニ於テ王路易其ノ臣民ニ抗拒スルノ議ヲ承ク固執スルコト能  
 ハス竟ニ北米州合衆國ノ獨立ヲ許スノ款ヲ結約セリ時ニ英國早ク已  
 ニ佛國ト戰端ヲ開クノ條ヲ公告セリ  
 英佛兩國ノ戰多クハ海上ニ在リ一勝一敗互ニ雌雄ヲ爭フト雖佛國遂  
 ニ利ヲ獲タリ時ニ紀元一千七百八十三年一月兩國和ヲヴエルサイヨ  
 ニ講セリ而シテ佛國前役ニ亡失セル所ノ地カナダ州ヲ除クノ外盡ク  
 皆還復セリ

第一百六十九篇

佛國改革ノ事情

紀元一千七百八十三年英佛講和ノ後幾ナラスシテ佛國中至大ノ急務  
 亦興レリ軍役ノ費用大ニ國債ヲ加倍シ府庫ノ資財已ニ減耗シ國家ノ  
 疲弊スルニ堪ヘズ乃猶僧徒貴族ノ除稅アルヲ以テ民情自不平ヲ生セ  
 サルヲ得ス故ヲ以テ事休紛擾シテ止マス

后及ヒ在廷ノ諸官人テツケール氏ノ撰任ニ於テ同心セサル者多シ是  
 其ノ卑賤ヨリ出テタルヲ厭惡スルノミナラス其ノ高德正廉ニシテ嚴  
 肅ナルヲ以テ后及ヒ諸官人其ノ心ノ好マサルニ由テナリテツケール  
 氏遂ニ其ノ官職ヲ褫カレタリ時ニ紀元一千七百八十一年ナリ

此ノ廢黜ハ王ニ在テハ甚不幸ト謂フヘシ何トナレハテツケール氏朝  
 臣ノ惡ヲ取ルト雖人民之ヲ信奉スル甚深キヲ以テ其ノ廢黜セラル、



ニ至テ衆民愁訴ノ起原トナルナリ紀元一千七百八十三年「ガロン」ヲ以テ相ト爲ス

此ノ時王一ノ方畧ヲ設ケ發告セサルベカラサルハ當然ノ理ナリト雖務メテ民財ヲ收取スルノ方ヲ究盡スルニ非サレバ報告令レ難シトス即僧侶貴族ノ不動産ニ在テ亦一般人民ト同シク課税セシメントスルノ條款是ナリ

其ノ之ヲ行フハ實ニ易カラス必先僧徒貴族ニ謀ルカ將人民ヲ會集シテ其ノ決議ヲ取ルカ此ノ時ニ臨テ國ノ會議最重大ノ緊要事トス乃在廷ノ諸官人盡ク此ノ國會ニ趨カサルハナシ百官有司ノ會集斯ノ如キ者ハ一千六百四十四年ヨリ以來未曾テ有ラサル所ナリ

唯此ノ大會議ヲ爲スハ「王路易」ニ在テハ則大難事トス此ノ會タル固ヨ

リ國ノ危厄ヲ洗除センカ爲ナルヲ諸人肯テ許諾スル者ナキノミナラス又更ニ其ノ愁訴ヲ取ルノ一事ヲ生セリ

斯ノ如ク事ノ盤錯シテ解ケサル所以ハ他無シ人民ノ苛政ニ苦ムノミナラス貴族ノ暴勢猛虎ノ如クナルニ窘迫セラレバテ以テナリ且當時ノ勢人民各個自主自由ノ權利ヲ得ント欲スルノ情實急切ナルヲ以テ政府ノ抑利益甚シケレハ之ヲ欲スルノ情益切ナルニ至レリ

往年米洲ノ戰ニ由テ米民英國ノ苛政ヲ避ケ自主ノ權利ヲ得タルヲ以テ佛人亦一心ニ之ヲ效フコトヲ欲シ且説客者ノ頻ニ之ヲ勸奨シルソート云フ者尤力ヲ出シテ之ニ當レリ衆庶ノ意見斯ノ如クナルヲ以テ宰相カローン氏此ノ終始如何ヲ默許シテ大ニ恐懼ノ情アリ

巴力門ノ議ニ僧侶貴族輩ノ特權ヲ保有スヘキヲ一決セリ是ニ於テ物

議稍、鎮定シノ一ターブルノ徵集ノミ獨存セリノ一ターブルトハ王  
自各地方ヨリ撰舉スル所ノ議員ナリ此ノ撰ニ當ル者ハ各地方ノ高貴  
人タリ第四世顯理及ヒ第十三世路易ノ治世中徵集セシ所ノ者ナリ  
紀元一千七百八十七年第二月二十二日ヲ以テ一ターブルヲ徵集セ  
リ其ノ數一百四十四人而シテ此ノ議員等一人アリテ宰相ノ建議ニ服  
スル者ナシ是ニ於テ滿朝ノ人皆來リ迫ルカ如ク衆民悉ク我ノ意見ニ  
相反セルヲ知り竟ニ官職ヲ辭スルニ至レリモツシニュー、ド、ブリエーン  
繼テ其任ニ當ルブリエーンハツールズノ大督教主ナリ  
新宰相ブリエーンモ亦一ターブルノ論ト和セズ故ニ同年第五月ニ  
及テ此ノ會議ヲ放解散セリ而レトモブリエーン吾カ萬機ヲ總攝スルノ  
器ニアウサルヲ悟リシ竟ニ紀元一千七百八十八年ヲ以テ其ノ職務ヲ

辭セリ此ノ人職ニ居リ政ヲ行フコト弊害少ナカラス其人ト爲リ傲慢  
頑冥ニシテ衆人ニ輕侮セツルト雖佛國中最上ノ位ニ居リ最大ノ寺邑  
ヲ有セリ其ノ位ヲ去ルニ及テ固有ノ資産ヲ以テ身ヲ安逸ニ處セント  
欲レ以太利國ニ入り復佛國ニ存スル所ノ王ノ憂虞ヲ顧ミルノ念ナシレ  
是ニ於テ王路易策盡キ氣屈シ衆人ノ意見ニ任スヨリ他ノ策ナシテツ  
ケール氏乃前職ニ復シ人民歎然トシテ群至シ大歡喜ノ色面ニ見ハレ  
頌聲耳ニ聒シ之ヲ譬フルニツケール氏大魔旗ヲ捧ケ一次之ヲ動か  
セハ一資ノ錢無クシテ國債ヲ償還シ再次之ヲ動かセハ一粒ノ穀食無  
クシテ全國二千六百萬口ヲ支給スヘシト想ヘルカ如ク然リ

ツケール氏ノ建議ヲ以テ王復國會ノ集議ヲ爲サンコトヲ命ス時ニ  
紀元一千七百八十九年第五月一日ナリ此ノ會議ハ三族即僧侶貴族平

民ノ代議員ヲ立テ、編成スル所ナリ  
 三族中平民ノ代議者ノ建言ニ曰ク願クハ平民代議者ノ員ヲシテ僧徒  
 貴族ト同シカラシメヨト王再三熟思シ乃平民代議者ノ員ヲシテ現今  
 在ル所ニ二倍スルヲ得ヘキヲ許セリ又王ニ問フニ僧侶貴族平民ノ代  
 議者相合シテ一體トナルヘキカ將三族各別ニ會議スヘキカヲ以テセ  
 リ  
 此ノ法ヲ定ムル必先僧徒貴族相謀ラサルベカラス從前僧侶貴族ハ各  
 別ニ集會セリ彼ノ二族合併シテ平民ト歎スルヲ得ルハ我ニ利アルコ  
 ト明ナリ而シテ平民ニ在テハ自然其ノ等位ノ勢權ヲ昇進スルアリ但  
 王ノ明此ノ建議ヲ專斷スルコト能ハス

## 第一百七十篇

オルレヤン侯マダム、デゼンリー、デューク、デシヤルト、即路

## 易、ヒリイブ、ミラボーノ事

時ニ貴族等大ニ衆心ヲ不滿ナラシム是貴族人ノ佛后ヲ惡ムニ由テ生  
 スル所カ將其ノ富貴ヲ利セントスルニ由テ然ルカ貴族ノ魁タル者ヲ  
 オルレヤンス侯ト爲ス此ノ侯ハ昔者佛國ニ攝政タルオルレヤンス侯  
 ノ曾孫ナリ其ノ不善ニ慣フコト少ナカラズ又人ヲ勸導スルノ心意尤  
 少シ

此ノ侯ノ心佛后ノ極メテ朴實ナリト雖其ノ行ハ則善良ヲ少ク所アル  
 ナ憎ミ之ヲ色ニ顯ハサマル能ハズ因テ大ニ怨慝ヲ生シ務メテ后ヲ誹  
 謗シ其怨慝ノ意ヲ逞フセリ佛國變革ノ始ニ當テ佛后ヲ非毀スル所ノ  
 小冊ニ至テハ皆此ノオルレヤンス侯ノ手ヨリ出ル所ナリ

世傳フ侯后ヲ惡テ足ラス又王ヲ廢シ其ノ位ニ代ハラシコトヲ謀レリト而シテ侯内ニ斯ノ如キ貪違ノ心ヲ抱クト雖外尙忠誠ノ色ヲ顯ハセリ但其大ニ爲サント欲スルノ心アリト雖才氣足ラス

侯ノ有ル所ハ其富ト姦心トノミ一言一行觀ルヘキ者ナシ威力ヲ以テ王家ヲ覆滅シ其ノ大欲ヲ充テント欲シ胸中極メテ多事ナリ是唯自欺クノミナラス自其ノ覆亡ヲ速ク所ナリ

侯心意久シク貪違ヲ蓄フト雖其子弟ヲ教フルニ至テハ纏纏倦マス曾テ世ニ著名ナル女子マダムデゼンリトニ其ノ子弟ヲ囑托シテ教育ヲ乞ヘリ此ノ女子ノ著ハス所ノ家記ノ如キハ往古佛國記者ノ著ハス所ノ嚴肅正整ナル如キ者ナシ徒ニ子女ノ解シ易キノ事ヲ錄スルノミ其ノ女傳ヲ撰フ最益アリ子弟輩其ノ薰陶ヲ受ケ世ニ芳名ヲ傳播スル

コト猶其ノ父ノ醜聲ヲ世ニ留ムルカ如シ侯ノ長子ヲ路易、ヒリイブト曰フ即佛國最後ノ王是ナリ常ニ説テ長子ノ事ニ及ヘハマダムデゼンリト大ニ歎賞セサルハナシ女傳ノ此ノ事ヲ語ルニ謂フ其ノ平生自勉カスル所有リ然リト雖其ノ名聲ヲ求メズ又曾テ驕誇ノ色ヲ見ズト又謂フ侯ノ長子ノ如キハ其ノ善良ナルハ生ナカラニシテ固有スル所ニシテ人爲ニアラサルカ如シ

貴族人中亦庶民ニ左袒スル者アリ之ヲカオントデ、ミラホート曰フ此ノ人ノ品行兇惡ナルオルレヤンス侯ヨリ甚シク其爲ス所ノ惡ムヘキニ至テハ又之ニ超過スル所アリ而シテ才智巧辨當時佛國中ニ秀拔スル所ナリ因テ撰ハレテ下院ノ代議者ト爲レリ

スタートス、ゼテナル、即佛國ノ國會、シヤコバンノ集議并ニ  
 王親臨會議打毬場ノ集會

佛廷ニ於テ嚴ニ時日ヲ刻シ其期ニ及テ代議者各出テヴエルサイヨ府  
 ニ會合ス時ニ巴里府ノ代議者未其人ヲ得サルヲ以テ王更ニ命ヲ下  
 シ期ヲ緩シ正ニ第五月五日ヲ以テ會議センコトヲ傳フ是ニ於テ其期  
 ニ至ルマテ各地ヨリ來集スル所ノ代議者互ニ相交親スルノ誼ヲ爲ス  
 時ニ人民ノ權利ヲ主張センコトヲ希望スル代議者相結テ一黨ヲ爲セ  
 ヲ而シテ更ニ會議ノ地ヲ巴里府中ニ易ヘント欲ス後此等ノ民權ヲ主  
 張スルノ徒各一舍内ニ集會セリ其會會ハシヤコバン宗派ノ僧院是ナ  
 リ其シヤコバンノ名アル所以ハ此ノ僧院適ニサンシヤコブノ街中ニ  
 在ルヲ以テナリ

是ノ黨類ノ街頭ニ會合スルヲ以テ之ヲ名ツケテラジヤコバン會ト呼ビ  
 做セリ此ノ會ニ由テ其ノ黨人大ニ威力ヲ佛國ニ伸ルヲ以テ斯ノ如キ  
 名稱ヲ創ムルハ全歐洲ノ大ニ驚嘆スル所ナリ

紀元一千七百八十九年第五月五日ヲ以テ果シテ大會議ヲ爲ス其ノ儀  
 裝頗端麗ナリ王玉座上ニ在リ王族及ヒ朝臣各位次ニ就テ侍坐セリ  
 オルレヤンス侯時ニ代議者ト爲リ其ノ席ニ在ルヲ以テ此ニ侍セス王  
 乃其ノ民人ノ肅然トシテ會同スルヲ喜フヲ告ケ且謂テ曰ク余カ望ム  
 所ハ全國民ノ幸福隆盛ナルヲ得ントスル一ニ衆人ノ決議スルニ依頼  
 スト

第三族即平民ノ代議者建議シテ問テ曰ク三族相俱ニ會議スルノ法ヲ  
 制スルハ如何ト既ニシテ決議シテ告テ曰ク夫僧侶貴族二黨ノ代議者

ノ如キハ唯自己黨中ノ代議者ノミ爾來庶民代議者同ク國會ニ與リ議セシムヘシ我佛國ノ法律ヲ制定スルニ當テ何ソ故意ニ其ノ席ヲ別ニシ會議スヘキノ權利アラシヤト僧侶貴族乃愕然トシテ驚キ或ハ此ノ議ニ同意スル者アリ

是ニ於テ庶民ノ代議者自謂フ法律ヲ制定スルノ主宰タル權力アリ因テ自號シテナシユナールブッセンブリー即國民會ト呼フ而シテ其ノ第六月十九日ニ及テ僧徒等此ノ國民會ニ與リ議セント謂フ者己ニ半ニ過キタリト時ニ貴族等憤然トシテ皆謂フ王若專斷ノ權ヲ執ルニ非スンバ事全ク廢弛ニ屬セント乃王ニ哀訴シテ國民會ヲ廢セント謂ヘリ

其ノ第六月二十日ノ旦ニ及テ國民會ノ大統領及ヒ會議者將ニ會議院

ニ登ラントスルコト例ノ如クス時ニ王家親衛ノ兵來テ之ヲ攔遏シ登ラシメズ且諭告シテ曰ク王親臨會議堂ヲ建立セント欲シ今木工ニ命シ某處ニ遣テ之ヲ謀レリト親臨會議ハ其ノ制法三族ヲ舉テ一室内ニ會議セシメ王親臨シテ其ノ議ヲ聽カンコトヲ要スル所ナリ

時ニ議員皆謂フ王此ノ議院ヲ新立スルニ當テ之ヲ國民會ノ大統領ニ謀ラス自恣ニ私決シ違ニ會議院ニ登ル者ヲ禁遏スルノ亡狀ナルヲ駭リ大ニ激怒ヲ發ス又或ハ恐懼シテ謂フ王或ハ國民會議ヲ廢セント欲スルノ意アルモ亦測ルベカラズト

會議者即憤然トシテ忙急ニ舊蹴鞠場ニ走り至リ此ニ會集シ暴雨ト雖敢テ去ラス謀議シテ共ニ結約スルアリ曰ク政度法律ヲ制定シ全フスルニ非スンハ肯テ國民會ヲ解ク可カラズト

第一百七十二篇

親臨會議ヲ起ス。ミヲゴ―伯ノ激論三彩帽號ヲ用ケル並國  
民衛兵起ル

親臨會議ノ式様頗華美トナス而シテ其法タル古代專制主ノ舊典ニ過  
キ庶民代議者ヲ待遇スルノ禮甚不遜ナリ此ノ會議ニ在テ僧侶貴族ニ  
至テハ華室ニ各席ヲ占メタルニ庶民代議者ニ在テハ暴風雨ト雖其ノ  
議院檐外ニ立テ其ノ議ニ與カラサルカ如シ

時ニ王親建議スル所ノ言ニ曰ク三族各自會議ヲ異ニスルハ余カ望ム  
所ナリト因テ代議者ニ會議ヲ徹了シテ各退去セシム是ニ於テ僧侶及  
ヒ其ノ同議ノ者肯テ去ラズ心中鬱憤シテ敢テ又言ハス

己ニシテ一有司議院ニ來リ代議者等ノ此ニ留ルヲ許サス衆ニ謂テ曰

ク公等速ニ退去セサルベカラズ是王命ナリト再三之ヲ促ス時ニミラ  
ボ―伯席ヲ起テ忿然トシテ大呼シテ曰ク佛國人民代議者ニ於テハ衆  
心同一派ク此ニ留ルコトヲ守定セリト

又有司ヲ詰難シテ曰ク汝輩此ニ來ルコト勿レ汝輩此ニ在テ口ヲ開ク  
ベキ權ナク又王ノ心事ヲ汝輩ニ告クベキ理無シ請フ之テ王ニ告ケヨ  
余等ノ此ニ留ル是人民ノ權利ヲ以テナリ銃鎗ノ力ニ非スハ惡ソ能ク  
余等ヲ驅逐スル者アラシヤト

佛王心性怯弱ニシテ決斷スル所ナキ者亦愛スルニ足ル者アリ其親臨  
シタル後僅ニ四日更ニ貴族ニ命シテ曰ク僧侶及ヒ庶民皆同一會議セ  
ヨト而シテ亦決然トシテ人民ヲ和順セシムルノ術ヲ出タスコト能ハ  
ズ

王又后ノ勸勉スルニ由テ兵人ヲ徵シブルセイヨ府及ヒ巴里府ニ屯集セシム國民會人ヲ威脅センカ爲ナリ時ニ人民ノ王ヲ見ル漠然トシテ干涉セサルカ如ク亦遂ニ之ヲ信奉スル者ナキニ至レリ而シテ民心ノ瞻望歸向スル所ハ宰相チツケールナリ是實ニ依頼スベキ者ト爲セリ而ルニ王復后ノ言ヲ用井テ之カ爲ニ竟ニ人民協和ノ心ヲ解散スルニ至レリ

宰相チツケール其官ヲ褫ルハノミナラス且速ニ佛國ヲ去ラシムコトヲ命セラル此ノ不慮ノ變ヲ聞クニ當テ巴里府下鹽擾臺煎火ノ如ク人民陸續トシテ來リ集リ后及ヒ朝廷ヲ敵視シ皆其ノ帽上ニ赤絲白ノ絹條系テ着ケテ號ト爲セリ而シテ此ノ號ナキ者ヲ見レハ即人民ノ仇敵ト爲シ之ヲ凌辱侮慢シ甚シキニ至テハ暴殺シテ憤慍ヲ洩スアリ

時ニ兵人ニ命シテ此ノ民ヲ逐ハントス而ルニ兵人等其ノ國民ニ向テ肯テ發砲セサルノミナラズ更ニ巴里府民ト相聯合シナシヨナール、ガルド即國民衛兵ヲ、フイエットト稱スル者ヲ撰舉シテ將タラシム

### 第一百七十三篇

佛國變革ノ權輿、パスナイル獄舎ヲ毀ツ王其ノ后ト出奔ス

佛國ノ變革紀元一千七百八十九年第七月十四日ヲ以テ入手ノ第一期トス此ノ日乃王權ニ抗敵シパスナイル獄舎ヲ擊破シ互ニ爭戰ヲ起セリパスナイルハ小城櫓ヲ建築セシ砦塞ヲ云フ然ルニ巴里府中適之ニ類スル一大家屋アリ因テ就テ亦之ヲ稱スルニ此ノ名號ヲ以テシテ監舎ト爲セリ

佛民ノ此ノ名ヲ聞ク者皆驚怖セサルハ無シ獄客アリ客中皆濕土ニシ



テ鼓嶽此ニ充切シ見ル者輒厭惡惱苦ノ念ヲ生セサルハナシ其ノ上唯  
一石ノ稻藁ヲ散布シテ臥床ニ充ツルノミ其ノ他又一物ノアルヲ見ズ  
嘗テ苛政ヲ施シ命罪證書ヲ以テ衆ク人ヲ暴殺スル者皆此ノ獄舍中ニ  
拘フ斯ノ如キ暴主恃テ以テ至要トスル所ノ獄舍亦輒廢毀スルニ至ル  
是時王兵人ニ之ヲ守ラシム而ルニ遂ニ衆民ニ奪取セラレ後ニ巴里府  
ノ市尹之ヲ廢毀スト云フ

其ノ獄舍ニ用井ル所ノ石ハ一モ遺ス所ナク悉之ヲ打毀シ其ノ獄舍ノ  
門鍵ヲ以テ之ヲセテラルウハシントシニ贈レリ是ウハシントシ暴君  
ニ抗敵スル大黨ノ巨魁タルヲ以テナリ而シテウハシントシ其ノ鍵ヲ  
以テ之ヲ米洲合衆國ニ捧呈シテ今尙華盛頓府ニ存セリ

時ニ其ノ人民ヲ抑制セント謀ルハ勢保テ難キコト明カナルニ因テ遂

ニ復テツケールヲ以テ宰相トス是ニ於テ人民同心欣然歡喜セザルハ  
無シ王ノ兄弟及ヒ后ニ黨與セル貴族輩皆惕然トシテ禍難ノ將ニ身ニ  
及ハントスルヲ恐レ王ト后トテ棄テ相率井テ國ヲ遁レ去レリ

其ノ故國ヲ棄テ去ルノ不信不愛ノ報乃著明ナルニ至レリ時ニ王彼輩  
ヲシテ必歸國セシメント欲シ書牘ヲ送テ懇々トシテ之ヲ召シ還ス后  
モ亦手書ヲ以テ人ニ贈レルアリ其ノ書ニ曰ク苟公等我王ヲ愛シ其ノ  
宗教ト政廷トヲ顧ルノ意アラハ速ニ還リ來レ嗚呼歸來セヨヤ歸來セ

ヨヤト

斯ノ如キ懇篤ノ書ヲ與フト雖亦其ノ意ヲ達スルコト能ハス蓋故國ヲ  
棄テ去ルノ人其ノ意佛國ニ還リ身其ノ擾亂ニ死スルハ固ヨリ肯テ欲  
セザル所ト謂フ又孰レノ地孰レノ處ニ在レトモ猶佛王ノ爲ニ其ノ利

ヲ謀リ國家ニ益スル所アヲント謂フカ今其ノ國ヲ去ルノ人ヲ稱シテ  
エミグランドト即移住外邦人ト喚ヒ做セリ

第一百七十四篇

爵名ヲ廢ス宰相チツケールノ品行、ボハツサルドノ事、并ニ王  
巴里府ニ入ル

國民會ノ者皆慎思同議シテ國法ノ不善ヲ釐正セントシ僧徒貴族ト相  
争フノ勢アリ僧徒貴族モ亦其ノ國家ヲ平穩ナラシメンカ爲ニ大ニ心  
力ヲ竭シ其志ヲ遂ケントスルノ勢アリ且貴族僧徒等一タヒ其ノ事ヲ  
成サントスルヨリ騎虎ノ勢止ムベカラズ是ニ於テ悉佛國中ノ諸特許  
ノ權ヲ廢セリ

茲ニ國會議員ノ者又世襲ノ爵名及ヒ民族ノ等級殊別アルヲ止ム然レ

トモ當時國民會ノ爲ス所ハ後ノ國民會ノ爲ス所ニ及ハス後ノ國民會  
ニ在テハ人民ヨリ書牘上ニ他族ヲ稱シテ例ニモレニュールマダムノ語  
ヲ用井ルヲ以テ貴族ノ常體ニ拘泥スル者トシ即之ヲ廢シテ代フルニ  
シトヨシトヨロヨノ語ヲ以テセンコトヲ建言セリ

人民族類ノ等級ヲ止ムルノ議出ルニ及テ宰相チツケール始テ之ヲ拒  
論スチツケールハ庶人ニシテゼチヴァ瑞西國一府共和政國ニ成長セシ人

ナリ其ノ意ニ謂フ凡拔群ノ功勞アル人之ヲ旌表スルニ爵名ヲ以テセ  
ザルベカラザル者ナリト而シテ斯ノ人國民會ノ建議スル所極メテ過  
刻ナル一二條件ヲ抗論シテ大ニ其ノ威望ヲ損シ竟ニ紀元一千七百九  
十年第九月四日ヲ以テ其職ヲ辭スルニ至レリ

斯ノ人嚴肅ニシテ純忠ナルヲ以テ在職中大ニ人望ヲ得タリ致仕シテ

其ノ故國ニ還リ田園ニ安臥シ紀元一千八百四年ヲ以テコーペーニ沒セリ

是時佛王ノ族類タル者僅ニ王后太子王女及ヒ王妹エリサベスアル而已太子ハ紀元一千七百七十八年ヲ以テ誕ス皆ヱルサイヨ府ニ居ルヨリ斯ノ時ニ至レリ

第十月六日ニ及テボハツサルド魁首トナリ民衆ヲ煽動シ兵ヲ起セリボハツサルドト云フハ魚サバ里府ニ賣ル女子ヲ通稱スル所ノ名ナリ民兵ヱルサイヨ府ヲ攻テ直ニ王宮ニ向フ其ノ間殺戮殘毒ヲ行フ者概女子輩之カ唱首タルコト知ルベシ

女子ノ性ハ其ノ意常ニ人ヲ困厄セシムルヲ以テ自快シト爲ス又其ノ女工ノ恒業ヲ爲サ、ルニ至テハ則輒其ノ婦女ノ情態ヲ失フガ如ク然

リ是時苟ゼテラルラ、フイエットノ其ノ間ニ周旋シテ調護ヲ爲スニ非ズンバ宮中ノ人悉此ノ毒禍ヲ被ラン

ゼテラルラ、フイエットノ調護ヲ得テ王民衆ノ請フ所ヲ聽シ王族ト共ニ民衆ヲ率テ還リテ巴里府ニ入ルヲ得遂ニツイルロー宮ニ居ル而ルニ仍監護セラレ其ノ花園ニ散步スルモ監守者六人アリテ之ニ從フ后モ亦然リ國民ノ監守スルニ非ザレバ戶外ニ出ツルヲ得ズ是ヲ以テ監守ノ人ニ聽カズレテハ一言一語モ親交ト相接スルコトヲ得ズ太子年僅ニ五歳天性善良ナルカ如シト雖亦監守人ヲ隨フニアラスハ櫛器把手等ヲ携ヘテ小庭ニ遊樂スルダモ且能ハズ

第一百七十五篇

盟約ノ事、移住人民自一軍ヲ編成ス

國民會議ヲ以テ國法ヲ設立シバスイルノ期日ヲ以テ王ノ確定ヲ取  
ルニ決議セリ貴族輩例年ノ三月ヲ以テ會スル所ノ大原野アリ是故ニ  
レヤン、ド、マルス即原野三月ト號スル者ヲ以テ此ノ禮儀ヲ行フ處ト爲ス  
ヲ定ム

一大圓臺ヲ此ノ原野ニ經營セントシテ二萬五千人ノ傭夫ヲ用ヰテ土  
木ノ工ヲ創起ス而ルニ其ノ成功ノ遲緩ナルハ人民自主自由ノ權利ヲ  
欲スルノ急ナル所ニ戾ルヲ以テ是ニ於テ貴賤老少男女ヲ間ハズ二十  
五萬人餘令セズレテ群至レ此ニ周旋セリ  
衆庶各皆我國法ヲ保護スベキ盟壇ヲ建ツル所ノ工事ヲ助クルヲ以テ  
榮ト爲シ袖手傍觀スル者ナク鄙事雜業ヲ爲ス者ト雖皆相俱ニ來集シ  
自働鏟ヲ執テ樂テ工事ヲ助ク

時ニ華裝麗飾ノ子女少艾アリテ去來スルハ各土ヲ盛レル小車ヲ挽キ  
壯男健兒ハ皆輻重車ヲ挽ク衆人合力斯ノ如クナルヲ以テ僅ニ一周日  
ヲ經テ圓臺乃落成ス其ノ速ナルコト天魔ノ幻術ニ因テ見出セシムル  
カ如ク皆驚怪セサルハナシ

三十餘萬ノ人民一時來集シ貴盛ナル媛妃ト雖皆白衣ヲ服シテ此ノ大  
儀ヲ助ケ行ヘリ實ニ紀元一千七百九十年第七月十四日トス是ヲコン  
フエデラーレホン盟約ノ義ト名ツク此ノ大集民中ニ於テ王ノ代議者及ヒ

衛兵ノ代理人ヲ、フエエット等國法ヲ監督シ能ク之ヲ保護セント云フ  
ノ情狀ヲ誓約セリ

此ノ誓言大ニ巴里府ニ布行セシヨリ移住外邦人ノ員日一日ヨリ増加  
シ紀元一千七百九十一年ノ春ニ及テ移住人民日耳曼國境ロングウイ

一ニ於テ自一軍ヲ編成セリ其ノ軍服ハ一齊ニ黑色ニシテ前ニ黃裏ヲ折反セリ其袖ノ一偏ハ死人ノ髑髏ヲ畫キ其ノ周圍ニ月桂樹葉ヲ點染シ一偏ハ刀劔及ヒ「勝ツカ死ヌカ」ノ題目ヲ標記セリ

第一百七十六篇

王族ツァレーンニ遁ル

斯ク殘忍暴行ノ民勢日ニ盛ニシテ從前王后ニ忠志ヲ通スル官人及ヒ臣僕等漸次殺害セラル、ニ及ヘリ是ニ於テ王后及ヒ其親族等巴里府ニ在テ長ク安全ヲ保ツ能ハザルヲ知レリ

然レトモ此ノ厄ヲ遁ル、コト能ハス彼ノ后ニ從フ者皆己ニ宮中ニ禁錮セラレ監守甚嚴ナルヲ以テ明證ノ書通或ハ印信アラザルヨリハ敢テ市坊ニ出ルコトヲ得ス茲ニ瑞典ノ一貴族アリ來テ巴里府下ニ居ル

此ノ貴族爲ニ奔逸ノ一妙策ヲ量出シ來レリ

瑞典人茲ニ魯西亞ノ貴媛其ノ親族ト共ニ將ニ巴里府ヲ出テ去ラントシテ二片紙ノ允裁印書ヲ有持セルヲ認識セリ是ヲ以テ謀ヲ成スヘルト爲シ王子等ノ宰婦ハ魯國ノ貴媛ニ擬シ太子及ヒ其ノ姉ハ魯媛ノ二女子ニ擬シ后ハ宰婦ニ擬シ王ト王女イリサメスハ侍者ニ擬シテ以テ都門ヲ出テアンコトヲ計レリ

民兵等之ヲ知り速ニロングウィーニ執ヘ去ラント欲シ快走ノ良馬ヲ以テ一要衝ノ地ニ備フ時ニ瑞人ノ心算既ニ完備ス乃太子及其ノ姉ヲ寢室ヨリ出セリ太子猶宿夢ヲ帶テ立ツコト能ハス民兵等其ノ女装スルヲ見テ訝リ問フ爾衆演戲ヲ爲サント欲シテ出ルヤト

時ニ謀テ謂フ兒童宰婦ハ車ニ駕セシメ宮ヲ離レ出ルコト少距ノ地ニ

在テ相待タント太子ハ其ノ事ノ危キヲ知ラズ車中ニ在テ尙熟睡セリ  
皇女ハ年齒稍長セルヲ以テ危難ニ遭遇スルノ地ニ臨メルヲ知レリ時  
ニ紀元一千七百九十一年六月二十日ナリ

彼ノ地ニ待ツコト殆一時三秋ノ思アルコト知ルヘシ少頃ニシテ王后  
來會レ急遽俱ニ共ニ相擁シ去レリ此ノ六人ノ宮ヲ出ル其ノ中心懼ム  
ヘク搖々トシテ頼ルヘキ所無キノ情況凄然トシテ憐ムベキハ是ヨリ  
甚キハアラザルベシ其ノ危難懼ルベキノ地ヲ經過スルコト方ニ夜ノ  
深更ニ當レリ

王等三人ノ貴族ヲ從ヘ之ヲ奴僕ノ用ニ充ツ而レトモ王族ノ援ナキ更  
ニ危難ノ地ニ至ラシメ王ノ災害ヲ増シ命脉ヲ蹙ルニ及バンメントス  
王后ハ常人ノ如クナルコト能ハス行旅ノ事ニ至テハ其ノ尤辨知セザ

ル猶小兒ノ如シ

而シテ王等幸ニ危難ニ罹ルコトナク夜半ヨリ翌日ニ達ス唯車駕ニ些  
少ノ變故アリ僅ニ遲滞ヲ爲セルノミ此ノ遲滞亦大ニ彼等ノ運命ニ關  
涉スル所アリ

移住民ノ一隊兵一地ニ要シテ王族ノ來ルヲ待ツコト已ニ數時曾テ王  
族ノ至ルヲ見ズ是ニ於テ翻然意ヲ改テ謂フ王等其ノ野人ニ認メラレ  
ンコトヲ恐レ己ニ前議ヲ廢棄セシナラント王等乃急ニ捷徑ヲ取テヴ  
アレーント云フ地ニ達セリ

第一百七十七篇

ヴァレーンニ遁走スル次篇

王族此ニ達スルニ當テ民兵己ニ去テ踪蹟無ク亡命者守兵ノ此ノ地ニ

在ラサルヲ以テ更ニ驚疑ヲ生シ漸ク進行シテアサンメヌホウニ達セリ是ニ於テ王前路ヲ問ハント欲シ車窓ヨリ左右ヲ回顧セリ

是時ドルウエート云フ者アリ適ニ王ノ面ヲ認識セリ斯人斯日巴里府ノ貨幣ヲ得タリ幣面ニ王ノ面貌ヲ印セリ是ニ由テ大ニ其面ノ王ニ似タルヲ驚認ス

ドルウエー進テ其ノ車駕ニ近ツキ王ト后トヲ視テ始テ其ノ心ノ恠疑ヲ釋キ速ニ之ヲツアレーンニ報知セント欲シ直ニ走テ彼ノ地ニ赴キ告ケ王族モ亦迫テ進行シ昏夜ニ及テ遂ニツアレーンニ達ス然レトモ其ノ衛兵ノ所在ヲ知ラサルヲ以テ圍都ヲ周巡シテ之ヲ搜索セリ斯ノ如ク遲緩猶預スルノ間ドルウエーツアレーン人ヲ鼓動シテ其ノ勢驍然タリ

是ニ於テツアレーン都下ノ人民大ニ騷擾シ亡命者ノ經過スルヲ過シントシテ柵ヲ設ケ之ヲ守レリ王ノ車駕已ニ圍中ニ在リ護兵亦已ニ追ヒ至リ此ノ圍ヲ擊破シ王ニ向テ進行セシムヘキヤ否ヲ問フ

王護兵ニ問テ曰ク斯ノ如クハ衆多ノ人命ヲ殺スニ至ルヤ護兵曰ク然リ強テ之ヲ爲セバ多少ノ性命ヲ絶ツ必セリト是ヲ聞テ王自意ヲ決シ因撃セラレンコトヲ請フ而シテ王族車駕ヲ下リ市正ノ家ニ入ル此ノ市正ハ小肆店ヲ開ク者ナリ

后其ノ肆店ニ坐シ市正ノ妻ニ對シ悉々トシテ説諭シ王族ヲ憫恤センコトヲ請フ其ノ妻ハ市廳ノ事ニ於テ管當スル者ノ如シ

其ノ妻大ニ感激スル所有テ慨然トシテ流涕スルニ至ル而ルニ尙意見ヲ強持スル所有テ肯テ之ヲ許サス乃謂テ曰ク妾若后等ヲシテ遁逃セ

シメハ我夫忽將ニ死ニ處セラルベシト而シテ后マリ―アントアチツト再三之ヲ辨解懇請スレトモ遂ニ其ノ意ヲ達スルコト能ハス  
 憐ムベシ亡命人皆再車駕ヲ還ヘサヽルヲ得サルニ至レリ王族此ニ到ルノ報傳聞シ人民卒ニ群集シ不禮ヲ加フルコト甚衆シ國民會ヨリ至ル所ノ代議者バルナーヴ及ヒスナコンノ二人王ヲ巴里府ニ還迎セント欲シ亦此ニ會合セリ

代議者近ク車駕ニ謁見スバルナーヴハ王族ヲ接待スルニ恭敬禮貌ヲ以テスレトモベナコンハ貴族ナルニ共和政黨タルノ狀ヲ示シ傲然トシテ其ノ王ニ抗敵シ一毫モ尊崇ノ意無ク太子ヲ擁持シテ其ノ膝上ニ置キ舉動頗粗暴ナリ其ノ指環ヲ以テ之ニ太子ノ髮毛ヲ捲テ娛樂ト爲スニ至ル

憐ムヘシ亡命兒半ハ恐懼シ半ハ憤怒シ忽大叫一聲ヲ發セリ后ノ意忍耐スル能ハサル所アリ愾志シ之ニ謂テ曰ク余ニ吾兒ヲ與フヘシ吾兒常ニ寛柔温厚ノ撫字ヲ受ク斯ノ如ク粗暴殘酷ヲ受クルニ堪ヘスト

### 第一百七十八篇

佛后其ノ相貌ヲ變ス、移住人、國人同力

此ノ大ニ憐ムヘキ亡命者ヲ遇スル更ニ慘酷ヲ究メ復ツウイロリー宮ニ移レ之ヲ監護スルコト嚴ナリ兵人其ノ室口ヲ守リ晨昏惰ヲス后ノ寢室ノ如キハ常ニ其ノ戸ヲ開キ僅ニ且暮衣ヲ更フルノ間之ヲ閉ルコトヲ得ルノミ

プリンセス、ド、ブムバル女ハ曾テ英國ニ出奔セリ而シテヴァレーンニ出奔スル王族皆人民黨ニ遮隔セラレ復巴重府ニ還ルヲ聞キ乃艱苦ヲ



俱ニシ獄舎ヲ俱ニセンコトヲ欲シ還テ巴里府ニ至ラントス時ニ英國女王之ヲ留メント欲シ百方説諭スレトモ聽カス

此ノ女還リテ遂ニツウイロリー宮ニ入ル其ノ佛國ヲ去ル僅ニ二三週日間ノミ而ルニ佛后マリーアントアチット暴ニ其ノ相貌ヲ變スルアルヲ見テ大ニ訝リ或ハ以テ我カ感想スル所ニ出テ、信ニ然ルニアラザラント謂フ后ノ眼肉消瘦シテ陷ルカ如ク其ノ頭毛一夕ニ雪ノ如ク遽ニ十數年ノ齡ヲ加フルノ看ヲ爲セリ

后ノ容色斯ノ如ク消瘦シ其ノ望ム所殆ト挫折セリ而レトモ其ノ操行温厚ニシテ威儀アル尙故態ヲ存セリ時ニ臨ミ機ニ應レテ高尚ノ威力ヲ見ハセリ然レトモ后モ亦終ニ昏睡病ノ如クナル猶王ノコトシ

王族ニ抗敵スル移住民及ヒ其ノ黨與タル墺太利人普魯西人等ノ思慮

ナキ處置ヨリシテ世亂益甚キニ至ル何トナレハ墺帝普王等其ノ臣民皆佛國ノ例ニ倣ヒ君主獨裁政治ノ強制ヲ免レンコトヲ欲スルニ至ルヘキヲ疑懼シ竟ニ兵威ヲ以テ其ノ自主自由ヲ得ントスルノ民心ヲ抑遏セント決議セリ

兵事ニ老熟スル佛國士官多クハ移住人中ニ在ルヲ以テ墺帝普王等前ニ説ク所ノ事行ヒ易シト爲ス又謂フ其ノ兵佛國ニ入ラハ必其ノ國ノ貴位ニ在ル者悉ク我ニ與スヘシ然ルトキハ不熟不精ノ小民輩何ソ能ク普國老練ノ兵士ニ敵スベケンヤト此ノ結盟軍將タル者ハ即フランスウイック侯ナリ

フランスウイック侯先布告スルニ王ノ尊重シテ永ク保護セントスルノ權利ヲ拒論セン者ハ悉ク嚴刑ニ處セント云フヲ以テシ巴里府ノ如

キハ全ク之ヲ擊破セントスルヲ示シ大ニ威嚇迫脅セリ此ノ布告ノ出ルニ當テ全佛國民大ニ激怒シ盡ク諸黨ノ評議ヲ廢棄シ唯外邦ノ敵人ヲ抗拒シ其ノ國土ヲ防護センコトヲ主張シ同一結合セリ

第一百七十九篇

一千七百九十二年第八月十日ヲ以テ王遂ニ廢セラレ王族獄ニ繋ガル

紀元一千七百九十二年第八月十日ニ及テ人民大ニサユイレリニ群集ス王族ハ國民會議院ニ遁シ其身ヲ全クセントス瑞西兵ノ宮ヲ守衛スル者衆民ノ己ニ宮ニ迫リ退去セシムヘカラサルヲ知り乃宮中ヲ銃撃シテ殺傷スル所亦多シ是ニ於テ人民ノ忿怒ノ情止ムベカラサルヲ知り遂ニ國民ノ衛兵ニ聯

合セリ此ノ衛兵ハワ、ファエットノ督スル所ニアワズ而シテ宮中ニ突入シテ在ル所ノ人悉ク殺害ヲ被ル是ニ於テ又王ニ一大訟ヲ歸セリ瑞西兵ノ宮殿ヲ燒クハ即王ノ命スル所ナリト爲シテ其ノ人民ニ抗敵スル戰爭ノ法ヲ取り罪ヲ王ニ歸スルニ至レリ

王ニ敵對スル者乃王位ヲ廢シ王族ヲ禁監スベキ好機會ヲ得タリ其ノ禁獄ノ處ハ鬱然タル古朴ノ一家屋ニシテ從來ナイトノダンブリエー黨ニ屬セル者ナリ而シテ今猶ダンブルノ名ヲ存セリ

王族獄中ニ在テ其ノ痛心苦思ニ換フヘキ諸物ヲ作りテ自慰ム王后及マダム、エリサベットハ獄中ニ在テ獨其ノ二童兒ヲ教育シ相與ニ教法ノ書籍ヲ誦讀スル外又他事ヲ爲サズ

又王族ノ移住人ニ通信センコトヲ懼レ筆紙墨ヲ禁シテ與ヘズ而レト

モ皇女特ニ方畧ヲ以テ數小片紙ヲ得タリ是ニ於テ鉛筆ヲ以テ日記ヲ作ル此ノ紀後年ニ於テ刊行セリ

一侍臣僅ニ王ニ奉仕スルヲ得タリ其名ヲクレリト云フ恐クハウエー  
ペールノ説

王大ニ之ヲ信服ス初時室内ヲ掃灑レ寢床ヲ理ムル總テ一婦女ヲシテ助ケ爲サシムルヲ許セリ而ルニ其ノ女爲ス所漸粗鹵ニシテ接遇殊ニ薄惡ナリ幾モナク狂疾ヲ發ス王族等已ニ無量ノ苦惱ヲ受ケ又此ノ女ノ爲ニ焦慮スルニ至レリ

爾後二皇女ノ家事ヲ營ム始メハ爲ス所ノ拙劣ナルノミナラス大ニ自疲勞セシカ如クナレトモ今ハ習慣自然ノ如ク縫裁ノ事ニ至テハ其ノ困倦ヲ慰ムルニ足レリトス而レトモ是モ亦禁止セラル是私ニ其ノ友人ニ通信スルノ一害ヲ爲スベシト云フヲ以テナリ

王等ノ常ニ不敬ヲ受ケ憂悶ヲ取ル一ニシテ足ラス又屢官人看守者ノ來テ王等ノ紙ヲ有スル者アリヤ否ヲ詰問搜索スルコト密ナリ而シテ率其ノ紙ヲ持スルヲ以テ大逆ト呼ヒ做スニ至ル偶々皇女イリサベツト茶壺ヲ盜ムト稱シテ罪セラレ其ノ不敬亡狀ノ甚シキ率此ノ類ナリ茶壺ヲ失ヒシハ誤テ他所ニ置ケルナリ

其ノ不敬ヲ受ル斯ノ如ク甚シキニ尙確乎トシテ正氣ヲ持シ忍耐シテ一毫不平ノ氣ヲ見ハサス愁訴ノ情ヲ出サス王ノ人ト爲リ偉ナリト謂フヘシ王ノ性怯勇相半ス其ノ危急大難ニ臨テハ怯弱ニシテ強骨ナキ殆幼兒ニ異ナラサルカ如シ而ルニ此ノ大不幸ノ運ニ會シ能ク艱苦ニ忍耐シテ志節ヲ屈セサルノ強剛ナルハ亦頗人ニ過絶セリ

國民會院ニ繼テ起ル者ヲアマサンブレ、ナシヨナル、レザスタケーヴ  
即國民立法會院ト爲ス是人民ノ撰舉スル所ノ議員ヲ以テ成立セシ者  
ナリ紀元一千七百九十二年第七月二十日ヲ以テ此ノ議員等コンヴァ  
ンション、ナシヨナル即國民大會議ヲ爲セリ其ノ初日ニ在テ己ニ國  
王ト云フ者ヲ廢スルヲ議定セリ

各又議シテ確定スラク從來耶蘇降生ヲ以テ元ヲ紀セシ法制ヲ廢シ悉  
ク此ノ共和政治ト成ル日ヲ以テ元年ト定メ永ク之ヲ記載セントス此  
ノ元年即一千七百九十二年第九月二十三日ナリ又其月名ヲ改メ正月  
二月等ノ名ヲ變改シテ兩月風月等ノ其ノ氣候ヲ示スノ名ヲ用井タリ  
自由黨ハ悉ク此ノ議ニ同意セリ而ルニ其ノ大ニ王族ノ待遇其ノ他ノ

事件ニ關涉スルアルヲ以テ又茲ニ二黨類アリテ起レリ其ノ宜キニ適

スル者ヲシロンドン黨ト爲ス是シロンドン縣ノ南西ヨリ出ツル者

部ニ在リ

多ク之カ首魁タルヲ以テ此ノ名アリ又其ノ黨ノ長上タル者ノ名ヲブ

リッソート云フヲ以テブリッソーナント號セリ

一ヲラ、モンタンヨ黨ト名ツクラ、モンタンヨハ山ト云フ義ナリ是其ノ

漸次會席ニ昇り列坐セル恰山ノ如クナルヲ以テ此ノ號アリ而シテ又

シヤコバン黨ノ名アリ世ニ著名ナル所ナリ是シヤコバンノ黨人多ク

之ニ黨與セルヲ以テナリ其ノ首長タルモノヲダントシロベスピュー

ルノ二名トス

ブリッソーナン黨ハ共和政体ヲ建テシコトヲ主張セリ而レトモ猶王

家及勤王家ヲ待遇スルコト頗温和ナリシヤコバン黨ノ一大眼目トス

ル所ハ王ヲ殺サントスルニ在ルノミ大會議ニ在テハシヤコバン黨ノ人員シロンドン黨ノ如ク衆多ナラズト雖其ノ迫脅威制スルヲ以テ亦温和人ヲ誘フテ其ノ酷烈ナルヲ倣ハスニ至ラシム

同盟ノ軍隊一時大ニ氣勢ヲ振ヒ直ニ進テ巴里府ニ迫ラントスルノ色アリ府下人ノ之ヲ知ル者大ニ忿怒兇暴ヲ激發スルニ至レリ

巴里府ニ於テ一廳ヲ設ケ囚徒ノ男女老少ヲ間ハス悉ク其ノ前面ニ集メ之ヲ窮詰糾難スルニ愚弄嘲侮ヲ極ム茲ニ王ノ親友アランセス、ド、ラムバールト云フ者頗容色アリ其ノ囚中ニ在リ同シク嘲侮ノ糾彈ヲ受ケ隨テ殺戮セラレ其ノ首ヲ竿頭ニ掲ケ王族ノ監舍前ニ來テ之ヲ縱觀セシム

后此等ノ凶恠ナル光景ヲ目シテ氣絶悶倒スルコト敬時紀元一千七百

九十二年第九月巴里府ニ殺戮セラル、者數千人之ニ倣フテ佛國中各地ニ於テ此ノ慘刑ヲ行フコト多シ此ノ時勤王家或ハ豪富ノ民苟群民ニ妨害ヲ爲ス者皆打盡シテ遺ス者ナシ

佛國人民ノ輕率ナル情態ハ此ノ殘忍ナル事實ヲ記載スル所ノ書傳ニ於テ極メテ悉セリ茲ニ一俳優ノ舞蹈ニ名アル者アリ其ノ愛國ノ情無シト云フヲ以テ遂ニ死刑ニ處セラレントス而ルニ其ノ終年纏頭俸錢無クシテ戲場ニ上ルト云フヲ以テ又其ノ罪ヲ免レタリ

### 第一百八十一篇

#### 第十六世路易糾彈ヲ受ケ死刑ニ處セララル

紀元一千七百九十二年第十二月二十五日ヲ以テ王路易ヲ大會議院ニ呼ビ來リ其ノ罪狀ヲ陳解セシメントス路易其ノ幫助ヲ得ヘキ正廉ノ

代議者ヲ用井ルヲ許スヲ請テ其ノ請ノ如クナルヲ得タリ此ノ事ノ至難ナルガ爲ニ王其ノ人ヲ求ムルニ唯トロンシエテセーゾノ二員之ヲ許諾セリ

第三人ダアルゼート云フ者ハ之ヲ辭セリ而シテ佛國中最著名ノ代議者ドマルジエルブ乃繼テ此ノ任ヲ受ケント請フ王即此等ノ端人ナルヲ喜テ之ニ任セリドマルジエルブノ公正寛大ナル實ニ人民ヲシテ感激セシム而ルニダアルゼーニ至テハ其ノ爲ス所之ト相反シ大ニ衆人ノ惡ミヲ取り漁夫販婦ト雖其ノ人ノ雲泥ノ別ナルヲ識レリ乃花環ト月桂樹葉トヲドマルジエルブノ門ニ掛ク是祝賀スルノ意ヲ表セルナリダアルゼーハ大ニ彼等ノ輕侮ヲ被ルニ勝ヘス終ニ其ノ身ヲ避匿セ

是ニ於テ王復其ノ親族ヲ見ルヲ得ス因テ屢之ヲ請フ黨人王ニ告テ曰ク對獄ノ時ニ在テ后及其ノ姉妹ニ通信スルコトヲ欲スル勿レ若之ヲ欲セハ王子ト相見ルヲ得ヘシ但斯ノ如クスルトキハ其ノ子タル者ハ母及伯母ニ見ユルコトヲ得スト路易此ノ條ノ言ニ依ルヲ欲セズ因テ終ニ復請ハズ

ラゼーフ王ノ陳情書ヲ讀メリ然レトモ大會議院ニ於テ敢テ宥恕セス一人トシテ王ノ冤枉ヲ辨論スル者ナシ其ノ處刑ヲ論スルニ至テ七百二十一中三百六十六ハ其ノ死刑ニ處スヘキヲ論セリ

オルレヤンス侯ヒリッブ、エガリテー

エガリテーハモ亦死刑ニ處スベ  
同等ト云フ義

シト言フ時ニ各議員侯ヲシテ大聲ニ之ヲ唱ヘシム是ニ於テ侯大呼シテ路易罪アリト言フ其ノ親戚タル者路易ヲ死ニ處スヘシト大聲スル

ヲ聞キ人々忿怒シテ一聲ニ大惡逆奴大兇漢ト罵詈シテ大聲ヲ發セリ  
 王路易ニ對シテ最抗敵スル者ト雖今侯ノ明比シテ其ノ近親ヲ宥厄ス  
 ルヲ惡マザル者無シ路易紀元一千七百九十三年正月ヲ以テ竟ニ死刑  
 ニ處セラルル而シテ其ノ歲末ニ及テオオルレヤンス侯モ亦路易ノ如ク其  
 ノ第十一月六日ヲ以テ死刑ニ處セラルル是又他黨ノ爲ニスノ如キ冤死  
 ナ取レリ

路易ノ死既ニ決案ス其罪名ヲ國民ニ公問セシコトヲ請フ而レトモ肯  
 テ之ヲ許サズ遂ニ一千七百九十三年第一月二十日其ノ明日ヲ以テ刑  
 死スヘキヲ公告ス路易三日ヲ緩フセンコトヲ請フ是神明ヲ敬禮スル  
 ノ備ヲ爲サントスルカ爲ナリ然ルニ亦敢テ聽サス其ノ日ノ夕陽ニ及  
 テ路易其ノ妻及親族ニ一訣スルヲ聽サル訣別ノ時其ノ相見テ痛恨酸

辛ナルコト知ルヘシ而ルニ路易平生克己敬謹ノ心ヲ失ハス從容死ニ  
 就クノ備ヲ爲シ平素信奉スル所ノ教旨ヲ觀念シ心怡然タル所アルカ  
 如ク然リ

其ノ第一月二十一日朝第八時ニ及テ路易將ニ刑場ニ就カントス而ル  
 ニ毫モ驚懼ノ色無ク威儀儼肅步履閑雅徐ニ場上ニ登レリ此ノ動止平  
 常難苦ニ忍耐スル所ノ意氣ニ異ナラス終ニ臨テ路易聲ヲ放テ號泣シ  
 テ曰ク佛國人宜ク聽クヘシ今余冤枉ニ死ス余且我カ仇敵ヲ恕スヘシ  
 ト王猶言フ所アラントス忽鼓聲鳴動シテ言フ所ヲ聞カサラシム是其  
 ノ揚言ヲ攪擾セン爲ニ設ケ爲ス所ナリ

削手路易ノ傍ニ立テ一刃將ニ快撃セントスエツザウオルト忽大聲ニ  
 呼テ曰クサン路易ノ子昇天セヨト即刃光閃然トシテ王路易身首處ナ

異ニセリ場ヲ圍守スル衛兵數人大音ヲ發シテ曰ク國民安然ナルコトヲ得タリ共和政治成就セリト但多少ノ兵士ハ沈黙シテ只管速ニ此ノ場ヲ退キ去ランコトヲ首長ニ請フ

路易ノ死スル享年三十九佛國王者中ニ聞エタル者ノ一人タリ而ルニ先王ノ暗昧ニシテ罪惡多キニ因テ遂ニ此ノ枉害ヲ被ルニ及ヘリ佛國人民數百年間王者ト貴族トニ抑壓セラレ久シク其ノ胸懷ヲ伸ルヲ得サルノ甚キシニ堪ヘス終ニ兵力ヲ以テ此ノ抑壓制度ヲ打破スルノ權利ヲ有スルニ至レリ然レトモ自由自主ノ名目ヲ借テ斯ノ如キ慘毒惡ムヘキノ殺戮ヲ爲スニ於テ又實ニ其ノ心ニ期セサル所ナリ

### 第一百八十二篇

太子ヲ稱シテ第十七世路易ト爲ス

后及ヒ王族ノ不幸ナル實ニ憐ムヘシ僅ニ生存スルコトヲ得ルト雖身繫囚中ニ在リ獄裏ノ苛逆兇暴ナルニ堪ヘス乃コンヅアンシヨシ即大會議院ニ命シテ太子ヲ他ノ王族中シモント云フモノニ寄托ス此ノ人不學殘横ノ士ナリ今特ニ之ヲ舉ルハ其ノ意知ルヘシ時ニ第七月三日ナリ乃太子ヲシテ其ノ父母ニ稟賦スル所ノ善良ノ性行ヲ棄擲シ又彼ノ不學兇暴ヲ倣ハシム又日ニ烈酒ヲ飲ムヲ習ハシメ或ハ屋窓ニ倚テ卑陋ノ誓詞及ヒ兇惡ノ詩ヲ讀マシムルコト數次以テ兵卒人ヲ樂マシムルノ意態ヲ爲セリ

憐ムヘシ太子天稟卓越ノ美アルヲ以テ薄運ニ遭遇シ居ルコト數月其ノ接待ノ苛酷ナルカ爲ニ其ノ軀羸弱シテ竟ニ化シテ愚矇トナル而レトモ母后ヲ愛戀シテ常ニ置カス其ノ屢々凌辱セラレテ逆境ニ耐忍スル



一事ニ於テ性ノ美タルコト見ルヘシ或ハ老吏ノ其ノ后ノ罪ヲ鍛鍊セ  
ント欲シ太子ヲ誘フテ之レカ陰事ヲ白セシメント欲シ強テ疑書ヲ錄  
シテ押印セシム

時ニ太子ノ心若シ此ノ老吏等ノ誘騙ニ隨ヒ一語ヲ發セハ必將ニ母后  
ノ罪狀ヲ捏造シ遂ニ之ヲ殺サントスルノ術ナルヲ悟リ敢テ一片ノ説  
話ヲ發セズ是ニ於テ兇徒或ハ威劫シ或ハ勸誘スレトモ尙固守シテ敢  
テ一言ヲ發セズ

紀元一千七百九十四年第一月ヲ以テシモン太子寄托ノ任ヲ罷メ更ニ  
之ヲ大室中ニ閉鎖セリ時ニ太子甫メテ八歳其ノ臥床ヲ供セサルコト  
六月其ノ襪衣及襪ヲ更ヘサルモノ一年餘其ノ斯ノ如ク大寤難ニ遇フ  
ヲ以テ身體益衰憊シ其ノ力自洗浴スルスラ且能ハス又其ノ憫ムヘキ

ハ此ノ鬼界ニ在ル約一年餘終日一事ノ作スヘキ無ク又終夜一燈ノ明  
ヲ取ルベキ無ク一點ノ情思ヲ消遣スル所ナシ  
但是監獄吏ノ交代スルニ會フテ僅ニ其ノ軀勢ヲ變スル所アリ即新監  
吏ノ來テ其ノ平生ノ缺陷ヲ補フコトヲ得ル是ナリ時ニ監獄中ガルニ  
エート曰フ者アリ入テ太子ニ侍スル者數時務メテ太子ヲ慰籍娛樂セ  
ント欲ス太子ノ幽囚セラル人ノ憐恤愛撫ヲ蒙ラサル日己ニ久シキ  
ヲ以テ便ガルニエート親昵スルコト舊交ノ如シ

然レトモ太子ニ侍シ留意教誨スルノ日己ニ晚シ太子ノ溫柔ナル美質  
ヲ戕害シテ其ノ心識ヲ衰耗スル猶其ノ肢休ノ漸衰弱スルカ如シ且其  
ノ艱難酸辛ヲ嘗ル最多ク最久シキニ因リ紀元一千七百九十五年第六  
月ヲ以テ勤王ノ諸士公告シテ以テ之ヲ王ト爲シ稱レテ第十七世路易

## 第一百八十三篇

## 王族生存スル者ノ運命

后其ノ太子ト別囚セラル、ニ及テ憂懣ノ甚シキ肝膽碎裂心身爲ニ毀傷セリ是ノ時太子囚處ノ高樓后囚處ノ高樓ト相對ス各其ノ樓上ニ徘徊スルヲ許サレタリ后其ノ樓ニ倚リ太子ヲ樓前上ニ望見スルヲ以テ僅ニ憂悶ヲ遣ルノ一事ニ充ツ后ノ心中切ニ太子ヲ思ヒ其ノ樓壁ノ罅ヨリ窺ヒ觀テ且喜ヒ且泣キ因テ佇立スル者日ニ數時ナリ

憐ムヘシ各個消憂ノ方ヲ得ルモ亦幾ナラスシテ遂ニ遮隔妨碍セラレ后太子ト生別離セシ後僅ニ一月ヲ經テ大會議院ノ一吏一日上午第二時ヲ以テ后ヲ提曳シテ更ニコンシエールゼヨリー獄舍ノ名ニ徙囚セリ獄

舍コンシエールゼヨリーハ最下ノ兇惡汚穢ノ犯人ヲ繫囚スル所ナリレ

后其ノ獄中ニ在リ兇漢等ト俱ニ起臥シ又彼等ノ命ヲ受ケテ其ノ衣ヲ脱シ其ノ衣ヲ着クルニ至レリ兇漢等后ノ衣囊中ヲ搜索シ悉ク其ノ收藏スル所ノ物貨ヲ奪掠シ僅ニ其ノ汗巾香瓶等ヲ留ムルノミ謂フ一井ニ皆奪ヒ盡サハ后ノ心身ヲ傷害スルコトアラント是甚后ヲ受惠スルニ出ル者ト爲ス其ノ獄舍極メテ低シ后之ニ入ルニ當リ其ノ額ヲ打ツ一兇漢問テ曰ク額ヲ傷ツケタルニアラズヤト后答テ曰ク傷ツクル所アラスト

后獄舍ニ入り暗黒卑濕ノ小室ニ繫カル見ル所唯愁慘ノ狀ノミニシテ一點ノ其ノ幽悶ヲ遣リ悲歎ヲ慰ムヘキモノナシ又哨兵アリ日夜監護シ須臾モ去ラヌ二王女ハ乃高樓ニ繫カレ僅ニ生ヲ保ナテ見ルニ忍ヒ

サル狀アリ而シテ后ノ慘酷斯ノ如クナルハ又知ラサル所ナリ二王女ノ心謂フ母后ハ爲スヘキ事アリテ適ニ其ノ情意ヲ慰安スル所アラント是ニ於テ二王女其ノ使用スヘキ資ヲ取テ后ニ贈ラント欲シ其ノ計可ヲ請ヘリ

是ニ於テ二王女又太子ニ贈ラントシテ有ル所ニ隨テ毛絲ヲ搜索積集シ襪子ヲ編織シテ半ハ成レリ而ルニ吏肯テ贈ルヲ聽サス其能厄苦ヲ忍ヒ且多能ナルコト彼等ノ妨害ヲ免ルヽヲ得タリ偶弊氈一片ヲ獄舍中ニ得テ即之ヲ解發シテ二個ノ棍棒ヲ取テ機ト爲シ以テ襪帶ヲ編製スルノ法ヲ發明セリ

紀元一千七百九十三年第十月十四日ヲ以テ官吏決案シテ后ニ告クルニ罪狀ヲ以テシ其ノ十六日ヲ以テ竟ニ死ニ處セリ死ニ就クニ當テ殺

然トシテ哀訴ノ色ナク怡然トシテ驚動ノ態ヲ見ス

紀元一千七百九十四年第五月ヲ以テ王女エリサベット刑殺セラル而シテ王族皆敬神ノ心厚キヲ以テ今其ノ汚穢ノ場ニ至ルニ其ノ路ノ崎嶇艱難ト雖一毫モ足起シ心動クコトアラザルヲ得タリ夫王族ノ禍難ニ遭遇スルニ當テ能ク之ニ耐忍シ其ノ心ヲ動サヽルヲ得ルハ皆此ノ王女ノ善心ニ關係スル所ナリト云フ

此ノ女容姿舉動ノ温雅貞靜ナル以テ衆兇惡漢ノ王族ヲ凌辱スル者等ヲシテ自慙愧スル所アラシム其ノ死ヲ命セラルヽニ及テ自請テ曰ク曾テ艱苦ヲ妾ト共ニセシ者ノ室ニ於テ刑殺セヨト

時ニ王女其ノ同室ニ在ル所ノ衆ヲ慰勞スルニ極テ厚シ又問テ其ノ欲スル所ニ及ヘリ其ノ死ニ臨ム時猶其ノ生存スル者ノ爲ニ悲哀痛歎ス

ルコト更ニ我カ死ヲ憂フルヨリ甚シク謂フ亦猶妾カ遭フ所ノ如キ艱苦ニ遭ハント

今王族生存者中ニ又一個ノ薄命人アリ數年前ニ在テハ極盛ノ福利ヲ得ルカ如キ者ナリ即王妹暗黒囚樓中ニ在テ唯一人僅ニ生存スルコト六月ニシテ又數個ノ佛民墾太利人ニ囚虜セラル因テ之ヲ償還セント欲シ王妹ヲシテ墾太利ニ寄送シ之ヲ質トス

王妹墾京維納府ニ至レリ而シテ交友ノ來テ艱ヲ問ヒ苦ヲ慰ムル者アリ王妹幽憂ニ在ル者己ニ一年餘穢ニ其ノ眉宇ヲ伸ルヲ見ルモ猶久シキニ至ル能ハス其ノ容色慘澹トシテ平和ナラス其ノ不幸ノ運ヲ見ルニ足レリ

### 第一百八十四篇

#### 佛軍大ニ振フ并ニ佛民ノ憤發

是ヨリ先キ諸軍聯合ノ事ヲ説ケリ今尙遺漏スル所アリ蓋讀ム者夫ノブルンスウィック侯ノ直ニ巴里府ニ入寇セサルト又王族ヲ援ケ市民ヲ威劫セサルトヲ以テ其驚惧スル所アリト思フ然ルニブルンスウィック侯ハ其力能ク之ヲ爲サバ輒欣然トシテ之ヲ爲サン侯ハ則頓ニ佛民ノ強弱ヲ測リ覺悟スル所有テ然リ

侯曾テ謂フ一タビ大軍ヲ夸耀シテ往テ其ノ境ニ入ラバ佛小民敢テ能ク抗スル者アランヤト而ルニ佛兵精練俊傑ノ士之ニ將帥タリ出テ相禦ク

是時佛將デユムリエーノ軍ヅエルダンロングウィー共ニ地名ヲ畧還シ連

戰シテ皆勝ツ又シナツブヲ畧取セリ時ニ紀元一千七百九十二年第十

一月五日ナリルクサンボルグヲ除ク外墺地利國ノニーゾルランド即  
白耳義等皆佛國ノ有ト爲レリ

紀元一千七百九十三年第二月一日ヲ以テ佛國大會議院ヨリ英國及ロ  
和蘭ニ向テ戰ハント欲シテ之ヲ公告セリ後又二週日ヲ歴テ西班牙ヲ  
擊ツテ告ク時ニ佛將デユムリエーハ和蘭ニ在リ其ノ軍尙大ニ振ヘリ  
然ルニデユムリエー偶シヤコバン黨中ノ人ノ妨害ヲ爲シ大ニ其ノ人  
望ヲ失セリ乃其軍ヲ率テ將ニ大會議院ニ抗セントシ竟ニ能ハズ因  
テ身ヲ脱シテ墺地利奔レリニ  
出奔スルニ當テ都下ノ士數人ヲ率テ又路易ヒリップト云フ者之  
ニ從フ此ノ人時ニシヤルトル侯タリ後ニ佛王ト稱スル者ニシテ世事  
ニ老熟シ天縱ノ勇悍大ニ世ニ芳名ヲ傳フ

デユムリエーノ出奔スル佛人爲ニ失フ所アルカ如キ者少時而ルニ佛  
人氣ヲ出タシテ復之ヲ顧ミス此ノ時佛民一意國事ニ在リ其我ヲ抑制  
スル王者ヲシテ其ノ貪戾ノ愆ヲ飽カシメント欲シ乃輕シク其ノ身  
ヲ兵役ニ服スルコトヲ爲シ肯ンセズ

佛民既ニ皆一意國事ニ盡力シ謂フ我輩民人ハ是最國家ノ緊要タルヘ  
キ者ナリト乃勞勩シテ倦マス人ノ貨財ナキ者ハ其攜帶スル所ト雖皆  
脱シテ之ヲ大會議院ニ納レ老幼婦女子ノ兵役ニ堪ヘサル者ハ皆出テ  
兵人ノ缺乏スル所ヲ補ヒ助クルヲ爲スニ至レリ

佛民ノ心皆既ニ斯ノ如シ故ニ天稟ノ才能アル者將帥トナリ其ノ軍ヲ  
率テ進撃スル所皆戰勝ヲ得サルナキハ亦怪ムニ足ラサル所ナリ  
紀元一千七百九十四年歲晚前ヲ以テ悉ク和蘭ヲ掠奪シ爾後佛國革命

ナポレオンノ治世ノ末ニ至ルヲ云フノ時ニ及ブマテ佛國之ヲ有スルヲ得タリ紀元一千七百九十五年ニ及テ佛國普魯西班牙ノ二國ニ講和シ二國爲ニ大ニ喜ヒ西班牙ハ其ノ西印度ノ地ヲ割キ與ヘテ以テ佛國畧取スル所ノ歐洲内ノ地ニ代ヘタリ

第一百八十五篇

ゼ、レイーン、オフ、アロール 怖ルベキ時世

佛王沒セシヨリシヤコバン黨其ノ大會議院中ニ在テ大權力ヲ得タリ其ノ黨ノ魁首タル者ヲロベスビエールト爲ス斯ノ人其ノ嘗テ己ニ抗論スル人ヲ抑制シテ遂ニ超出シテ佛國ニ大統領タリ其ノ政柄ヲ握ル日ヲ稱シテゼ、レイーン、オフ、アロール即怖ルヘキ世トス法應ヲ設立シ己ノ意ニ悖フ者ハ一ニ皆之ヲ死刑ニ處ス而シテギョネーン 此ギョネーント云フ體

師ノ病者ヲ診スルニ必死スヘキ症アル者ヲ長ク保存セシムルハ更ニ痛苦ヲ取ルノ甚シキヲ以テ徐々死ニ向ハシムル器械ヲ創造ス而ルニ又此ノ器械ヲ以テ遠ニ己カ命ヲ亡ヘ即斬首架ノ如キ一次僅ニ能ク一人ヲ殺スニ足ル可カラシムル者ヲ造レリ又其ノ殺戮ヲ嗜ムノ意ヲ飽カシムヘキ法律ヲ創設スルコト極テ多シ

當日革政ノ初ニ當テハロベスビエール僅ニ巴里府ノ一訟師タリ時ニ唯其ノ拔群ノ訟師タラント欲スルモ尙企テ及バサル所アリ而ルニ更ニ一進路ヲ開テ其ノ大兇惡ナルシヤコバン黨ノ尤ト爲リ漸其ノ魁首ト爲ルヲ得タリ其ノ外貌ヨリシテ之ヲ觀レハ其ノ中心ノ兇惡ヲ見ルベキ者無シト云フ

其ノ世ニ當リ殘虐ヲ施ス時其ノ衣服ノ華美ナルヲ以テ常ニ十分ニ目指セラル斯ノ殘暴ナル兇人ノ最愛好シテ自製スル所ハ綿紗ヲ以テ短

觀衣トシ紅絹ヲ以テ裏ト爲シ又淺藍色ノ上衣ヲ表スル是ナリ凡時様ノ流布スルハ佛京巴里府ヲ以テ其ノ首タル者トス

ロベスピエール其ノ勢權ヲ固持セント欲シ因テ制スル所ノ法アリ反テ自其ノ滅亡ヲ招クヲ證スルニ足レリ其ノ權力ヲ以テ已ト競ハントスル者ヲ剪除セント欲シジャコバン黨中最權力アル者ヲ召シ暴ニ革改法廷ニ下シ之ヲ死刑ニ處セリ

其ノ相繼テ冤死ヲ取ル者ハ其ノ誰タルヲ辨知スベカラズ大會議院中ニ在ル議員等競々トシテ自安ンセス終ニ其ノ身ノ危厄ヲ免レンコトヲ謀リ相結テ黨ヲ爲セリ乃紀元一千七百九十四年第七月二十八日ヲ以テロベスピエールヲ捕ヘ其ノ明日斬首ニ就ク其ノ死スルノ報ヲ聞クヤ全佛國ノ民皆欣躍シテ已マス又文明各國人ヲシテ大ニ躍舞シテ

賀セシメタリ

此ノ時佛國人民多クハ大會議院ノ管理ヲ受テ之ニ服從セリ或ハ亦大會議院ノ名義ヲ借ル者ノ統轄トナリテ服屬スルアリ而シテ又或ハ自主黨ノ響歎トナルアリ勸王黨人ノ抗拒トナルアリ

然レトモ二黨ノ之ニ抗スルカ如キハ乃大會議院ノ兵人ニ擊碎セララル此ノ兵役ニ當テ兵人大怒シ其ノ爲ス所殘酷ヲ極メ皆目シテ國賊ト爲シ之ヲ殺戮セサルハナレ

ツーロン府民皆其ノ大會議院ニ抗スルノ黨中ニ在リ而シテ其ノ府民ハ多クハ第十七世路易ノ爲ニ其ノ保護ヲ請フト云フヲ以テ英國ニ降レリ時ニ大會議院ノ兵人直ニ進テ其ノ障壁ニ迫リ兵事ニ卓越セシ人有テ之ヲ指揮シ大銃ヲ發射セリ之ヲ拿破侖字那波爾ト稱ス

拿破侖字那波爾ノ傳

拿破侖字那波爾ハ地中海ノ一島格爾斯ノアビヤクナヨ府ニ生ル時ニ紀元一千七百六十九年第八月十五日ナリ其ノ父ハ才藝多能ナル一訟師ニシテ母ハ天稟剛毅ニシテ容色ノ麗美ナル此ノ島中ニ冠タル者ナリ其拿破侖字那波爾ト稱スル者ハ古代聖士ノ名ニ由テ命スル所ト云フ蓋此ノ名ヲ命スルノ親タル者ハ何ノ日ヲ以テ其ノ祭日トシテ祀セルナラン末其ノ然ル所以ヲ審カニセス何トナレハ其ノ古聖士ノ名甚著名ナラサルヲ以テナリ

拿破侖ノ幼時一日督教主某來レリ之ニ問フニ某ノ祝祭ノ日ヲ以テス教主答テ曰ク古ヨリ聖士無數之ヲ三百六十五日ニ分テリ故ニ分明ナ

ラサルナリト拿破侖權力ヲ得ルニ及テ法王大禮儀ヲ厚クシ其ノ祝賀ニ於テ乃貴ホテ古聖士ノ拿破侖ヲ神子ニ進ム而シテ「セント、ナポレオン、デス、ウルサン」ヲ祭日ニ充テ祝敬セラル

拿破侖幼時衆人ニ愛憐セラル又他ノ兒童ノ如ク物ヲ害スルコト少シ此ノ島ニ驕官スル所ノ衙官マルボツバ蚤ク其ノ才能アルヲ知り之ヲブリエーンニ在ル陸軍兵學舎ニ入ルコトヲ許セリ此ノ學舎ハ幼年生ノ築營及ヒ砲兵士官ノ教授ヲ受クル所ナリ

拿破侖精ヲ究メ力ヲ盡シ學ニ從事セリ其ノ教頭タル者之ヲ公府ニ聞セント欲シ其ノ才幹有テ強忍事ニ堪ヘ乾々トシテ倦マス大ニ學術ノ進ムコトヲ讚稱驚歎セリ拿破侖ノ修ムル所ハ數學ヲ始メトシテ總テ兵事ニ關係シタル諸學科ナリ



遊戯ニ於ルモ亦其ノ好ム所ノ學科ノ外ニ出テス其ノ居ノ小庭園ヲ經  
 營シテ堅壁トシ人ノ此ニ入ルヲ許サス冬日ニ當テハ學舍ノ友生ヲ率  
 井テ自將タルカ如ク指令シテ雪塊ヲ以テ一城堡ヲ造立セリ其ノ精巧  
 ナ究メ智力ヲ見ハスコト少年生建築科中希ニ有ルノ大名譽ヲ得タリ  
 拿破侖學漸達シ年十四ノ時拔擢セラレ升テ巴里府下ノ學校ニ入ル此  
 ノ校ニ在テ名聲ヲ得ル猶ブリエーンノ校中ニ在ル時ノ如シ竟ニ本府  
 最上ノ文學士徒ニ入ルヲ許サレタリ

十六歳ニ及テ又撰ハレテ少尉ニ任セラル拿破侖既ニ久シク學業ニ從  
 事ス今又大ニ群英ニ交通シ其ノ曾テ自修ムル所ノ業ヲ以テ其ノ才力  
 ナ見ハシ人ヲシテ驚歎スヘカラシム其ノ人ト爲リ丰姿絶美ニシテ俊  
 秀ノ氣ヲ見ハス形貌孱弱ナルカ如クナレトモ其ノ事ヲ執ルニ順利ナ

ヲサル者ナシ其ノ力ノ堪ヘサル所ハ奮然心カヲ盡シテ之ヲ爲シ果サ  
 ヲレハ止マズ

其ノ文學上ニ於テ名聲ヲ得ント欲スルノ意尤切ナリ曾テリヨシ府ノ  
 大學校ニ在テ其ノ對策最俊拔ナルヲ以テ大ニ褒賞ヲ得タリ又革政ノ  
 始ニ當テ大ニ自主自由ノ權利ヲ唱ヘ其ノ同僚官吏ヲシテ激怒セシム  
 因テ官ヲ辭シテ其ノ郷格爾斯島ニ還リ復心志ヲ文學ニ竭セリ

其ノ居處ノ幽靜ナル野生橄欖神仙掌クレマアイス及ヒ巴旦杏等ノ諸  
 樹屋ヲ環繞シ一個ノ花崗巉々トシテ孤立シ其ノ下ニ一ノ消夏亭アリ  
 今ニ至テ尙存セリ門ニ一無果樹ノ鬱然タルアリ是拿破侖最愛スル所  
 ノ隱棲ナリ即號シテ拿破侖ノ岩洞ト曰フ其ノ名今ニ至テ存セリ

拿破侖心性快活蓋久シク此ニ潛居スルコト能ハス復出テ巴里府ニ入

ル而シテ革政ノ事起ルニ會シ始テ青雲ノ道路開達シ人生一能一善ナクシテ門地ヲ以テ舉用セラレ位官ヲ得ルノ舊弊ナキニ至レリ  
 曾テ兵學校ノ幹事其ノ生徒ノ行跡ヲ記スルノ表ニ拿破侖ヲ以テ最上ノ大英才ニシテ最上ノ勉勵心アル少年ト爲セリ其舉ケラレテ將ト爲リ又ツールノ役ニ當リ砲兵隊ノ號令官タルヲ得ルハ皆此ノ名聲アルニ因テ然ル所ナリ

當時兵事ハ悉ク大會議院ノ議官タル者之ヲ司レリ茲ニ一議官ツールノ役ニ當リ其ノ部兵ヲ率井之ニ赴ク者アリ其ノ戰勝ヲ得タル時後レテ戰ニ及ハサルコト三點時此ノ戰勝ヲ致スハ實ニ拿破侖ノ功ナルニ其ノ公告スルニ當テ議官自謂テ己ノ功ト爲シ曾テ拿破侖ノ名ヲ見ハサス

其ノ功勳アルニ議官敢テ之ヲ讚美セス又壅塞シテ公示セスト雖然レトモ兵人一齊ニ大聲シテ之ヲ稱揚セリ是ヲ以テ軍總督己ニ其ノ推舉帖ヲ製シ畢ルノ後又早く拿破侖ノ名ヲ其ノ最第一位ニ錄記セリ且記スラク彼ノ英傑ヲ遺漏スルトモ必當ニ其ノ進途ヲ開クベント

彼ノロマスビエールノ殺戮セラル、ニ當テ拿破侖モ亦之ト同刑ニ歸セント欲シ其ノ迫脅ノ勢烈ナリ是人民皆其ノ尤深クシヤコバン黨ニ結フモノトナスヲ以テナリ是ニ於テ其ノ將帥ノ任ヲ褫ハル後復屢用井ラレンコトヲ請ヘトモ遂ニ許サレズ拿破侖氣運坎壞ナルニ會レ財帛漸ク盡キ友朋棄テ、顧ミズ人々之ヲ待ツコト賤奴ノ如シ竟ニ史丹  
トルコノ使役ニ充テアンコトヲ期スルニ至ル  
帝ノ稱

拿破侖至難ノ任ヲ蒙ル、拿破侖ノ成功及ヒ褒賞ヲ得ル并ニ  
婦ヲ娶ル

人民大會議院ヲ侮慢スル甚シ且其ノロベスピエールノ使用器タルニ  
因テ其ノ憎惡又甚シ、巴里府民既ニ屢其ノ權ニ抗抵シ、議院及ヒ議官ノ  
如キハ勢將ニ保存スル能ハサラントス時ニ兵人ノ巴里府ニ在ル者ニ  
至テハ其ノ力ヲ議官ノ爲ニ盡サント欲スレトモ是皆其ノ首長タル者  
ノ意見ニ出ル所ナリ

是時其ノ要スル所ハ剛毅果敢衆人ノ心服スヘキ所ノ英雄ヲ得ルニ在  
リ是ヲ以テ衆心皆其ノ人ヲ得ント欲ス顯フニ其ノ人アリ適、一言ヲ發  
シ因テ歐洲二十年間ノ勢運ヲ一定スルニ至レリ其ノ言ニ曰ク余獨公  
等カ常ニ求ムル所ノ英雄アルヲ知レリ、格爾斯島ノ小吏是ナリ思フニ

今之ヲ招カハ彼敢テ辭センヤト

拿破侖乃徵ニ應シテ復島中ヨリ出テ土寇ヲ鎮定スルノ法ヲ論シ其ノ  
意見ヲ獻スル極テ善シ衆皆心服セサルナシ乃拿破侖ヲ撰擢シテ衆軍  
ニ將タラシム時ニ土寇來リ攻メ其ノ議院ト稱スル所ノツウイレリー  
宮ヲ襲撃スレトモ勝タズ死傷スル者多シ因テ追撃シテ薄暮ニ及テ止  
メリ

拿破侖已ニ戰勝ツ累進シテアルメーヨドランアリヨル即巴里府鎮兵  
ノ元帥ニ任セラル此ノ職任タル最至重至難トスル者ニシテ國民ノ飢  
テ憂ヒ或ハ他ノ情故ニ因テ屢擾亂アルノ時機ニ臨テ元帥其ノ軍ヲ出  
シ其ノ兵力威權ヲ以テ之ヲ鎮定スルノ任タリ曾テ國民亂ヲ唱ヘ群集  
スルニ會フ拿破侖之ヲ解カント欲シ其ノ意ヲ用井委曲諭解ス中ニ一

婦人ノ頗強壯肥大ナル者アリ黨民ニ説テ敢テ去ラシメサランコトヲ謀ル

其ノ言ニ曰ク請フ此ノ愚蒙軍吏ノ言ヲ用井ル勿レ彼ノ輩嘗テ我徒ノ餓死セントスルモ亦憂恤セス而シテ己レハ則飽食シテ其ノ體ノ肥大ナルヲ病ムニ至レリ拿破侖ハ瘦瘠ノ人ナリ乃之ニ向テ曰ク我カ好婦請フ卿ニ問ハン卿ト余ト孰レカ肥大ナルヤト婦此ノ言ヲ聞キ即失咲シテ退ク黨民等モ亦因テ決然トシテ退キ去レリ此ノ事ヤ以テ拿破侖戰功中ノ要ト爲スニ足ラスト雖亦記載スルニ足レリ此等ノ伎倆ハ其ノ財賄性命ヲ費サズシテ自得スヘシ

時ニ一童兒アリ年齢約十歳許其ノ意欲スル所アルカ如ク直ニ來リ拿破侖ニ謁センコトヲ請ヒ自其ノ名ヲ告テ曰クボーハルチー伯ノ子ユ

ーゼーシ、ボーハルチート、ボーハルチー伯ト云フ者ハ曾テ協和變政ノ役ニ當リ劇戰ヲナレテ勇氣ヲ見ハセシ人タリ而ルニロベスピエールノ疾患ニ遭ヒ其ノ暴虐人ノ刑死ニ先ンスルコト四日ヲ以テ殺サレタル者ナリ

ユーゼーシ其ノ父曾テ持スル所ノ刀劍ヲ還ヘサレンコトヲ請ヒ因テ特ニ來レルナリ時ニ拿破侖其ノ情願スル所至當ナルト童子ノ志行トヲ感賞シ愛憐ノ情深シ童子終ニ自介シテ拿破侖ヲ引テ其ノ母ニ交結セシム其ノ母容姿美麗ニシテ志行温和藹然トシテ掬スヘシ而シテ其ノ情意ノ深厚ナル大ニ拿破侖ノ人トナリヲ知ルニ似タリ拿破侖モ亦其ノ好匹トナレ遂ニ之ヲ聘レテ婚ヲ成セリ時ニ紀元一千七百九十六年第三月ナリ

此ノ婦名ヲシヨセフイーント云フ深ク拿破侖ニ愛好セラル其ノ當日  
 拿破侖ノ意中ノ事ヲ鈎摘シ隨テ人情事理ヲ説キ其ノ夫ヲシテ其ノ功  
 ヲ成サシムルコト多シ又平素能ク拿破侖ノ怒氣ヲ治ルノ術ヲ得タリ  
 蓋拿破侖ノ怒ヲ發スル其ノ婦ノ爲ニ發スルニ非サルヘシ何トナレハ  
 余未曾テ拿破侖ノ其ノ婦ニ向テ怒ヲ發スルコト有ルヲ知ラサルナリ  
 其ノ怒氣ヲ治ムルヤ顔ヲ犯シテ諫諍スルニアラス唯其ノ情理ニ就テ  
 徐々ニ諭解シテ遂ニ能ク其ノ巧ヲ收ムル者ナリ

### 第一百八十八篇

政體ノ一改革以太里役起ル

大會議己ニ斯ノ如キ暴虐ヲ爲シ竟ニ紀元一千七百九十五年第十月二  
 十七日ヲ以テ廢滅ニ歸セリ因テ更ニ新體ヲ編立センコトヲ謀ル其ノ

體大概米聯邦ノ政ニ髣髴タリ

議政官ヲ分テテ二トス其ノ一ヲコンセイデ、サンシヤント曰フ我米洲  
 ニ在ル所ノ上院ノ如シ其ノ一ヲコンセイデ、ザンサント稱ス我米洲ノ  
 下院ノ如シ而シテ其ノ斷ヲ主リ大權ヲ掌握スル者五人アリ猶我米洲  
 ノ大統領ノ如シ之ヲダイレクトワールト稱セリ

紀元一千七百九十六年春某ノ月日ヲ以テ三軍并ニ進發ス其ノ二軍ハ  
 日耳曼國ニ向テ戰ハントスモローシ、ニュールダンノ二人之ニ將タリ此  
 ノ一軍遂ニ功ヲ成セリ先ニ此ノ共和國ノ兵佛軍ニ於ルカ如ク輒功ヲ  
 成スコトヲ得サルアリ其ノ進ムヤ壞地利ノ將アレナデュークシヤル  
 逆撃シテ之ヲ退ク而レトモモロー是ニ於テ大ニ名譽ヲ得タルアリ  
 其ノ第三軍ハ拿破侖選ハレテ之ニ將タリ進テ以太利ヲ攻畧セントス

往時拿破侖軍ニ臨テ勳功ヲ成ストモ他人亦分ツテ其ノ功ヲ攘メリ今ハ則其ノ功業專拿破侖一人ニ歸スルニ至レリ是時澳地利ノ老將等拿破侖ヲ視ルニ年ヲ以テスレハ其ノ兒童ノ如ク懸絶シ其ノ名氏ヲ以テスレハ未曾ア聞カサル所ナリ我將帥ヲ見テ一點ノ恐色ナシ

然レトモ老將等亦之カ爲ニ其意思ヲ費サ、ル能ハス乃其ノ軍ヲ以テアルプス山上險要ノ地及ヒ他ノ絶壁上ニ屯營セシム是佛軍ノ進テ此ノ山ヲ踰エ以太利ニ入ルヲ慮テ之ヲ拒クニ備フルナリ

紀元一千七百九十六年第四月十二日ヲ以テ兩軍互ニモーンテ、ノッタニ會戦ス拿破侖之ヲ撃破ス爾後戦フコトニ皆勝テ年ヲ經ルノ間復一ノ抗禦スル者ナシ

拿破侖後來大ニ權勢ヲ張リ名聲ヲ揚ルニ及テ之ニ諂諛スル者アリ古

代大ニ世ニ芳名ヲ流ス所ノ者ノ名氏ヲ得テ其ノ家譜ニ附會セント欲シ古書ヲ探リ偶往昔ボナバルトト云フ者ノ史ヲ得タリ乃法王ノ母ボナバルト是ナリ

拿破侖之ヲ聞キ其ノ附會ノ言ヲ悅ハズ或ハ其ノ古昔ゴシツク公子ノ後裔ト稱スルヲ以テ大ニ人ニ誇ル色アリ而レトモ拿破侖ハ自謂フ我ハモーンテ、ノッタノ役ヨリ貴顯ニ至レリト

第一百八十九篇

以太利役ノ後記、ロタイーノ戰、アルコラヲ畧ス并ニ拿破侖  
グレナデイエー即精兵ニ救ハル

拿破侖ノ戰勝ヲ得ル悉ク之ヲ登記セバ記スルニ勝フヘカラズ此ノ役ヤ其ノ功ヲ奏スルコト頗神速ニシテ多ク以太里國中ノ大部落ヲ畧シ

得テ佛國ノ属地タラシメタリ其ノ最大功勳ト稱スルモノハロデー  
ノ役ニ當リアツタ河ノ橋梁ヲ過ル是ナリ

此ノ橋梁タル壞地利ノ精強ノ一隊二三十門ノ大砲ヲ備ヘ嚴ニ防守セ  
ル所ニシテ荷之ヲ過ントスル者アレハ之ヲ打撃シ盡サントス其ノ勢  
極テ猛烈ナリ拿破侖直ニ進テ此ノ險地ヲ冒シ其ノ軍ニ指揮シテ其ノ  
大砲ヲ備フルヤ天ニ誓ヒ死戦シテ其ノ軍ヲ堅護スルニ在リ

而シテ壞地利ノ兵ヲ出ス日久シ倦心無カラス拿破侖勝ニ乘スルノ銳  
氣勢猛鷲ナルヲ以テ拒戦スレトモ支フルコト能ハス佛軍又後來必名  
聲ヲ拿破侖ニ齊クスルコトアラント稱スル所ノ軍吏有テ之カ嚮導タ  
リ

佛軍兵人ニ在テハ各其ノ心情ヲ慰ムルノ一良法アリ其ノ卓拔ノ軍功

アル者ハ即假リニ位階ヲ設ケ與フ是ナリ而シテ拿破侖ヲカボラル押

伍ト稱スルニ至ル元帥ヨリ以下雜兵ニ至ルマテ皆ソルダ即兵人ト稱

之ヲ兵人ト稱スルヲ懼リテカ而シテ功ヲロデーノ役ニ見ハセルヲ

以テ部下ノ兵大ニ之ニ感服セリ乃稱シテロゴナーカボラルトスルハ

是敵人及ヒ其ノ麾下ヲ併セテ皆其ノ名稱ヲ用テ彼ヲ呼ヒ做シ大ニ當

世ニ稱セラル者ナリ

以太里ノ役ニ當テ拿破侖何レノ地何レノ城ト雖其ノ以テ要處ト爲ス

所ハ其ノ絶危絶險タルヲ顧ミス身目之ヲ冒シテ懼ル色ナシ今其ノ

一ヲ擧ケ以テ其餘ヲ概見スルニ足レリ茲ニ一野村ノオルコラト稱

スル地アリ壞地利ノ有スル要地ニシテ之ヲ略取スルニ於テ最其ノ嚮

緊ナル功用アリ

此ノ地唯一小徑ノ進ムヘキアルノミ四面皆澤アリ徑之ニ横絶ス塙地利ノ軍寡シ此ノ要處ヲ守ルニ足ルヘキノミ因テ大ニ之ヲ砲撃ス塙軍潰走ス既ニシテ又銳兵ヲ以テ更ニ來テ追撃ス佛軍復破リテ之ヲ走ラス

己ニシテオルコヲ一將ニ拔ケントス塙兵尙之ヲ拒守シテ砲丸雨ノ如ク下ル時ニ拿破侖銳氣ヲ鼓舞シ部兵ヲ激勵シ自軍旗ヲ把リ進テ道尾ノ橋上ニ迫リ手ツカカラ其ノ旗ヲ此ニ立テタリ

時ニ塙地利新銃ノ兵増來リ更ニ銃砲ヲ風發シ佛軍ヲ拒ク是ニ於テ佛軍稍退ク而レトモ將帥尙心ヲ留メ兵ヲ護抱シ死屍ヲ蹈ミ烟焰ヲ突テ軍ヲ旋ス此ノ連忙惶遽ノ際拿破侖馬跌キ澤中ニ墮ツ

是時塙地利ノ軍大ニ追撃シテ競ヒ來テ拿破侖ノ兵ヲ割テ其ノ間ヲ中

斷セリ是危急ナルニ當リ苟精兵ノ來リ援フニ非ズハ蓋或ハ將ニ殺獲セラレントス己ニシテ佛軍相叫テ曰ク進メ進メ進テ我將ヲ援ケヨト佛軍其ノ將拿破侖ヲ愛守保護スルコト其ノ號令及ヒ其ノ應ニ爲スヘキ軌範ヲ愛守スルヨリモ尙深切ナリトス佛軍因テ復大ニ振ヒ撃テ竟ニ塙地利ノ軍ヲ逐テ退カシム

### 第一百九十篇

#### 拿破侖ノ後記

世ノ將帥タル者ノ其ノ功ヲ成ス或ハ偶然ノ利ヲ得或ハ其ノ部兵ノ勇銳ナルニ因テ戰勝ヲ得ルト雖其ノ事ノ危急ナル其ノ軍敗ルノ時ヨリ甚シキ者アリ拿破侖ノ如キハ固ヨリ腦中謀畧アリ措置宜ヲ得テ竟ニ至大ノ勳功ヲ成立スルニ至レリ



拿破侖其ノ英才ヲ以テ新ニ軍法ヲ製造セリ其ノ運動ノ快捷ナル老将ト雖其ノ術ヲ辨知スルコト能ハス而シテ老将等皆常ニ謂フ世ノ戰敗ヲ取ル者皆古制ノ兵法ニ從ハサルニ因レリトロデイノ役畢ルノ後拿破侖一日ホンガリーノ老軍吏ト談話ス此ノ軍吏ハ嘗テロデイノ役ニ當リ故アリテ捕虜セラレシ者ナリ

今軍吏其ノ拿破侖タルヲ識ラス乃拿破侖ノ戰法ヲ論シ嘆息シテ曰ク其ノ法頗整肅ナラス我軍ニ於テハ一年少人ヲ撰ヒテ將ト爲セリ此ノ將行軍ノ規律ニ於テ一毫モ辨知スル所ナシ或ハ其ノ後軍ニ在リ或ハ其ノ翼軍ニ在リ嘗テ恒居スル所ナシ其ノ規律斯ノ如ク己ニ壞亂ス復何ノ保守スル所アラシヤト

拿破侖身自其ノ才能アルヲ知レリ而ルニ諸人各地ニ於テ嘗テ成功ア

ルハ輒之ヲ以テ衆人ニ示スコト亦時ヲ移サズ其ノ功ヲ立ツルノ軍吏ニ褒賞ヲ與フルニ於テハ常ニ注意シテ心ヲ留メサルハナク又常ニ飛書ヲ以テ其ノ同僚ノ位階ヲ選進センコトヲ請ヘリ

夫此ノ事アル特ニ其ノ正廉仁恕ヲ見ルノミナラス大ニ其ノ術ノ巧ナルヲ見ルニ足レリ故ニ人ノ拿破侖ニ推舉セラレ者ハ皆其ノ大恩ヲ仰カサルナク其ノ推舉ヲ蒙ラサル者ト雖猶其ノ心ニ感激シテ人々推服セサルハナシ

拿破侖以太利數州ト講和セルノ歎中ニ曰ク其ノ開明國中ニ在テ讚美スヘキノ木偶及ヒ畫圖ヲ以テ之ヲ佛國ニ送ラント即此等ノ物ヲ取テ皆之ヲ巴里府ニ送致ス佛國ノ驕傲ナルニ今此等ノ物ヲ送與スルヲ以テ足レリト爲セリ

是ノ時拿破侖其ノ文學技術アル者ヲ見レハ之ヲ待スル大禮ヲ盡セリ其ノ有名ノ星學家オリヤンニト云フ者ニ贈レル書中ニ曰ク才能學藝ニ於テ卓越セル者ハ尙我カ國人ト別異セサル可シ

又曰ク我佛國中上等ノ數學家或ハ良畫工或ハ文學ノ一學科ニ長セル人ト爲シ之ヲ書冊ニ記載セラル、者アレハ一大都府若クハ大市邑ヲ舉テ之ニ與フルヨリ寵榮ナリト爲スト

### 第一百九十一篇

#### 伊太利交戦ノ結局及レオベンノ媾和ノ約

此時全歐洲人皆偏ニ拿破侖勃那波爾的ニ注目スルニ至レリ夫拿破侖ノ豪傑ナルモ其數月前ニ在テハ己ガ安身立命ヲ求ムルニ過サリシニ何ソ計ラン暴ニ高位赫々タル人ト爲リ諸國ヲ鎮定シ諸帝國ノ畏懼ス

ヘキ人ト爲レリ實ニ拿破侖ノ如ク手ニ唾シテ富貴ヲ博スルハ蠢蠻人中ニ在テハ偶然ルコトヲ得ヘキモ歐洲文明ノ諸國ニ在テハ未曾テ聞カサル所ナリ

夫拿破侖ノ富貴ヲ得ル所以ハ皆其才力ニ在ルノミ而シテ長ク之ヲ保存スルモ亦才力ニ在リ拿破侖麾下ノ士ノ如キハ固ヨリ其ノ英才ニ信服シ愛慕スルコト甚深切ナルヲ以テ其最難シトスル所ノ指揮監督ノ事ニ至ラモ之ヲ辨識スヘキ代理人ヲ檢出スルヲ得ル亦難シトセズ又拿破侖ハ強毅ニシテ事ニ堪ヘタル精力ト事務ヲ總理スルノ才智トヲ以テ其ノ兵卒ニ至ルマテ之ヲ感歎心服スル所アラシム又其ノ操練指教スルノ妙ナルヲ以テ兵士ニ在テハ亦其ノ欲スル所ノ如ク一和レテ心意ヲ勵發シ唯兵事ノ起ラサルニ恐ル、ノ勢アリ此ノ大ニ戰ハン

ト欲スル時機ニ乗シ之ヲ使用スルヲ以テ兵士皆其ノ死ヲ忘レニ至レリ又時ニ路遠ク勞大ナル征戰ヲ爲スニ當テハ拿破侖曰、兵士ヲ慰勞シテ曰ク余ハ汝兵士等ノ血液ヲ瀉キテ勝利ヲ得ンヨリハ汝等ノ疲勞ヲ厭ハス其ノ兩脛ノ力ヲ竭スヲ以テ勝ヲ致サンヲ欲ス夫道遠ク勞重キ征行ヲ爲スハ拿破侖ノ創制スル所ノ一欸ナリ

拿破侖塙地利ヨリ至ル所ノ兵ト交戦シ遂ニ盡ク其ノ五軍ヲ撃テ破レリ此ノ五軍ハ其ノ一軍適ニ敗レテ又一軍ヲ出シ五軍相續テ拿破侖ヲ抗禦スル所ノ兵ナリ而ルニ伊太利既ニ全ク佛蘭西共和政國ニ降服シテ後拿破侖始テ日耳曼國ニ向テ進軍セリ

曾テレイン河上ニ於テアルナデューク、シヤルノ軍利アリシヤルハ能ク其兵士ト相親和スルヲ以テ今拿破侖ノ日耳曼ニ進軍スルニ於テ謂

フ此ノ佛國弱齡ノ將ノ好敵手ナルヘシト佛國弱齡ノ將トハ拿破侖ヲ指テ云フナリ而シテ此ノ戰ノ結局如何ニ就テ歐洲人ノ說各殊ナル所アリ

然レトモ此ノ事人ノ怪疑ヲ取ルヲ須タス兩國兵ヲ交フルニ當テ僅ニ二十日ヲ費スノミ拿破侖終始唯十戰ニ過キズシテ咸ク塙地利ノ兵ヲ敗ル此ノ役ニ於テアルナデューク兵卒ヲ失フ所蓋四分ノ一ニ當レリ而シテアルナデュークハ塙地利首府維納ニ至ルノ間一路防守ノ兵無ク敵ノ爲ス所ニ任セテ其軍ヲ退去セリ

茲ニ拿破侖アルナデュークニ説クニ兵ヲ解キ和ヲ講センコトヲ以テセリ其盟約ノ條款ハ一ニアレナデュークノ爲ニスル所ナリ然ルニアルナデューク敢テ之ヲ欲セス唯速ニ兵ヲ率テ首府維納ニ退カンコト

ヲ請ヒ此ニ於テ此ノ帝國強精ノ兵ヲ其ノ城下ニ集合シ以テ其ノ兄ノ帝位ヲ保存スヘキ一戰ヲ爲サンコトヲ決議セリ

然レトモ此ノ首府中ニ在ル所ノ人民其ノ意大ニアルナデュークト異ナリ凡府中ノ人上下貴賤ヲ論セズ悉皆戰兢氷淵ノ念ヲ抱キ國ノ立タサルコトヲ憂ヒ胸間煩熱シテ消スルコト能ハス夫此ノ怯心ノ生スル良ニ其ノ以アリ在廷ノ官人王族等皆身ヲ顧ミ國ヲ忘レ其ノ畜フル所ノ寶貨ヲ荷擔シテ將ニ急ニ洪葛利國ニ遁逃セントスルノ謀アルヲ以テナリ此等ノ國ヲ棄テ身ヲ遁ル、中ニアルナデューク、マリー、ルーイサト云フ者アリ其齡五六歲許戰勝ノ將將ニ來ラントスルヲ見テ衆ニ先テ遁レ去レリ戰勝ノ將トハ拿破侖ヲ云フナリ此ノ女後來拿破侖ニ嫁スルモノナリ

奧國ノ首府維納ニ在テハ市民唯一ノ如ク講和ノ字ヲ唱フルノミ而シテ敵兵ノ進テ府城ニ達スル僅ニ數日間ニ迫リ府中ノ人大ニ之ヲ憂懼ス帝乃特意ニ國使ヲ遣シ和ヲ講セントス拿破侖乃戰ヲ止ムルコト五日ヲ約ス然レトモ亦遷延數日始テ講和ノ以テ信スヘキ期アルニ至レリ

紀元一千七百九十七年第四月十八日ヲ以テレオペンニ於テ假ニ條約ヲ修ム時ニ奧國ノ國使拿破侖ニ接見シ因テ其ノ稱譽ヲ取ラント欲シ諛言シテ曰ク我帝佛國ノ共和政國タルヲ承領セリト

拿破侖之ヲ聽キ儼然トシテ之ニ告テ曰ク夫我佛國ノ共和政國タル光明正大恰太陽ノ如ク然リ苟人其自國ノ成立保存スル所以ト佛國ノ共和政治タルトヲ認識スル能ハサルカ如キ無眼ノ者ニ至テハ必以テ大

第一百九十二篇

モントベローニ在テ日ヲ送ル、カンポー、フオルミオノ講和

拿破侖今ニ於テ始テ一身安寧ノ間ヲ得タリ而シテ此ノ閑ニ乘シ婦人ト共ニモントベローノ宮中ニ光陰ヲ消遣セリ此ノ宮ハミラン伊太利ノ一市

邑ト相距ル僅ニ數里ノミ宮ノ位斜ニ小丘ニ對セリ宮中ニ起立シテ一望スレハロンバルダイ州伊太利ノ郡ノ曠濶ナル膏腴沃饒ノ郊野ヲ目下ニ

俯看ス其絶景勝テ言フベカラズ

是ノ宮ニ在ルニ當テ伊太利國中最高貴ノ嬪媛或ハ才能技藝ニ卓越シテ世ニ稱セラル、者或ハ容色ノ端麗麗美ナルニ著名ナル諸方ノ貴女等日々集會シテ以テジョセフィン即拿破侖ノ妻ナリト交遊セリ此ノジョセフ

イシハ生來和順温雅ニシテ其衆貴女ヲ待遇スルノ慇懃ナル情愛ノ厚キ恰大有名拿破侖ノ夫人タルヘキ才色徳ヲ以テ上天ヨリ賦與セラルシカ如シ

斯ノ如ク宴樂中ニ日ヲ送ルト雖其至大ノ國事ニ至テハ胸中ニ藏蓄シテ姑置クコトナシ壤地利日耳曼及伊太利諸州ノ公使輻湊來會シ或ハ諸大將ノ來會シテ國家ノ要務ヲ商議スルアリ或ハ祝賀ノ盛宴ヲ開クアリ蹈歌ヲ爲ス者アリ田獵ヲ爲ス者アリ其勢恰盛大ノ朝堂ニ在テ百官ニ接スルカ如シ

危迫ノ時ニ當テ心情優遊其樂ミテ改メス陪來集ノ土人ハ唯頸ヲ延ヘ踵ヲ企テ商議ノ結局ヲ待ツニ在リ但其ノ生ノ保存ヲ得サルト否ラサルトハ拿破侖ノ指揮スル所ニ係レリ

拿破侖凡世上ノ幸福大吉利ト稱スル者悉一身ニ有セリ四方ヨリ相祝シテ伊太利國ヲ救助保護セラレタリト稱揚シ其ノ名聲威權ノ赫々タルニ至テハ實ニ王者ト雖及フベキ所ニアラス而シテ其ノ年齢ヲ算フレハ正ニ少壯ノ間ニ在リ拿破侖此ノ後數年ヲ經テ屢々人ニ語ルアリ曰ク余カ生來最幸福ト稱スヘキ好時節ハ少年砲兵ノ士官タル日ニ在リ時ニ金錢ノ貯ヘ無ク又家屬ノ累ナク飲食セント欲スルトキハ市店ヲ查照シテ其廉價ナルヲ擇フカ爲ニ巴里府中ヲ縱橫行步セシナリト爾後各人ノ商議始テ一決シ和ヲ講スルニ至レリ其講和ノ約ヲ稱シテカンポーフォルミオノ盟約ト做セリ時ニ紀元一千七百九十七年第十月十七日ナリ即伊太利國ニ於テ亦過半共和新政國ヲ創立シ之ヲ稱シテシサルビン、レバアリツクト呼做セリ

アラブス山背ノ  
共和國ト云フ義 ヴュニス 伊太利治

海ノ一市ノ地ハ遂ニ奧地利帝ノ有ト爲リ其後ジエノア伊太利沿海ノ一市邑ナリハシサルビン、レバアリツクトノ稱ヲ以テ共和政治ヲ創建セリ

是ニ於テ拿破侖伊太利國中ニ在テ行フ所ノ諸事悉畢ルニ屬スルヲ以テ其ノ兵士ニ別レ去ラントス時ニ兵士等其ノ別ヲ惜ミ戀々トシテ垂涎シ輒別ル、ニ忍ヒサルニ至レリ此等ノ兵士ハ拿破侖ノ軍事ニ關涉スルノ初ヨリ其指揮ニ從テ俱ニ與ニ大功ヲ奏セシ所ノ者タリ而シテ拿破侖其ノ居ル所ノ地位實ニ甚危險ノ域ニ在リトス或ハ是ヨリ高位階ニ升リ大權勢ヲ得ルカ將大難ニ陥リ性命ヲ損亡スルニ至ルカ其ノ中道ニ立ツテ得ルコト難シトス

### 第一百九十三篇

巴里府ニ於テ拿破侖ノ待遇是時拿破侖ノ外貌動作ノ記載

巴里府下ノ士民ハ拿破侖ノ平素ヨリ才力卓抜スルヲ識認シテ之ヲ待  
遇スル甚篤シ而シテ今又世ノ有名ノ諸彦此ノ府下ニ歸集スルコト恰  
祝日ノ如シ然レトモ拿破侖ノ如キ世ニ卓絶セル英雄ハ尋常得テ見ル  
ヘキ所ニアラス且其ノ年齢ノ少弱ナルヲ以テ更ニ感歎ノ情ヲ起サ  
ル者無シ

茲ニマダムドスタールト云フ者アリチツケルノ女拿破侖ノ動作功勞  
ヲ記録セルアリ此ノ人謂フ拿破侖ヲ見ルモノハ必驚愕歎賞セサルハ  
無ク又恐怖セサルハ無シト

又拿破侖ノ爲ス所皆人ト異ナルアリ復時俗ニ從フテ喜怒ノ色ヲ爲サ  
ズ寛猛ノ威ヲ示サス只管其ノ平生ノ志ヲ遂ケントスルニ在リ因テ人

ノ其ノ身ヲ利スルヲ謀ル者ハ極メテ之ヲ愛好セリ

拿破侖平居沈黙寡言ナリト雖其喜悅ノ色ヲ現ハスニ遇フ者能ク之カ  
爲ニ心ヲ動カサハル者ナシ衣服ノ華美ヲ喜ハス常ニ服スル所ハ鼠色  
上衣ノ鎖襖下ヨリ腮ニ至ル者ヲ服シ又周圍ヲ折返シタル帽ヲ冠セリ  
此等ノ服様ハ來世ニ其ノ拿破侖タルヲ知ラシムルニ足ルヘシ

テイレクト、リーノ權力頗衰廢ニ至レリ是ニ於テ拿破侖ノ如キ英傑在  
ラハ漸ク其ノ權ヲ奪ハレンコトヲ忌憚シ之ヲ疎遠スルノ謀ヲ營ミ大  
ニ意匠ヲ費セリ拿破侖ハ恬然トシテ之ヲ知ラサル者ノ如シ但承ク閑  
廢スルコトヲ喜マズ因テ埃及國ヲ畧征スルコトニ於テ心大ニ之ヲ喜  
ヒ以テ大快事トス

拿破侖其ノ軍中ニ就テ新ニ一隊兵ヲ設ク其隊約百人ヲ以テ連合セリ

其ノ兵皆文學技術有名ノ士ナリ佛人之ヲ呼テサヴァン智者ト云フ義ト曰フ夫埃及國ハ古來文華開明ノ國ニシテ學術ノ本源ト稱セラレシ所ナルヲ以テ其ノ寶物古器ヲ搜索點檢セント欲シテ此ノ學士隊ヲ率ルルナリ

希臘國及羅馬國ニ於テ古昔流行セシ所ノ諸物當時佛國ニ於テ亦大ニ行ハル物名及衣服ノ制度ハヘーゼン宗ニ因テ之ヲ確定ス拿破侖學術ト兵事トヲ併セ好メルヲ以テ世人其ノ評ヲ爲シテ曰ク拿破侖ハ即ミテルヴァト稱スル女神ナリ學術ト兵事トヲ司ルノ神ナリ一手ニ槍ヲ持シ一手ニ學術ヲ教導シテ遠征ノ先鋒ヲ爲サント欲スル者ノ如シト

第一百九十四篇

征畧ノ兵埃及國ニ達ス

紀元一千七百九十八年第六月ヲ以テ征畧ノ兵トウロン港ヨリ航シテ

マルタ地中海ニ在ル所ノ一島ナリヲ畧取シ徐々トシテ埃及國アレキサンドリヤ中

海濱ニ在ル所ニ上陸セリ此ノ港市ニ在ル所ノ守兵佛軍ヲ拒クコト少

頃時ニシテ乃降レリ是ヲ以テ戰勝ノ兵直ニ進テカイロ埃及ノ首府ニ達

ス其ノカイロ府ニ達スルノ沿道ニ在ルマムリツクスト云フハ埃及

國王兵士ノ稱號ナリ

佛兵士ノ戲謔ヲ好ム甚シ危險ノ地ニ在リト雖戲謔ノ情ヲ忘ルハコト

能ハス茲ニサヴァン佛國學士智者ノ稱號ノ人ハ驢馬ヲ支給シ其ノ騎乘ニ供シ

或ハ運輸ニ備フ此ノ驢馬ハ埃及國ニ於テ常ニ運輸ニ備フル所ノ家畜

タリ佛軍ノ大將時ニ令テ兵士ニ下シサヴァン隊ハ殊ニ留心シテ防守

レ其ノ身ヲ傷害セザラシム而シテ兵士等大軍ノ攻撃ヲ受ル毎ニ其ノ



歩軍ヲシテ方陣ヲ作ラシム此ノサヴァン即學士隊ヲ防護シ其ノ方陣  
 中ニ置テ其ノ身ヲ安シセシメント欲シテナリ  
 然レトモ此ノ學士隊ニ於テハ無識ノ兵士ハ因ヨリ此ヲ尊敬スルヲ知  
 ラズ唯其ノ異狀ヲ嘲笑シテ哄噓ノ聲常ニ陣外ニ溢ルヽニ至レリ時ニ  
 一隊ノ指令官兵事ノ機變ヲ觀テ精細ニ着眼スル者アリ乃揚言シテ曰  
 ク彼ノ純ナル驢及サヴァンヲシテ常ニ方陣中ニ在ラシメヨト  
 佛軍遊撃スル沿道皆大沙漠ニシテ偏強ナルマムリックスノ兵茲ニ防  
 守シ最上ノ亞刺伯馬ニ跨リ短長ノ銃砲ヲ備ヘ其ノ勢焰沙漠ヲ蓋フカ  
 如シ此ノ騎兵等羽飾ノ頭巾空中ニ耀映シ美麗ナル軍裝兵器燦爛トシ  
 テ太陽ト光ヲ放アリ  
 其ノ騎兵忽進ミ忽退キ疾キコト烈風ノ如ク佛人ノ隊ヲ離レテ躊躇ス

ル者ヲ見レハ彼亦或ハ其ノ騎ヲ按シ別ニ爲ヌ所アルカ如ク或ハ大ニ  
 驅逐シ旋轉ノ勢勇猛ナリ

是ノ時英國ノ軍艦都督ロルドテルソン佛軍ヲ進撃センガ爲メアレキ  
 サンドリヤ港市ニ達セリ時ニ紀元一千七百九十八年第八月一日ナリ  
 此ノ日ナイルノ戦アリ而シテ此ノ戦ニ於テ佛ノ軍艦敵兵ニ畧取セラ  
 レ或ハ撃碎セラレテ唯四艘ヲ餘スノミ

佛軍斯ク險危ニシテ孤立援ナキヲ以テスト雖拿破侖曾テ意トナサズ  
 乃遂ニ埃及國ノ首領ト爲ルニ至レリ是ノ時佛兵ト埃及國ノマムリッ  
 クスト交戦ノ最大ナル者ヲピラミートノ役トス此ノ戦ヲ斯ク稱スル  
 ハ埃及國ピラミート即重大ナル造營金字塔ノ近傍ニ在テ戦闘セシテ  
 以テナリ

拿破侖埃及國ヨリパレスタイン國ニ進軍セシガ乃復埃及國ニ還ル此  
 土耳其國ノ軍ト交戦アラシカ爲ナリ此ノ軍其ノ國都コンスタンチナ  
 ーブルヨリ航海シテ埃及ニ達ス而シテ拿破侖ノ最盛美ニシテ大吉利  
 アル所ノ戦勝ハアブキール埃及海濱ノ市邑港ナリニ於テアス時ニ紀元一千七百九  
 十九年第七月二十五日ナリ此ノ戦ヲ以テ拿破侖埃及國ニ在テ爲ス所  
 ノ事業悉ク成就スルニ至レリ拿破侖同フ所敵無ク其ノ鋒ヲ交ル處ト  
 シテ成功セサルハ無シ然レトモアクル市邑ノモ拔クコト能ハス此ノ  
 アクルハ海濱ニ在リテ防禦甚嚴ナル所タリ其ノ之ヲ拔カント欲シ攻  
 撃スルコト前後十一次此ヲ防守スル所ノ軍ハ土耳其英吉利二國ノ銳  
 兵ニシテ守禦ノ策甚精密ナルヲ以テ遂ニ拔クコト能ハス此ノ防守兵  
 ノ指令官タル者ハシツドニー、スミツスト云フ人ナリ

茲ニ拿破侖佛國事務ノ情形ヲ探知シテ緩急還ラサルヲ得サルノ勢ア  
 リ是ニ於テ自愛寵スル所ノ數士及當ニ心服ヲ布ク所ノ士數員ト直ニ  
 海ニ航シテ去レリ其ノ歸航ニ當テ英國艦隊ノ爲ニ殆捕獲セラレント  
 スルモノ數次遂ニ此ノ危急ヲ脱シテ佛國フレージユスニ達スルヲ得  
 タリ實ニ紀元一千七百九十九年第十月九日ナリ

### 第一百九十五篇

佛國ニ於テ勃拿波爾的凱陣及ヒコンシユル、大統領ト爲ル事  
 彼ノ日耳曼帝ハ其身禍ニ切近スルヲ懼テ佛國ト和好ヲ講セシモ今ニ  
 至テハ其ノ恐懼スル所ノ者遠ク去リ且佛國艦艦ノ破壊スルモノ無數  
 ニシテ彙將勃拿波爾的其ノ餘長ルヘキ精兵銃卒亦皆伊太利ニ來ルコ  
 ト能ハズト爲セリ

日耳曼帝乃英國ノ請求スル所ニ隨ヒ且其ノ國ヨリ大ニ金貨ヲ供給スルアルヲ以テ大ニ兵援ヲ得テ又更ニ佛國ト戰ヲ起セリ是時魯西亞國モ又佛國ニ敵シテ己ニ干戈ヲ動スニ至リ伊太利モ亦復澳地利人ノ有ト爲リ又魯國ノ大將スワロフハ大ニ勝利ヲ得タリ

佛國ノ強盛ナル屢戰勝ヲ得ル其ノ常技ニシテ怪ム可キニ非サルカ如シ而ルニ今ノ敗軍忽大不幸ノ及フコトアフロントスルヲ以テ國民ノ意氣沮喪シテ大ニ不安ノ色ヲ現スニ至ル而シテ佛國政廷ノ司長固ヨリ國民ノ望ヲ歸スヘキ者ナク其ノ威權ヲ保持センコト甚難シ意フニ政廷將ニ變革スル所アフロントス實ニ危急存亡ノ秋ト謂フヘシ

茲ニ勃拿破爾的歸國ノ新報ヲ望ムコト恰好機會ノ來リ大時運ノ復スルヲ待ツカ如シ而シテ此ノ新報ヲ巴里府ニ送ル所ノ使人ハ大戰勝ノ

報使ヨリ優レル待遇ヲ受ケタリ其ノ使報ハ唯勃拿破爾的ノ旋軍ヲ告クルニ止ル而ルニ政廷ノ會議ニ在テハ戰勝ノ喝采ヲ以テ祝賀スルニ至レリ

勃拿破爾的ノフリジヤスヨリ巴里府ニ至ル沿道ノ行軍ハ即凱陣ノ儀ノ如ク各處ニ鐘ヲ鳴シ道路ヲ清ム勃拿破爾的ノ旋軍スルヤ朝士司長ニ至テハ意ハズ瞿然トシテ憂懼スル心アリ然レトモ強ヒテ喜フ色ヲ裝作シ以テ其ノ中情ヲ藏匿セリ

勃拿破爾的此ノ時恬然トシテ晦養ノ術ヲ計リ其ノ外貌ハ專文學ニ一身ヲ寄スルカ如シ其ノ實ハ佛國ノ事情形勢ヲ闕ヒ知ル所アリ其ノ事タル率勃拿破爾的ノ施爲シ易キ所ナリ因テ衆人類ヲ集メ勃拿破爾的ニ左袒セントスル者衆ク各皆其ノ圖求スル所ノ情事ヲ聞知セントスレ

是ニ於テ勃拿波爾の大事ヲ爲サントスルノ時機至レリ乃立法會議員  
 サンクルーニ於テ集會商議セリ此ノサンクルーノ地ハ巴里府ヲ相距  
 ルコト殆六里許ナリ紀元一千七百九十九年第十一月十日ヲ以テ勃拿  
 波爾の諸士官ノ大衆ヲ從ヘコンセイイ、ド、サンサンノ院内ニ入り來レ  
 リ勃拿波爾のノ此ノ院ニ入ルニ當テ議論騷擾タリシカ兵士ノ來リ集  
 ルニ會シテ會議員モ亦散解セサルコト能ハサルニ至レリ  
 會議結收ノ局ニ至テ政廷司長ヲ廢シ百般ノ公務ヲ管理スルノ權ハ衆  
 撰ノ三人ニ委任セント決定セリ此ノ執政三人ヲ稱シテコンシユルト  
 爲ス而シテ三人中ヨリ又一人ヲ撰ヒ之ヲ第一コンシユルト稱シテ最  
 上ノ威權ヲ握ル者トス勃拿波爾の、シユージェス、ジュコーノ三人公撰ニ  
 因テコンシユルノ權ヲ受タリ其ノ第一コンシユルニ至テハ未遽ニ命

スル所アラス此ノ三人ニ委テ相俱ニ議決スヘントス  
 シユージェスハ大才智アリ好テ名聲ヲ貪ルノ僧侶ナリ其ノ政府ノ改革  
 アル己内國事務ヲ管理スルノ地ニ居ラント欲シ大ニ衆人ヲ慫慂シ  
 テ務メテ變革ノ事ニ從ハシム此ノ僧ノ意ニ謂フ勃拿波爾のヲシテ兵  
 事ノ總督ヲ委任セシメハ其ノ意當ニ充滿スヘシ我ハ内國百般ノ事務  
 ヲ處分スルノ權力ヲ有セント

茲ニシユージェス第一コンシユルノ位ヲ得ント欲スルニ就テジュコー  
 ノ意ハ己カ意ニ差ハサルヲ料レリ此三人始テコンシユルノ集會ニ就  
 ク時ニ當テ其ノ意俱ニ相反セリ一ハ勃拿波爾のヲ云フ一ハ勃拿波ジュコー乃シユージェスニ  
 謂テ曰ク第一コンシユルノ位地タル素ヨリ宜シク汝ニ付スヘシ之ヲ  
 屬セシコト論說ヲ須タサル所ナリト勃拿波爾のハ固ヨリ其ノ理アル

コト同一ナル議ヲ發セリ

三人コンシユルノ商議ニ至リ勃拿波爾的詳細ニ事ヲ論シ先ツ國政上ニ關涉スルコト及會計事務宗門教旨并ニ諸法律等ノ事ニ至ルマテ大ニ其ノ持論ヲ主張スルアリ是ヲ以テアシユールニス目瞪シ口呆シテ其ノ欲スル所一切雲消スルヲ悟リシ豁然トシテ自改テ平生謀議スル所ノ政學家ニ謂テ曰ク汝等貴人向來國政事務ニ於テ更ニ謀議スルコトヲ用ヰザレ汝ニ主君ノ在ルアリ勃拿波爾的職トスル所ノ意見ヲ以テ百般ノ事務ヲ管理スルコトヲ得ン便宜ニ從テ事ヲ行フコトアルヘシト

### 第一百九十六篇

サン、ベルナル山ヲ踰ユル事

第一コンシユルノ政權ヲ握ル始ニ當テ其ノ行フ所ノ第一事ハ即澳地

利及英吉利兩國講和ノ事トス然ルニ兩國之ヲ拒テ聽カス此ノ時英國ニ和ヲ講スルニ其王第三世ジョージニ贈ルニ勃拿波爾的自書ノ書翰ヲ以テセリ從前英佛兩廷ノ通信ハ其ノ國相ヨリノ外曾テ致シ來ル者無シ

茲ニ日耳曼國ニ在ル所ノ佛軍將帥ノ任ハモロート云フ者ニ委セリ伊太利國ニ留マル所ノ將帥ハ仍勃拿波爾的自之ニ任セリ紀元一千八百零五年五月六日ヲ以テ勃拿波爾的巴里府ヲ發ス此レ瑞西國ノ徵兵六萬餘人ニ將帥タラント欲スレハナリ

勃拿波爾的ノ策ニ依テ此ノ大軍ヲ行ルニ悉ク其ノ大砲彈藥軍器輜重等ヲ隨帶シテ歐洲最第一ノ高山ヲ踰エントス其ノ山路險隘僅ニ一山羊ノ過ルニ足ルノミ是ヲ以テ測量築城術ヲ善スル所ノ人ヲ遣シテア

ルプス山ノ絶頂ナルベルナール山ヲ測量セシム  
 此ノ人大山ノ險路ヲ攀登スルニ極メテ困頓スト雖終ニ其ノ巔ヲ究ム  
 ルコトヲ得タリ乃復前路ニ循テ下リ來テ第一憲官ノ所ニ復命セリ時  
 ニ第一コンシユル即勃拿波爾の間テ曰ク道路險隘ナリト雖尙軍ヲ行  
 ルコトヲ得ヘキカ其ノ人答テ曰フ極メテ艱險ナリト雖踰ユルコトヲ  
 得ヘシ拿破侖之ヲ聞キ其ノ人ニ謂テ曰ク然ラハ余輩ヲ先導セヨト是  
 ニ於テ奮起シテ軍ヲ進メント欲ス誠ニ非凡ノ軍行ト謂フベシ  
 第五月十五日ヲ以テ拿破侖自大軍ヲ帥先驅シテ進發スルヨリサン  
 ヨリサン、ビエールノ一小邑ニ達ス是處ヨリシテ路ノ通スヘキナシ但  
 見ル一山極メテ高大ニシテ近ツキ攀ツベカラサルヲ其ノ巔荒漠際ナ  
 ク積雪中ニ亢立セリ

一路極メテ峻絶極メテ屈曲凹凸ス積雪崔嵬風起ルトキハ雪塊山腹ヲ  
 旋轉シ兵士ノ山腹ヲ下ルニ擊觸シテ力勝ツコト克ハス亦俱ニ谷中ニ  
 墮落セントス要スルニ山羊ノ一種レヤモワーノ外絶エテ人ノ踰越ス  
 ル能ハサルカ如シ

其ノ危険斯ノ如クナルニ第一憲官及從兵等爲ニ一點ノ難色ヲ見サズ  
 材木ヲ鑿刳レテ砲身ヲ其ノ中ニ嵌シ率テ砲一門ヲ一百人ニテ運搬セ  
 シム乗車ハ其ノ器具機械ヲ解放シテ腰背ニ負ハスアリ或ハ兵卒ノ運  
 搬スルアリ彈藥軍器ニ至テモ亦之ニ同シ

凡運搬ノ勞兵士一半ハ斯事ニ從ヒ一半ハ銃包糧糞ヲ運送スルニ從事  
 セリ兵士一人其ノ負擔スル所ノ量各六十磅ヨリ七十磅ニ至レリ身此  
 ノ重負アリテ終ニ徒手ノ人ト雖尙登攀ニ汗勞スヘキ氷雪崢嶸タル山

ノ大險路ヲ越エタリ

樂隊ハ大兵ノ先行ニ在リテ時ニ音樂ヲ奏シ若シ大艱難ノ場ニ至レハ即大鼓ヲ鳴ラシ進撃ノ號ヲ爲レ兵士ノ意氣ヲ激勵シ天然ノ障害物即險路等ヲニ抗スルノ勇氣ヲ鼓セシムルカ如シ夫佛國ノ兵士ニ非ズン云フナリハ誰カスノ如キ艱險ヲ忍テ進行スル者アラシ又拿破侖ニ非ズハ誰カスノ如キ非常ノ危行ヲ爲スニ忍フ將帥アランヤ

拿破侖時有テハ兵後ニ在リ唯嚮導者ヲ從ヘルノミ身ニ服スル所ハ灰色ノ外衣藏少所ハ三角ノ帽子ナリ是時天氣空濛淫雨淒涼タリ而ルニ拿破侖平生ノ豪氣ヲ損セス一日其ノ帽ヲ振ヒ雨水ヲ絞リ去リ含笑シテ導者ニ謂テ曰ク試ニ見ヨ此ノ山余カ爲ニ何ヲカ爲サン徒ニ我帽ヲ損壞セシノミ山ヲ越エハ我新帽ヲ改易セント

此ノ山嶺ノ傍ニ僧徒ノ勇氣アル者住メリ積雪中ニ其ノ居ヲ占ム此斯ノ如ク絶險ノ山中タルヲ以テ窮困ノ行人ヲ救護セント欲スルカ爲ナリ此ノ僧徒ヲ呼テサンベルナールノ僧徒ト做ス兵士等此ノ處ニ至ルマテ乾麪包ヲ雪中ニ漬シテ食フニアラザレバ曾テ其ノ爽快ヲ覺ル者アラズ

茲ニ此ノ僧院ノ老糧米ヲ貯藏スルノ大庫アリ兵士此ノ處ヲ過ルアレバ輒給與スルニ麪包乾酪及酒一杯ヲ以テセリ嘗テ一人アリ此ノ行ヲ同クセシ者此ノ說話ヲ爲シテ曰ク斯ノ如キ勞困ノ時ニ當テ酒一杯ヲ得ルハニキシコ國ノノキシコハ金ヲ出タス國ナリ金貨ヲ得ルニ優レルコト遠シトレ此ノ山ノ一方ヲ下ルニ起初上ル時ヨリ尙艱險ナル所アリ然レトモ一物ノ損耗スル者ナク竟ニ此ノ險路ヲ越ユルヲ得タリ第五月十六日ノ

詰朝大軍ノ先鋒ビエモンニ於テアオレタ伊太利北部一府ナリチ畧取セリビエモンハ曠濶タル地ニシテ兵士等既ニ經過スル勞ヲ忘レテ大ニ快活ノ意ヲ覺フルニ至レリ

## 第一百九十七篇

マレンゴー及ホエンリンデンノ戰并ニルノヴィール及アミアンスノ講和

拿破侖此ノ大軍ヲ率テアルプス山ヨリ下リ進ム此ノ地曾テ人ノ騎歩シテ來往スル者ヲ見ズ今大軍ノ暴ニ到ルヲ望テ澳地利人驚愕シテ謂フ此必妖魔ノ幻術ヲ施シ之ヲ致スナルベシト拿破侖乃澳人ノ魂驚キ膽落ルヲ好機トシ勢ニ乘シテ奇策ヲ以テ片時ニ數次ノ戰ヲ爲シ最後第六月十四日ヲ以テマレンゴーノ大戦ニ大勝利ヲ得タリ

此ノ戰實ニ全勝ヲ伊太利國ニ得テ第七月二日第一コンシユル拿破侖巴里府ニ旋軍セリ其ノ他ノ征戰皆二月ニ過キスレテ罷ム勃拿波爾的往者埃及國ニ至ル時伊太利境內ナル佛國畧有ノ地ノ敵國ヨリ奪掠セラルタル者時ヲ費サズシテ復悉ク佛國ノ版圖ニ歸セシメタリ

是ニ於テ勃拿波爾的復講和ヲ澳地利ニ謀ル而ルニ英國再金貨ヲ澳地利ニ贈給スルヲ以テ澳國之ヲ恃テ固ク其ノ和ヲ拒ム因テ紀元一千八百零二年二月三日ノ戰アリ澳軍ホエンリンデンニ於テ大ニ佛軍ニ敗ラレタリ時ニ佛軍ノ將ヲモロート云ヘリ

是ニ於テ澳帝其ノ宿志瓦解シ力亦能ク爲スコトナシ遂ニ和ヲ講センコトヲ求ム帝初志固執シテ敢テ講和ヲ聽カズ今勢窮リ形屈シ守禦ノ術復施ス所ナク自ラ和ヲ乞フニ至ルヲ以テ其ノ要約スル所ノ條款必



當ニ嚴酷ナルヘシト謂フ然ルニ大ニ之ニ反シ其ノ和約ノ條款實ニ帝  
心ノ利スル所ノモノ多シ此ヲ稱シタルノウィールノ和約ト云フ而シ  
テ紀元一千八百一年第二月九日ヲ以テ相與ニ之ヲ證示セリ

斯ニ至テ英國獨未佛國ト干戈ヲ收メヌ而シテ埃及國ノ地ハ兩國相爭  
フ所ノ者トナレリ佛國ノ埃及ヲ有スルハ固ヨリ其ノ欲スル所ナリ然  
ルニ英國之カ説ヲ作シテ埃及ハ之ヲ土耳其國ニ返スヘキヲ至理ナリ  
トス彼此ノ論久シテ乃止ムニ至リ佛軍ノ埃及國ニ在留スル者其ノ本  
國ノ給養繼ク能ハサルヲ以テ是即往年佛國ノ艦隊悉英國ニ  
打破セツレシ故ヲ以テナリ己ムコト  
ヲ得ズ埃及國ヲ去ルニ至レリ紀元一千八百二年第五月二十七日英佛  
兩國相共ニ和約ヲエミアンスノ地ニ結ベリ

第一憲官勃拿波爾的衆人ノ階級ヲ確定シ承ク其ノ政廷ノ存立センコ

トヲ謀リテ一身ヲ此ニ從事ス紀元一千八百一年第九月十八日ヲ以テ  
拿破侖佛國ニ於テ更ニ宗門ヲ再興セント欲シ因テ羅馬法王ト盟約ヲ  
結ヘリ此ノ盟約ヲ稱シテコンコルダフト爲セリ

羅馬法王加特力宗門ノ首領タルハ世ノ知ル所ナリ而シテ其ノ祖先法  
王ヨリ以來永世固有維持スル所ノ最大權力ノ如キハ今全ク擲棄スル  
ニ至レリ今更ニ加特力宗門ヲ設立スルノ禮典ハ巴里府中ノノートル  
ダムノ寺院ニ於テ講習セリ其ノ式樣甚端麗壯嚴ナリ

拿破侖勃拿波爾的是時王者ノ儀容ヲ爲シ自寺院ニ臨メリ茲ニエス都  
ノ大督教主タル者曾テ佛王第十六世路易即位ノ禮ヲ行ヒ時說法シ  
タル例アルニ因リ今復此ノ人ニ説教ヲ命セリ

勃拿波爾的又少年ノ徒ナシテ學科ヲ教習セシメン爲ニ一教場ヲ設立

セント欲シボリタクニツクノ學校ヲ興起セリ又善全ノ法律書ヲ編成  
セント欲シ佛國內最大名アル律法師タル者ヲ召集シテ己ヲ輔翼セ  
メ而シテ其ノ弊習冗事無用ニ属スル者ハ盡ク究論詳議シテ大ニ改竄  
訂正スル所アリ

是ノ外佛國內ニ於テ大ニ更新スル所アリ規模甚廣大ナリトス凡道路  
水道及橋梁等修理築造セサル者無シ都テ勃拿破爾的ノ功勞ニ至テハ  
其ノ處ル所ノ地位ニ適當スルヲ窺ヒ觀ルニ足レリ

茲ニ紀元一千八百四年ニ至テ拿破侖一大事ヲ作起スルコトアリ此ノ  
事大ニ物議ニ涉レリ時ニ拿破侖其ノ兵士ニ令テ下シテダアンジヤン  
侯ヲ逮捕シ以テ巴里府ニ來ラシム此ノダアンジヤン侯ト稱スルハボ  
ルボン家ノ一族ニシテ當時日耳曼國ノバルデンニ居ル者ナリ

此ノダアンジヤン侯謀テ拿破侖ヲ殺サントスル者ノ黨タルノ嫌疑アリ  
因テ此ノ侯ヲ糾問シ死刑ニ處センコトヲ裁斷シ其ノ夜巴里府ヲ距  
ル四里許ナルウアンジューン城壕ニ於テ射殺セントス

今衆説ニ據レハ此ノ侯斯ノ如キ奸計ニ關係セサルコト世ノ知ル所ナ  
リ然レトモ當時拿破侖ヲ殺サント謀ル者アルハ確實ナル明據アリ疑  
ナ容ルメカラス此ノダアンジヤン侯ヲ死刑ニ處スル所以ハ拿破侖其  
ノ仇怨アル者ヲ懲戒スル所アランコトヲ欲シテ然ルナリ

此ノ事ヤ拿破侖ヲ謀殺セントスルノ徒ヲシテ警戒セシムルニ足レ  
リト雖斯ノ如キ慘烈ナル事亦憫ムニ足レリ但其ノ拿破侖ヲ殺サン  
コトヲ謀ルハ實ニ其ノ人アリ而シテ其ノ證據世ニ見ハレレヨリダ  
アンジヤン侯ノ冤枉ナルコト又益明ナリ且今佛國始メテ平定シ歐洲

爲ニ清平ヲ得ルト雖拿破侖世ニ在リ復將ニ騷亂ニ歸スルコト有ラ  
 ントスルモ亦明ナリ夫拿破侖ヲ暗殺セント謀ルコト已ニ數次嘗テ  
 紀元一千八百年第一月ヲ以テ賭テ龍動府ニ爲ス者アリ曰ク拿破侖  
 第四月ニシテ殺サルヘント而シテ後又巴里府ニテ結黨セル者約五  
 十人ヲ查出セリ其ノ黨中或ハ高貴人アリ又拿破侖ヲ謀殺セントス  
 ル黨人英國ヨリ多ク貨賂ヲ受ケ其ノ使用ト爲ル者謀覺ハル又英國  
 宰臣等ムニツクハザッリヤノ首都日耳曼ウエルテンニ在テ佛  
 國ニ敵シ事ヲ起サント欲シ因テ國界ニ群集セル佛國移住ノ人民ヲ  
 鼓動スルコトヲ查出セリダアンジャン侯適此ノ國界ニ住セルヲ以  
 テ其ノ黨ノ魁首ナラント謂フナリ其ノ疑獄ヲ致ス所以ノ事故千萬  
 アリト雖一々縷説スルモ亦煩冗ナルカ故ニ姑之ヲ闕ス今侯ノ佛政

府ニ捕ハレ糾問セラレレ罪狀ノ其ノ款ニ曰ク佛國ヲ仇怨シテ干戈

ヲ把リ英國ノ爲ニ其ノ心力ヲ竭ス又自バルゲン日耳曼國侯ノ其ノ

他ノ地方ニ群集セル叛黨ノ魁首ト爲リ英國ノ支給ヲ受ケ且英國ノ

拿破侖ヲ殺サントスルノ謀ニ與カリ務メテ其ノ事ニ力ヲ盡スト然

レトモ終ニ一事ノ侯ヲ留スヘキノ見罪アラサルヲ以テ此ノ條ノ證

據ト確定スベカワズ侯其ノ明且第六時ヲ以テ遂ニ死ニ就ケリ世ニ

傳フル所ニ云ク兵人侯ヲ以テ發彈ノ標的ト爲サント欲シ燈臺ヲ其

ノ脚膈ニ懸ケタリト夫此ノ侯ヲ冤殺セル實ニ拿破侖ノ操行上ニ在

テ萬代消滅スヘカワサルノ疵病タリ余等茲ニ侯ノ冤枉ニ死セシテ

回顧シ之ヲ熟慮スルニ蓋侯ノ爲ニ其ノ無罪ヲ辨解セル者其ノ説ヲ

主張スルノ力量足ラサルナリ拿破侖ニ於テハ一個ノ無罪ヲ殺シ又

有罪ヲ罰スルニ失セリトス而シテ有罪ノ徒其ノ心之ヲ慨歎シテ曰ク刑罰大ニ其ノ當ヲ失ヘリ有罪其ノ刑ニ免カレ無罪反テ罰セラルト此ノ侯國ヨリボルゴン家系ニ出ツ是故ニ其ノ心必大ニボルゴン統人ノ再佛國王位ニ回復スルヲ意欲スルコトアルベシ故ニ云フ若シ佛國中央ノ地ニ在テ一變革ノ事アルコトアツハ蓋侯必是カ魁首ダラント而レモ當日ノ事ニ在テ侯ヲ凶黨ナリト誣ルニ至テハ固ヨリ一ノ證明スルニ足ルモノアラズ

### 第一百九十八篇

拿破侖選ハレテ佛ノ帝位ニ登ル

書中佛帝ト記スレトモ佛國帝ニアラス此人民ノ帝タル

ノ意故ニ國土ハ拿破侖ノ國土ニアラス人民ノ主タルヲ云フノミ蓋國帝タルハ佛人民モ亦肯テ好マサル所ナルベシ

憲官ノ任タル初時其ノ期限ヲ定ム而シテ拿破侖能ク其ノ任ニ堪ヘ事

務ヲ盡スト云フヲ以テ人民之ニ報謝センコトヲ商量シ終身此ノ職ヲ擔任セシメンコトヲ決議シ又其ノ代テ此ノ任ニ當ル人ノ如キモ拿破侖自之ヲ選フコトヲ得ルノ權ヲ執ラシメタリ

拿破侖其ノ權力ヲ得ル己ニ斯ノ如キニ及フト雖其ノ大ニ欲スル所ノ貪心未飽醫セス其ノ意謂フ眞個ノ權力アラハ冀クハ之カ尊號ヲ得ント乃紀元一千八百四年ヲ以テ選ハレテ帝位ニ登リ始メテ其ノ素志ヲ飽カシムルコトヲ得タリ其ノ即位ノ禮ハ未曾テ帝王權内ニアラサル所ノ大禮典ヲ以テ之ヲ行ヘリ

曩時法王レオ王シャルマンニ服セシムル金冕ヲ以テセシコト上條ニ説ケルカ如シ又王シャルマンノ儲立テ王位ニ即クニ及テ法王第七世ビュースト云フ者金冕ヲ冠セリ但王シャルマンノ此ノ禮ヲ行フ遠

ク羅馬ニ赴キ其ノ堂ニ入テ之ヲ行ヘリ今拿破侖ノ即位禮ヲ行フ彼ノ法王ヲ佛國ニ召シテ以テ之ヲ行ハシメンコトヲ決セリ

紀元一千八百四年第十二月二日ヲ以テ此ノ禮ヲ巴里府ノノートル・ダムノ禮拜堂ニ行ヘリ帝拿破侖此ニ即位ノ盟ヲ爲ス舊例ノ如シ又法王ニ倣フテ之ヲ爲スコト數次而シテ拿破侖自金冕ヲ服スルノ禮較通常即位禮ニ異ナル所ナリ

時ニ來臨スル所ノ僧侶中最高貴ナル者金冕ヲ捧ケテ帝拿破侖ニ冠セシム其ノ禮舊例ノ如シ此ノ高貴僧ト稱スル者ハ上帝ニ代テ此ニ降臨スル者ト爲ス又帝ト王ト俱ニ上帝ノ管スル所ノ者ト爲セリ而ルニ獨拿破侖其ノ信文ヲ禮拜堂中ノ高僧ニ受ルコトヲ肯セス乃法王金冕ニ福ヲ祈リ拿破侖手目之ヲ神壇ニ取テ其ノ首ニ冠シ而シテ後復之ヲ其

ノ妃ニ冠セシメタリ

是ノ時シサルピーンノ共和政國更ニ以太里王國ト稱シ拿破侖ヲ招テ又此ニ王タラシメント欲ス即紀元一千八百五年第五月二十六日ヲ以テ拿破侖鐵冠ヲミーンランニ服セリ世ニ之ヲ稱シテロンバルドト云フ即古昔歷世王者ノ服スル所ノ者ト爲ス

拿破侖既ニ此ノ冠ヲ服シ因テ又人民ノ族階稱呼ヲ其ノ舊ニ復セリ帝族一派ヲ稱シテ王族ト爲シ他ノ有名將帥及政學家ヲ稱シテ公若クハ侯トナセリ

是ノ時ニ當テ帝拿破侖詔ヲ下レテ外邦ニ移住セシ人民ヲ召シ還ス衆庶欣々然トシテ喜ヒテ相賀セサルハナシ宮中舊貴族アリ又再此ニ雲集シテ各務メテ新帝ニ諛ヲ呈スルコト猶其ノ祖先ノ嘗テ大王第十五

世路易ニ事へ趨走スル狀ノ如シ其ノ賤陋ナル奴僕ノ態見ルヘシ  
 革命儀例既ニ畢リ嚴然タル政廷ヲ興隆セシニ因テ國民ノ歡喜欣躍ス  
 ルコト際リ無ク佛民ノ如キハ皆嘗テシヤコバン王家ノ暴政ニ苦ミ且  
 共和政治大統領ノ衰運ニ遭ヒ其ノ困阨ヲ取ル所ノ者ナリ

第一百九十九篇

再度ノ兵亂オーストルリッヅノ役プレスブルグノ講和并ニ

ブレッスヴァンドーシニ圓銅柱碑ヲ立ツ

佛英二國ノ和親スル久シキコト能ハス復于戈ヲ交フルニ至レリ其ノ  
 孰ヲ是トシ孰ヲ非トスル余ノ能ク辨識スル所ニ非ズ其ノ先戰ヲ公告  
 セシ者ハ英國ナリ未戰ヲ公告セサルニ當テ英國其ノ民ニ布令シテ曰  
 ク凡何ノ地ヲ問ハス何ノ處ヲ論セス其ノ點檢査出スル所ニ隨テ佛國

ノ船舶ヲ奪掠セヨト此實ニ紀元一千八百三年第五月十六日ナリ

拿破侖亦令シテ曰ク英國國民ノ和蘭佛國內ニ在ル者ヲ見ハ誰人ヲ論セ  
 ズ悉ク之ヲ捕縛セヨト二國ノ令スル所既ニ斯ノ如シ其ノ下民ニ於ケ  
 ル亦大不幸ナラズヤ英國人ノ殘暴ナル之カ爲ニ佛國船戶ヲシテ悉ク  
 衰廢ニ屬セシメ又佛國人ノ無情ナル此ノ時國家寧靜ニ屬シ諸地方ニ  
 遊寓スル百千萬ノ英國人ヲ捕虜スルニ至レリ

是ヨリ先キ佛國共和政治軍人ノ勝利ヲ得タル者大ニ美麗ナル偶像及  
 漆器等ノ物品ヲ以太里及和蘭ヨリ畧取シ得テ齎シ歸レリ是ヲ以テ高  
 貴富豪ノ士及好事家ノ古器奇品ヲ辨明セル諸生等多ク巴里府ニ來集  
 シ展觀セリ

今此ノ人衆悉ク拘留セラル其ノ家郷ヲ辭スル時ハ僅ニ數日ヲ期シ妻

子ニ別レ去リレニ今ニ於テハ期ノ如ク歸郷スルコトヲ得ス其ノ親族ト離隔スルコト幾年時ヲ度ルヘキヤヲ知ラサルニ至レリ其ノ解放セラレテ其ノ郷國ニ還ルヲ得ルハ唯兩國和平スルニ至ルニ非ズハ得ベカラサルナリ

紀元一千八百三年第五六月ヲ以テ佛軍ハノーブル日耳曼列國中ノ一ヲ畧取セ

リ而シテ後一千八百五年第二月四日ニ及テ拿破侖復書ヲ英王第三世

ジョージニ贈レリ其ノ文中務テ交戦ヲ休メンコトヲ諭示セリ王ジョ

ージ竟ニ之ニ答フル書ナシ

是ノ時魯西亞澳地利ノ二國亦佛國ト抗戦スルヲ公告ス而シテウルテ

ンベルグ及パウアリアノ二小邦兵ヲ出シテ拿破侖ト合從ス拿破侖乃

二邦ニ貽ルニ王號ヲ以テシア之ヲ賞セリ

既ニシテ澳軍來テパウアリアヲ襲撃ス是ニ於テ拿破侖親クランドアルメー即老練ノ軍ニ將トシテ之ヲ援ク爾來直ニ號令ヲ拿破侖ニ受クルノ軍ヲ稱シテグランダルメート呼ヒ倣セリ時ニ澳軍力拿破侖ニ敵スルコト能ハス

拿破侖其ノ第十月ヲ以テ進テ日耳曼ニ入り十一月十三日ヲ以テ維納府ヲ畧取セリ此ノ府ハ澳地利ノ有ニシテ實ニ壯麗ノ一首府ナリ拿破侖其ノ最壯麗ナルシヨーンブルク宮ヲ取テ此ニ居ル此ノ宮ハ當日ニ及フマアモ日耳曼帝王歷世居住スル所ノ者ナリ

其ノ第十一月二十七日ヲ以テオーストルリッヅノ大役アリ魯西亞及澳地利ノ軍大ニ潰敗ス乃拿破侖自其ノ意ノ如ク講和ノ約條ヲ指畫セリ是ニ於テ拿破侖佛帝號ヲ稱シ又ウルランベルグ及パウアリアニ

邦ノ王號ヲ稱スルカ如キモ共ニ之ヲ聽シテ敢テ異議スル無ク竟ニ紀元一千八百五年第十二月二十六日ヲ以テ此ノ盟約ヲブレスブルクガリイ國ニ修メリノ一市邑ニ修メリ

此ノ戰勝ヲ記セント欲シ乃一ノ大ナル高圓柱碑ヲ巴里府中大街頭ニ立ツ而シテ之ニ纏帶スルニ青銅ノ螺旋形環ヲ以テシ其ノ柱本ヨリ柱梢ニ至ルマテ其ノ環ニ刻スルニ佛軍出テオーストルリツヅノ役ニ至ルマテ最大事功ヲ錄寫セリ是此ノ役ニ敵軍ヨリ獲ル所ノ鈍砲一千二百門ヲ以テ製造セシ所ナリ且柱頭ニ帝拿破侖ノ像ヲ安置シタリ今ニ至テハ則棄テ之ナシ

### 第二百篇

トラフアルガルノ戰拿破侖戰勝ノ後記、ナルジイットノ講和

### 及二帝ノ出會

佛軍既ニ陸地ニ於テ戰勝ヲ得タリト雖英軍海上ノ戰ニテ乃大ニ敗ヲ取レリ佛軍ノ船艦只其ノ港口ニ漂寄シテ大軍ヲ張ルコト能ハス拿破侖英國ヲ襲撃セント欲シボーロン港ニ在テ大ニ其ノ備ヲ爲セリ其事功ナシト雖拿破侖一時大ニ艦隊ヲ簡練スルヲ以テ佛國水師提督是ニ於テ奮勵シテ海戰ヲ爲サント欲ス

佛ノ水師提督其ノ艦隊ヲ率テ英ノ艦隊ニ對セリ是ノ時英國ノ艦隊其ノ勢佛國ノ艦隊ニ敵セス佛ノ水師提督因テ勇進シテ戰ヲ挑ム此ノ時乃佛國ノ不利ヲ取レリ何トナレハ英ノ艦隊ハ名將ロルト、チルソンノ指揮スル所ナリ因テ殆佛國ノ全艦ヲ撃破スルニ至レリ世ニ此ノ役ヲ稱シテトラフアルガルノ役ト爲セリ即紀元一千八百五年第十月十



二日ヲ以テ兩軍相解テ退ク是ノ時英軍戰勝ヲ以テ大ニ賀スト雖計ヲ  
 ズ其ノ名將キルソン氏ノ戰死スルアルヲ以テ衆皆哀傷レテ已ムコト  
 能ハズ然レトモ勇將キルソンハ今日大戰勝ヲ收ムルヲ目撃レテ嘆セ  
 シナリ

是ノ時歐洲過半拿破侖ノ管理スル所ニ屬セリ拿破侖大ニ宿志ヲ遂ケ  
 其ノ意ノ欲スル所ニ隨テ王者ヲ進退スルノ權理ヲ得タリ即拿破侖ノ  
 弟ジョセフヲシテチーブル國ノ王位ニ即カシメ又其ノ次弟路易ボバ  
 ルトヲレテ和蘭國王ト爲スハノーヴエルク國ハ英國王世襲ノ地ナリレ  
 モ拿破侖之ヲ普魯西國王ニ與ヘリ此ノ普魯西王ノ是ノ役ニ當テ局外  
 中立タリシヲ以テ之ヲ褒賞スルナリ

日耳曼國ハ曾テ羅馬法王レオノ佛王シャルマンノ頭上ニ金冕ヲ服セ

シメシ時ヨリ成立セシ所ノモノナリ而ルニ今廢滅ニ屬セリ而シテ日

耳曼王者ノ相結盟スル者十四個是皆最小ノ國權ヲ保持スル者ニシテ

コンフェデラーレユニオン、ライン ライン河邊ノ諸州結盟會同ノ稱號ヲ

以テ相共ニ連合シテ拿破侖ノ保護管理ヲ受ル所ナリ第二世フランシ  
 スノ如キモ禮儀ヲ正シテ舊日耳曼帝號ヲ廢シ澳地利帝號ヲ取ルニ至  
 レリ

拿破侖ノ權勢威力斯ノ如ク赫奕タルヲ以テ世人驚怖スルモ亦甚シ澳  
 地利ノ如キハ初之ニ抗敵スト雖既ニ大ニ其ノ國力ヲ損スルヲ以テ復  
 共ニ抗スル能ハス但普魯士國ニ至テハ未曾テ其ノ國力ヲ竭シテ之ト  
 角逐セス是ニ於テ普魯士國王フレデリック始メテ佛國ト相爭ハント  
 欲シ其ノ公告ヲ發セリ拿破侖之ヲ聞キ勃然トシテ起テ直ニ大軍ヲ以

テ進發ス乃紀元一千八百六年十一月四日ヲ以テエナノ地ノ大戦勝  
アリ同月二十五日ニ及テ勢ニ乘シテ普魯士國ノ首都ベルリン府ニ進  
入セリ

拿破侖頻ニ勝軍ノ勢ニ乘シ紀元一千八百七年二月八日エイセイニ  
於テ大ニ魯國ノ兵ヲ撃破シ又第六月十四日ニ至テ再魯兵ヲフリード  
ラントニ破ル此ノ二役ノ結局ニ至テ魯國帝アレキサンドル其ノ戰ヲ  
喜ムノ驕心頗ニ挫折シテ佛國ニ講和ヲ求ムルニ至レリ因テ紀元一千  
八百七年第七月七日ヲ以テ和約ヲナルシト普魯士國ノ一市邑府ニ於テ行フレ  
此ノ和約ノ條款ハ兩國帝相共ニ商議スル所ナリ其ノ兩帝始メテ相會  
スルノ禮式ニ在テハ往昔帝王修ムル所ノ例ト甚異ナルコト無シ時ニ  
ニユメン河ノ中央ニ一個ノ筏ヲ繫ケリ此ノニユメンハ魯國ト普國ト

ノ境界ヲ爲ス所ノ河水ナリ

兩帝各ニユメン河岸ヨリ同時ニ乗船セリ時ニ兩岸ニ觀望スル者數千  
人兩帝乃河中ニ繫ク所ノ筏ニ上リ帷幕中ニ入テ互ニ親シク相接見シ  
テ以テ其ノ禮ヲ爲ス時ニ兩國ノ軍隊呼聲河水ヲ動カシ相與ニ之ヲ祝  
セリ往時斯ノ如キ際兵士ヲ備フル所以ハ異心ノ人ノアラシムコトヲ恐  
レ之ヲ防護センカ爲ナリ而今兩國各其ノ軍ヲ出シ其ノ國境ニ出會ス  
ル所以ハ唯兩帝相會スルニ當テ各其ノ君主ノ威武ヲ缺損スルコト無  
カラシメント欲シテ然ルナリ

トラファアルガルノ役ニ於テ英國艦隊ノ將チルソン氏敵兵ニ其ノ肩  
總海陸軍將及士官ノヲ撃タシメテ其ノ銃丸竟ニチルソン氏  
ノ肩胛ニ没スルニ因テチルソン氏ハ甲板上ニ倒ル時ニ數個人來テ

共ニ將帥ヲ扶ケ起立モシメントス。テルソン氏始テ覺リ回顧シテハルデイト云フ者ニ謂テ曰ク敵兵竟ニ意ヲ余ニ得タリト。數人逐ニ扶ケテテルソン氏ヲ引テ梯ヲ下ラシム。時ニテルソン氏舵繩能柄トノ所ノ繩間ニ施スノ敵ニ射ラレテ悉ク斷絶スルヲ見テ再其ノ舵繩ヲ設ケンコトヲ命セリ而シテ後自手巾ヲ以テ其ノ外貌ヲ蔽フ。此其ノ傷ヲ被ムルヲ以テ其ノ水兵ノ銳氣ヲ挫カンコトヲ恐レ隠シテ知ラシメザラシカ爲ナリ。是ヨリテルソン氏艦内ナル治療所ニ到ル。醫其ノ傷ノ治スヘカラサルヲ明審シテルソン氏モ亦自其ノ起キサルヲ知り之ニ謂テ曰ク醫士余ヲ棄テ、猶治スヘキ創傷人ノ所ニ至ルベシト。テルソン氏疼痛彌劇シト雖尙自勝敗如何ヲ識ラント欲シ切ニ問テ己マヌ而シテ又曰ク誰カバルタイーヲ召シ來ルモノアル余ハ殺サレズシ

テ必自ラ死スルコトアルベシトハルデイト即來テ其ノ手ヲ握テ語ルコト能ハズ少頃ニシテテルソン氏甚低聲ニ謂テ曰クハルデイト勝算如何ソヤト而シテ後英國艦隊利ヲ得テ一モ降ル者アラサルヲ審ニシ因テ自其ノ身事ヲ語テ曰ク汝ハルデイト余ハ死者ナリ余ノ命今將ニ去ラントス百事悉ク余ト共ニ去ラント時ニハルデイトテルソン氏ノ快復ノ機アラフコトヲ望メリテルソン氏曰ク否否此ノ事必得ベカラズ余己ニ中心ニ感悟スル所アリ必當ニ死スヘキナリト侍醫テルソン氏ニ問テ云ク君今深ク疼痛苦悶スル所アリヤテルソン答フ余心大ニ喜テ自死センコトヲ祈念スト然ルニ英國全ク軍勝ヲ取ルニ及テテルソン其ノ艦隊ニ投鑑センコトヲ令シ復自語テ曰ク余カ死スルニ及テ屍ヲ船外ニ投スル勿レハルデイト來テ余ヲ親嘴セ

ヨト時ニハルデイ一跪坐シテ其ノ命ニ從ヘリテルソン氏又謂テ曰ク  
 余カ志足レリ余自職務ヲ成シテレリ此唯上帝ノ德惠ナリハルデイ  
 一感謝セヨト即再チルソン氏ヲ親嘴シテ其ノ天福ヲ受領シ竟ニ永ク  
 訣別セリ此ノ役ニ當テテルソン氏素ヨリ自死ヲ決セリ其ノ軍ノ勝利  
 チ取ルモ亦自決セリ其ノ身生テ凱陣ノ歡ヲ衆ト共ニ受ルコト能ハ  
 サルモ亦自決セリ

## 第二百一篇

普魯士王后ノ事及拿破侖新王ヲ封スルコト

茲ニ初テ相見ノ禮ヲ修シ而シテ後兩帝互ニ其ノ禮儀ヲ廢シ只管ニ親  
 受懇篤ノ談話ヲ爲スニ及ヘリ拿破侖又力ヲ極メテ快樂戲事ヲ爲シ其  
 ノ妙手ヲ見ハセリ時ニ普魯士王直ニ自ナルシット市ニ來レリ然レト

モ拿破侖普王ヲシテ敢テ魯帝アレキサンドルト同等ノ地位ヲ以テ之  
 チ遇セス

拿破侖大將帥ノ職ニ在テ三國帝各其ノ意見ヲ話スルヲ以テ一大歡娛  
 トセリ自謂テ曰ク余カ如キハ三帝中兵事ニ於テ最暗昧ナル者トス三  
 帝各話スル所アリ其ノ話ハ一兵士軍裝表衣ノ前面及後面ニ在ル所ノ  
 扣鈕ノ數或ハ其ノ裾縁ヲ裁割スル様式等ノ事ノミ時ニ軍中ニ在テ裁  
 縫ヲ事トスル工匠等其ノ表衣ノ製尺度ノ段匹ヲ以テ之ヲ裁縫スルヤ  
 ナ計算スルニ至テハ一人ノ普王フレデリックノ暗識スルニ如ク者無  
 シ

拿破侖人ニ語テ曰ク余此等ノ事ニ於テ裁縫ノ事  
ナ指ス甚拙レト雖彼ノ帝ヲ  
 賤視スルヲ好マサルヲ以テ是等モ亦戰爭ニ要ナル者ノ如ク和答ヲ爲

セリ先ニ佛國ノ兵若シ其ノ將帥ノ任ヲ一個ノ裁縫匠ニ任セシメハ普魯士王ノ如キモ必セエナニ於テ勝ヲ取ラシ然レトモ戰勝ノ要ニ至テハ偏ニ其ノ兵士ヲ指揮スル將帥ノ練熟ニ在テ縫匠ノ表衣ヲ裁スル練熟ニ在ラサルヲ以テノ故ニ普魯士國人大敗ヲ取ルニ至レリト

普魯士后ハ美麗ニシテ才智俊秀温雅ノ風ヲ存セリ茲ニ深ク拿破侖ノ懇接ヲ得ント欲シ心力ヲ竭シテ之ヲ謀レリ此專普王ノ爲ニ其ノ多惠ノ情誼ヲ得ント欲シテナリ而ルニ拿破侖ハ其ノ后シニバインノ好言ニ誘セウレス乃謂フ吾一モ普后ノ偽情狡計ニ惑フ無キコト恰蠟布ノ雨水ヲ防クカ如シト

拿破侖一日普后ニ贈ルニ一朶ノ薔薇花ヲ以テス此ノ花殊ニ嬋娟ノ美色アリ王后初ハ一切ノ禮物ヲ辭シテ受ケサルニ遂ニ之ヲ收メテ答フ

ルニ嘗テ拿破侖ノ畧取スル所ノ普國ノ一都マグテンブルグヲ求メダリ拿破侖憤然トシテ愠テ曰ク余ハ之ヲ贈ルノ人タリ后ハ之ヲ受ルノ人タリ請フ能ク是ノ義ヲ辨スヘシト

普后ノ佞諛ヲ極メ力ヲ盡セシコト一モ其ノ夫王ノ爲ニ利スル所ナシ普王殆其ノ領地ノ過半ヲ奪掠セラルヽニ至レリ普王ノ失フ所ノ地ヲ割テサキソニーノ新王ニ贈リ其ノ餘ノ地ハ又分テ新ニウエスフアリ一國王ゼロームニ與ヘリ

往時歐洲各國ノ拿破侖ニ抗スル者連ニ佛兵ニ擊破セラルヽヲ以テ遂ニ大ニ畏服ノ態ヲ見ハセリ英國ニ至テハ其ノ地多クハ島嶼ナルヲ以テ僅ニ攻撃ヲ免ルヽコトヲ得タリ此ノ時ヲ呼テ拿破侖ノ大威權ヲ有スルノ秋ト做セリ

歐洲南部已ニ服ス手ヲ下スヘキ王國アラサルヲ以テ即又兵鋒ヲ轉シテ其ノ北部ニ向ハントス拿破侖乃先西班牙王第四世ヲヤーレスト云フ者ニ連合シテ葡萄牙國王ニ向テ兵ヲ出タヌ時ニ葡萄牙國ノ王族ハ悉ク伯西爾國ニ避道ス因テ紀元一千八百七年十一月三十日ヲ以テ佛軍直ニ葡萄牙ノ首府リスボンニ進入セリ

其ノ翌年ヲ以テ西班牙王其ノ位ヲ辭シテ帝拿破侖ニ贈レリ拿破侖乃之ヲ以テ其ノ弟ジョセフニ授ク而シテ又拿破侖ノ妹夫ミューラト云フ者ニチーブル國ノ王位ニ登ルコトヲ得セシム

## 第二百二篇

再澳地利ヲ服ス、維納ノ講和、及拿破侖婚ヲマリー、ルウイーゾニ結フ

西班牙及葡萄牙ノ兩國首府ハ今己ニ佛國ノ有ト爲ルト雖二國ノ民未心服ノ色ヲ呈ハサズ英國王此ノ機ヲ見テ其ノ佛ノ保護ヲ頼マサル所ノ人ヲ即二國ノ人民ヲ指テ云フナリ助ケントシテ軍ヲ出タヌ即葡萄牙國ニ向フ將ヲソル、アルソル、ウエリー、ズリート爲ス此ノ將ヲ説クニ其ノ稱號ウエ  
ルリントン侯ヲ以テセハ讀者則解シ易カラシ

ウエルリントン侯乃葡萄牙ヨリ佛軍ヲ驅逐ス其ノ時ジヨセフ當時西班牙王

在リハ其ノ首府マドリットヲ道レ去ラントス乃拿破侖ノ來テ授フニ

因テ復佛國ノ成業ヲ回復スルニ至レリ紀元一千八百八年第十一月ヲ以テ拿破侖西班牙國ニ突入シ自本土ノ君主ト稱セリ而シテ第十二月四日ニ及テ其ノ首府マドリットノ民亦翕然トシテ來服セリ

歐洲諸國ノ曾テ拿破侖ニ屈服スル者唯遜讓自守リ其ノ安息ヲ取ルノ

ミニアラサルハ固ヨリ判然タリ心常ニ其ノ威赫恐喝ノ勢焰ヲ厭ヒ好  
機ノ會スルヲ待テ之ヲ驅除セントス乃今ノ時ヲ以テ乘スヘキノ機ヲ  
得タリト爲セリ而シテ拿破侖ハ則西班牙國ニ留リテ爲ス所アラント  
ス

紀元一千八百九年春テロールノ民謀反シウエストフアリヤ國ノ民其  
ノ王セロムヲ驅逐ス世ノ傳フル所ニ據レハ普魯士國ノ如キハ拿破侖  
ニ在テ初時ノ勝戦ナクハ其ノ弊ニ乘シ必當ニ澳地利ノ軍ト合從シテ  
佛國ヲ撃ツヘシ然ルニ佛帝直ニマドリッドヨリ還リグラントアルミ  
―即帝ノ親兵ヲ引テ日耳曼ノ中央部ニ突入セリ

拿破侖累ニ進テエクムール及エッスリンノ地ニ勝テ再維納府ヲ畧有  
ス紀元一千八百九年第七月六日又ウァグラムノ地ニ戦テ大ニ勝ツ後

拿破侖自和約ノ事ヲ諭示ス此ノ講和ヲ稱シテ維納ノ和ト爲ス此ノ約  
ヲ修ムル實ニ紀元一千八百九年第十月十四日ナリ此ノ役佛將ランス  
戦死スランス人ト爲リ勇悍大ニ帝拿破侖ノ愛重ヲ得タリランス交戦  
スルニ當テ飛丸來テ兩脛ヲ貫ク是ニ於テ竟ニ起キズ拿破侖哀惜ノ情  
己ム能ハスト云フ今ヤ歐洲陸地再拿破侖ノ威力ニ劫服セリ羅馬法王  
嘗テ拿破侖ニ對シテ不遜ナルコトアルヲ以テ卒ニ法王ノ位ヲ褫ハレ  
佛國ノ將ヘルナドット拔デワレテ瑞典國王位ヲ繼承セリ

拿破侖ノ婚ヲ擇フヤ歐洲名族故家ト輒結親セリ又深慮スル所有テ其  
ノ夫人ジョセフイント離婚セリジョセフインハ嘗テ拿破侖ノ大ニ愛  
顧スル所ナリ而シテ忽出ダシテ更ニマリー、ルウィー、ズヲ娶ル此ノ女  
ハ澳地利帝第二世フランシスノ女ナリ

拿破侖一ノ奇想ヲ構出シテ之ヲ欸接シ敢テ尋常ノ舊儀ヲ蹈マズ欸接トハ婚禮通常ノ儀式ヲ云フ茲ニソラスソシ近傍ニ一騎士アリ其ノ衣服儀容高貴ヲ表スル者無シ行テ一馬車ノ走ル者ニ遇フ是即妙齡新后ノ馬車ナリ騎士少シク行過シテ復還リ馬ヲ停メ車内ヲ諦視ス斯ノ人ハ誰ソ即拿破侖ナリ馬車乃戸扇ヲ開ク拿破侖乃入テ婚禮ヲ修メ新婦ト駢坐シテ語笑ス其ノ親睦ノ情ハ其ノ先后ト和好スルカ如クニシテ尤厚シ新后謙德美色容止舉動專淳撲ヲ主トシ拿破侖ヲ愛慕スルコト甚深ク一ニ其ノ情意ヲ悅ハシメ言フ所ニ從順シテ一和同心ナルカ如シ

拿破侖ノ閨門ニ入ル舉動甚端嚴ニシテ后ヲ遇スルコト極テ親切温和ナリ禮儀ニ心ヲ用ヰル者ト爲ス其ノ平日定限ノ課程アルニ當リテハ

猶其ノ飲食スルヲ忘レテ時晷ノ移ルアリ后ノ書ヲ讀ミ或ハ婦工ヲ取テ止マサルトキハ甚不樂ノ色ヲ見ハセリ

而ルニ皇后マリー・ルウィーズ自帝ノ衛兵ヲ存恤シ舉止周詳ナルコト高貴ノ女子ノ如クナラサルヲ以テ傍人大ニ之ヲ驚異ス紀元一千八百十一年第四月二日恐ラシハ三月二十日ノ誤ナランヲ以テ一子ヲ産ス即之ニ授クルニ羅馬王ノ號ヲ以テセリ

### 第二百三篇

魯軍不幸ニシテ敗ヲ取ル、モスコ―府ノ燒夷及クラシド、ア

ルミーノ衰滅

魯帝兵事ニ於テ聲名ヲ求ルノ心大ニ盛ナリ而シテ拿破侖ノ盛名ヲ忌惡ス乃自其ノ強ヲ負ミ世曾テ未之ニ服セサルモノアリ即拿破侖ト其



ノ優劣ヲ決センコトヲ要シ紀元一千八百十一年大ニ兵備ヲ設クルナ  
 リ  
 拿破侖蚤ク之ヲ覺リ敵兵ヲ本土ニ受ルヲ欲セズ乃先ナテ之ヲ征セン  
 ト欲シ即紀元一千八百十二年第六月二十二日ヲ以テアニエーメン河岸  
 ニ到リ魯國ニ對シ戰端ヲ起スヲ公告ス第六月二十四日ヲ以テ魯國ノ  
 界ヲ侵シ其ノ沿道ノ市街ヲ掠略スルコト少チカラズ遂ニモスコ―府  
 ニ進入セリ此レ往時魯國ノ首府ナリキ

紀元一千八百十二年第九月七日ヲ以テ拿破侖大ニ魯國ノ兵トボロテ  
 イノ邑モスコ―近傍ニ在リニ戰フ兩軍勝負未決セス俄頃ニシテ魯軍兵ヲ退ケ  
 モスコ―府人ナキカ如シ第九月十四日ニ及テ佛軍モントザルヴコー  
 ショント稱スル所ノ丘陵ニ達セリサルヴユーシヨンハ即救援ノ義ナ

リ此ノ稱アル所以ハモスコ―ヲ目撃スルハ此ノ山丘ニ在ルヲ以テ土  
 人之ヲ尊敬シテ神聖ノ如クスル者ナリ

佛國既ニ此ニ據ル前ニ當テモスコ―府アリ府中ニ數個ノ高塔アリ宮  
 殿巍然層樓相望ミ園庭盛麗花卉滿開銅造屋背ノ半球形ナルハ太陽ニ  
 映レテ其光爛々タリ而レトモ府人悉ク退避スルニ因テ境中殊ニ寂寂  
 タリ拿破侖心ニ謂フ此ノ府中ノ諸有司貴族及富豪ノ士民等必相俱ニ  
 來リテ降ヲ請ハント然ルニ終ニ斯ノ如キ形情ヲ見ズ

拿破侖此ヲ以テ躊躇スルコト二時間而シテ後始メテ一新報ヲ得タリ  
 此ノ府民悉皆遁逃シテ日中ノ人屋一人ノ遺留スル者無シト是ニ於テ  
 令シテ兵ヲ進メ全車直ニ府ニ入ル府中寂寥唯曠漠タル原野ノ如シ各  
 見テ驚異セサルハナシ乃入テ之ニ據ル

斯ノ如ク寂寞ノ境ニ亦久シク居ル能ハス先ニ府宰道避ノ際ニ當テ數  
十處ニ火ヲ點シ之ヲ焚キ盡サンコトヲ謀レリ府中皆木造ノ房屋ナル  
ヲ以テ火焰ノ延燒スル瞬間ニシテ撲滅スベカラサルニ至ル亦驚愕ス  
ベシ

是ニ於テ佛軍急ニ火ヲ避テ退去セントス事亦急遽ニ出ツ時ニ帝拿破  
侖ハ府ノ中央ナルクレミソンニ居ル此ノクレミソンハ周圍無數ノ屋  
房重疊聯合シテ恰一市街ヲ爲スカ如ク其ノ四方ハ繞ラスニ重大ナル  
石壁ヲ以テセリ此往日魯帝ノ住セシ所ナリ

其ノ猛火ノ勢焰益熾ニシテ居ル所ノクレミソンニ及ハントス將士退  
避センコトヲ請フ拿破侖乃終ニ此ヲ去ル途上亦險艱ナリ市街巷衢皆  
悉ク炎焰トナリ空氣火熱ヲ帶ヒ鬱蒸蒸灼シテ人復氣息スヘカラス拿

破命退去スルコト三里許ニシテ纒ニ休息スルヲ得タリ而シテ府中火  
滅セサルコト四日餘夫ノ數百年建築造營スル所ノ巨構瞬間ニシテ灰  
燼ニ屬セリ

此ノ月二十一日ヲ以テ佛軍再モスコ―府ニ入ル而シテ其ノ府民ノ還  
復ヲ勸説スレトモ府民之ニ從フ者ナシ是ニ於テ拿破侖自謂フ魯帝ア  
レキサンデル講和ヲ諾スルアラント即自書シテ之ヲ魯帝ニ贈レリ然  
レトモ魯帝一言ノ之ニ報答スル無シ

又更ニ魯將ニ説クニ講和ノ議ヲ以テス魯將之ニ答ヘテ曰ク魯國ノ例  
斷シテ境内ノ敵兵ト商議スルコトヲ許サスト今倉庫既ニ火シ兵ニ見  
食ナク冬寒將ニ至ラントス魯軍大ニ其ノ擲ヲ得佛軍ノ道路ヲ拒絕セ  
ント欲シ之カ備ヲ爲セリ

是ノ時佛軍始窘困シ遠ニ此ノ地ヲ退去スルノ外更ニ安然ノ策ナレ乃  
 第十月十八日竟ニセッコ<sup>一</sup>ヲ去ル佛軍退去ノ時其ノ記中ノ事驚慌忽  
 遽ノ情永ク世ノ話柄ト爲レリ佛軍ノ歸途ハ公路ヲ取り捷徑間道ヲ求  
 メサルヲ以テ糧食空乏シテ爲ニ餓死スル者アリ又寒候蚤ク至ルニ因  
 テ人々凍縮シテ更ニ酸辛ヲ取ルアリ

魯國哈達克騎兵ト稱スル者アリ其ノ勇猛ナル猶マメリニークス

埃及國王

ノ騎兵

ニ髣髴タリ悍猛ナル一騎隊トス此ノ哈達克騎兵佛軍退去ノ時

ニ乘シ其ノ兵ノ散隊ヲ困死セシメ伊國ノ人馬等爲ニ暴殺セラルヘ者  
 千數ニ及ベリ

然レトモ兵士等帝拿破侖ノ英才及福運アルヲ信シ且帝ト苦樂ヲ相共  
 ニスル甚久シキヲ以テ肯テ其ノ英氣ヲ挫カズ乃拿破侖第十二月四日

ヲ以テ棧ニ乘シテ郷路ニ向ヒ同月十八日竟ニ巴里府ニ還ルコトヲ得  
 タリ

帝拿破侖ノ歸途ニ上ル兵士此ノ事ヲ聞テ大ニ銳氣ヲ挫ク者アリ而シ  
 テ軍律亦悉ク廢棄シテ收メス兵士等皆唯一身ヲ存センコトヲ欲ス第  
 十二月十二日ニ及テ殘兵始メテコッフノ<sup>一</sup>ニ達ス此等ハ六月前ニ在  
 テ此ノ地ヨリエニ<sup>一</sup>メン河ヲ渡リシモノナリキ

グラント、アルメ<sup>一</sup>ノ兵氣乃復往日ノ如キ者ナシ先ニ征戰ノ時四十萬  
 ノ兵士アリ而シテ今殘ル所ノ者僅ニ五萬ニ及ハズ其ノ軍裝ニ至テハ  
 代フルニ婦人ノ絹上衣或ハ其ノ自拾ヒ得ル所ノ襪布ヲ以テヌ又或ハ  
 赤脚ニシテ鮮血ヲ流スアリ或ハ鞋ニ代フルニ汚穢ノ布ヲ束テテ其ノ  
 脚ヲ保護スルアリ悽愴ノ狀實ニ言フベカラズ

佛國敵兵ニ攻畧セラル及拿破侖即位ヲ辭スルコト

佛國既ニ數萬ノ精兵ヲ失フコト斯ノ如シ再之ヲ充備センコト亦難シトス然レトモ紀元一千八百十三年ノ春ニ當テ最強勇ノ兵ヲ選テ日耳曼國ニ進入ス時ニ普魯士國民大ニ憤勵シテ之ヲ拒ク瑞典國亦拿破侖ヲ抗禦スルヲ以テ公告スルニ及ヘリ

拿破侖ノ豪氣猶凜然トシテ屈スル所ナク兵事ニ周旋スルコト益勦ム紀元一千八百十三年第五月二日兵ヲ帥テ普魯ノ兩軍ナルーツセンニ擊破シ大ニ之ニ勝ツ同月二十日二十一日又パウツノセンニ戰テ連ニ之ニ勝ツ是ノ時澳地利帝自介シテ和議ヲ謀ル是ニ於テ和約ノ條款ヲ商議セン爲メブラキニ會ス是ノ時拿破侖敵國二帝ノ言フ所ヲ

聽カス約竟ニ成ラサルニ至ル

是ニ至テ澳國合從ノ列國普魯結黨シテ佛國ヲ拒クノ狀アリ是ニ於テ

紀元一千八百十三年八月二十六日拿破侖三國ノ兵ヲドレスデン

ノ一ニ擊破ス此ノ時拿破侖鬼神ノ如キ威力ヲ以テ一時ニ全歐洲ヲ平

定セシモ復終ニ敗亂シテ各土寧慮スルコトナキニ至レリ即群寇各所

ニ蜂起スルアリ因テライブレック

日耳曼國ノ一都

ニ於テ連戰皆破レ兵ヲ引

テ退カサルヲ得サルニ至ル時ニ同年十月十九日ナリ

然レトモ拿破侖武威全ク盡キズ茲ニ三十萬ノ大兵ヲ募集セリ佛國革

命ノ變ヨリ今ニ至テ國勢恰演戲場ノ如ク幾變セリ乃勤敵ヲ四方ニ受

ケ爲ニ侵襲セラル者亦衆シ十五萬ノ魯軍路ヲ瑞西ニ假テ佛國ヲ侵

シブリューヒエルハ普兵十三萬ヲ引テ途ヲ日耳曼ニ取テ佛國ニ入ル

拿破侖ノ舊友ベルナドットト云フ者瑞典ノ兵十萬ヲ以テ和蘭口ヨリ佛國ニ突入シ英將ウェルリントンノ領スル所ノ兵西班牙ヨリ佛國ヲ攻ム各國斯ノ如キ大兵ヲ以テ拿破侖ニ迫レトモ拿破侖蓋世ノ雄アリ猶其ノ勇氣ヲ奮ヒ其ノ勢焰少シモ退滅セズ歐洲人皆仰瞻シテ其ノ雄ニ服セサルナレ拿破侖謀ノ敵ノ計ル所ヲ度リ謂フ其ノ結局必大ニ成立スル所アラント而シテ心復自疑ハス

茲ニ講和ノ議再起レリ而シテ復竟ニ成ラズシテモンマルトルノ阜丘ニ於テ一大戰アリ其ノ戰酣ナルニ及テ巴里府ノ兵防禦術盡キ敵兵之ヲ蹂躪セリ紀元一千八百十四年三月三十一日ヲ以テ魯帝アレキサンドル普王フレデリック入テ巴里府ヲ陷ル

魯帝普王俱ニ公告スルニ佛國王位ヲブルボン王統ニ復センコトヲ以

テセリ此ノ時拿破侖殲兵ヲ收集シテフォーンゲンブロート云フ地ニ在リ其ノ麾下尙深ク拿破侖ニ心服シテ再三呼躍シテ戰ハント欲スルノ言アリ首將長官等論シテ戰フモ亦利ナシト爲レ言竟ニ行ハレス合從ノ列國一齊ニ公告スルニ向來拿破侖ト共ニ事ヲ謀ルベカラザルヲ以テアセリ拿破侖乃帝位ヲ辭シ其ノ子ニ讓ラント欲シ紀元一千八百十四年四月ニ及テ傳位ノ典ヲ修シ自退ク而シテ其ノ欲スル所竟ニ成ラズ

同盟列國建議シテ拿破侖ヲエルバ島ニ竄流ス拿破侖島ニ在テ尙帝號ヲ擁シ之ニ關涉スル萬機ノ光榮ヲ保持スルヲ得タリ而レテ又海陸二軍ヲ總轄セリ之ヲ舊帝國ノ盛大ニ比較スレハ十分ノ一ナラス此ノ島徑約六十里英里其ノ人口約一萬二千ニ過キス

拿破侖是ニ於テ命ヲ上天ニ委シテ決然トシテ島ニ赴ケリ發スルニ臨  
 テ積年愛顧スル所ノ士ニ別ル、實ニ心碎ケ膽裂クルノ思切ナルコト  
 言フベカラス是即世ニ著名ナルガルドアンペリヤール即近衛兵ナリ  
 紀元一千八百十四年四月二十日ヲ以テ精兵ノ存スル者ヲフオンアン  
 フローノ大庭ニ召集シ拿破侖自其ノ將ヲ抱擁シ黨旗ヲ把リテ相語ル  
 少時ニシテ發程セリ群士爲ニ悲嗟涕泣セサルハ無シ此ノ一段悽涼ノ  
 景狀實ニ天人ヲ感動セシメタリト云フ

第二百五篇

巴里府人民ノ記

同盟列國ノ兵巴里府ニ屯集ノ時ニ當テ府下ノ情景實ニ奇觀ト爲スニ  
 足レリ魯人澳人及レシヤノ沙漠ヨリ至ル所ノ蕃民異種來會シテ此ノ

府内ニ充滿シ宛一大陣營ノ如シ  
 市坊各所ニ營ヲ結ヒ兵人戸コトニ供饌ヲ理ムルアリ或ハ怪異ノ衣服  
 ナ洗濯スルアリ壯麗ナル庭園ニ軍馬ヲ繫クアリ美樹ノ皮ヲ剝刮シテ  
 殺風景ノ狀アリ或ハ各處ニ軍器兵具ヲ堆積シテ丘陵ヲ爲スアリ野蕃  
 種族ノ弓箭長鎗ヨリ開明國人ノ長短銃砲刀劍等ニ至ルマテ各種ノ物  
 品雜然タリ

巴里府人民ニ至テハ靜寂トシテ安堵スルコト實ニ感スルニ足レリ時  
 有テ敵軍ノ砲聲轟々トシテ耳ヲ貫クモ尙且本土ヲ離ル、ノ色ヲ起サ  
 ス此拿破侖ノ英傑ヲ依頼シテ然ルナリ今敵兵ノ既ニ府門ヲ擊破シテ  
 突入スルニ及テ尙夷然トシテ憤慨ノ色ヲ見ハサズ但浮薄ノ人情昨日  
 ハ拿破侖ノ長生ヲ祈ルト祝シ今日ハ第十八世路易ノ長生ヲ祈ルト祝

行樹樾道及公園等依然タル好景ヲ呈シ舊觀ヲ損スルコト無ク猶一个ノ歎兵ノ在ラサル者ノ如シ行樹ノ森列セル者ハ巴里府ノ周邊ヲ環レル廣キ樾道ナリ此第十世路易ノ造作スル所ニシテ嘗テ藩牆ヲ毀壞シ濠塹ヲ填メテ往來ノ大道ト爲セシ者タリ此ノ藩牆ハ古昔巴里府ノ寇ヲ防ク所ナリ

巴里府民ハ好テ家外ニ遊歩ス天氣好晴ニ臨テハ男女閑暇ヲ得ル者互ニ群集シテ行樂ス斯ノ如キ閑遊ノ人ハ無量ノ快話奇談ヲ爲シ或ハ勝地ヲ散歩シ風烟ヲ望テ時ヲ送レリ傀儡走索戲滑稽家ノ如キモ均レク會集シテ奇觀妙術ヲ爲スアリ

夫大都會ノ盛ナル斯ノ如キノ繁華ナルモ皆度外ニ擲棄シテ更ニ人ノ

其ノ權理ヲ妨害スル者ナレ是ニ於テ佛人ノ禮讓ノ名アル知ルベシ此ノ禮讓アル俗習徹上徹下皆是ナリ試ニ其ノ一ヲ言ハン汲者ノ水ヲ運搬スルニ疊石路ヲ過キテ誤テ木匠ニ水ヲ濺ケハ必其ノ水桶ヲ卸下シテ之ヲ謝ス木匠ハ汲者ノ通路ヲ遮防スル所ノ器具ヲ收メテ曰ク是我ノ過ナリ我宜シク其ノ罪ヲ謝スヘキナリト

## 第二百六篇

第十八世路易王位ニ進メタル及拿破侖エルマ島ヨリ還テ佛國ニ入ル并ニ佛ノ土民拿破侖ヲ待遇スルノ情態

委員總會務メテ人民ノ爲ニカヲ盡サント欲シ第十六世路易ノ弟ナ王位ニ進メンコトヲ謀レリ此ノ人已ニフロヴァンス伯ノ稱ヲ以テ前條ニ説ク所ノ者ニシテ天性善良ニシテ心術正直信厚ナル人タルコト前

ニ述ル所ノ如シ且文學ニ於テ亦頗練達セリ而ルニ衆庶ヲ治ルニ至テハ其ノ器量才畧凡庸ノ人ニ異ナルコト無シ

第十八世路易ノ王位ニ即カントスルニ當テシャルトル即君主權限條例ニ據リ政ヲ執ランコトヲ要ス其ノ條例ニ於テハ王ノ權内ニ制限アリテ人民ノ權利アルベキ條理確然トシテ記載セリ五月三日ヲ以テ路易禮ヲ正クシ儀ヲ整ヘテ巴里府内ニ入ル

第五月三十日ニ及テ佛國乃歐洲諸國ト條約ヲ結ヘリ而レテ佛國ノ動亂革命前ト殆相伯仲ス是人民所謂グラントナシヨ大國民ノ稱號ヲ

欲スルナリ是ニ於テ佛國人民ノ勢諸國王及王路易共ニ俱ニ盡力苦思シテ始テ安寧ニ復スルヲ得タリ

佛民王路易ノ品行善良ナルヲ顧思セス皆謂フ王ノ欲タル者時ニ拿破命ヲ指ス

勢日ニ熾ニシテ王信義ヲ人民ニ盡スト雖隨テ復敗滅ニ歸スヘシ而ルニ王路易ノ心前政ヲ掃盡セント欲レ撥ヲ伺ヒ寺邑ヲ還復センコトヲ望ムニ在リ其ノ寺邑ト稱スルハ國會議院ノ曾テ之ヲ沒收シテ人民ニ頒與セン所ノ者ナリ是ヲ以テ人心恟々氷淵ノ想ヲ做シ大ニ疑念ヲ生スルニ至レリ夫佛國ノ人民久シク擾亂ニ際シ平穩ナル能ハズ又嘗テ他邦ト戰鬪シ曾テ敗駟ヲ取ルコト無キニ今合從列國ニ擊破セラレ且人民ノ惡ミニ依テ放逐セシ所ノ者ヲ王位ニ進メラルヲ以テ人皆不滿ノ意ヲ抱カサルハナシ

舊兵士等英雄拿破侖ノ英風ヲ欣慕シ時ニ臨ミ感ニ觸レテ哀惜ノ情ヲ起サ、ルハ無シ此其ノ驥尾ニ附テ英名ヲ得タルヲ以テナリ是ニ由テ士官等ノ意皆謂フ往時拿破侖ニ服從スル時ノ舊套ノ持論ハ今日政府



ニ在リト雖採用スルコト無カルヘレ

夫ノ兵士等ノ欣慕スル所ノ情ヲ滿テントスル期乃至レリ紀元一千八百十五年三月一日ヲ以テ拿破侖エルバヲ發シカンスノ地ヨリ上岸ス而シテ其率ヲ來ル所ノ兵一千ニ滿タズ拿破侖上岸ノ時一戰シテクロノールフルノ都府ヲ畧取ス此ノ大都ノ守兵ヲ管領スル大將ハ王路易ニ於テ忠節ノ臣タリ都下ノ防禦甚嚴ニシテ守兵亦頗衆シ

守兵將令ヲ奉シテ兵士ヲ都城牆壁上ニ登ラセ銃砲ヲ整理シテ將ニ火ヲ點セントス時ニ拿破侖ノ從士近ク都城門ニ及ヘリ都城ノ兵砲擊ノ令ヲ傳フ而ルニ忽焉トシテ一聲天ニ轟クノ下拿破侖ノ萬歲ヲ賀スルアルヲ聞ク此皆都兵ノ爲ス所ナリ

而ルニ守將門鑰ヲ持シテ放タズ是ニ於テ都民等各斧鉞ヲ提テ都門ヲ

擊碎シ拿破侖ニ謁見セントシテ相競テ走り出ツ途ニシテ拿破侖ニ會フ蟻集ノ群民乃各拜跪シ或ハ手ヲ握リ或ハ膝ヲ擁シ脚ヲ抱キ愛慕スルコト父母ノ如シ

第二百七篇

同盟列國再佛國ト相寇ス并ニワートルローノ大戰

拿破侖進テ佛國ニ入り漸次巴里府ニ達ス復一人ノ抗拒スル者無レブルボン家及之ニ黨與スルモノ此ノ事ヲ聞テ愕然トシテ色ヲ失セリ王弟モッシュールエガリテノ子オルレヤン侯及前ノカルトレッス侯タル者都テ三人出テ兵將ヲラント請ヒ即レモンノ地ニ發セリレモンノ人蚤ク己ニ拿破侖ニ降レリ而シテ兵卒等其ノ情ヲ以テ士官等ノ意見如何ト問フ士官ノ意兵卒ノ見ニ同シク即答フルニ拿破侖ノ

麾下ニ属スルヲ請フ

茲ニ一士官ノ身數所ノ創痍ヲ被リ數枚ノ賞功牌ヲ佩フル者アリヨッ  
シユ一聞テ曰ク汝勇悍ノ士當ニ我王ノ爲ニ萬歳ヲ唱フヘシ士官答テ  
曰ク汝ハ汝タレ余ハ拿破侖ノ萬歳ヲ唱フヘシ世豈其ノ父ト戰フ者ア  
ランヤト

拿破侖ノ人望ヲ得ル斯ノ如シ之ニ降ル累々トシテ絶エス第三月二十  
日ニ及テ拿破侖進テ巴里府ニ入ル路易己ニ巴里府ヲ去ル其ノ從フ者  
唯士官數人ノミ其ノ他悉ク拿破侖ニ從ハンコトヲ欲ス文官ニ至ラモ  
亦皆然ラサルハナシ

時ニ拿破侖佛帝ノ位ニ復レ之ヲ各國ニ公告センヲ謀ル然ルニ各國相  
議シテ之ト與ニ和親スヘカラサルヲ盟ヘリ是ニ於テ諸國互ニ佛國ヲ

攻ムルノ備ヘテ爲セリ

第六月初旬ニ及テ英軍普軍合從シテブルッセルノ近傍ニ出テ陳ス  
其ノ大將タル者ウエルリントン及マルシャルブリュヒエル等ナリ拿  
破侖乃兵十五萬ヲ率テ兩軍トワートルローニ戰フ拿破侖大ニ敗ル  
時ニ紀元一千八百十五年第六月十八日ナリ多年戰勝攻取ノ功烈忽一  
夢トナリテ消滅セリ

拿破侖戰敗レ走テ巴里府ニ還ル時ニ六月二十日ナリ二十九日ニ及テ

ロッシエフオール佛國ノ一港ニ赴カントス此脫シテ米洲聯邦ニ逃避セン

ト欲スルナリ同年七月七日同盟列國復巴里府ヲ陷レ翌日第十八世路  
易再巴里府ニ還ル

佛國人民ヲ導ク爲ニ設立スル所ノ法前年ニ比スレハ甚苛酷ナリトス

前年ニ施行スル所ハ頗温和ニシテ親民ノ意アリ今其ノ國勢俄ニ一變  
シ外兵ノ佛國ニ留帶スル數年本土ノ政ニ至テモ亦之ニ委任セリウー  
トルローノ軍費ハ悉ク佛國ヨリ償ハシメ諸城堡ハ皆同盟列國ノ所轉  
トナル

佛民ノ從來傲然トシテ世ニ驕誇スル情態今ハ復有ルコトナシ共和政  
國ノ世ニ當テ繪畫肖像等以太里和蘭其ノ他諸國ヨリ收集シテ久シク  
ルーウル宮ノガレリー繪畫肖像彫琢物其ノ他名  
工品等ヲ收藏スル所ナリニ藏畜スル珍寶悉ク  
其ノ舊主ニ歸セリ

第二百七篇

拿破侖護送セラレテサント、エレイン島ニ至ル及其ノ死亡

拿破侖ノロッシェフオール港ニ達スル港口ニ英國艦隊ノ防守スルコ

ト嚴ナリ拿破侖乃心意ヲ決シテ私ニ謂フ危ヲ蹈ミ險ヲ冒シ逃レ得ハ  
則好シ若シ然ルコトヲ得ズハ囚虜ノ辱ヲ取ラン自英國ニ投シ其ノ民  
ニ因テ一退隱ノ地ヲ求メンニハ如カスト

第七月十五日乃英國ノ船ニ乗シ二十四日行テ英都ニ達セリ乃拿破侖  
意料スル所ノ外ニ出テ英國ノ之ヲ待ツコト甚無狀ナリ直ニ一船中ニ  
禁錮シ一人ノ交通スルコトヲ許サス

英國ノ士集議スル所アリ乃拿破侖ヲセント、ペレナ島ニ押送スセン  
ト、ペレナハ大西洋ノ中央ニ位スル小島ナリ地唯巖石多シ拿破侖孤  
島孤囚ノ人ト爲リ竟ニ此ニ終レリ此ノ島ニ到ル時紀元一千八百十五  
年第八月六日ナリ

島中監守ノ者最嚴密ナリ濱海各所衛兵陳列シテ晨昏怠ラス内ニハ則

監兵當ニ之ヲ圍守ス又兵艦アリ島ノ周地ヲ巡リ外船ノ來リ泊スルアレハ船内ヲ糺問シ他事有テ繫船スル者モ亦嚴ニ之ヲ看守セリ

一島内外監守甚嚴ナルコト斯ノ如シ而ルニ尙拿破侖或ハ羅網ヲ脱シテ再佛國ニ還リ至ワシコトヲ望ム者亦甚衆シ或ハ一旦復此ノ島ヨリ脱シテ佛都ニ還ルコトヲ得ハ往昔其ノエルバ島ヨリ歸ル日國民ノ喜躍シテ之ヲ迎フルト其ノ情同シカルヘシ

是等仰望スル所ノ一黨拿破侖ノ不幸ニシテ死スルヲ以テ素志遂ニ灰セリ其ノ死セル實ニ紀元一千八百二十一年第五月五日ナリ其ノ死スルノ後黨與ノ意一ニ其ノ子ニ在リ其ノ母ハ則拿破侖ノ后ト共ニ澳地利ニ還ル所ノ者ナリ

此ノ子ワイヒシユタット侯ト稱セラル其ノ品行ノ如キハ世知ル所稀

ナリ其ノ教育ヲ受ルノ始メヨリ務メテ貪名ノ心ヲ抑壓セリ惜哉其ノ長シテ人ト成ルニ及テ死セリ

茲ニ佛國政府ニ在テハ大ニ力ヲ勞シ其ノ前主拿破侖ニ就テ民想ヲ起サシムル所ノ者悉ク瓦解セリ即ブラッスワンドーム圓柱上ヨリ其ノ肖像ヲ卸下シ其ノ名姓ノ各所ニ在ル者亦盡ク削除セリ

然レトモ拿破侖ノ英智才畧及其ノ大威權ノ世ニ存スル者ハ千歲不朽ニシテ磨滅スヘカラス道路宮室ノ美麗及津梁橋架ノ壯堅ナル悉ク其ノ創造スル所ニシテ今猶存セリ其ノ最貴重ニシテ記功碑ト稱スヘキ者ハ其ノ編修スル所ノ律法書ナリ此書ハ素稱シテコード、ナポレオン即拿破侖律法書ト曰フ後其ノ目ヲ變シテコード、レヴィル即民律法書ト爲セリ今日佛國律法ノ基本トシテ奉スル者ハ即拿破侖ノ律法書ヨ

第二百九篇

マレシヤルチーノ死并ニラヴァルレット脱獄

紀元一千八百十五年ウァートルローノ戦ニ拿破侖ノ黨與皆其ノ罪ヲ赦サル而シテ獨チーラベドエール及ラヴァルレットヲ刑セントスラベドエールハ嘗テグレノベル市ノ軍將ニテ拿破侖ノエルバ島ヨリ佛國ニ復ル日其ノ黨援第一人タリ是ヲ以テ按問セラレ遂ニ死刑ニ處セラレタリ

マルシヤルチー軍官ノ名ニシテ監

察ノ如キ者ナリ

世人之ヲ稱シテゼ、ブレューズスト、オ

フ、ゼテレーヴ即勇悍中ノ勇悍ナル者トス是拿破侖ノ將帥中最卓越スル所ノ者ニシテ人民之ヲ愛慕崇敬スルヲ拿破侖ニ亞ケリ然ルニボル

ボン家ノ復スルニ當テ帝族大ニチーヲ愛撫シ其ノ拿破侖ト戰フニ當テチーニ將帥ノ任ヲ授ケリ

チー既ニ其ノ任ヲ受ケテ巴里府ヲ去ル日王路易ニ約シテ曰ク臣直ニ軍ニ赴キ帝拿破侖ヲ捕フルコト野獸ノ如クニシテ之ヲ巴里府ニ監送セント而シテチー拿破侖ト兵ヲ接スルニ當テ其ノ誘導ノ言ニ牽カレ帝ヲ思フノ情復發セリ乃其ノ帥非ル所ノ兵ト相約シテ復拿破侖ニ歸セリ

チーノ囚ハルニ及テ王族其ノ罪ヲ糺シテ死刑ニ處ステーヲ死刑ニ處スル其ノ事極メテ秘セリ此政府ノ懼ル、所アルヲ見ルニ足レリラヴァルレット少年ノ時ヨリ拿破侖腹心ノ人ニシテ拿破侖ノ夫人即ジョセフィンノ姪ヲ娶ル者ナリ斯ノ人王路易ノ朝ニ在テ一官職ナク拿破

命エルバ島ヨリ巴里府ニ還ルニ及テ書信局指揮職務ノ任ヲ承ケ拿破  
 命ノ大勝ヲ公報ス

其ノ罪狀ヲ正シ死刑ニ處セントスラヴアルレットノ妻之ヲ憂ヒ往テ  
 其ノ夫ニ説キ脱セシメントス曰ク請フ假ニ妾カ衣ヲ服シ女粧シテ脱  
 出スヘント時ニラヴアルレット獨其ノ妻ヲ遺シテ獄吏ノ殘酷ヲ蒙ム  
 ラシムルニ忍ヒス未遽ニ之ヲ許サズ

其ノ妻ラヴアルレットニ説クコト再三ラヴアルレット遂ニ其ノ事ニ  
 從フ死刑ニ就クノ前一日其ノ夜ニ其ノ妻マダムラヴアルレット其ノ  
 女ト共ニ夫ノ獄ニ來リ屢脱出センコトヲ促カス乃婦人ノ服ヲ着ケ  
 女粧シテ遂ニ脱シ去ル兵士監守スル者之ヲ知ル者ナレ

ラヴアルレット既ニ出テ竟ニ一所ノ潛匿スヘキ所ヲ得タリ茲ニ著名

ナル一奇事アリ即ラヴアルレットノ獄舎ヲ脱シテ潛伏スル所ノ地ハ

當時佛國相ノ邸内ノ一室ナリラヴアルレット此ノ室内ニ匿ルハコト

三週日國相ノ夫人ハ則曾テ佛國タル國ル家暴亂人倫道絶ニ戰恐懼ノ世ト云ヘル義

ニ遇ヒ死ニ處セラレントシテ幸ニ救助セラレシ者タリ其ノ時夫人自

誓テ謂フ妾此ノ恩ヲ報センニハ亦人斯ノ如キ不幸ニ遭遇スル者アラ

バ必死力ヲ極メテ其ノ人ヲ救ヒ以テ答謝スルノミト

今ラヴアルレットノ偶道レテ其ノ家ニ匿ル夫人及其ノ夫アレクソン

氏相與ニ喜ヒ厚ク之ヲ待遇シラヴアルレットノ巴里府ヲ脱去スルノ

機アルヲ闕ヒ得ルニ至ルマテ心力ヲ竭シテ之カ地ヲ爲セリ彼ノ獄吏

果シテラヴアルレットノ妻ヲ考掠スルコト酷ナリ妻其ノ苦楚慘毒ニ

堪ヘス羸病シテ殆死セントス

後數年ヲ歴テラウアルレットノ佛國ニ還ルヲ得ルモ妻狂疾ヲ發シテ精神恍惚トシテ其ノ面ヲ識ル能ハス此ノ婦居常温良愛敬俱ニ至レリ又常ニ夫ノ不幸ヲ痛悼シテ己マズ其ノ夫モ亦情意ヲ尽シ愛顧至ツサル所ナシ其ノ嘗テ我ヲ救フノ恩アルヲ以テ特ニ然ルナリ

第二百十篇

佛國朋黨ノ形勢

佛王第十八世路易ノ位ニ在ル艱難多事ノ基ヲ成セリ其ノ國民ノ王ヲ奉戴セサルモ亦明ナリ夫巴里府民ハ王路易ノ氣質薄弱ニシテ信實ナク其ノ衆ヲ統御スルノ才ニ非サルヲ以テ動スレハ拿破侖ヲ引テ之ヲ議セリ王路易嘗テ放逐セラレテ久シク英國ニ留ル其ノ國民ノ優待ヲ感喜シ之ヲ顔色ニ見ハスニ至レリ因テ佛國ノ人民ハ益之ヲ惡ミ憤怒

スルニ至レリ

王路易爾來三色旗

即佛國ノ旗章ナリ

ヲ用ヰルヲ禁シ復ブルボン家ノ白旗ヲ用

ヰシム此ノ令ヲ下ス尤王ノ過失ヲ見ルニ足レリ夫三色旗ハ積年數所ノ戰ニ大勝ヲ得タルノ瑞寶ニシテ曠スベカラサル者タリ而ルヲ今暴ニ之ヲ禁スルヲ以テ愛國ノ民益憤怒ヲ作セリ

王勤王ノ人心ヲ悅ハシメント欲シ曾テ自人民ト誓約シテ行フ所ノ君主權限條例即シヤルトルヲ廢セリ此レ王ノ過失中第一ニ居ル所ナリ勤王家ノ意猶未飽カス常ニ王ヲ迫劫シテ人民自主ノ權利ヲ束收シ往日王家ノ權ヲ恢復センコトヲ要セリ

此ノ勤王家ニ主タル者テアングレーム侯及其ノ夫人ト爲ス此ノ夫人ハ第十六世路易ノ女ニシテ曾テ拘囚セラレ後免サルヲ得タル事等

己ニ前ニ訛ケリ侯ハアルトワー伯ノ男ニシテ今王第十八世路易子ナキニ因テ王ノ假嗣子トナルヘキ者タリ

茲ニ勳王黨ノ威勢益強盛ニシテ出板自由ノ權アルモ亦之ヲ禁壓シ專政府ノ威力ヲ張ランコトヲ務ム

夫君主權限條例ニ由レハ立法官ハ貴族會院及代理委員會ヨリシテ其ノ職任ヲ命セラル代理會員ハ平民ヨリ撰拔セラレシ者ナリ而シテ立法官ニ又三黨アリ即中位ノ一黨アリ定論ナク二黨ノ決議ヲ取捨シ其ノ善ト爲ス所ノ者ニ與ミス之ヲ稱シテサントルト爲ス中位ニ在ルヲ以テナリ勳王黨ハコテゴーレヨト稱ス院中右位ニ坐スルヲ以テナリ自由黨ハコテドロワート稱ス院中左位ニ坐スルヲ以テナリ

是時ニ當テ國民ノ心大ニ不樂ナリ王路易因テ大ニ勞思スル所アリ

而シテ偶々西班牙國ノ亂ニ會シ王路易其ノ國事ニ關係レ其ノ國ヲシテ平治安穩ナラシメントス

紀元一千八百二十三年ノ始ニ當テ佛國大軍ヲ出シテ西班牙國ニ進發ス其ノ軍ニ將タル者ヲアングレーム侯ト爲ス而シテ第五月十日ヲ以テ其ノ首府マドリットニ入り進テカラツシ

西班牙沿海ノ一部

ニ達セリ第十一

月二日アングレーム侯ハ凱陣ノ式ヲ爲シ復巴里府ニ旋軍セリ斯ク武威ヲ以テ西班牙國ヲ鎮定スルコト有リ大ニ人民ノ心ニ滿テリ

在朝ノ嬖臣此ノ事ヲ以テアングレーム侯ヲ讚美稱揚スルニ據レハ讀者或ハ信シテ此ノ侯ノ英畧殆拿破會ニ卓越スル所アラント謂フベレ幸ニ此ノ一事差々人民ノ望ヲ慰ムルアルヲ以テ宰臣等隨テ大ニ新法ヲ行ヒ王及貴族ノ威權ヲ張ランコトヲ勉ム



宰臣等設施スル所ノ法稍々行ハレ其ノ意ヲ違スルコトヲ得タリ而レ  
 テ今佛朝復古維新ノ始ヨリ己ニ年數ヲ歴其ノ人民ノ穩ナラヌレテ動  
 スレハ輒擾亂ヲ起サントスルノ勢モ亦頗挫折スルカ如シ然レトモ其  
 ノ帖服スルハ中等ニ在テ相親ム人ノミ眞ニ相悅服スルニ非ズ上下猶  
 政府ニ抗スルノ論說盛ナルハ其ノ情亦察知スヘシ

## 第二百十一篇

## 第十世シャルノ傳及民黨大ニ震フアルシエル國ト戰爭

己ニ説ク所ノ如ク第十八世路易其ノ進退適宜ノ機ニ投スルヲ得タリ  
 此其ノ艱難辛苦ヲ嘗メ自其ノ才智ヲ試ミルアルヲ以テナリ此ノ王ノ  
 時ニ當テ少シク佛國ノ安靜ヲ得タルハ一ニ王ノ誠正ニ依ルカ如シ而  
 シテ紀元一千八百二十四年九月十六日ニ及テ王世ヲ辭セリ是ヲ以テ

佛國ノ大權始テアルトワ―伯ニ歸セリ此ノ伯ハ第十世レヤルト稱ス  
 ル所ノ者ナリ

王シャル勤王黨ノ巨魁ニシテ固ク此ノ論ヲ持守セリ王ノ始メテ事ヲ  
 執ル大ニ勸王黨ノ爲ニス然レトモ亦未衆民ノ望ヲ失フニ至ラス曾テ  
 國會議院ニ寺邑ヲ沒收セラレレ者アリ王此等ノ諸人ニ年資ヲ給セリ  
 是ヨリ先キ寺邑ノ人民私有スル所ノ地テ一ニ皆收メ取テ之ヲ寺主ニ  
 還サシメントセレニ其ノ民大ニ危懼スルヲ以テ即此ノ制ヲ定メ其ノ  
 人心ヲ鎮定セリ

次ニ施行セシ所ハ出板刊行ノ自由及人民ノ權力上ニ於テ事理ノ合ハ  
 サルアリ及王ヲ敵視スルニ至ラシム王ハ王室ノ威權ヲ張ラント欲シ  
 更ニ貴族議院ヲ増加シ人民ノ代議員ヲ廢セリ此大ニ朝廷ニ補益スル

所アラント謂ヘルヲ以テナリ斯ノ如ク宰臣ノ權ヲ強固ニセント欲シ  
 反テ其ノ勢ヲ削弱セリ宰臣等因テ自職ヲ辭シ人民ノ德望アル者ヲ撰  
 舉シ此ノ任ニ當ラシム然レトモ此等ノ人王ト相信親セス紀元一千八  
 百二十九年第八月八日ニ及テ各其ノ職ヲ辭シ去リ更ニ他人ヲ代ヘテ  
 此ノ任ニ充ツ其ノ首長タル者ハ即ジユールト・ボリニヤック公ナリ  
 ギリニヤック氏ノ稱タニモ猶人民ノ大忌ヲ取ルニ足レリ此會アマ  
 リーアントニットヲ擁シ威權ヲ恣ニセルヲ以テナリ時ニ紀元一千  
 八百三十年第三月二日ニ於テ貴族議員人民代議員大集會アリ  
 王會議ニ在テ議スル時人民代議員王ト論議スル所甚激烈ナリ王乃此  
 ノ議會ヲ放解セリ凡議員ノ決定スル所ハ王自恣ニ之ヲ廢斥スルヲ得  
 ス唯放解シテ人民ト再議セシムルノ權アルノミ然レトモ此ノ舉ニ於

テ一モ王ニ利スル所アラズ貴族議員ヲ増加スト雖人民代議員モ亦衆  
 多ナルニ至レリ

亞弗利加北部ノ海岸ハ古來野蠻種族ノ居ル所ナリ此ノ蠻民常ニ開化  
 國民ノ其ノ方物ヲ取ムルヲ拒メリ若シ是ヲ強フルアレハ地中海上ノ  
 互市ヲ妨害シ其ノ物件ヲ奪掠シ其ノ餌食ト爲セリ

此ノ強暴ナル蠻俗ヲ破滅セントスルハ米洲合衆國ヲ以テ首唱ト爲ス  
 合衆國其ノ國人ヲシテ其ノ凶暴ヲ被フルコト無カラシメント欲シ爲  
 ニ計畫スルコト久シクシテ其ノ功ヲ成セリ英國モ亦之ニ次テ此ヲ謀  
 レリ紀元一千八百三十年ヲ以テ佛國兵ヲアルジェー都ニ遣ハシ之ヲ  
 侵伐スアルジェー都ハ此ノ海賊蠻民ノ巢窟ノ一ニシテ其ノ都民ハ凶  
 暴貪戾ヲ以テ名ヲ得タル者ナリ

佛國ノ之ヲ征スル大ニ功アリ紀元一千八百三十年第七月四日ヲ以テアルジエー都竟ニ佛國ニ降服ス爾來永ク佛ノ屬地ト爲リテ今ニ及ベリ此ノ征戰ヨリ延テ紀元一千八百四十八年ニ至ルマテ其ノ狀米洲ニ於テ印度蠻民ト戰鬪セルト同一般ナリ佛民ノ此役癘毒ニ死スル者兵ノ爲メニ死セルヨリ多シトス

## 第二百十二篇

## 三日革命ノ起初

佛軍アルジエー都ヲ伐テ戰功アル新報忽巴里府ニ至ル時ニ紀元一千八百三十年第七月九日ナリ此ノ新報ヲ得テ宰臣等大ニ人望ヲ得ルベシト時人ノ想像スルアリ而ルニ人民ノ意見ハ則己ニ確定シテ動カズ第七月二十六日ニ及テ王法令ヲ傳ヘテ出版ノ自由ヲ止メ又新ニ起ス

所ノ人民代議員會ヲ解キ更ニ議員ノ撰擧ヲ爲セリ其ノ解カル、所ノ議員ハ未一會議ヲ經サル者ナリ

斯ノ如キ處分ハ所謂君主權限ノ條例ニ相反スル所ニシテ專上ノ威力ヲ以テ下ヲ抑壓スルノ意タルコト佛民ノ情ヲ熟知スル者ハ能ク理會スヘシ而ルニ王ハ自信シテ禍亂ニ備フルコトヲ知ラス

王及宰臣等危難ノ將ニ身ニ及ハントスルヲ知ラズ其ノ二十六日王田獵シテ自遊歡シ宰臣等ハ唯人民ノ外相和スルヲ見テ亦相與ニ頌賀スルヲ知ルノミ而ルニ人民ノ不平ヲ證スヘキ一奇事アリ即巴里府下ニ土寇蜂起シテボリニヤック公ノ駕中ニ瓦礫ヲ亂投セリ

其ノ翌日ニ及テ人心益動搖シテ止マズ街坊ハ守衛ノ兵ヲ遣テ之ヲ監守セシメ亂ヲ開クニ至ラサルヲ得タリ第二十八日ノ曉ニ至テ人民大

ニ沸騰シ市街各所ニ蟻集シ頗煽亂ノ勢アリ同日九時ニ及テ忽三色旗  
ヲノトル、ダム寺ノ堂閣上ニ掲ケタリ第十一時ニ及テ巴里府廳ノ中堂  
ノ屋上ニ國旗ノ風ニ飄ルヲ見タリ

府民等ナシヨトル、カルド國民ノ戎衣ヲ着ケ兵ヲ執テ衛兵ト抗戦スル  
衛兵

コト數次時ニ市房ヨリ放射スル所ノ銃丸雨ノ如ク衛兵爲ニ大ニ挫折  
セリ

人民等又屋脊ニ在テ瓦礫木石ヲ取テ衛兵ニ抛ツ又熱湯熱油ヲ灑テ之  
ヲ困ム又傳フル所ニ曰ク一貴媛アリ下婢ト共ニ一大洋琴ヲ投シ其ノ  
下ニ徘徊スル所ノ守兵ヲ打撃セリト同日ノ夕人民等街坊ノ要衝ニ柵  
ヲ列シ徹夜セリ其ノ前日ニ在テハ大小ノ馬車ヲ以テ衛兵ノ通路ヲ遮  
斷セリ今又瓦石ヲ掘發シテ壘壁ト爲シ木版家具ヲ以テ構造スルコト

頗堅シ

又行樹鐵道ノ樹木ヲ伐テ之ヲ街道ニ横タヘ通路ヲ斷ツ防禦斯ノ如ク  
嚴ナリ然レトモ衛兵等己ニ前日ノ覆轍ヲ覺リ今ハ其ノ計ニ陥ラス  
第二十九日ノ午時ニ當テ王ノ親兵ヲ除クノ外衛兵等皆民黨ニ左袒ス  
是ニ於テ將ニ起ラントスル禍亂頓ニ熾消ニ歸セントス親兵ハ即皆巴  
里府外ニ放逐セラレタリ唯人民ノ意ヲ用井ル所ハ王ノ身ヲ全クセ  
メントスルニ在ルノミ

第二百十三篇

革命ノ結局并ニラ、フアエット再命セラレテナシユナル、ガル

即國民衛兵ノ監督トナル

此ノ三日革命ノ時ニ會シ民政有司等ノ施行セシ所ヲ説カン茲ニ紀元

一千八百三十年第七月二十七日新會院ニ集合セントシテ人民代理者  
 巴里府ニ來會スル者アリ而ルニ先ニ制定スル所ノ法例ニ依ラズレテ  
 之ヲ拒ノリ二十八日人民代理者相率テツイレリ—官ニ赴ケリ

人民代理者此ノ宮ニ至ル時ニ監軍隊將ナマルモント稱ス代理者乃マ  
 ルモンニ陳スルニ人民ノ意王ノ法例ヲ廢止スルニ非サレハ必服從ス  
 ルコト無キヲ以テスマルモン之ヲ諒察シ國家危急此ノ極ニ至ルノ因  
 由及之ヲ救護シテ安寧ナラシムヘキ所以ヲ書シテ王ニ奉呈ス而ルニ  
 王之ニ答フルニ今更ニ新令ヲ下シ兵威ヲ振テ之ヲ拘束センコトヲ以  
 テセリ

此ノ議固執シテ破ルベカラズ因テ其ノ結局前ニ説ク所ノ如ク兵士等  
 皆王家ニ叛キ去リ在朝ノ宰臣等モ亦各其ノ職位ヲ辭シ而シテ王モ亦

終ニ其ノ法令ヲ廢スルノ令ヲ下スニ至レリ王ノ此ノ令ヲ下ス機期甚  
 後レタリ故ニ巴里府民ハ既ニ決議シテ第十世シヤルノ王タルベカラ  
 サルヲ唱ヘリ

衛兵巴里府ヲ去テ後乃人民代理者權ニ政權ヲ握リ政府ヲ設立セリナ  
 シコナル、ガルド即國民衛兵ニ至テモ亦再之ヲ置キ大將ヲ、ファエット  
 復之カ監督タリラ、ファエットハ曾テ屢、政廷改革ニ遭遇スト雖其ノ固  
 持スル所ノ論ハ自主自由ノ正理ニシテ始ヨリ之ヲ變換スルコト無シ  
 昔日レーン、ド、テロル即戰慄ノ世ノ始ニ當テラ、ファエットハ其身ヲ保  
 タンコトヲ計テ佛國ヲ出奔セリ時ニラ、ファエットハ所謂自主自由黨  
 ノ人タルヲ以テ殆其ノ身ヲ危クス其ノ普魯士國ニ達スルヤ乃捕ヘツ  
 レ獄舎ニ拘囚セラル、コト數年即王者ノ權ヲ抑奪セントスルノ寇敵

タルヲ以テナリ夫ヲ、フアエット自信シ自任シテ虐政ノ下ニ居ラス力ヲ極メテ之ヲ破ラント欲ス敢テ其ノ黨與ノ衆寡ヲ問ハス固持スル所ノ高節義氣少シク屈スル所ナレ

拿破侖モ亦曾テラ、フアエットノ誠心ヲ感稱セリ曾テ之ニ贈與スル所アリテ、フアエット固ク拒テ受ケズ今ニ及フマテ竟ニ一ノ職任ヲ奉セズ唯代理者會院ニ在テ人民ノ代議員ニ充ルノミ

市民上下トナク皆ラ、フアエットノ德望ヲ仰戴スル甚深ク其ノ指揮ヲ受ルセノ皆悅服シテ之ニ從順シ七月二十九日日未沒セサルニラ、フアエット全ク巴里府ヲ鎮定セリ夫三日革命ノ擾亂ニ際シテ一ノ倫盜劫劫忿怨私闘ノ起ル無キハ實ニ巴里府民ノ最貴重稱譽スル所ナリ

三日革命ト稱スルハ今説ク所ノ如シ是ヨリ先キ斯ノ如キ一大變ノ俄

頃ニ發リ又俄頃ニ治マルハ未曾テ聞カサル所ナリ茲ニ英國人アリ數人結隊シテ適意行旅ヲ爲ス其ノ巴里府ニ達セシ時適三日革命ニ際會ス而シテ其ノ何ノ緣故タルヲ識ラス日ニ唯其ノ内亂ヲ見ルノミ英人佛語ヲ解セサルヲ以テ其ノ國ニ還ルニ及テ始テ巴里府ニ到ル時乃其ノ革命ノ際ナルコトヲ知レリ

### 第二百十四篇

ルウイー、ファイリツブ王位ニ即キ統治ス新革命ノ記第三世拿破侖ノ傳

紀元一千八百三十年第七月三十日人民代理者議ヲ決シテフルレヤンス侯ヲ以テ政廷ノ主宰メラシメント欲シテ之ヲ迎ヘリ而シテ未承傳不磨ノ稱號ヲ襲セス權ニ副都督ヲ以テ之ヲ稱セリ斯ノ新報國內各

處ニ布達シ人民大ニ喜色アリ而シテ三采旗ハ則既ニ掲ケサル處ナシ是ヲ以テ再爭亂ヲ起ス者ナシ乃同年八月二日ニ及テ第十世シヤル及アンダレム侯相俱ニ禮ヲ正クシテ其ノ位ヲ辭ス此レ王ノ曾孫當時ド、ゴルドー侯ヲシテ嗣王タラシメント欲シテナリ

唯此ノ志アリト雖留心シテ遽ニ發セス乃都民既ニ蜂起スル者數千人ラムブリエーニ侵入スヘキ備ヲ爲セリラムブリエート稱スルハ王ノ退去セシ所ナリ而シテ王ハ則其ノ未寇スルヲ待タス早ク遁レテ之ヲ避ク此其ノ前一千七百八十九年第八月ノ覆轍ヲ記スルアルヲ以テナリ當時巴里府民蜂起シテヴェルサイエ都ニ迫レリ

第八月十七日ヲ以テ王シヤル英國ニ到リ又進テイヂンボル蘇格蘭ニノ首都ニ至レリ此ノ府往古ヨリホリールトノ宮殿アリ王曾テ佛國ヲ出ダ英

國ニ遁ルノ際此ノ宮ニ館セリ今復道レテ此ノ府ニ至リ再此ノ宮ニ匿ル王後竟ニ壞地利國ゴリトニ没ス時ニ紀元一千八百三十六年第十一月六日ナリ茲ニブルボン即王族ヲ云フ宗族ヲ奉戴シテ勤事セントスル徒尙纒ニ存セリ此ノ徒等ゴルドー侯王シヤルノ孫ナリヲ正統ノ君トナシ第五世顯理ト稱センコトヲ欲ス

是ノ時佛國更ニ一政廷ヲ建立セントス而シテ人民ノ共和政体ヲ愛慕スル者甚衆多ニシテ之ヲ惡ム者亦甚少ナカラス此昔日ゼ、レーン、オフ、テルロル即戰慄恐懼時世ノ殘虐橫恣復此ノ際ニ發出センコトヲ恐ル、サ以テナリ

ラ、ファエット中心深ク共和政体ヲ好ミ米洲合衆國政体ヲ以テ政府ノ至善全成ナル者ト爲セリ願フニ共和政ノ國体ハ其ノ人民相與ニ統治

スルノ善法ニ通曉シ能ク教育ニ達セサレハ不可ナルヲ理會スヘシ佛  
國人民ハ猶未此ノ地位ニ至ラス且其ノ世々君主ノ統治制馭タルヲ以  
テ人民習慣シテ常性トナル今俄ニ自由ノ權ヲ與フルニ至テハ則亦其  
ノ安寧ヲ得難カラント謂フ

ラ、ファエットハ是ノ意見ヲ固持シテ而シテ其ノ國民務メテ眞個ノ特  
權ヲ得ント欲シ乃更ニ禍亂ヲ醸シ國家ヲ艱マスマスナ喜バヌ又意フ政体  
ハ唯其ノ國民ノ幸福安寧ヲ存スルヲ主トス必シモ其ノ名ニ管セズトシ  
是ヲ以テラ、ファエット君民國治立君定律ノ政体ヲ公論シテ意テ人民  
代理者ニ寄ス此ノ時王位ニ即クヘキ人ヲ論定セントスラ、ファエット  
敢テ此ノ論ニ與ラス若シ一語ヲ發セハ王冠忽其ノ頭上ニ加フルコト  
ヲ得ヘシ然ルニラ、ファエット曾テ此ノ意思ヲ見ハサヌ其ノ智謀深遠

ニシテ性行善良ナルヲ知ルベシ

茲ニ一人アリ其ノ人當日論定セントスル所ノ事ヲ以テ其ノ身ニ自有  
スルカ如シ即之ヲオルレヤン侯ト爲ス斯ノ人佛國人民ノ大ニ尊崇ス  
ル顯理、ロ、ガランノ苗裔ナリ嘗テ人ノ教ヲ受テ自主自由ノ理ヲ解セリ  
昔日革命ノ始ニ在テ人民ニ黨與シ爾來シヤコバン黨ノ暴怒ヲ避ケ道  
レテ外邦ニ在リト雖人民ニ抗シ干戈ヲ動かス等ノ事ヲ爲スニ至ラス  
オルレヤン侯初メ故國ヲ去テ瑞西國ニ遁レ一學校ニ在テ數學教師ト  
ナリ身及二弟ノ衣食ニ給セリ爾後母ヨリ贈ル所ノ物ヲ得テ即去テ米  
洲合衆國ニ之キ客寓スルコト數月紀元一千八百年ヲ以テ又去テ英國  
ニ至リ拿破侖ノ敗亡ニ至ルマテ此ニ留ル

此ノ侯始第十八世路易王ヨリ一軍監督ヲ命モラル而ルニ侯君主權限



條例ヲ主張シ勸王黨ニ抗スルニ因テ其ノ任ヲ免セラレタリ爾來此ノ革命ノ事起ルヨリ今ニ至ルマテ復職事ナシ

第八月九日衆人侯ヲ迎ヘテ王位ニ即カシメントス其ノ王タル復君主ノ舊號タル佛國王ニアラス特ニ佛國人民ノ王タルヲ稱シ人民ノ成立生存ト其ノ權利ヲ得ルトヲ明ニス侯ノ此ノ任ヲ受ル其ノ君主權限條例即國法ニ載スル所ノ條款ハ敢テ踐行セサルヲ誓ヘリ時ニ集會院ニ輻奏スル人民數千餘ナリ

時ニラ、ファエット新王ノ手ヲ執リ引テ集會院樓上ニ登ル此ノ樓ハ街衢即集會院ノ在ル所ノ坊ニ臨テ群民ノ目撃中ニ在リ而シテラ、ファエット新王路易、フィリップヲ抱キ人民ニ向テ今施行スル所ノ條件實ニ自己ノ嘉納スル所ノ狀ヲ公告シ後自樓頭ニ出テ衆ニ向テ呼テ曰ク余等今日ヨリ

共和政中ノ尤至善ナル者ヲ得タリト

王路易、フィリップ一時民望ヲ得シカ爲メ自其ノ身ヲ投レテ人民眞個ノ利益ヲ謀ルニ任シ又其ノ居ル所ノ地位ニ合スル責ヲ勉ム

王斯ノ如ク苦心煩慮シテ政務ヲ勤ムルヲ以テ佛國大ニ安寧ニ屬シ事皆順序ヲ得農商益繁昌ニ至レリ前説ク所ノ佛軍曾テアルジエリ亞非

利加洲中南  
部海濱ノ地ヲ畧取セシヨリ此ノ地ヲ以テ佛國ノ一植民地ト爲セリ其ノアルジエリ亞非ノ戰己マサルコト七年ノ久シキニ及ヘリ然レトモ此ノ役ヲ除クノ外王路易、フィリップノ時爭亂アルコト無ク世ト共ニ平安ヲ保テリ

此ノ王即位ノ始ニ當テ踐行セシ所ヲシテ永ク變易スル所ナカラシメ上下相共ニ福祉ヲ受ルアルベシ而ルニ其ノ晩年ニ及テ貪戾ノ私情

ヲ退クシ偏ニ王ノ親族ヲシテ尊大富榮ヲツレメ且往昔君主專制ノ權  
利ニ原ツキ一王統ヲ創立セント欲シ百端意匠ヲ費セリ

故テ以テ王ノ爲ス所ノ事業所謂君主權限條例即國法ニ留心スルコト  
甚了シ難レ又立法官ノ二派ヲ廢シ之ヲ視ルコト玩具ニ異ナラス此ノ  
一事ヲ以テ王ノ國法ヲ輕視スルノ證ト爲スニ足レリ是ニ於テ人民心  
其ノ心ヲ安スル能ハス遂ニ其ノ非理ヲ抗論セントシテ衆相會スルニ  
至レリ

是ニ於テ王驚懼レテ急ニ其集議ヲ破解セント欲シ嚴令ヲ出シテ之ヲ  
禁止ス王一タヒ此ノ令ヲ下シ乃其ノ覆亡ヲ取ルニ至レリ紀元一千八  
百四十八年第二月二十二日ヲ以テ人民巴里府ニ於テ一會集ヲ成サン  
ト謀ル政府又嚴ニ制令ヲ出スヲ以テ會集スル能ハスト雖巴里府ノ人

民街衢各所ニ蟻集充滿セリ

是等ノ群黨驕然トシテ遂ニ妄動ノ勢ヲ見ハス政府兵力ヲ以テ之ヲ制  
馭スト雖衆心益激怒シテ直ニ巴里府ニ迫リ諠譁鼎沸街坊交市ノ地忽  
變シテ戰場ト成ルコト三日夜而シテ危難殆將ニ王ニ及ハントスルヲ  
以テ王其ノ族ヲ率テ英國ニ奔ル

茲ニ至テ佛國共和政體ヲ立テ人民其ノ委員ヲ撰任シテ巴里府ニ會シ  
告ルニ政休制定ノ議ヲ以テス即委員ノ議ニ因テ路易拿破侖ヲ擇テ  
大統領ニ任ス路易拿破侖乃其ノ任ヲ承ク時ニ紀元一千八百四十八  
年第十二月ナリ路易拿破侖ハ即勃拿波爾的ノ甥ナリ

茲ニ紀元一千八百四十八年第二月佛國發起スル所ノ革命變動遂ニ歐  
洲他邦ニ波及シテ之カ爲ニ多少ノ騷擾ヲ生ス即伊太利諸州及ヒ日耳

曼諸州人民蜂起シ各處沸亂汗騰地ニ塗ルニ至レリ此ノ二國ノ人民各  
君主專横ノ暴行虐政ヲ苦ミ決戰數次ニ及フト雖民黨竟ニ敗レテ其ノ  
志ヲ遂クルコト能ハス

ハンガリー

日耳曼聯邦ノ一

人戰ヲ勤メ奮撃ス軍頗利アリ然レトモ竟ニ魯西

亞ノ援兵來リ志意ヲ違スルコト能ハス羅馬人モ亦徒ニ共和政制ヲ立  
テントシテ佛軍ニ追去セラレ退テ羅馬法王ノ地ニ避ク紀元一千八百  
五十一年第二月二日ニ及テ路易拿破侖強暴殘酷ノ政ヲ施シ縱ニ其  
ノ國律ヲ廢滅ス世之ヲコシテエタート喚ロ做ス而シテ自政府ノ全  
權ヲ奪領シ自第三世拿破侖ト號シテ公告シテ佛帝トナル時ニ紀元一千  
八百五十二年ナリ

第三世拿破侖帝位ニ登ル以來佛國兵事日ニ忙シ帝ノ海陸軍モ亦出テ

外ニ戰フコト數處、即魯人ト争フハクリミヤ魯國南部ノ半島島ニ於テ土耳

其人ト闘フハセーリヤ

亞西亞西部ノ國ニシテ土耳其ノ有スル所ナリ

ニ於テス又墨是哥府ニ

在テハ墨是哥人ト戰フ是ニ於テ佛國海軍漸ク強大ナリ其ノ貿易亦繁  
盛ニ至リ巴里府ノ如キハ最壯麗ナルニ至レリ紀元一千八百五十三年  
ニ及テ第三世拿破侖后ヲ娶ル而シテ紀元一千八百五十六年ヲ以テ后  
一子ヲ誕ス

史ヲ讀ム者後篇ニ記載スル所ノ世系圖表ニ由テ佛國猶立君體裁ヲ存  
スルアルヲ認識セン此ノ時佛國君主タランコトヲ望ム者三人即第十  
世シャル王ノ孫第五世顯理、第三世拿破侖ノ男拿破侖、オーセン及路  
易、フィリップ王ノ孫巴里府伯爵路易、フィリップ是ナリ

余此ノ史ヲ作ルニ當テ佛國人民ノ品行形勢ヲ以テ其端緒ヲ起セリ而シテ今又是ノ史ヲ完收スルニ再其ノ品行形勢ヲ説クヘシ夫紀元一千七百八十九年ノ革命起ルニ因テ實ニ大ニ佛國人民ノ形勢ヲ一變セリ革命以前ニ在テハ土地ハ皆各貴族ノ占有スル所ニシテ若シ其ノ主タル者死スレハ其ノ長男其ノ地ヲ襲有ス

其ノ貴族ト稱スル者一ノ貢稅ナク獨農民苦辛ノ力ヲ坐享スルノミ農民ニ至テハ辛苦力作シテ收得スル所ノ續命物十ノ八九ハ王及貴族各邑ノ租稅ニ託シテ之ヲ貢納セサルベカワザラシム其ノ情ノ憐ムヘキ往古封建ノ世ニ在テ奴隸ト呼フ者ト異ナル所無レ

然ルニ革命ノ日ヨリ政府茲ニ留意シ此ノ種ノ民ヲ遇スル甚厚ク往時

官ニ沒收セシ所ノ土地ハ農民ノ請求スル所ニ隨ヒ各之ニ頒與シ其ノ價ハ年月ヲ迫テ漸次ニ納還セシム且其ノ間田地ノ耕耘ヲ起サン爲ニ官其ノ主ニ貸スニ其ノ財本ヲ以テセリ

革命前ニ在テハ農民貧困ニシテ偷盜ノ心ヲ抱クアリ革命以後ニ至テハ其ノ質直勉勵節儉ニシテ其ノ身保全スルコトヲ專トシ他ノ貴族市府民等ニ卓越スルコト遠シ平等ノ農民ニ至テハ自主自由ノ風ヲ存シ一舉一動淳朴質直ナラサルハ無ク皆其ノ同位同階ナル實ヲ呈シ又能ク上下一致ノ理ニ曉通セリ

佛國人民ハ其ノ軀幹強クシテ短ク縱橫相稱ヘリ其ノ眼目頭髮蒼黑ニシテ顔面淡黃色ヲ帶フ此ノ淡黃色ヲ帶フルヲ以テ此ノ國ノ貴婦女子務テ其ノ顔面ヲ粉色スルノ習アリト世ノ想像スル所ナリ

米洲人或ハ英人ノ始メテ佛國ニ至ル者一日シテ奇異ト稱スル者ハ此ノ國ノ婦人家ニ居テ萬般ノ事務ニ關涉シ忙劇奔走スル是ナリ其ノ客舍ニ於テ諸賓ニ接待シ自會計ヲ取り奴婢ヲ使役スル等皆婦人ノ手ニ屬セリ

人若シ家具ヲ買ハント欲シ匠肆ニ至レハ款待商量シテ受券契帖ヲ作リテ其ノ價金ヲ收受スル等ノ事務皆婦人ノ掌トル所ナリ又大製造場ニ至ル者アレハ引テ其ノ室ニ入り諸器械機動ノ妙理ヲ説示スル等亦皆其ノ指揮スル所ナリ其ノ舉動作爲ヲ視テ一切ノ家業事務全ク婦人ノ管理スル所タルヲ證明スルニ足レリ

汝等若シ假圃

即假ニ製スル所ノ田圃  
コシテ模範トスヘキ者

ニ至ルアラハ穀倉厩舍ニ導キ種

々ノ器物ヲ見スヘシ又婦人汝等ヲ引テ田畝ニ往キ稼穡耕耘ノ職務ヲ

示教辨解スヘシセーヴルニ在ル所ノ磁器製造ニ至テハ金貨ヲ收受スル亦專婦人ノ職トセリ

巴里府中ノ穀市ニ於ル婦人常ニ其ノ房ニ在テ麩粉或ハ諸穀ヲ賣リ周旋經營シテ其ノ牙錢ヲ得ルコトヲ務ム佛國各個ノ婦人勉強シテ其ノ自做シ得ヘキ所ノ職業ニ從事ス總テ執ル所ノ事ハ其ノ婦女子ニ適スルト適セサルトヲ問ハス佛國人ノ巧心機智アル極テ華麗ナル製造奇巧ナル寶器貴貨等ハ大ニ他邦ニ卓絶スル所アリ絹、布棉、紗、圖繡、磁器等モ亦高價ナルアリテ外邦ニ輸出セリ彩畫彫像等ノ術ニ至テモ亦英國ニ勝レリトス唯棉布製ノ段匹、鐵製ノ諸器物凡機械上ニ就テ練熟精達シテ國家ノ利益多キハ佛國モ亦英國及米洲人ニ及ハサル所アリ

カハット宗族ノブルボン同族ノノ系譜即世ノ常ニ此ノ族ヲ稱分派

シアブルボン家ト呼做ス者

第四世王顯理 紀元一千六百十年害セラレシ所ノ王聖路

易第六子ノ第十世ノ後裔ナリ

第四世王顯理ノ諸王子

第十三世王路易 紀元一千六百四十三年歿セリ

オルレヤン侯ガストン 紀元一千六百六十年死セリ子ナシ

第十三世王路易ノ諸王子

第十四世王路易 紀元一千七百十五年歿セリ

アージュー侯フイリップ後ニオルレヤン侯タル者

紀元一千八百三十年佛國ニ王タル路易、フ

イリップ、ハ此ノ侯ノ苗裔ナリ

第十四世王路易ノ王子

太子路易 紀元一千七百十一年死セリ

太子路易ノ諸子

ブルゴンジール侯路易 紀元一千七百十二年死セリ

西班牙王第五世フイリップ

ベルリール侯シヤル

ブルゴンジール侯ノ子

第十五世王路易 紀元一千七百七十四年歿セリ

第十五世王路易ノ諸王子

太子路易 紀元一千七百六十五年歿セリ

アンジュー侯

紀元一千七百三十二年死セリ

太子路易ノ諸子

ブルゴン侯路易

紀元一千七百六十一年死セリ

アキターン侯ジョセフ

紀元一千七百五十四年死セリ

第十六世王路易

紀元一千七百九十三年斬首セララル

第十八世王路易

紀元一千八百二十四年歿セリ子ナシ

第十世王シヤル

紀元一千八百三十年其ノ位ヲ讓ハレ紀元

一千八百三十六年歿セリ

第十六世王路易ノ王子

太子路易一名第十七世王路易ト稱ス

紀元一千七百九十五年歿セリ

第十世王シヤルノ諸王子

アングレーム侯路易

紀元一千八百三十年王位ニ登ル權理ヲ廢

セリ

ペリー侯シヤル

紀元一千八百二十年害セララル

ペリー侯ノ子

ボルドー侯ニシテ又シヤンポール伯タル顯理

ブルボン家系ノ家人ニシテ未王位ニ登ラ

サルノ日己ニ第五世顯理ト稱セラレシ者

勃拿波爾的家族ノ系譜

シヤル、ボナパルト

コルスニ於テアヤクナヨノ訟師ニシテ紀

元一千七百八十五年死セリ

シヤル、ボナバルトノ諸子

ナーブル國王ジョセフ 後西班牙王タル者

帝拿破侖

紀元一千八百二十一年サーン、ヘレーヌ島ニ於テ死セリ

ルーシエン

荷蘭王路易

第一世拿破侖ノ皇子

羅馬王拿破侖

世之ヲ稱スルニライヒスタット侯及第二世拿破侖ヲ以テスル者

路易勃拿波爾的ノ子

路易拿破侖

後第三世拿破侖ト稱スル者

第三世拿破侖ノ皇子

拿破侖、ニュージエーン、路易 帝皇子ト稱スル者

カペー家系ノオルレヤンブルボン同族即常ニオルレヤン家ト稱セラル、者ノ系

路易、フィリップ

フィリップ、エガリテート稱セシオルレヤン侯フィリップ即第十三世路易第六世ノ孫タル者ナリ

フェルディナン、ルウイ、フィリップノ諸子

オルレヤン侯フィリップ 佛國王位ヲ嗣クヘキ世子タリ而ルニ乗車スルニ當テ其馬奔蹙シテ死ス時ニ紀元一千八百四十二年ナリ



于ムール侯路易

シヨアンヴィー公フランソワ

オーマール侯顯理

モンパンシエー侯アントワー

オルレヤンス侯フェルディナントノ諸子

巴里府伯路易、フィリップ、オルレヤン、ブルゴン家系ノ代理者

シャルトル侯ロベール

小永井八郎 校

具氏佛國史下冊畢

佛國史下冊正誤

葉數	行數	誤謬	訂正
六一	三	第六世シヤル	シヤル
七六	六	以テ	以テ
九〇	一〇	流ス言	流言ス
九三	六	寛柔	寛柔
	一〇	侯迎	侯迎
	二	アカダミー	アカデミー
一一四	二	遺命シ	遺命シ
一一五	五	一鍵ハ	一鍵ハ
一二八	四	ロガラ	ルグラン
一五三	四	ロガラ	ルグラン

一六五  
二〇七  
二二九  
二三九  
二三五  
二四九  
二五一  
三七一  
三一〇  
三二〇  
三三六

三  
五  
三  
〇  
一  
一  
七  
七  
七  
七

ロ、ドラゴナード  
以ニ  
フリデリック  
詔書  
レツトル、ズ、カッ  
シユー  
マリ、アントチ  
ツト  
モッレニ  
カオント、デ、ミラ  
ボー  
甚キシ  
奔レリニ  
其ノ巧

ル、ドラゴナード  
以テ  
フレデリック  
詔書  
レツトル、ド、カッ  
シユー  
マリ、アントワ  
チツト  
「モッレニ」  
カオント、ド、ミラ  
ボー  
甚シキ  
ニ奔レリ  
其ノ功

三四二  
三五二  
三六〇  
三七一  
三九〇

八  
六  
三  
七  
四  
七

風發シ  
宮ノ位  
因ヨリ  
驛背  
一ノ大ナル高  
鈍砲

放發シ  
宮ノ地位  
固ヨリ  
驛背  
一ノ高大ナル  
銃砲

一 書中原語ノ左側ニ双柱ヲ施スハ總テ單柱ノ誤又(カルタイナール)

ル)(カルゲイナール)ハカルゲイナール(ゲニーク)ハゲニークノ誤歐洲米州ノ(州)ハ洲ノ誤

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS 561

NAME	SCORE	GRADE
ALBERT EINSTEIN	100	A
ISAC NEWTON	95	A-
ALBERT EINSTEIN	90	B+
ALBERT EINSTEIN	85	B
ALBERT EINSTEIN	80	B-
ALBERT EINSTEIN	75	C+
ALBERT EINSTEIN	70	C
ALBERT EINSTEIN	65	C-
ALBERT EINSTEIN	60	D+
ALBERT EINSTEIN	55	D
ALBERT EINSTEIN	50	D-
ALBERT EINSTEIN	45	F
ALBERT EINSTEIN	40	F
ALBERT EINSTEIN	35	F
ALBERT EINSTEIN	30	F
ALBERT EINSTEIN	25	F
ALBERT EINSTEIN	20	F
ALBERT EINSTEIN	15	F
ALBERT EINSTEIN	10	F
ALBERT EINSTEIN	5	F
ALBERT EINSTEIN	0	F

卷之五

500

1387

